

第2部

学部・研究科のFD活動報告

・ 法文学部、人文社会科学研究科	2
・ 教育学部、教育学研究科	12
・ 理学部	32
・ 医学部	39
・ 歯学部	52
・ 工学部	62
・ 農学部、農学研究科	84
・ 水産学部、水産学研究科	104
・ 共同獣医学部	118
・ 理工学研究科	136
・ 医歯学総合研究科	160
・ 保健学研究科	170
・ 司法政策研究科	177
・ 臨床心理学研究科	183
・ 連合農学研究科	193

法文学部・ 人文社会科学 研究科

法文学部・人文社会科学研究科 FD 活動報告

法文学部・人文社会科学研究科においては、従前から取り組んでいる 1. 法文学部学生による授業評価アンケート調査、2. 法文学部授業公開・授業参観（研修授業）、3. 人文社会科学研究科授業評価アンケート調査、4. 人文社会科学研究科 TA アンケート調査を実施した。これらの成果は以下のとおりである。

1. 法文学部学生による授業評価アンケート調査

今年度の授業評価アンケートは、6月22日から7月10日までの間、各教員が担当授業の中からひとつを選んで実施された。アンケート用紙の質問内容に関しては、平成23年度に改訂を行い、その際に同一の内容で何年か調査を実施すると決定したことを受けて、本年度も前年度に引き続き同じ内容で調査を行った。以下、学科ごとの結果分析である。

1.1. 法政策学科

(1) 講義

昨年度・一昨年度と比較して上昇した項目は、「(6)この授業に対して満足している」「(8)この授業に対するあなた自身の受講態度の総合評価」「(9)この授業はわかりやすいものであった」「(10)教員は授業の目標をはっきり示した」「(11)教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった」「(13)教員の授業に対する意欲や工夫が感じられた」「(14)質問や意見に対して適切に対応してもらえた」「(15)この授業に対する総合評価」など、多くの項目で、昨年度・一昨年度と比較して評価が改善している。全体的に消極的な評価（各項目の「1」「2」）が低下する一方で、積極的な評価（各項目の「4」「5」）が上昇している。機械的に例年の数値と比較することは難しいが、教員側の授業改善の努力と学生の自主的な学習が促されたことが推認される。

昨年度・一昨年度と同様に、「(3)あなたは不明な点を積極的に教員に質問した」「(4)この半年間でこの授業のオフィスアワーを利用した」の項目は、それぞれ「1:全く質問しなかった」「1:全く利用しなかった」が突出して高くなっている。今後も引き続きオフィスアワー制度の周知などを通じて、学生の質問しやすい環境を醸成する必要がある。

(2) 演習

本年度の演習に対する評価も、例年どおり講義に対する評価と比較して高い傾向にあり、すべての項目で講義に対する評価を上回っている。演習について、昨年度と比較して評価が高いのは「(14)質問や意見に対して適切に対応してもらえた」「(15)この授業に対する総合評価」など複数の項目について確認されるが、「(10)教員は授業の目標をはっきり示した」「(13)教員の授業に対する意欲や工夫が感じられた」など項目については昨年度の評価を下回っている。演習においては、学生自身の主体的な参加も求められることから、学生の興味や意欲を引き出すような教員側の工夫が引き続き必要である。演習のみについて問われた項目「(a)

質疑応答等が活発になされた」「(b) 授業での教員の発問や誘導が適切であった」は、昨年度の平均値と比べて減少、一昨年度の平均値と比べても低い数値となっている。授業評価を行ったゼミが異なることや、学生の入替わりなどもあるため、単純な比較で上下をみるのは限界があるが、今後も授業運営の改善に向けた教員の努力が求められる。

1. 2. 経済情報学科

(1) 講義

昨年度と比較して、評価は全体的に下がっている。平均値が昨年よりも上昇したのは「講義を時間通り行った」のみであり、残りの評価項目は低下している。時間通り授業を行ったとしても、「(9) この授業はわかりやすいものであった」「(15) 授業の総合評価」の評価が低ければ、教育効果があったとは結論付けられない。もっとも実施率が昨年度よりかなり低いため、実施率を上げれば、数値は良かったのかもしれない。いずれにしても、授業への取り組みに対する教員側のより一層の努力が求められる。「(14) オフィスアワーの活用」については工夫が必要だろう。「(17) 学生生活の支援」については、昨年度・一昨年度と同様に学生の不満が浮き彫りになっており、物理的に解決できる部分は教員側が早急に努力していく必要があるだろう。

(2) 演習

演習については、昨年度と比較して、評価が全体的に高くなっている。前年度と比較して下回ったのは授業時間だけである。教員のさらなる努力は引き続き求められるが、概ね教員の努力が認められたとあってよいだろう。また、例年のことながら、演習についてのアンケートは教員と学生が見えるところで行うことになり、どうしても講義よりも匿名性が損なわれてしまい客観的な評価になりにくい側面がある。したがって、アンケートの取り方も依然として今後の課題となるであろう。

1. 3. 人文学科

(1) 講義

本年度も、質問項目自体は昨年度までと同一である。ただし昨年度の報告では「頭打ち感が否めない」との指摘がなされたが、本年度は授業時間の順守などを除き、昨年よりも高い評価を得た。昨年度の指摘通り「FDの結果として授業の質が向上し、本年度もその高い水準を維持した」と評価することができる。しかしその一方で、教科書や補助教材の利用に関して指摘したように、「すぐれた授業」と「普通の授業」の二極分化の発生が疑われる現象も見られることから、今後もそうした傾向に注視していく必要がある。

またオフィスアワーの利用については、例年通りの低水準を維持した。この点についてはむしろ、学生が質問等をしやすい環境がまだ整備されていないという評価を下すことも可能であるが、そもそも今の学生に対し、質問のためにわざわざ教員の研究室まで出向きなさい、という指導自体が適切ではないという可能性も考慮すべきである。熱心な学生の

中には、教員の研究室へは出向かないまでも、電子メールや、実施している授業において
は授業中の小レポートなどの手段を通じて質問等をしている者も見受けられる。

さらに、当然ながらこの授業アンケートには、何らかの理由で授業に出席していない学
生の意見や、アンケートを実施していない授業に関する評価は反映されていない。この授
業アンケートの結果は、上述したような技術的限界を勘案しつつ読まれるべきであること
は言うまでもないことである。

(2) 演習

昨年度の報告書では「学生は以前にまして、シラバスで提示された学習目標の達成、教
員の意欲や工夫などを強く求め、またそれに関連して個人別学習の助言指導といった、き
め細かいケアを要求するようになっている」「それに対応して、教員側も学生の要望を察知
し、適切な対応を取ることが求められている」と指摘されたものの、数値は総じて昨年度
より低下しており、FDアンケートの成果をより広く教員間で共有することが必要である。
人文学科の演習に対する学生の評価は例年通り、講義と比べて高いものであるが、昨年指
摘した通り「それは受講生の多様性の低さが一因である可能性が高いことを忘れるべきで
はない」。現在の評価に甘んじず、教員が学生のニーズをくみ取って改善を継続すること
が演習の質をさらに高めることにつながるだろう。

2. 法文学部授業公開・授業参観（研修授業）

今年度の授業公開・授業参観は、7月6日から7月10日まで実施され、法文学部の全教
員が期間中に担当授業のすべてを公開するとともに、公開される授業の中から1コマ以上
参観することが求められた。

2.1. 授業改善への取組について

全教員参加による授業公開・授業参観は、今年度で11年目となる。これまでも授業の方
法に関する様々な工夫や改善が図られており、今年度も多岐にわたる教員の努力が読み取
れる回答が多く寄せられた。受講生の理解度を高め、授業内容への関心を喚起する種々の
工夫の中から、ここでは特に3項目にまとめ、紹介したい。

(1) 授業内容を分かりやすく伝える工夫

受講生が授業内容を理解しやすいよう、様々な工夫がされていることが伺えた。特に、
文書や図式を、パワーポイントや書画カメラ（OHC）を使ってスクリーンで見せながら解
説する取組みは多く見られた。投影する資料を印刷して配布する、ということもよく行わ
れている。また、今日の授業が学期全体の授業のなかでどの位置にあるのかを授業開始時
に示す、ルーブリックを示す、など、丁寧で細やかな配慮も見られた。

(2) 受講生の興味・関心を高める工夫

受講生の興味・関心を高める工夫も多く見られた。中でも、受講生にカードを配布し、

その日の講義内容へのコメント・質問・要望等を記入してもらい、次回の授業時に教員がフィードバックする、という例は多く寄せられた。大規模クラスでは特に教員がひとりひとりの理解度を確認することが難しくなるが、この方法を活用することでそれを補うことができる。また、受講生にとっても、自分の書いた内容が紹介されると、それが学習意欲にもつながり、他の受講生にとっても参考になり、さらに前回の講義内容を想起する上でも有益だと思われる。

また、パワーポイント資料と配布資料は別内容にし、受講生が適宜補足することで講義内容をより深く理解できるよう工夫した、という例は、授業への集中力を維持させる工夫、という点からも興味深い。この他にも、前回扱った教材を今回は形式ややり方を変えて再度利用する、という語学科目での例は、単に同じ内容の繰り返しではないため、受講生にとっても興味・関心を持って取り組めるよい復習活動例になっている。

(3) 教室の環境作りへの工夫

授業を円滑に進めるためには、教室の環境作りも欠かせない。今回の回答でも、意見を報告する前に、近くに座っている人と事前に話す時間を設けるなど、発言しやすい雰囲気作りへの配慮も複数例見られた。授業運営での工夫として参考にしたい。

このように、今回のアンケート結果から、授業改善について各教員が多量の努力を払っている様子が覗えた。また、実際に授業を参観した教員からも、工夫していると感じた点や取り入れたい点として、数多くの内容が寄せられた。それらの内容を共有し、新たな工夫も加えながら、より良い授業運営に繋げたい。

2.2. 授業公開の現状と今後のあり方について

まず、今年度を含めた5年間の授業公開・参観の状況を以下に表で示す。

	2011年度 (後期)	2012年度 (後期)	2013年度 (前期)	2014年度 (後期)	2015年度 (前期)
(A) 公開された科目数	80科目	87科目 (107コマ)	91科目 (112コマ)	88科目 (161コマ*)	231科目**
(B) 参観者数	48名	48名	46名	37名	29名
(C) 参観率 [(B) ÷ (A)]	60%	約55%	約51%	約42%	約13%
(D) 参観者のいた科目数	28科目	29科目 (31コマ*)	32科目 (32コマ)	29科目 (29コマ)	22科目
(E) 被参観率 [(D) ÷ (A)]	約35%	約33%	約35%	約33%	約9%

*コマ数には同一授業の複数回の公開あるいは参観が含まれる。

**時間割にあるオムニバス形式の授業以外の全科目

(1) 参観者数（参観率）

今年度の参観者数は、過去最低だった昨年をさらに下回っている。また参観率も公開科目を時間割上のすべての授業としたため、大幅に低くなっている。

(2) 被参観率

被参観率も参観者の減少および公開科目数が大幅に増えた影響で、これまでより低くなっている。

これらの数字をどのように解釈すべきかについては意見が分かれるであろうが、参観できる総授業コマ数が飛躍的に増加したにもかかわらず、参観者数自体が減っていることは歴然としており、この現実はこの制度の今後を考える上で考慮しなければならない。全学科から寄せられている意見から判断しても、授業公開そのものには肯定的で、協力する姿勢を示しながら、自らは参観しない（あるいは、多忙ゆえに機会をもちにくい）教員が依然として少なくないことが問題である。改善に向けて今後どのような方向をとるべきかについて、報告中の「2.5. 授業公開に対する意見」を参照しながら以下で考えてみたい。

2.3. 授業公開制度の改善に向けて

報告書の「2.5. 授業公開に対する意見」を踏まえ、(1) 今年度の変更点についての反省、(2) 実りある制度設計に向けて、の二つの観点から今後の在り方を探ってみたい。

(1) 今年度の変更点についての反省

今年度の授業公開・授業参観においては、前年度に寄せられた提案を採用し、実施期間を1週間に短縮する代わりに期間内のすべての授業を原則として公開する方法が採用された。

授業公開の期間を1週間に短縮した点については、否定的なコメントが多く寄せられた。具体的には、公開する期間が短いために、他の教員の授業を参観する機会を活用することが困難であるという課題である。自身の授業を公開すること自体には抵抗が無いが、他の先生の授業を参観するとなるとある程度の期間（2週間以上）を設定した方が柔軟な対応が可能であるとするコメントが複数寄せられている。人文学科から寄せられたコメントでも「法文学部では曜日によって授業数の偏りが見られ、聞かせて頂きたい授業と自身の授業が重なったり、他の用務で出席できなかつたりする場合もある」「自分が誰かの授業を見に行くとなると時間の工面が大変だと感じる。来年は自分の授業を休講にして参観しようかと思う」との指摘がある。

今年度は期間中の授業を原則としてすべて公開する方法を採用する点を主眼とし、授業公開実施の負担を増加させないために公開期間を短く設定した経緯がある。その結果として参観が困難になってしまったことは遺憾であり、次年度以降の改善が求められる部分であると考えられる。

期間内のすべての授業を原則として公開することについては肯定的なコメント、否定的なコメントの双方が寄せられた。肯定的なものには「共通教育での授業公開のように、担当教員の所属を問わず、授業担当者全ての科目を公開すべきだと思います」（法政策学科）「今回の方法がやりやすいと感じました」（人文学科）といったものがある。すでに共通教育で実施されていることから、抵抗なく受け入れられたのかもしれない。あるいは、期間内の授業の進行度合いを考えながら公開タイミングを決定する手間が省けるという側面が評価されたのかもしれない。

否定的なコメントとしては、「すべて公開よりも、授業担当者によって選ばれた授業を参加の方が好ましい。デザインされ、工夫された授業を公開することは意味がある」が挙げられる。授業の進行状況によっては授業公開・授業参観に適さないタイミングに当たってしまうこともあるだろう。あるいは、義務的にただ公開するだけの授業公開ではFD活動としての授業公開・授業参観の目的を達成することにはつながらないという意見なのかもしれない。

上記今年度の変更点についてのコメントを集約すると、大きく2つの対処法が考えられる。1つは授業公開の期間を従来のように長く設定する方法である。しかし、「他の先生方の授業を参観すること自体は非常に有益だが、それにまつわる事務的な作業が軽減されるのが望ましい」（人文学科）とあるように、教員の事務作業の負担減とセットで考えなければならぬ問題であろう。

第2に、授業公開の期間設定を行わないという方法もありうる。授業公開・参観の期間を設定するというよりも、それぞれの教員・授業のタイミングに合わせて、教員が自信のある授業を自ら選んで公開する方法である。

対処法は必ずしもこの限りではないが、次年度以降、何らかの改善の必要が高いことは間違いないと考える。

（2）実りある制度設計に向けて

授業公開・参観の制度そのものについては、肯定的なコメントが多数寄せられている。「(参観者の有無に関わりなく)自分の授業を省みるよい機会ではないかと思っております」（法政策学科）「大学教員には、社会に役立つ人材を育成する義務があります。しかしながら、そのノウハウを学ぶ場所が極めて少ないのが現状です。したがって、公開授業という形で、他の先生のノウハウを吸収する機会があることは、鹿児島大学の教員・学生にとって、非常に有益であると思います」（経済情報学科）「自分とは異なる専門分野の授業を参観させていただくことにより、他の教員の授業方法についてだけでなく、自分の専門分野以外で蓄積されている研究成果等についても学ぶことができるので、教員にとって授業公開は貴重な機会であると思う」（人文学科）など、多くの教員が制度そのものの意義を理解し、前向きに活用しようと考えている。

しかし、「授業公開・参観の意義はあると思いますが、マンネリ化していることは否めな

いように感じます」(人文学科)とあるように、授業公開・参観の実施には一定の意義を見出すものの、その実施方法に改善の余地が大きい点を指摘するコメントも多い。

「毎年授業公開が実施されるが、参観者が少ないので、授業公開の方法を考える時期に来ているのではないかと思う」(経済情報学科)「従来、大学の授業は教員個人の裁量に委ねられる点が多く、また教員サイドに授業の質を高めるという意識が今ほどは高くなかった可能性がある。こうした背景からFD委員会が発足したのだと考える。したがってFD委員会の活動は、当初は委員会側から半ば強制的にFD活動を引き起こしていくタイプの活動が中心であったかもしれない。しかし、その状況は変わりつつあると考える。たとえば今回の授業公開期間中においても複数名の教員が合同で基礎演習を実施するなど、教員側の自主的なFD活動が盛んになりつつある。また合同でゼミを実施し、懇親会の場で学生を交えてゼミの進め方について議論する例も複数耳にしている。こうした動きはとりわけ若手で顕著であるが、若手がベテラン教員のアドバイスを請う形でベテランも巻き込んだ活動へと進化しつつある。教員側の自主的なFD活動が活発化するなかで、FD委員会の果たすべき役割は教員の自主的なFD活動を支援し、その成果を学科・学部・全学に共有することへとシフトしていく必要があるかもしれない。授業公開・授業参観という半強制的な(前時代的な)FD活動を今後も継続する必要があるのか、という点については検討の余地があるのではないかと考えている。」(経済情報学科)といったコメントは、授業公開・授業参観というFD活動の方法そのものに疑問を投げかけている。

また、より具体的に参観者からのフィードバック方法の改善を求める意欲的なコメントも見られた。たとえば、「今回初めて、参観者の先生から評価をいただき、非常にためになった。ただ、授業に対する問題点等のマイナス面については人間関係上指摘しづらい面もあるかと思うので、この点をどうにか改善していただければ、より効果のある授業公開制度になると思う」(経済情報学科)という指摘がある。単に参観者が増えたとしても、公開する側にとってメリットが少ないのではないかという意見だろう。この点については、「他大学でもあるような教授法の学位(あるいは知識やスキル)を持った職員に定期的に授業を見てもらい、教員にフィードバックするようなシステムがあると授業の改善・向上につながりやすくなると思います」(経済情報学科)という改善提案がなされている。人材確保の問題や人選の妥当性の問題など、解決すべき課題が多いとは思われるが、検討の余地はあるかもしれない。

以上のコメントを集約すると、授業公開・授業参観制度は「教員が授業の質を向上させるためのきっかけ作り」および「意欲的な教員が同僚の授業の工夫を学ぶ場」として作用してきたと整理できるだろう。参観者がいなかったとしても、同僚の目にさらされるかもしれないという緊張感は、改めて自身の授業を見直すきっかけとして機能しているように思える。また、授業を公開した結果得られるフィードバックには不満が残るものの、同僚の授業を参観することで得られる学びは大きいとする意見が多い。

しかし意欲的な教員からすれば現状の制度には不満が残るのだろう。同僚の授業から学

ぶ場は自分たちでも設定することができる（すでにしている）。せっかく公開したにもかかわらず自身の授業を参観してもらえない、改善点を伝えてもらえない。こうした声にどの程度応えていくべきかは、授業参観・授業公開という制度の位置づけとも関わるだろう。

授業公開・授業参観の制度をFD活動に意欲的でない教員に対してその重要性を理解してもらうための活動として位置づけるのか、多忙を極める学務の合間を縫って自身の教育活動を見つめなおすきっかけとして位置づけるのか、FD活動に意欲的な教員を満足させるような制度へと変容させていくべきなのか。すべてを同時に満たすような均衡点を見つけることは困難を極めると考えられるが、ターゲット・実施の目的・FD活動の現状等を改めて整理し議論していくことは意義があると考ええる。

3. 人文社会科学研究科授業評価アンケート調査

今年度の「人文社会科学研究科授業評価アンケート調査」は、6月22日から7月10日にかけて実施された。調査の対象は、各教員の担当授業のうち1科目としたが、博士後期課程を担当している場合は、博士前期課程と博士後期課程それぞれ1科目とした。アンケートの項目内容は、継続性を重視する観点から、従来と同様とした。アンケートの結果は、おおむね次のようにまとめられる。

(1) 今年度の調査においても、授業についての5項目(1)～(5)と受講生に関する2項目(6)と(7)のすべてにおいて、5段階評価で4以上の評価が全体の9割以上を占めている。このことから、本研究科においては、受講生のニーズに合った質の高い授業が提供されており、受講生も熱心に受講していることがわかる。また、昨年度と比較すると、全ての項目において4以上の評価の割合が上昇しており、受講生のニーズに合った授業への改善、受講生の受講態度の改善が見られるという結果が得られた。しかしながら、今年度は(2)テキスト・資料等の適切さと(5)教員の熱意に関して、5の評価の占める割合が昨年度に比べて低くなっている。他の質問項目の結果や自由記述から見て取れるように受講生の授業に対する評価は極めて高いが、今年度に関してはテキスト・資料等の適切さと教員の熱意については評価が低くなっていることが明らかになった。適切なテキスト・資料の選択、教員の熱意は、(3)授業内容の理解度、(6)学力や興味の向上、(7)受講態度の改善につながることから、さらにきめ細やかな対応が教員に求められるだろう。

(2) 過去9回の調査と今回のアンケート結果を比較しても全体的傾向は一貫しており、全ての調査において全項目は5段階評価で一貫して高い評価を得ている。こうしたアンケート結果の一致は、本研究科の授業に対する受講者の満足度が高いことを示しているといえよう。

(3) 大学院課程の授業評価アンケート調査は今回で10回目だが、研究科全体の実施率は46.3%で、前年度の77.8%と比較して、大幅に低下した。本アンケート調査は、授業改善のための基礎的データを収集するために不可欠なものであるから、実施率を高い水準で維持

するため、アンケート実施に対する各教員の意識向上、アンケート実施依頼の徹底措置が必要であろう。

以上のように、人文社会科学研究科では、受講者から高く評価される効果的な授業が実施されていると評価することができる。今後は、このレベルを維持するだけでなく、さらにより高いレベルの授業を構築していくためにFD活動に取り組んでいくことが望まれよう。

4. 人文社会科学研究科 TA アンケート調査

「TA アンケート調査」は、授業における教育支援者としてのティーチング・アシスタント（教育助手。以下、「TA」と記す）の在り方を教員間で検討することを目的に、平成19年度より開始された。今年度は、法文学部後期授業にTAを務めた人文社会科学研究科の学生全員を対象として、平成27年7月24日～8月5日と平成28年1月13日～2月3日の2回に分けて実施された。その結果は、以下のようにまとめられる。

「事前準備」「教員の指導等」「TAのメリット」の項目の結果から、TAは教員との間で適度な連絡をとりつつ、熱心に業務に従事し、TA制度が効果的に実施されていることが確認できる。また、「TAの負担」については、後期の時期においてTA業務と修士論文の執筆が重なることが負担になっているという意見もあった。

平成27年度TAアンケートにおいて、特に改善された点は以下の通りである。

一昨年度までTAは後期のみの雇用であったため、TAが従事できる科目は制限され、学生自身の専門とは異なる科目でTAを務めるケースも少なくなかった。昨年度より前・後期両方で雇用が可能となり選択肢が増えたことで、より学生の専門に近い科目（例えば、指導教員の専門科目）でTAの業務を遂行できるようになった。学生はTAの業務を通して、専門的知識をさらに深め自身の研究およびプレゼン能力を高める良い機会と捉えているようである。

昨年度はアンケート調査を1月～2月にのみ実施したため、前期にTAを担当した学生からすべて回収するのは極めて難しかった。今年度は7月～8月、1月～2月の2回に分けてアンケートを行ったことから、多くのTA担当者からアンケートの回答を得ることができ、TAの活動実態を知る上で有意義なデータが得られた。

以上の結果から、今年度も、人文社会科学研究科のTA制度は、学生へ教育経験の機会を提供し、業務の遂行も高く評価できることが確認できた。今後も継続し、さらに充実した制度となるよう努力していきたい。

教育学部・ 教育学研究科

平成 27 年度教育学部・教育学研究科教育改善活動報告

目次

1 章 学部授業アンケート回答の分析

1. 授業アンケート質問項目について 1
2. 授業アンケート回答の分析 1

2 章 平成 27 年度前期・後期教育学部授業公開報告

1. 授業公開の実施計画 3
2. 授業公開の実施状況 4
3. 授業参観報告書における記述 5

3 章 教育学部・教育学研究科合同 F D シンポジウム

1. F D シンポジウムの目的 8
2. F D シンポジウムのテーマ 8
3. スケジュール 8
4. 基調報告 8
5. グループ別討論会及び全体報告 9
6. 全体討論会での議論（学生 F D 委員によるまとめ） 10

4 章 学生 F D サミット 2015 夏

1. 活動内容 12
2. 活動詳細 12

5 章 平成 28 年度教育学研究科教育改善のための意識調査

1. はじめに 14
2. 意識調査の実施方法 14
3. 意識調査の質問項目 14
4. 調査結果 14

1章 学部授業アンケート回答の分析

1. 授業アンケート質問項目について

昨年度に引き続き質問項目の見直しを行った。本来、数年分のデータの比較・分析が可能となるまでは質問項目は変更しない方がいいのだろうが、質問項目としての妥当性の向上の観点から検討した結果、11項目を継続、5項目を削除、3項目を新設することとした。これら質問項目の見直しにより、近似した項目の省略や質問意図の曖昧さの軽減が図られたものと考えている。

2. 授業アンケート回答の分析

アンケートの実施科目数は昨年度の60科目から5科目少ない55科目で、実施率はおよそ55%である。今後も実施率向上の方策を検討していく必要がある。授業アンケートの14の質問項目について、全科目平均値を次頁の図1に示した。上位3項目と下位3項目は以下のとおりである。

上位3項目	下位3項目
Q14「授業に対する教師の熱意を感じましたか」	Q13「オフィスアワーを活用しましたか」(新)
Q10「教師の説明の仕方は分かりやすかったですか」	Q 6「授業中質問や発言をしましたか」(新)
Q 9「教師の話し方は明瞭で聞きとりやすいものでしたか」	Q 4「予習や復習をしましたか」(新)

下位3項目はいずれも今年度の新設項目である。これらの項目は、学生自身が授業への取り組みについて自省することを明らかに含意した文言なので、学生の評価の低さは想定された結果と言える。これらの次に評価が低い項目は、Q3「授業内容を理解するためには普段の予習や復習が必要不可欠でしたか。」、Q5「授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか。」、Q7「授業内容は理解できましたか」で、これらは昨年度と同様の結果である。

表1は、平成26年度と27年度の年度間比較を試行的に行ったものである。表の右端の数値から分かるように、27年度は継続使用した11項目全てで26年度を下回る結果となったのは意外であったが、数値としては授業改善が進まず、寧ろ後退している現状を示している。本アンケートの形骸化も今後懸念される中、学生の有用な声を授業改善に確実に活かすことが最重要事項である。

授業評価アンケート 質問項目	H27	全科目平均値 H27	H26	全科目平均値 H26	全科目平均値差 H27-H26
授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか。	Q1	3.54	Q1	3.61	-0.07
授業の進度は適切でしたか。	Q2	3.56	Q2	3.67	-0.10
授業内容を理解するためには普段の予習や復習が必要不可欠でしたか。	Q3	2.92	Q3	2.94	-0.02
新 予習や復習をしましたか。	Q4	2.54			
授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか。	Q5	3.07	Q4	3.37	-0.30
新 授業中質問や発言をしましたか。	Q6	2.63			
授業内容は理解できましたか。	Q7	3.38	Q5	3.43	-0.05
授業はあなたの知的好奇心を刺激しましたか。	Q8	3.42	Q9	3.54	-0.12
教師の話し方は明瞭で聞きとりやすいものでしたか。	Q9	3.58	Q11	3.67	-0.09
教師の説明の仕方は分かりやすかったですか。	Q10	3.59	Q12	3.63	-0.04
資料(板書、プロジェクター、配布資料等)の内容は明瞭に見てとることができましたか。	Q11	3.47	Q13	3.56	-0.09
授業は時間通りに行われましたか。	Q12	3.55	Q14	3.70	-0.15
新 オフィスアワーを活用しましたか。	Q13	1.87			
授業に対する教師の熱意を感じましたか。	Q14	3.61	Q16	3.72	-0.11

表1 年度間比較 (H26年度とH27年度)

<H26年度からの削除項目>

- ・大学の授業にふさわしいレベルの内容を学べたと感じましたか
- ・授業に満足していますか
- ・授業はあなたのためになったと思いますか
- ・この授業の履修を他の学生にも薦めたいと思いますか
- ・質問には丁寧に対応してくれましたか

◎<H27年度 質問項目>

- Q1 授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか。
- Q2 授業の進度は適切でしたか。
- Q3 授業内容を理解するためには普段の予習や復習が必要不可欠でしたか。
- Q4 予習や復習をしましたか。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (新設)
- Q5 授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか。
- Q6 授業中質問や発言をしましたか。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (新設)
- Q7 授業内容は理解できましたか。
- Q8 授業はあなたの知的好奇心を刺激しましたか。
- Q9 教師の話し方は明瞭で聞きとりやすいものでしたか。
- Q10 教師の説明の仕方は分かりやすかったですか。
- Q11 資料(板書、プロジェクター、配布資料等)の内容は明瞭に見てとることができましたか。
- Q12 授業は時間通りに行われましたか。
- Q13 オフィスアワーを活用しましたか。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (新設)
- Q14 授業に対する教師の熱意を感じましたか。

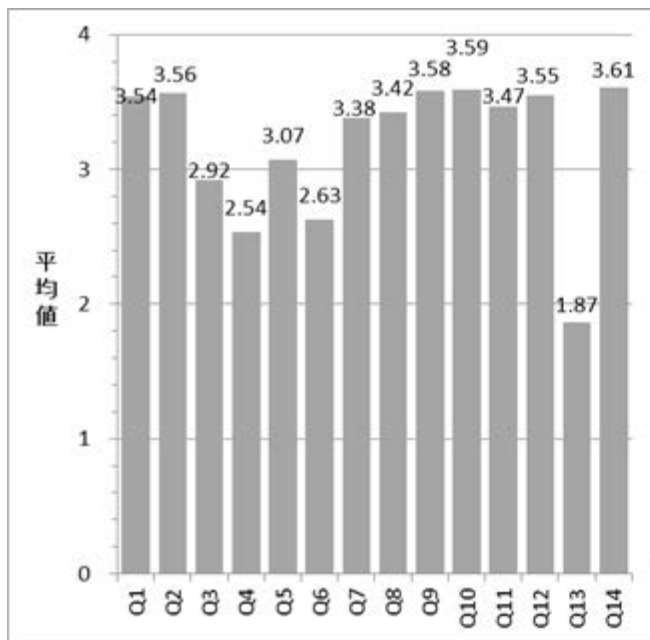


図1 各質問項目に対する全科目の平均値

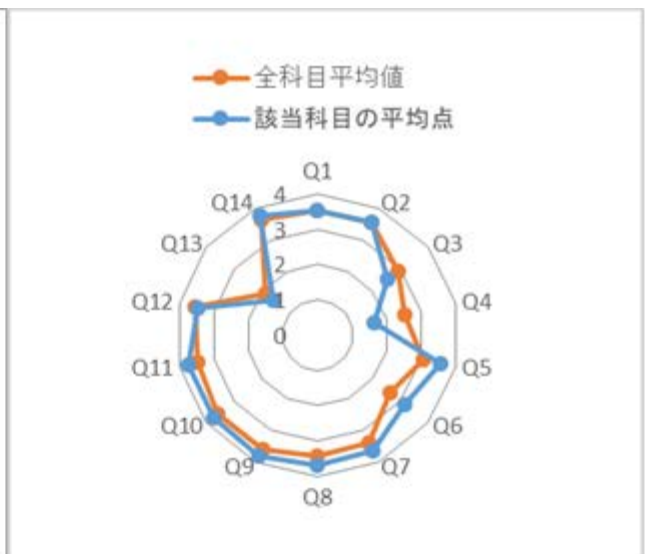


図2 各教員に返却した図の例
 該当科目と全体の平均が比較できるようにした。周囲の数字は質問項目、円内の数字 0~4 は平均点を示す。

2章 平成27年度前期・後期教育学部授業公開報告

1. 授業公開の実施計画

鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針にあるFDの定義には「～教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上をはかるとともに、学生支援を行う自発的な取組」とあり、各教員が自発的に自身の教育方法を向上・改善させて行くことが求められている。また、本学部の教育改善委員会においても「教員同士が相互に授業を公開・参観することにより、各教員が授業方法・授業運営の改善をはかり、教育の質的向上を目指す」ことを目的に設定し、継続的に授業公開・参観を実施している。

昨年度までの実施状況を顧みると、参観数の減少傾向はとまり、少ないながらも一定数を維持している。原因はいろいろと考えられるが、この企画の開始当初に比べて教員自身の意識が低下しているのか、授業参観に参加する教員の固定化が要因であると考えられる。また、授業参観の計画も、各教員が授業を一つ提供するものであるため、参観者自身の時間割との重複等もあり、参観機会が限られていることも参観者数が少ない原因であると考えられた。そのため、昨年度からは一人でも多くの教員に参観の機会を提供すべく、前期と後期にそれぞれ授業参観期間を設けた。参観機会の増加とともに参観者数の増加が期待されたが、一昨年と比較してほとんど改善は見られなかった。そこで、今年は前・後期ともに参観期間を設定し、参観者の希望があれば授業者と相談の上、提供授業一覧に記載のない授業も参観可として授業公開を実施した。

(1) 授業公開の枠組み

実施方法は、基本的に昨年度の方法に準拠して行った。教育学部所属の教員に必ず一つは提供するよう依頼し、提供された授業公開科目一覧表をもとに参観する教員が授業提供者に事前に連絡し、確認を行ってから当日に参観する方法を行った。

(2) 授業公開科目の調査

前期授業公開については、事前に教授会で報告した後に平成27年5月20日(水)～5月29日(金)の期間で授業公開に関する調査を行った。調査内容は、①授業公開実施科目名(曜日・時限・科目名・講義室)、②受入可能人数(人数を指定する場合、人数を記載)であり、それらを各専修世話人に報告してもらい、専修世話人は、それらを一覧表にして教育改善委員会の担当者にメールで転送をもらった。

後期授業公開も同様の内容の調査について、教授会で報告後、平成27年11月18日(水)～11月27日(金)の期間で授業公開に関する調査を行った。

(3) 授業公開科目一覧と授業参観報告書書式の提示

各専修世話人から提出された資料を集約し、前期授業公開については平成27年6月3日(水)に、また後期授業公開については平成27年12月2日(水)に教育学部全員に授業公開科目一覧表と授業参観報告書の書式を配布するとともに、授業公開実施要項を提示した。各教員の諸事情により授業公開科目一覧表の内容に変更等が生じた場合は、その都度訂正版を全教員に配布した。授業参観者は、授業参観報告書を提出することを原則とした。また、授業公開科目一覧表は、本学の他学部に対しても送付された。

(4) 授業公開及び授業参観の実施

前期授業公開期間は平成 27 年 6 月 8 日（月）から 7 月 10 日（金）までを、また後期授業公開期間は平成 27 年 12 月 7 日（月）から平成 28 年 1 月 22 日（金）までとし、この期間中に各教員は、授業公開および授業参観を実施した。

(5) 授業参観報告書の提出

授業を参加した教員は、前期授業公開については平成 27 年 6 月 8 日（月）から 7 月 24 日（金）までに、また後期授業公開については平成 27 年 12 月 7 日（月）から平成 28 年 1 月 22 日（金）までに授業参観報告書の提出することが求められた。

(6) 授業公開のまとめ

提出された各教員の授業参加報告書をもとに、教育学部教育改善委員会が集約、整理を行った。

2. 授業公開の実施状況

授業参観報告書を集計、整理した結果、平成 27 年度教育学部授業公開の実施状況は以下の通りであった。

(1) 授業公開科目数

前期授業公開については、公開科目として 88 科目の登録があった。このうち 1 科目は、6 名の教員の連名で登録があったものである。また一つの科目を複数名で担当している授業については、それぞれの担当日ごとに登録されているケースがあった。また、一つの科目を複数の場所で別れて開講しているものもあるが、これらは一つの科目として取り扱っている。授業内容や進度の関係で、公開授業日を指定されている授業もあり、これらは公開科目一覧表に全て記載した。参加教員数は、92 名であった。理由を確認してはいないが、授業提供のない教員が 1 名、病気療養中のため授業を提供できなかった教員が 1 名、長期在外研修のため参加できなかった教員が 1 名いたが、ほぼ全ての教員から授業の提供があった。

後期授業公開については、公開科目として 96 科目の登録があった。一つの科目を複数名で担当している授業について、それぞれの担当日ごとに登録されているケースがあった。参加教員数は、96 名であった。病気療養中の教員及び長期在外研修の教員以外の全ての教員から授業の提供があった。

(2) 授業参観件数

前期授業参観について、提出された授業参観報告書は 30 通であり、昨年度の 27 通（後期実施）より若干増加した。しかし、後期授業参観については、提出された授業参観報告書は 12 通であり、前期に比べると大幅に低下している。

平成 23 年度の授業公開から、参観者は 20 名から 30 名の間で推移しており、作年度から授業公開の期間を 2 期設定しても、あまり改善は見られなかった。特に後期授業公開については前期との組合せの意味で行う旨を広報していたのが減少の理由に考えられるが、後期のみ参観を行なった教員も 2 名いたことから、少ないながらも授業公開期間を増やしたことの意義はあったと考えられる。

3. 授業参観報告書における記述

多くの報告書に共通する内容は、参観でよかった点や工夫や配慮についての具体的な記載であった。以下に「授業参観者が、よい、あるいは取り入れてみたいと評価した授業の方法」と「参観授業の改善のための工夫」の2つにわけて紹介をしたい。

【授業参観者が、良いあるいは取り入れてみたいと評価した授業の方法】

【授業の導入】

- ・ PP上にキーワードを2回ほど提示し、学生の電子媒体を活用して出席を取るという方法を用いられており、出席確認のための時間短縮や確実性が保障されると思いました。
- ・ 授業の最初で、全体の授業の流れにおける当日の授業の位置づけ、また、当日の授業の流れがよくわかるような説明がなされていて、復習にもつながるものと思いました。
- ・ 前回の振り返りを、口頭だけでなく資料やスライドを使いながら提示しており、視覚を通して確認することができるよう努めていた点が良かったです。また、しっかりと丁寧に振り返りを行っていました。

【授業の展開】

- ・ 講義とあわせて、受講生の興味・関心を喚起するような多くの演習を取り入れておられたことです。具体的に、本授業では、カードソート法とよばれる「キャリア・価値の分析」に関する演習が行われていました。これは、受講生の価値観や人生観などに関する潜在的な認識を顕在化させるものであり、受講生自身の価値観や人生観のみならず、生徒の進路設計や人生設計の指導にも有効であると強く感じました。
- ・ 様々な事例を紹介されながら、生き方について考える機会を受講生に提供されておられたことです。例えば、「ハチドリの一しずく」の童話の紹介およびその検討は、その好例です。
- ・ 受講生同士が刺激しあう工夫がなされ、作品づくりを介してスパイラル的に展開するスタイルの講義であったといえる。
- ・ 学生への発問は、多人数講義ではやりにくい所もありますが、「さあ、皆さんはどうでしょうか」など、上手に間を取ることで、心のうちに考えさせるという方法も取れることを実感することもできました。
- ・ 高校生向けの地理番組を使い、オイルマネーの実際やOPECの歴史のイメージをつけさせようとされていました。活字資料からだけではイメージしづらいところもあるので参考になりました。
- ・ 重要な用語や説明は書かせるよう穴抜きのプリントとなっていました。統計資料や説明が詰まったプリントで、作成されるのも大変だったと思いました。
- ・ 学生を少人数のグループに分けて、グループ同士を競わせて、グループ内での討論を活発にさせる等、授業方法に斬新な工夫が見られ大いに参考になった。
- ・ 実際に筆を取り手本を示すことはなかったが、「指導言葉のみ」にて、作品づくりの方向性を示唆する手法は、大変参考になったところである。改めて、指導場面における「言葉の価値と意味」について捉え直す機会になった。

- ・初回に「サブノート」を配布しておくことで、次回の授業内容の予習はもちろん、半年間の授業内容を体系的にイメージしやすくなると思いました。私の場合、毎回授業時に資料を配っているのですが、今後、自分の授業にも「サブノート」を取り入れてみたいと思います。
- ・授業の進捗は学生側が教科書やサブノートを読み、疑問に思った点を質問すると、教員側がそれらに答えるという「学生参加型」で行われており、学生の自発的な学びを促すための工夫がなされていました。その他に教員側が回答する際は、必ず質問した学生の名前を呼び（たとえば、〇〇さんが質問したように……）、その学生への正の強化を与える場面も印象的でした。
- ・各人の技能に合わせて難易度が選べるような教材を準備
- ・板書については要点に限っており、そのため学生にとっては重要点を確認しやすく、本単元の全体像が見えていたように思う。これまで板書については省略することが多く、板書の有用性に気づくことができた。
- ・実技指導で、通常の座学の授業とは異なると思っていたが、先生の定位置が後ろにあることに少し驚きを感じた。演奏を聴くためとは思いますが、最初から後ろというのは新鮮だった。指導は、各ペアに対して15分～20分の間で行われていたが、常に緊張感があり、演奏をしていない学生も姿勢を崩している人は見当たらなかった。
- ・明らかに練習不足と思われる学生に対して、同じミスを繰り返すことに対しては、極めて厳しい口調で指導を行われていた。自分の通常の授業ではそのような状況になることはない（最終的に筆記試験を重視していることから）が、実験の授業については自分も厳しい態度で臨むべきだと痛感した。
- ・レポートの書き方を尋ねた際、実験の目的や意義は特に授業では説明せず、自分で考えてレポートに記述して欲しいとのことであった。化学実験では目的等は説明して、意識を持たせてから実験・レポートの作成に取り組んでもらうようにしているため、異なる教育方針が知れたのは興味深かった。
- ・授業評価シートが2領域9観点から構成されており、学生の取り組みをしっかりと看取することが準備されていました。このことで、これまでの授業の理解の程度や模擬授業に向けての準備の程度を的確に評価できるように思えました。
- ・「世界一暮らしやすい国」の日本語資料が配布され、経済格差の及ぼす影響や教育の問題など、学習者はエビデンスに基づき議論することが求められた。さらに、お互いの考えを英語で表現しながら、相手の話を理解し、自ら討論していくアクティビティの高い学習法といえた。
- ・教師からの発問はなかったがパワーポイントを使った資料提示と説明は非常にわかりやすかった。英語の例文も説明に即して覚えやすいものだった。授業の始まりで、前回の授業に対する受講者からの質問に一つ一つ丁寧に答えていたが、これは学習の振り返りと深化・補充にとって効果的なやり方だと思った。質問は授業の最後にカードを配布して記入してもらっていた。
- ・結果を各グループに実際に発表させることなく、机間巡回のあいだに素早く読み取って教員自体がまとめてしまい無駄な停滞を防ぐ。「他のグループからは出ないものを！」等々競技性遊戯性も適宜とり入れられる。クラス・マネジメントと学習内容そ

のもの両面において、ことの軽重を教員があらかじめよく理解していればこそその鮮やかな進行である。

- ・医学系の授業は、どうしても知識注入型の授業になってしまうため、授業中居眠りをする学生が多いが、質問を頻繁にし、表が赤で裏が白のカードで答えさせ、受講生を上手く授業に参加させていたと思う。
- ・プリントに紹介されているものの出展がすぐにわかるようになっていましたので、自分でさらに調べて学習しようとする学生にとって便利だと思います。
- ・実物を用いての観察・実験は、受講する学生の取り組み意欲も高くなるので、学生実験以外の自分の講義の中においても、実物を用いた演示実験や工作、実際の授業状況の提供などを取り入れていきたい。
- ・講義だけでなく、ビデオ視聴を行うことで、教育相談等を行う際の留意点について具体的に学ぶことができていると思った。第12、13講では県総合教育センターの教育相談課を訪問して、本県における教育相談の現状を学ぶことも計画されており、座学中心ではないシラバスであることも確認できた。
- ・本時授業前に Moodle で授業用ノートが配布されており、受講学生が持参することになっていた。また、講義の要点がプレゼンテーション資料として提示されていた。
- ・全体指導のあとの個別指導では、学生各々の適性に応じた、詳細で具体的なアドバイスが見られ、指導を受けた学生の技術的向上がすぐにあらわれていた。
- ・練習用も兼ねた詳細な印刷資料も配付され、文字だけでなく図もふんだんに使われており、たくさんの情報を効率的に吸収しやすいように作成されていた（しかも、内容だけでなく見た目にも大変美しいものであった）。
- ・また授業計画の発表後には、他のグループによる相互評価（共感できる部分、異議を唱える部分）のメモがフィードバックされ、次回授業までに再検討した授業計画を提出することになっていた。これにより授業での発表がやりっぱなしで終わらず、授業計画の質をより高めて終わることが可能となる。学生が活動する授業の質を高めるには、授業者による事前、本時、事後の綿密な計画が重要であると感じた。
- ・学生とのコミュニケーションや話す内容等について、大人数講義でも対話的に、そして興味を引き付けられる小技が参考になった。具体的には、①時折疑問を投げかけ、学生同士で話し合う活動を入れるとともに、一番後部に座る学生を指名する、②試験の出題に関わる話を挟んで注目を集める、③鼻を嚙んでうるさい学生のよろしくない行動に対して笑いで対処する等を真似たい。
- ・アクティブ・ラーニングの授業とは、このようなものかという典型を参観させていただいた。このような展開への準備や工夫に費やす時間とエネルギーは膨大になるだろうと感じたが、学生の参画状況や満足度は非常に高いだろうと思いました。
- ・パワーポイントでなく、資料を配布し、学生の注目度をチェックしながら進める授業の内容は、ともすれば私のパワーポイント中心の授業と異なり、参考になった。

3章 教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウム

1. FDシンポジウムの目的

学生の視点から教育活動の実態について調査・報告をおこない、改善策を提言することが主な目的である。また、今後の継続的な活動のために記録を蓄積し活用できるようにすることも重要な目的である。

2. FDシンポジウムのテーマ

シンポジウム開催前に学生FD委員によって取り上げるべきテーマが議論され、学生に対するアンケート調査も併用して下記のテーマが決定された。最初のテーマは、今年度新たに設立されたアクティブラーニングプラザに対して学生たちがその利用法を主体的に決めるために設定されたものである。また、後者の2つは教育内容をより良くするためという視点から選ばれたものである。

- (1) 第二講義棟(アクティブラーニングプラザ)の利用法について
- (2) 履修に関して(時間割を含む)
- (3) 大学内施設の利用について

3. スケジュール

日時:平成27年12月22日(火)

- | | |
|-----------|---------------|
| 1. 受付 | 13:50 ~ 14:00 |
| 2. 基調報告 | 14:00 ~ 14:30 |
| 3. グループ討論 | 14:40 ~ 15:40 |
| 4. 全体報告 | 15:50 ~ 16:50 |

4. 基調報告

後の集団討論が円滑に進むように教員3名(瀬筒委員, 錦織委員, 池川委員長)による基調報告がなされた。まず瀬筒委員から、9月に行われた学生FDサミットの参加報告がおこなわれ、各大学の学生FD委員の取り組み等が報告された。錦織委員からは、教育学部のカリキュラムの特徴や第二講義棟の設立目的といった今回のテーマに沿った内容についての概説がおこなわれた。池川委員長からは、学生FD委員の設立当初の様子からなぜFDが必要なのかという理念までのより広い包括的な報告がおこなわれた。

5. グループ別討論会および全体報告会

各グループは学部生(主に3年生)5～6名, 大学院生1～2名, 教員1～2名を基本単位とした。下記は学生FD委員が, それぞれのグループで話し合われた内容等についてまとめたものである。

Aグループ

- アクティブラーニングプラザに関して
 - ・駐車場に屋根が欲しい。
 - ・部屋ごとに使用方法を決める。(学習/娯楽スペースの区別)
- 履修登録・時間割に関して
 - ・履修登録の説明を詳しくする。(例:教育課程の見方を詳しく。)
 - ・エントリーを同じ時間に何枚も出したい。
- 大学内施設に関して
 - ・エデュカにATMを設置する。
 - ・売店の時間を少し遅くしたい。

Bグループ

- アクティブラーニングプラザに関して
 - ・プラザ内で目的ごとに部屋を作成する。
 - ・時間外の使用に関しては, 1, 2年生は申請制にする。
- 履修登録・時間割に関して
 - ・免許取得, あるいは卒業までにあとどれくらい単位が必要なのか確認するのが容易にできるシステムを作って欲しい。

Cグループ

- アクティブラーニングプラザに関して
 - ・使用時間の提示をする。
 - ・部屋の使い分け。
 - ・ゴミ・空気などの環境整理をする。
 - ・掃除道具・ゴミ箱の設置をする。
 - ・ボランティアサークルで清掃活動を行う。
- 履修登録・時間割に関して
 - ・履修登録の時間・期間の改善をする。(例:エントリーシートの受付を24時間可能にする。2日間の受付にする。)
 - ・共通科目の授業と実習が重なる。
 - ・共通教育で抽選が落ちた後の履修登録方法を改善してほしい。
 - ・専修ごとに履修登録の例を提示してほしい。
- 大学内施設に関して
 - ・ATMを設置してほしい。
 - ・施設のバリアフリー化。

- ・駐輪場の増設をしてほしい。
- ・クーラーの調節を学生自身でもできるようにしてほしい。
- ・コピー機を設置してほしい。

Dグループ

○アクティブラーニングプラザに関して

- ・1階の使用方法。
- ・暖房について。

○履修登録・時間割に関して

- ・集中講義と実習が重なる。
- ・大学院の夜間講義の単位取得の難しさ。
- ・履修したい講義が重なっている。

○大学内施設に関して

- ・エデュカのコピー機について。
- ・冷水器の設置をしてほしい。

Eグループ

○アクティブラーニングプラザに関して～

- ・エアコンの暖房の設定温度が19℃と低い。
- ・ATM, ブラインド, コピー機(USB対応), 冷水器が欲しい。
- ・部屋の使用方法を明確にする。
- ・決まったルールは張り出す等して全員に知らせて欲しい。

○履修登録・時間割に関して～

- ・講義の改善をしてほしい。
- ・履修登録に関する一連の流れを改善してほしい。

○大学内施設に関して

- ・エデュカの営業時間を延長してほしい。
- ・理系棟のトイレの電気, 音姫, CALL教室, 教育学部の案内地図を改善してほしい。
- ・ゴミ箱, ポストを増やしてほしい。
- ・駐輪場の屋根を設置してほしい。
- ・警備員さんへの待遇に関して。(例: 制服をそろえる, 待機室を設置するなど。)

6 全体討論会での議論（学生FD委員によるまとめ）

(ア) ATM設置, コピー機の無料使用に関して

ATMは昔, 教育学部キャンパスにもあったが, 設置者に何らかの理由があったため, 撤去されてしまった。もし, 設置をしたいのであれば外部機関との打ち合わせが必要なため, なかなか実現が難しいと思われる。

以前はコピー機が無料で使えたということだったが, 現在は有料なため, 卒論などで大量に印刷すると莫大な費用がかかるという意見があった。しかし, それは教員側も同じであり, 学生だけが無料で使うというのはなかなか難しいということだった。しかし, 今後の話し合い次第で

は料金を引き下げることが可能かもしれないということだった。

(イ) アクティブラーニングプラザの利用方法に関して

アクティブラーニングプラザは設立後間もないため、利用に関する規則等が曖昧である。これからのFD委員会の話し合いで詳細な利用法を作成するという方針となった。

(ウ) 科室の設置に関して

一部の専修では科室がなく、自分達が勉強できるスペースがないという意見があった。教員側の意見では、科室の設置は教員が必要か否かによって設置の有無が決まっているということだった。これに関しては各専修の学生と教員との問題になるということだった。

(エ) 学校生活に関するアンケートに関して

大学院生の意見で、学校生活に関するアンケートがおこなわれていたということを知らなかったというものがあった。この件に関しては、学部生FD委員会が大学院生も参加するということを知らずにおこなったためである。今後は、大学院生にもアンケートを取っていきたいと思う。

4章 学生FDサミット2015夏

日時：2015年9月2日(水)～3日(木)

会場：追手門学院大学(大阪府茨木市)

参加：64大学 481名

1 活動内容

【1日目 9月2日(水)】受付9:15～

10:00～11:30 オープニング（開会宣言，学長あいさつ，趣旨説明 [Missionの確認]）

11:40～12:50 昼食（アイスブレイク）

13:00～14:00 他大学の事例発表（岡山，京都文教，芝浦工業&追手門学院，山口大）

14:15～16:10 パネルディスカッション（テーマ「本当に大学が“よく”なっている！？」）

16:10～16:20 1日目の振り返り

17:30～19:00 懇親会

【2日目 9月3日(木)】受付9:15～

10:00～11:00 オープニング（1日目の振り返り，2日目のプログラム説明）

11:20～13:30 しゃべり場①—活動年数別—（昼食込み）

テーマA 活動2年以上「今後の学生FDはどうなるのか？」

テーマB 活動2年未満「私たちが大学をよりよくするためには？」

13:50～14:50 しゃべり場②—各大学別—

「2日間の内容を通じて感じたことの共有と，自大学に持って帰るものはなにか，また自団体はこれからどのような活動をしていくべきなのか！？」（アクションプランの作成）

15:00～15:50 各大学発表

16:10～16:40 フィナーレ

2 活動詳細

(1) 活動の整理【活動象限】

本サミットのオープニングにあたり，活動象限という座標軸を用いて，自大学の活動を整理する作業を行った。大学を良くしようとして行っている活動が学生，教職員いずれに向けてのものなのか，また向上，改善のいずれのためなのかを整理しながら活動象限に書きこむことで，活動の本質を捉えようとする方法である。図1は，本学部における教育改善活動の「授業公開」，「授業アンケート」，「教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウム」を活動象限に当てはめたものであるが，「学生」周辺の事象が少ない。本

学部は、学生主体のFD活動に関しては、今後進展の余地を残した初期段階にあると言える。

(2) 他大学の事例発表【他大学の活動を知る】

学生FDの活動が盛んな五大学が発表を行った。発表を聞くうちに本学部の学生FD活動は初期の段階に位置することが分かり、それ以後は本学部に持ち帰ることができる有用な情報や活動はないかという観点で発表を伺うことになった。岡山大および芝浦工業大の発表の要旨は図2に示した。その他、追手門学院大学の発表では、「A悩む教師」(座席の位置によって集中度、理解度に差があるのではないか。), 「B葛藤する教師」(なぜ学生は消極なのか、教科書を変えるべきか。), 「C更なる向上を目指す教師」という3つの教師像を目指して学生主体の授業改善活動が行われているという報告があった。追手門学院大や芝浦工業大では、授業改善の要望や提案をFDに関する専門的な学びを経た学生が直接教師に伝えて支援するシステムを構築している。学生FD活動が盛んな大学には、①FDを研究あるいは強力に押し進める教職員の存在がある、②FD活動を日常的に行う5～10名程の小組織(サークル、生徒会のようなもの)が存在する、という共通点が見られるようである。本学部のように、学生FD活動の初期にあたるような場合は、当面図2の岡山大学のような組織を目指すことが妥当なのではないかと考えられる。

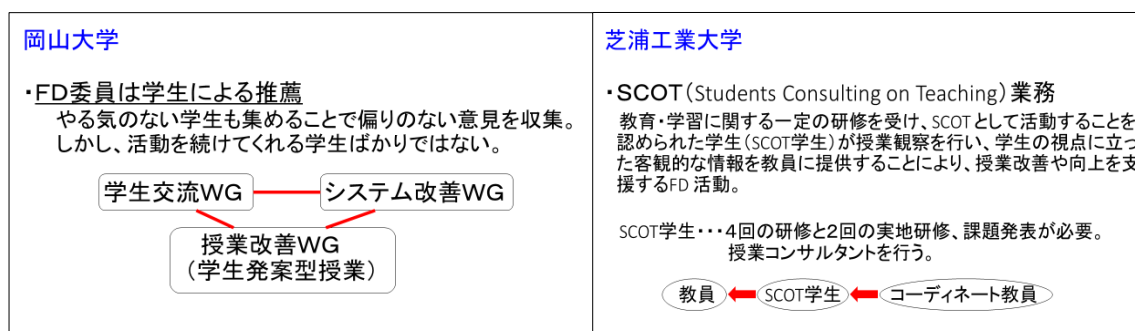


図2 他大学の事例発表 学生ができる学生FD活動の実例

(3) パネルディスカッション【視野を広げる】「本当に大学が“よく”なっている!？」

3名の研究者が学生FDの歴史や課題について述べられた。要旨を整理して示す。

- ・学生FDに専門性があった方が、成果が目に見えやすいのではないか。
- ・学生FDの専門性は必要ではなく、意欲、向上心を大切にしたい。
- ・学生FDの活動を支援する教職員には、専門性が必要である。
- ・学生が授業改善に主体的に関わり、大学は学生と連携する。
- ・モチベーションの保持(成長している実感や目的の共有)
- ・コミットメントが必要(学生のアンケート結果を確実に活かす)

(4) しゃべり場【アクションプランの作成】～各大学発表【決意表明】

他大学の教員や学生と5名程度のグループを形成、KJ法によって自大学の長所・短所を書き出して紹介また他者の考えを聞き合った。よりよいしゃべり場にするため、相手の話に耳を傾ける、積極的に話し合いに参加、些細なことでも発表、みんな明るく笑顔で議論する等は、他のコミュニケーション場面にも応用できる。その後は各大学のグループに戻り、今後のアクションプランを考えて、決意表明としての最終発表を行った。本学部から参加した学生2名は、まずは学生FD委員会の周知が必要であると考えたようである。

5章 平成27年度教育学研究科教育改善のための意識調査

1 はじめに

本学大学院教育学研究科は、改組後7年目を迎えると共に、教職大学院の創設に向けて、大きな転換期を迎えつつあるといえる。過渡期にあっても教育学研究科の教育・研究の水準を確保し発展させていくために、毎年大学院生を対象に教育改善のための意識調査が実施され、結果を考慮しながら、教育・研究環境の改善が図られているところである。

例年挙げられる課題としては、授業内容・授業形態にはおおむね満足しているが、研究・学習環境では改善を求めている状況があり、また、昨年は新たに今後の研究の方向性について調査を行ったところ少数の結果ではあったが十分なサポートを受けていない状況が窺われた。

これらの課題点を踏まえ、教育改善のためのさらなる示唆を得ることを目的とし、本年度も引き続き意識調査を実施し分析する。

2 意識調査の実施方法

平成27年度の教育学研究科大学院生による授業アンケートを以下の手順により実施した。

- 1) 調査期間：2016年1月12日（アンケート配布開始）～2月5日（回収締切）
- 2) 対象：教育学研究科全学生（1年生38名、2年生39名、計77名）を対象とした。回収数は27名（1年生17名、2年生8名、学年不明2名）、回収率は35.1%であった。
- 3) 手法：アンケート用紙（別紙1）にて無記名自記式アンケートとした。
- 4) 配布方法：研究科運営委員より学生に配布
- 5) 回収方法：アンケートBOXを事務室に設置した。
- 6) 集計方法：2016年2月末に集計および分析を行った。なお、分析において無回答は省いた。

3 意識調査の質問項目（資料1参照）

調査項目は、1「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業、2「学修コース専門科目」等の授業、3研究・学習環境、4今後の研究成果の発表予定、5その他、要望・意見について、一部選択式を併用し、それぞれ満足している点、改善してほしい点等を自由記述で回答を求めた。

4 調査結果

1) 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業について

(1) 満足している点（表1-1）

満足している点について、「院生同士の交流」10名（38.5%）が最も多く挙げられ、次いで「講義内容・教員」9名（34.7%）、「オムニバス形式」8名（30.8%）、「カリキュラムの設定」3名（11.5%）、「その他」1名（3.8%）の順であり、「特になし」は2名（7.7%）であった。結果からは、他分野の院生や現職の教員との交流による学びが述べられ、今後、教職大学院教育が開始されるにあたり、良好な環境が醸成されていることがわかる。このような交流は、多様な専門性を有する教員が、講義内容の工夫や采配ができており、オムニバス形式という本共通科目の特色が十分に機能していることにも支えられている様子が窺える。また、夜間教育への配慮やシラバスの明確化などの対応もカリキュラム遂行へのサポートとなり、満足感につながっていることがわかり、今後も継続されることが望まれる。

表1-1 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業における満足している点 (複数回答) (n=26)

	項目	具体的内容	人数(%)
満足している点	院生同士の交流	<ul style="list-style-type: none"> ・現役の先生や留学生、ストレートマスターなど、幅広い年代の人々と意見を交換できること。 ・現職の先生方や社会人、様々な専門分野のストレートマスターと関わることができるから。 ・現職の先生方や他コースのストレートマスターの皆さんと意見交換ができ、自分の知見を広げることができること。 ・現職の先生方とともに教育について学ぶことで視野が広がった。 ・他の専修、現職の先生方との意見交換ができ、見聞を広めることができたから。 ・他の大学院生との意見交換や話し合いで理解を深めることができ満足している。 ・他教科専修の方たちと意見交換ができる点。 ・同じ学年の人と一緒に受けられる講義が多いため、とても楽しく良い刺激を受ける。 ・科の共通は同じ学年の人たちが集まり、いろいろな人と学びあえて充実していたと思う。 ・皆と一緒に授業ができて、よくコミュニケーションができます。 	10(38.5)
	授業内容・教員の指導態度	<ul style="list-style-type: none"> ・学部の時には学べなかった内容を勉強できること。 ・実践的内容や理論的内容など多岐にわたっており満足している。 ・先生方の講義や意見を聞くことで見聞を広めることができたから。 ・先生方の授業は面白かったです。 ・講義のスタイルが参加型のものが多く、意見を発しやすい雰囲気と他者の意見を多く聞けるところが良い ・必修なので様々な先生方と学ぶ機会があり、多くの学びを得られる。 ・共通教育の各分野をそれぞれ特徴的に分けて詳しく勉強する機会がありましてありがたいです。 ・特別支援教育や学校マネジメント等幅広く学ぶことができ良かったです。 ・教育マネジメント特論は特に内容が面白く、勉強になった。 	9(34.7)
	オムニバス形式	<ul style="list-style-type: none"> ・必修科目がオムニバス授業のため、様々な先生の講義を受けることができる。 ・オムニバス形式になっているので、いろいろな視点から講義が受けられるのは良いと思う。 ・オムニバス形式である点。 ・オムニバス形式で、いろんな先生の考えを聞くことができ、視野が広がる。 ・オムニバスの授業が多く、多様な内容の講義を受けられて満足している。 ・オムニバス形式の授業では担当の先生方同士でしっかり連携が取れているように思います。 ・先生方の授業をオムニバスで受けられるということに関しては、様々な視点から教育を学ぶことができたので満足しています。 ・1つの講義で複数の先生の話聞くことができ、1つのテーマ(科目)でも内容・視点がいくつもあることが分かり良かった。 	8(30.8)
	カリキュラムの設定	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムが充実していた。 ・夜間に設置しているので、社会人にも夜間の人にも考慮している。 ・シラバスを示し分かりやすい。 	3(11.5)
	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・満足しているというほどではないが、学ぶ者にとっては、どのような条件でも謙虚に受け入れるべきだと思っている。学問は分野が異なってもどこかに共通性があるものだと感じた。 	1(3.8)
	特になし	<ul style="list-style-type: none"> ・特にありません 等 	2(7.7)

(2) 改善してほしい点 (表1-2)

改善してほしい点については、「特にない」13名(56.5%)が最も多く、次いで「授業時間の延長」4名(17.4%)、「宿題・課題」3名(13.0%)、「カリキュラムの設定」3名(13.0%)が同率で、「その他」1名(4.3%)の順であった。改善してほしい点が「特にない」者が約半数以上ということで、「研究科共通科目」「コース共通科目」においての満足感の高さが窺える結果であった。しかし、次に多かった「授業時間の延長」に関する事項は、毎年(平成23年～)改善してほしい点として挙げられている事項であり、授業時間の延長は教員の熱意の表れと考えられるが、改善を促していく必要がある。また、「課題・宿題」に関しては、授業時間以外でのグループ活動に不自由さを抱えている様子が窺え、教員の配慮が求められる。「カリキュラムの設定」の事項は、共通科目の受講を希望する院生の意欲から出た積極的な要望であり、可能な限りの検討をしていければと考える。

表1-2 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業における改善してほしい点 (複数回答) (n=23)

	項目	具体的内容	人数(%)
改善してほしい点	授業時間の延長	<ul style="list-style-type: none"> ・時間内に授業が終わらない点。20:30に授業が終わるはずなのに、キリが悪いと1時間も授業が延長したことがあった。限度があると思う。 ・授業時間を守ってほしい。毎回オーバーしたが長い時で1時間オーバーした。次の日のことや行き帰りのこともあるので、6限は特に時間を守ってほしい。 ・とても良い授業ばかりですが、ほとんど5分は遅く終わります。長い時は30分～1時間も超過します。それぞれ用があるのでPM8:30にはしっかり終わってほしい。 	3(13.0)
	課題・宿題	<ul style="list-style-type: none"> ・講義内で他の院生との話し合いを通してグループ発表を行うときがあるが、授業時間外では集まりづらく、十分な話し合いを経たグループ発表ができなかった。 ・授業でのグループ活動の時間を増やしてほしい。 ・レポートが多い。 	3(13.0)
	カリキュラムの設定	<ul style="list-style-type: none"> ・研究科共通科目をもう少し増やすことはできないでしょうか(専攻の知識だけでなく教育における諸問題を様々な視点から見て学ぶことができるとも勉強になったため)。 ・コース共通は開講されないものもあり困る。 ・複数の先生の講義を受けることができるメリットはあるが、15回というのは短いと思う。学部共通英語のよ 	3(13.0)
	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・先生の変わりは早いです。1人の先生の授業はまだ十分把握しないうち別先生になりました。 	1(4.4)
	特になし	<ul style="list-style-type: none"> ・特にありません 等 	13(56.5)

2) 「学修コース専門科目」の授業について

(1) 満足している点 (表 2-1)

満足している点については、「専門科目の充実」9名(40.9%)、「専門科目の多様性」8名(36.4%)、「個に合わせた授業・対応」6名(27.3%)、「少人数制の授業」2名(9.1%)、「その他」2名(9.1%)、「特にない」1名(4.5%)の順であった。

項目	具体的内容	人数(%)
専門科目の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・専門的内容をより深く学ぶことができた。 ・より深く専門知識を学べる点。 ・より専門的に様々な事柄を学べる点。 ・自分の興味深い分野に対して、深く勉強できます。 ・学部の時よりも掘り下げた授業であるところが良かった。 ・毎回貴重な資料をいただき、感謝している。 ・実際に役立つ話題や検査の仕方など勉強になった。 ・演習が多いのでとても勉強になります。 ・実技レッスンや音楽教育について充実した講義を受けることができた(知りたいことを教授して下さったり、皆で討論して深めることができたから)。 	9(40.9)
専門科目の多様性	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ学修コースではあるが、全く違う専門科目の講義を受けることもあり、これまでに得られなかったことを学べているので、刺激にもなり満足している。 ・様々な分野を学ぶことができているため、とても満足している。 ・様々な分野の先生方の授業を受けることができ、学びが広がるから。 ・他教科との交流が深まり、多面的な意見・視点を得られる点。 ・自分の専門外のことについて知ることができた点。 ・自分の専修の授業を主にとってきたが、専門のみならず、資料の使い方等もすべて有意義なものだった。 ・他の講義で学習する内容とつながる横断的な講義内容が多く、学習したことと関連付けて考えるということが身につく。 ・音・美・体で共通の授業を受けることで共通理解が深まった。 	8(36.4)
個に合わせた授業・対応	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の修論や学びたいことと関連付けた授業内容を構成していただき、学びが深まるから。 ・大学院ということで、院生に合った研究に近い内容で進めている。 ・レポートの書き方について詳しくご指導いただきました。修論の書き方にもつながりとても役に立っています。 ・受講したすべての授業で丁寧な指導をいただけて大変ありがたかった。 ・少人数でも教授とのコミュニケーションはよく取れている。 ・大学院生側の日程も考慮していただいたりする。 	6(27.3)
少人数制の授業	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数なので意見が言いやすい。自分自身の意見が反映しやすく、やりたいことを授業で扱ってくれる。 ・少人数での授業が多いので、じっくり勉強できます。 	2(9.1)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・野外調査や付属小・中学校での授業参観・授業実践などが多くおもしろかった。実際に子どもに触れる機会になり勉強になった。 ・先生はまじめで授業が面白かったです。いろいろ勉強できました。 	2(9.1)
特にない	<ul style="list-style-type: none"> ・特にない 	1(4.5)

満足している点

「専門科目の充実」と「専門科目の多様性」が多く挙げられていることから、専門科目が充実し、関連する学修コース内の他分野を学ぶことでさらに深まる相乗効果を持ったものになっている様子が窺える。また、専門科目を学ぶにあたっては、「個に合わせた授業・対応」「少人数制の授業」といった院生の状況や研究の方向性に合せて意見を出しやすく、汲み取りやすい対応がなされていることが、満足感に影響していることが分かった。今後も継続していく必要がある。

(2) 改善してほしい点 (表 2-2)

改善してほしい点とその理由については、「特にない」16名(69.6%)で最も多く、次いで「カリキュラムの設定」4名(17.4%)、「授業内容・教員の指導態度」3名(13.0%)、「その他」1名(4.3%)の順であった。「特にない」は約7割が選択し、『共通教育科目』群より満足感が高い状況が窺える。「カリキュラムの設定」においては、専門科目数の増加を希望する者、免許単位の互換を希望する者、学修コースのくりに違和感を持つ者など多岐にわたっており、改善に値するかは検討が必要であろう。「授業内容・教員の指導態度」についても、教育の観点で専門科目を見つめたいという者、自己の発表より講義を求める者、教員にやる気を求める者など様々である。また、少数意見ではあるが、「その他」で授業内容がシラバスと異なっているとの指摘があり、全教員が今一度確認しておく必要がある。

表2-2 「学修コース専門科目」の授業における改善してほしい点 (複数回答) (n=23)

改善してほしい点	項目	具体的内容	人数(%)
	カリキュラムの設定	<ul style="list-style-type: none"> 学修コース専門科目の選択の幅を広げるために科目を増やすことはできないでしょうか。 特別支援の専修免許の単位を取ろうとすると、他の校種の単位に回すことができません。また、科目を取るためのコマも制約されてしまう。互換性は何とかならないでしょうか。 学修コースのくくりが難しいと感じる(国語と英語、音楽と体育など大きいくくりでは同じかもしれないが、もっと専門にふれた方がよいと思う)。 前期は特にゆっくり授業を選びたかった。もう少し日程にゆとりがほしい。 	4(17.4)
	授業内容・教員の指導態度	<ul style="list-style-type: none"> 例えば歴史学と歴史教育というように、1つの学問分野を教育の観点から見て扱うような授業があると、より学びが深まると考える。 発表が多くて先生からも専門の知識をいろいろ教えていただきたいです。 やる気のない先生も多い。 	3(13.0)
	その他	<ul style="list-style-type: none"> 内容がシラバスと異なっている。 	1(4.3)
	特になし	<ul style="list-style-type: none"> 特になし 等 	16(69.6)

3) 研究・学習環境について

(1) 満足している点 (表3-1)

満足している点については、「院生室・研究室」9名(40.9%)で最も多く、次いで「施設全般」3名(13.6%)、「トイレ」3名(13.6%)、「図書・図書館」2名(9.1%)、「WiFi環境」2名(9.1%)、「その他」4名(18.1%)、「特になし」4名(18.1%)であった。

毎年(平成23年～)挙がっていた事項であるが、「院生室・研究室」が個人に確保されていることは研究・学習環境の満足感に大きく影響している。また「施設全般」「トイレ」「WiFi環境」といった項目で満足している点が多く挙げられ、本年度の開棟に至ったアクティブラーニングプラザの存在により、院生の研究・学習環境はさらに整ったことが窺えた。

表3-1 研究・学習環境について満足している点 (複数回答) (n=22)

満足している点	項目	具体的内容	人数(%)
	院生室・研究室	<ul style="list-style-type: none"> 自分の研究室があるから。 院生室は学習に適しており満足している。 院生用の研究室があり、集中して研究に取り組みました。 研究室が設置してあったこと(研究室のおかげで集中することができたから)。 院生室があり研究する環境が整っている。 研究室の設備、個人の融通が利く等すばらしいものだと感じる。 院生室は使いやすい環境も良い。 いい研究室があって、楽な環境があって、ありがたいです。 資料などが研究室もよく深く調べられる。 	9(40.9)
	施設全般	<ul style="list-style-type: none"> 設備が整っているため過ごしやすい(音美棟)。 設備もちゃんと備えていて、ありがたいです。 アクティブラーニングプラザが10月から使用でき、快適に学習ができる。 	3(13.6)
	トイレ	<ul style="list-style-type: none"> トイレ設備がきれいになった点 アクティブラーニングプラザができ、トイレ等利用しやすくなった。 トイレにバックをかけるフックが設置されたのがとても助かっている(音美棟)。 	3(13.6)
	図書・図書館	<ul style="list-style-type: none"> 資料などが図書館もよく深く調べられる。 図書さえたくさん揃い、自由に見れるようになっておればそれ以上のことはない。 	2(9.1)
	WiFi環境	<ul style="list-style-type: none"> WiFiが前より届くようになった。 WiFiが使える場所が増えて勉強しやすくなった。 	2(9.1)
	その他	<ul style="list-style-type: none"> 不自由するところはない。 今のところでは、概ね満足している。 普通だと思っています。 先生からいろんなアドバイスもさせていただきます。 	4(18.1)
	特になし	<ul style="list-style-type: none"> 特になし 等 	4(18.1)

2) 改善してほしい点 (表3-2)

改善してほしい点は、「特になし」7名(28.0%)が最も多く、次いで「施設全般」「トイレ」がそれぞれ4名(16.0%)、「空調」「院生室・研究室」「専攻別での研究環境の差」がそれぞれ3名(12.0%)、「WiFi環境」「その他」がそれぞれ2名(8.0%)であった。改善してほしい点が「特になし」者は約3割で、『共通科目群』『学修コース専門科目』等の授業に比較すると、改善の要望が多いことが窺える。

表3-2 研究・学習環境について改善してほしい点

(複数回答)(n=25)

改善してほしい点	項目	具体的内容	人数(%)
	施設全般	<ul style="list-style-type: none"> ・アクティブラーニングプラザの入室・入棟できる時間をしっかり提示してほしい。 ・学内は汚い(廊下など)。アクティブラーニングプラザは特に汚れが目立つ。新しいのにもったいない。学生が自ら掃除できるよう掃除用具を1セットでもほしい。 ・ブラインドが壊れており大変困る。 ・音美棟に運搬用エレベーターを設置してほしい。 ・文系棟1階に自動販売機を設置してほしい(外に出る手間がかかるため)。 	4(16.0)
	トイレ	<ul style="list-style-type: none"> ・エデュカのトイレ設備の改善。 ・理系棟等もきれいにしてもらえるとうれしいです(トイレ等)。 ・トイレの掃除用具は必要。 ・トイレが掃除をしている様子がなく、気づいたときは掃除をしたいので、手洗い場にスポンジ、トイレ掃除のブラシを置いてほしいと思います。 	4(16.0)
	空調	<ul style="list-style-type: none"> ・アクティブラーニングプラザの教室の空調が悪い(暖房等がきかない)。 ・文系棟、理系棟、音美棟、体育棟とすべて使用したが、棟によってクーラーのきき方が全く違う。特に音美棟は夏が大変で改善が必要であると思う。 ・暖房の温度設定が寒すぎる点。 	3(12.0)
	院生室・研究室	<ul style="list-style-type: none"> ・院生室の机の使用状況が分かりづらい。 ・ちょっと室が狭くて皆が全員では混んでいました。 ・パソコンも1台だけでは足りないです。 ・白黒コピーしかできない。 	3(12.0)
	領域別での研究環境の差	<ul style="list-style-type: none"> ・専攻によって設備にばらつきがある。 ・科によって様々(パソコン・プリンター・WiFi環境、部屋等)で、同じ学費を払っているのに不平等だなと感じることも多い。なぜこんなに科によって異なるのか教えてほしい。 ・プリントアウトできる環境・設備、または規定が一定でないように感じる(他の院生がどのようにして印刷しているのかを知りたい)。 	3(12.0)
	WiFi環境	<ul style="list-style-type: none"> ・WiFiが通ってればよりよかった。 ・WiFiもないですが、ちょっと不便です。 	2(8.0)
	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・CiNiiで検索して表示される論文をもっと増やしてほしい。 ・大学院生は夜遅くまで研究室にいることも多いので10Km以上でなくても車の入構許可を出してほしい。 	2(8.0)
	特になし	・特になし 等	7(28.0)

項目として「施設全般」「トイレ」を詳細に見てみると、アクティブラーニングプラザの使用時間の明示や汚れた場所の掃除など、院生が自ら利用しやすくするための積極的な要望として挙がっていた(この件については、本年度開催された学生FDシンポジウムの中でもすでに提案され、学部教育改善委員会と合同で「アクティブラーニングプラザ利用上の注意点」を作成するに至っている)。「空調」に関しては、棟や部屋の状況次第で、大学推奨の設定温度(夏期28℃、冬期19℃)と実際の温度が異なり、研究・学習に悪影響があるようであれば考慮する必要もあり、まずはその根拠となるデータを取ってみてもよいのではないだろうか。「院生室・研究室」に関して詳細に見てみると、室内の手狭さ、備品(パソコン、プリンター)について述べられ、この件も毎年(平成23年～)挙げられている内容で、改善が進んでいない様子が窺え、次年度への課題である。また、「領域別での研究環境の差」は数年ぶり(平成23年度)に挙げられた項目であるが、以前は院生室の有無での不平等感であったものが、今回は院生室内の備品に対する内容へと変化している。研究・学習環境を整えつつある中で領域毎の事情から時間差が生じる可能性はあるが、同額の学費を払っている院生に不平等感があることは問題である。領域毎の研究環境を調査した上で補正していく必要があるかもしれない。「WiFi環境」については、今後整っていく可能性は高いが、院生室・研究室まで整えてほしいとなると、改善の要望は多くなるだろう。「その他」で挙げられた車の入構許可であるが、院生の活動状況を考慮すると検討する余地があると思われる。

理学部

平成 27 年度 理学部 FD 活動報告書

平成 27 年度に理学部で実施した FD 活動は以下のとおりである。

- (1) 学生による授業評価アンケートの実施（7 月、1 月）
- (2) 授業公開および授業参観の実施（6～7 月）
- (3) FD 講演会の開催および学生・教職員ワークショップへの参加

以下、それぞれの活動の概要を報告する。

(1) 学生による授業評価アンケートの実施

理学部における授業評価アンケートの目的は、受講学生の率直な声を担当教員に還元することにより個々の授業や学科のカリキュラムをより有益なものへと改善していくことにある。理学部での授業評価アンケートは平成 13 年度より実施されているが、その際に集計結果を教員評価のための資料として利用しないことと決めている。これは授業改善以外の目的にアンケートを転用することは授業改善の面では逆効果であるという専門家の意見とも一致している。平成 27 年度の授業アンケートは、不定期実施科目、集中講義、教職専門科目、非常勤講師担当科目を除く全科目（前期 92 科目、後期 104 科目）を対象に行われた。アンケート用紙は、授業ごとに受講者分を担当教員に渡し、適切なタイミング（原則として最終講義日）に記入させた。受講者は 13 の質問項目に、それぞれ 1～5 の 5 段階評価で回答する。以下、数値化した集計に基づいた分析を行った結果を示しているが、授業内容の量やレベルなど回答項目によっては数値の高低と評価の高低が単調な数値関係になっていないことに注意が必要である。また、自由記述欄も設けられている。授業担当教員は、（無記名で）記入されたアンケート用紙を所定の封筒に入れ、学生係に持参することとした。

アンケート結果は、授業ごとの回収済みアンケート用紙の現物と、集計したデータを担当教員に返却した。それを参考に担当教員が授業改善を行っている。理学部全体としては、アンケートの集計結果を保存し、必要に応じて学部および学科のカリキュラム改善のための基礎データとして活用できるようにしている。以下に平成 27 年度のアンケート結果について報告する。

アンケートの回答数は述べて前期 1907 枚、後期 1643 枚であり、実施科目受講者総数に対して、前期 51%、後期 37%であった。前年度は、前期 56%、後期 45%だったので、若干低下しており、過去 5 年間でも最低値を示しているので何らかの対策が必要である（図 1 参照。なお、昨年度までの報告書とは計算方法が異なる）。理学部では集計の効率化のためのネットワーク利用の検討を行っているが、この移行で回収率が低下するとの報告もあり、悪影響を及ぼさないような配慮も必要である。

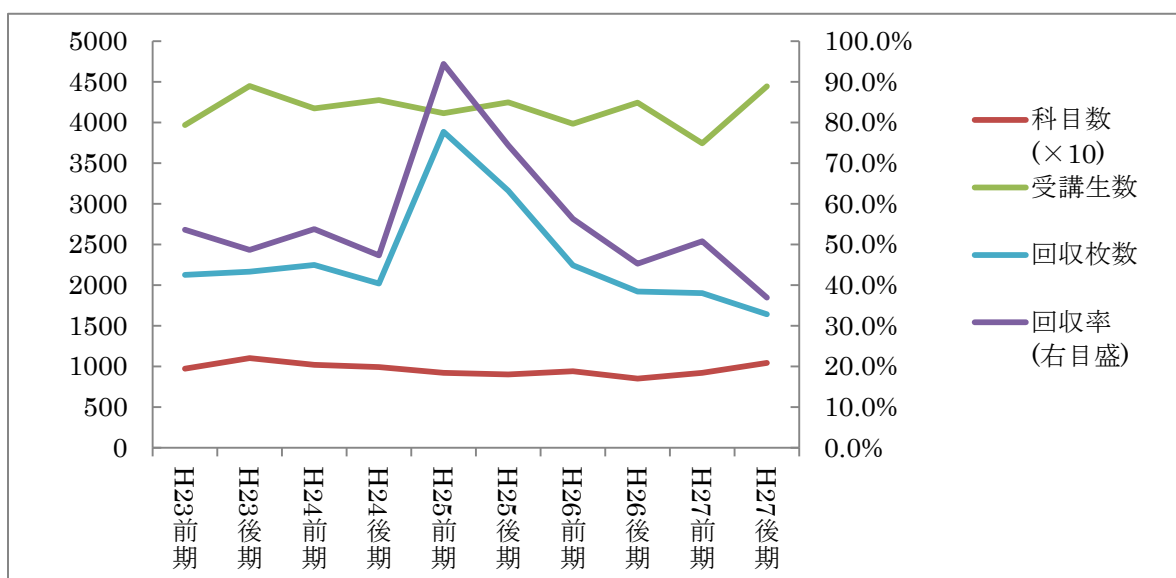


図1：授業評価アンケートの実施と回収率

平成27年度の全質問項目の評価点平均（項目毎の平均評価点の平均値）は、前期が3.68、後期が3.67で、前年度の前期3.61、後期3.68に比べると若干の変動はあるものの、平成23年度以降は、平成25年度のみ3.50および3.44であったことを除けば3.6～3.7の間にあるので大きな違いは生じていない（注：昨年度までの報告書とは計算方法が異なる）。平成25年度の低い数字に対しては、各教員が危機感を持って授業改善に取り組んだ結果が継続的に表れたのではないかというのが昨年度の解釈であったが、平成26～27年度の2年間で平成24年度以前と同程度の値になっていることから、平成25年度だけが特異であると捉えるのが妥当だろう。これが学部全体の傾向であるほかに、平成25年度のみ開講・休講や担当教員が変更された少数の科目が原因である可能性もある。とはいえ、実施科目数、同受講者数とも大差ない中で、平成25年度のみ回収数が2倍程度増加しており、意識が低い学生の回答が大きな影響を及ぼした可能性がある。もちろん、原因究明と効果的な対策としてのFD活動を考えるためには、このような推測だけでなく、検証作業が必要である。

ただし、アンケート集計で示される評価点は、項目によって数値との対応付けが異なる上に、順序数であって計量数ではない（評点4が評点2の2倍という意味を持たない）ため、その平均値のみでは分析が不十分である。項目間での数値の比較もほとんど意味がない。（前期と後期の比較も、対象となる科目がほとんど一致しないため、年平均とした方が良いかも知れない。）

そこで、アンケート項目ごとの年次変化（今回は平成22年度から27年度の6年間に注目すると一定の傾向があることがわかった。グラフの見やすさも考慮して、項目を「受講生の学習態度」「シラバス」「授業内容」の3つに分けて以下に示す。いずれの指標も数値が大きいほど「良、長、多」を意味する。

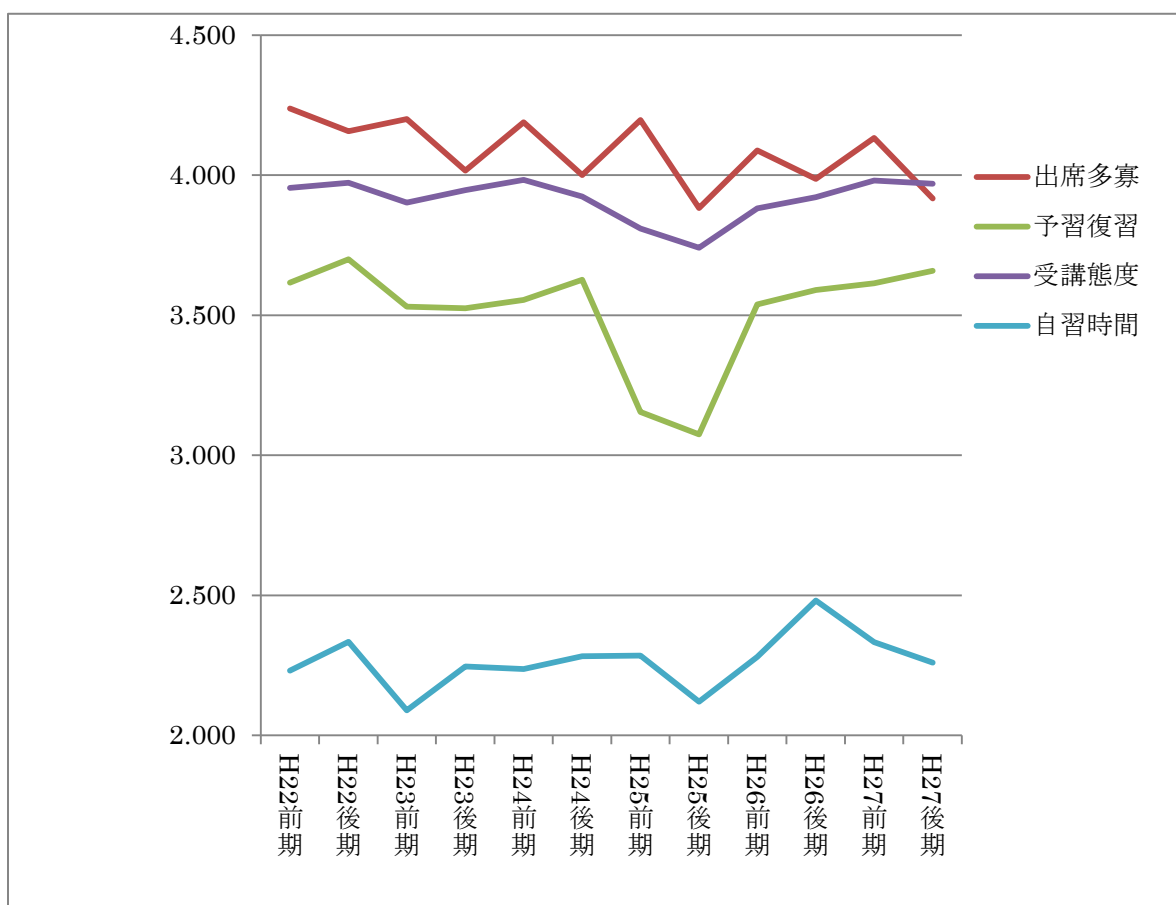


図 2：受講生の学習態度に関する指標の変化

図 2 は受講生の学習態度に関連した指標の変化である。平成 25 年度の全平均値低下の原因の 1 つは「予習復習時間（授業の予習・復習をし、宿題などにも積極的に取り組みましたか?）」の減少であることが分かる。「受講態度（授業中、真剣に学ぼうと心がけましたか?）」も、若干の低下がある。ここから、平成 25 年には学生の学習態度が低下したことがうかがえる。その理由としては後述のように教員が学生の授業意欲を掻き立てられなかったことが考えられる。しかしながら、その前後では、いずれも同程度の数値であることを考えると、主たる原因は学生側にあったと見るのが妥当だろう。とはいえ、再発を防ぐためには、これが一部の学生に留まるのか、アンケートへの回答が実態をどの程度反映しているのかなど、より深い分析が必要である。

図 2 ではむしろ「出席多寡（この授業の出席状況を教えてください。）」が長期的に低落傾向であることが注意すべき点だと考えられる。これに対する対策としては、学生が欠席する理由を追及する必要がある。学生の学習意欲が低下しているとみられる平成 25 年度でも特段の低下が見られないからである。貧困や雇用主の不当待遇によるアルバイトの増加、ボランティア活動やサークル活動への過度の傾倒なども大きな理由と考えられ、それぞれに対して個別に有効な対策を考える必要がある。

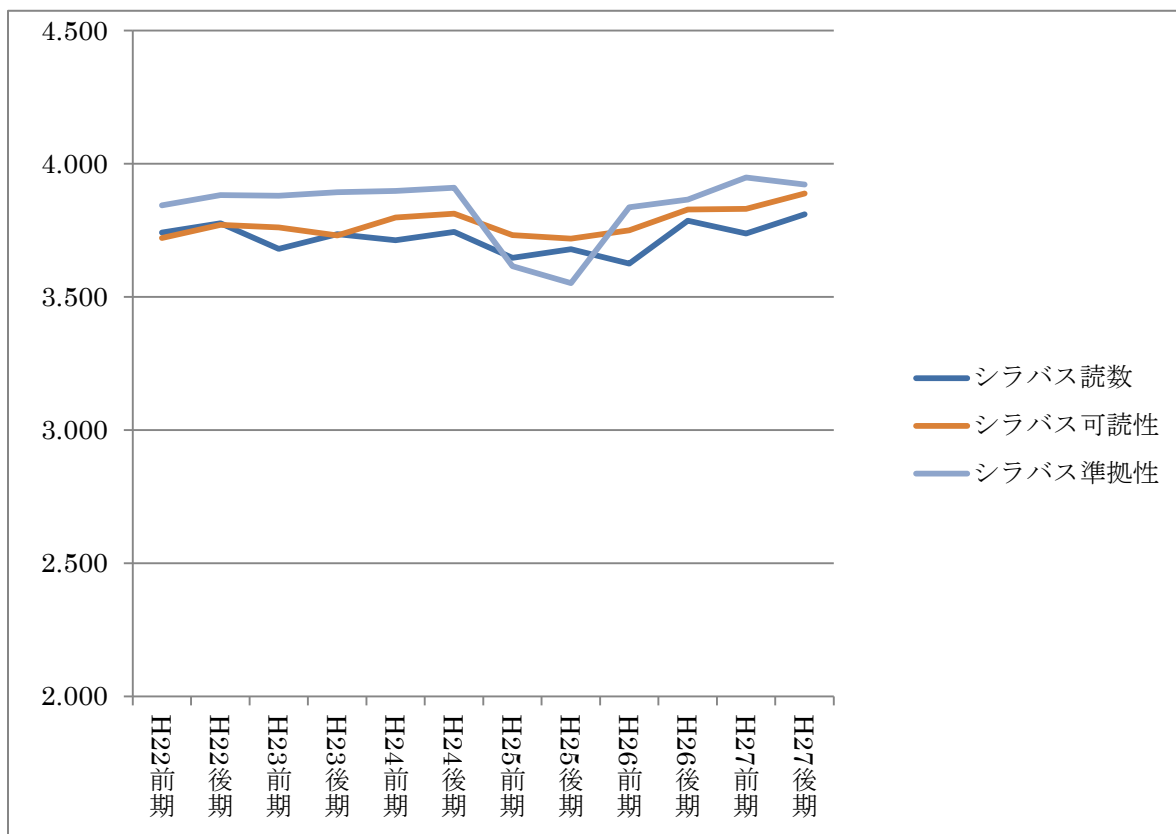


図3：シラバスに関係した指標の変化

図3はシラバスに関連した指標の変化を示す。ここでも「シラバス準拠性（授業はシラバスの目的・内容にそって実施されたと思いますか?）」で平成25年度に顕著な低下がある。先に述べた学生の受講態度の低下が、ここにあるとすればシラバスの書き方を考える必要がある。ただし、シラバスへの準拠を過度に重視すると、受講生の理解度に応じた修正ができなくなるなどの弊害も起こるので注意が必要である。「シラバス可読性（シラバスの内容はわかりやすかったですか?）」にほとんど変化がなく、むしろ、（誤差範囲とはいえ、）微妙に上昇傾向もうかがえるので、シラバスの書き方に問題があるのではなく、シラバスの読者である受講生のアンケート評価の基準が異なっていた（過度に厳格であった）可能性も考えられよう。

回収率の際に述べた推測が正しければ、平成25年度の低下は、シラバスの読解力が学生によって大きく異なっていることが根本原因であるとも考えられる。その場合、どの程度の読解力を持つ学生を想定してシラバスを書くかという一段と難しい問題も考慮しなければならない。資料を読んで自主的に判断する力は本来、高校卒業までに修得すべき能力であると考えるが、シラバスを読んで授業選択を自主的に行う経験が乏しいことが原因であるならば、大学新入時などに教示・指導する必要も生じるだろう。

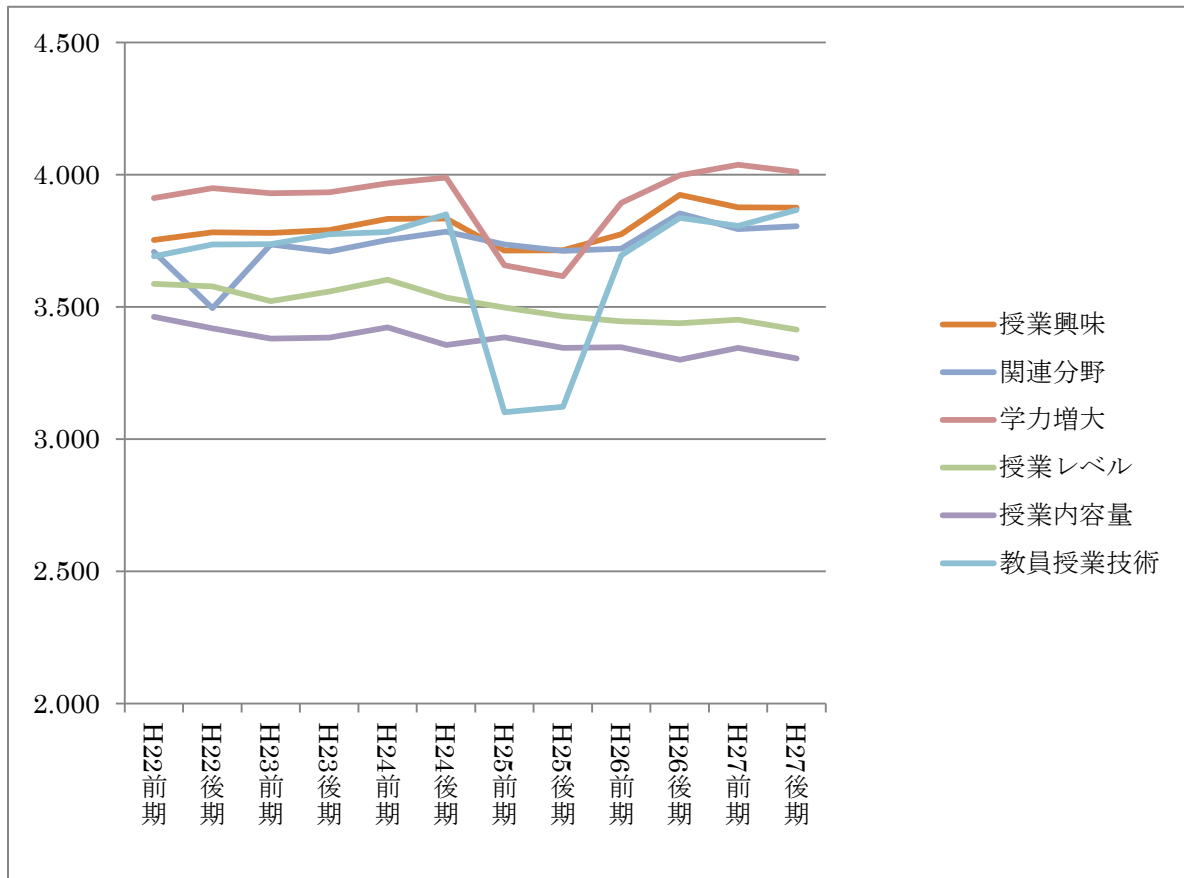


図4：授業内容に関係した指標の変化

図4は授業内容に関連した指標の変化である。これまでに見られた平成25年度での特異な減少は「学力増大（この授業は、学力（知識・技術・思考能力）の増大に役立ちましたか?）」と「教員授業技術（教員の話し方は聞き取りやすく、説明もわかりやすいと思いませんか?）」に見られる。単純に解釈すれば、これが教員の授業技量の低下を意味するが、前述の特徴、および、前後の年度ではほぼ同じ値を示していることから、受講生側に原因がある可能性も十分に追求する必要がある。

長期的な傾向として「授業レベル（授業内容のレベルはいかがでしたか?）」と「授業内容量（授業内容の分量はいかがでしたか?）」の低落化がある。ただし、これらの指標はいずれも「妥当だった」が「3」なので、現在の傾向はむしろ向上と考えるべきだろう。ただし、受講生と教員とでは“妥当”と考える基準が大きく異なっている可能性が高く、大学教育全体でいえば現状の3.3~3.5が最適値である可能性もある。また、有意な差とはいえないだろうが、平成25年度を除くと、「学力増大（この授業は、学力（知識・技術・思考能力）の増大に役立ちましたか?）」や「授業興味（授業方法は興味をわかせる理解を促す上で有用でしたか?）」に微増の傾向が見られる。明確な証拠とは言えないが、これらの指標を急増させるのは難しいことを考えると、各教員

の地道な FD 活動の積み重ねの成果であると考えたい。

大学も教育機関である以上、授業改善の努力をすることは責務と考えるべきだが、その具体的な方法は自明ではない。理学部が専門とする自然科学研究と同様、様々な取り組みや試行錯誤を通じて、得られた結果から改善を加えるという手法に則って、向上に励むべきだろう。教育は短期的または数値化が可能な方法で得られる結果が極めて限られていることも十分に意識する必要もある。こうした困難な問題にも理学的な方法論を適用して改善を進めることこそ、理学部の教員が得意とする手法であるといえる。

(2) 授業公開と参観の実施

平成 26 年度の授業公開・参観は、6 月 29 日から 7 月 3 日に行われた。後期は事務的な不徹底もあり募集に対する応募がなく実質的には実施されなかった。前期の授業公開数は 13 件であり、平成 25 年以降微増したが、ここ数年間はほぼ同数である。学科によっては授業公開する教員の固定化が見られているのも一因と考えられる。参観者数も 1 名で、昨年度の 0 よりましとはいえ、一昨年度も参観者数も 3 人のみと低調で推移している。授業参観は教員の立場から授業のやり方を学べるという点で FD の中心とすべき活動なので、何らかの対策が必要な状況であることは間違いない。主体的な行動ならば、見学を行うだけでも授業改善の効果はあると考えられるので、参加への敷居を下げる方策を検討したい。昨年度の報告でも公開期間を 1 週間限定とせず、年間を通して自由に公開、参観のできる取り組みなどを考えることが提案されていたので参考にしたい。これまでは、「授業公開・参観報告書」の提出を要しているが、それに加えて、もっと気軽に参加できる“簡易版”も新たに実施し、初参加の敷居を下げるのも一法であろう。実施体制も含めて改善を検討したい。

(3) 学生・教職員ワークショップへの参加

平成 27 年 12 月 11 日に行われた、学生・教職員ワークショップ「授業アンケートの結果をどう授業に活かすか」に、理学部から教員 4 名、大学院生 1 名が参加した。残念ながら、学部学生と事務職員の参加はなかった。理学部ばかりでなく、全学的に参加者数もそれほど多くなかった。

今回のテーマは多くの学生や教員が関心を持つものであり、内容も参加に値するものだったという感想を参加者の多くが持っていたので、参加者数がここまで僅少なものは残念である。魅力的なテーマだと考えられるにも関わらず、また、学部内での周知は例年と同程度には行った上での参加数なので、周知活動のやり方を含めて根本的な方策も考える必要があるだろう。これまでの参加者からの口コミを有効利用するなど、学部単位でも様々なアプローチを試みるなどして大幅増加を実現する方策を探りたい。

医学部

平成 27 年度 医学部医学科 FD 活動報告書

1. はじめに

医学部医学科では平成 27 年度の FD 活動計画として、まず『学生による授業評価アンケート』の実施を挙げ、平成 23 年度から全学生を対象として全ての授業科目において実施している授業評価アンケートについて、学生の教育への積極的参加や、学習計画と成果並びに教員の指導等に対する評価及び改善に有効であることから、継続して実施することとした。

次に『教員の国内研修』を挙げ、診療参加型臨床実習で優れた指導方法を導入している大学を訪問し、学内での報告会を実施することで、本学における診療参加型臨床実習を推進するための動機づけとすることとした。

最後に『学内講師による医学教育講演会』を挙げ、一つは平成 22 年度から実施している入学試験面接評価者講習会を継続して実施することとした。もう一つは本学科で実施している共用試験への理解を深める必要があるとの意見が各所で挙げられたこともあり、共用試験に関する講習会を実施することとした。

上記 3 つの活動計画に基づき、平成 27 年度の FD 活動を行ったので報告する。

2-1. 学生による授業評価アンケート

本学科では全授業科目（実習を含む）を対象とした学生による授業評価アンケートを平成 23 年度から実施しており、平成 27 年度も同様に実施した。

まず 1 年生から 4 年生までの専門教育科目 49 科目については、学習と授業に対する無記名のアンケート用紙を学務課医学教務係より科目責任者に配布し、科目責任者が試験実施時（試験を実施しない科目については授業最終日）にアンケート用紙を配布、回収した。

1 年生から 4 年生までのアンケートは、学生の学習の実態とカリキュラム、教員の指導方法について具体的な改善点を明らかにするために実施し、学生自身の学習に対する自己評価（4 項目）、科目について（8 項目）、講師の指導について（5 項目）、全体評価（1 項目）の各項目について 5 段階の評定尺度で回答し、さらに自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。なお、学生の記載後は学務課医学教務係に届けられ、速やかに集計した後、結果及び自由記述内容を科目責任者に報告した。

次に 5 年生の臨床実習では、実習開始前のオリエンテーション時にアンケー

トの目的や内容、実施方法を説明した後、それぞれの診療科での実習について、2週間ごとの実習終了時に授業評価アンケートを実施した。また、6年生の選択実習では、約4ヵ月間の実習の後に各自が選択をした実習先（学内、鹿児島県内、海外）について、6年次 OSCE (Objective Structured Clinical Examination: 客観的臨床能力試験) 終了時にアンケートを実施した。

5年生から6年生までのアンケートは、自身の学習に対する評価（6項目）、実習計画・実施について（5項目）、指導について（1項目）、全体評価（1項目）の各項目について3～11段階での評定尺度における回答を集計し、自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。なお、アンケート用紙は無記名で、学生の記載後は学生自身によって学務課医学教務係に届けられ、教員や指導医の目に触れることが無い状況で実施した。

2-2. アンケート結果

全てのアンケート結果は医学部 FD 委員会医学科部会、医学部教務委員会医学科部会、医学科会議にそれぞれ報告した。以下にアンケート結果の概要を記載する。

1年生から4年生までの専門教育科目全49科目中47科目から計3980枚（平均85枚/科目）、5年生の臨床実習では前期（3月下旬から9月中旬）1345枚、後期（9月下旬から翌3月上旬）1538枚の計2883枚（平均120枚/診療科）、6年生の選択実習では326枚（平均8枚/診療科）の回答が得られた。

アンケートの自身の学習に対する評価という項目について、1年生から4年生までの専門教育科目（【別表1】参照）においては、評価平均が3.45～3.59と自主的な学習が十分に行われているとは言えない状況であるが、5年生の臨床実習（【別表2】参照）では評価平均が4.03～4.28、6年生の選択実習（【別表3】参照）では評価平均が4.55～4.64と学年が進むにつれて自主的な学習に対する意識の向上が見受けられる。

また、臨床実習においては診療参加型実習の比率を増やしていくことが求められているが、学生の回答における診療参加型の割合は5年生の臨床実習では平成26年度の39.3%に対して平成27年度が37.7%、6年生の選択実習では平成26年度と平成27年度がともに45.4%と昨年度に比べあまり変化が無かった。そのため、平成28年度以降は診療参加型実習推進のための取り組みが重要な課題となるといえる。

なお、平成27年度はアンケート未回収の科目が2科目あり、今後のアンケート実施、回収の方法について再度検討が必要であるといえる。

【別表1】授業評価アンケート集計結果(1年生～4年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	評価平均	SD
積極的に学習した(質問・予習・復習)	1.0%	6.7%	29.5%	41.0%	17.7%	3.56	0.82
教科書や参考文献で広く、深く学習した	1.5%	8.5%	32.5%	36.2%	17.2%	3.45	0.83
原理の理解や臨床への応用を考えながら学習した	0.8%	5.3%	30.1%	41.3%	18.4%	3.59	0.81
グループ学習ではグループのために貢献した	0.7%	2.6%	23.7%	32.6%	16.8%	3.53	0.76
科目について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
シラバスには必要な情報がわかりやすく記載されていた	1.1%	3.2%	38.1%	36.1%	17.4%	3.46	0.74
学習内容は有用である	1.1%	3.0%	18.6%	40.5%	32.8%	3.89	0.75
効果的な学習方法が用いられた	1.5%	4.1%	25.4%	40.2%	24.8%	3.70	0.77
他の授業との関連や発展がよく理解できた	1.3%	5.3%	25.3%	41.7%	22.3%	3.66	0.84
科目の教育目標に沿った評価(範囲、内容、レベル)だった	1.1%	3.4%	25.2%	41.8%	24.3%	3.72	0.77
学習した領域への興味、関心が高まった	1.4%	3.3%	22.2%	40.6%	28.3%	3.78	0.79
難易度は	1 難しい	2	3 適切	4	5 易しい	評価平均	SD
	6.5%	15.1%	63.5%	9.1%	1.7%	2.72	0.65
時間数は	1 長い	2	3 適切	4	5 短い	評価平均	SD
	2.6%	6.4%	65.7%	14.7%	6.5%	3.10	0.67
講師の指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
講義・実習等がよく準備されていた	1.2%	3.6%	22.8%	41.9%	26.4%	3.77	0.77
理解を促すための工夫がされていた	1.1%	4.0%	24.5%	43.1%	26.4%	3.74	0.79
質問を促し、積極的に質問に応じてくれた	1.1%	2.7%	26.4%	38.0%	27.7%	3.76	0.76
学習領域の講師として適切であった	1.2%	2.5%	21.9%	39.8%	30.5%	3.84	0.75
授業を担当した複数の講師は連携して効率的に指導した	1.6%	4.8%	25.5%	35.8%	21.5%	3.41	0.82
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	2.3%	3.3%	25.0%	39.1%	26.2%	3.71	0.84

【別表2】授業評価アンケート集計結果(5年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	評価平均	SD
積極的に実習した	0.1%	1.4%	13.6%	55.1%	29.8%	4.13	0.70
実習に関連する項目を自主学習した	0.1%	1.3%	12.8%	56.7%	29.1%	4.14	0.70
診療のルールに従って行動した	0.1%	0.3%	9.6%	52.7%	37.3%	4.27	0.67
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.1%	0.6%	9.6%	50.4%	39.4%	4.28	0.69
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.1%	2.1%	18.7%	52.9%	26.2%	4.03	0.76
実習計画・実施について						平均	SD
主な実習方法は							
診療参加型						37.7%	1.91
模擬診療型						20.0%	1.60
見学・講義						48.7%	2.14
指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.5%	1.1%	6.0%	25.2%	67.3%	3.77	0.77
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.6%	1.1%	6.4%	25.2%	66.7%	4.56	0.70

【別表3】授業評価アンケート集計結果(6年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	評価平均	SD
積極的に実習した	0.0%	0.9%	10.9%	36.2%	52.1%	4.58	0.65
実習に関連する項目を自主学習した	0.3%	0.9%	9.4%	42.6%	46.8%	4.55	0.77
診療のルールに従って行動した	0.0%	0.3%	7.4%	37.4%	55.0%	4.59	0.66
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.3%	0.6%	7.4%	36.5%	55.3%	4.64	0.61
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.9%	0.3%	14.4%	35.3%	49.1%	4.60	0.68
実習計画・実施について						平均	SD
主な実習方法は							
診療参加型						45.4%	3.46
模擬診療型						15.3%	2.34
見学・講義						40.0%	3.32
指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.3%	1.5%	5.3%	20.7%	72.2%	4.74	0.61
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.0%	1.5%	4.7%	18.6%	75.1%	4.81	0.49

3. 教員の国内研修

当初、臨床実習に関連した教員の国内研修を計画していたが、FD委員会医学科部会での再検討の結果、喫緊の懸案事項である日本医学教育評価機構(JACME)による医学教育分野別評価受審に関連した研修に参加することとし、その対象も事務職員にまで広げることが決定された。この決定を受け、平成27年度は3名の職員(いずれも学務課医学教務係)が医学教育分野別評価に関連した研修会並びにシンポジウムへ参加した。

まず、1名の職員が12月4日に東京慈恵会医科大学にて開催された「医療系教学職員のためのSD研修会」に参加した。この研修会では、まずJACME設立準備委員会委員の方から医学教育分野別評価制度確立の経緯と今後の展望についての講話があった。さらに、実際にトライアル評価を受審した東京慈恵会医科大学の職員の方から受審報告が行われた。

次に2名の職員が2月11日に東京医科歯科大学にて開催された「平成27年度文部科学省大学改革推進事業(基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成)公開シンポジウム」に参加した。このシンポジウムでは、まずJACME設立準備委員会委員の方からJACME設立に関する報告があった。さらに、他大学における医学教育分野別評価受審に向けた取り組みやトライアル評価の受審報告があった。

これらの研修会及びシンポジウムへの参加によって、医学教育分野別評価制

度に対する知識が向上し、受審に向けての情報収集を行うことができた。また、受審に関する準備の大変さを痛感し、改めて気を引き締める良い機会となった。

4. 学内講師による医学教育講演会

『共用試験に関する FD・SD 講習会』

日 時：平成 27 年 11 月 4 日（水）17：00～18：00

会 場：第 5 講義室

講 師：佐野 輝（医学部長）

田川 まさみ（医歯学教育開発センター長）

対象者：医学科担当教員、医歯学総合研究科等事務部職員

目 標：本学科における共用試験の現状と今後の展望を理解し、共用試験に対する教職員の知識を高めると同時に、コンプライアンス意識の向上を図る。

総 評：以前より導入されている共用試験（OSCE、CBT：Computer-Based Testing）を実施するにあたって、教職員の協力は絶対不可欠である。今回の講習会開催については、参加者の評価も良好であり、目標である共用試験の現状把握、教職員の知識並びにコンプライアンス意識向上は十分に達成されたと考えられる。また、当日参加できない教職員のために講習会を録画保存し、DVD 講習を開催できる環境作りも行った。DVD 講習も含め、今回の講習会には多くの参加が得られ、今後の共用試験実施に関して非常に有意義な講習会であったといえる。

『入学試験面接評価者講習会』

日 時：平成 27 年 12 月 25 日（金）15：00～17：00

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

共 催：医学部入試委員会医学科部会

会 場：保健学科会議室

講 師：佐野 輝（医学部長）

谷本 昭英（入試委員会医学科部会長）

田川 まさみ（医歯学教育開発センター長）

医学部 FD 委員会医学科部会委員

上村 裕一、小片 守、西 順一郎、小林 裕明

参加者：医学科入学試験面接担当予定教員

(前年度までの講習会を未受講の者)

目 標：本学科のアドミッションポリシーに基づく評価基準に従った公平で信頼性の高い面接評価を行いながら、受験生の能力を引き出す方法を講義とロールプレイで習得する。

総 評：昨年度より一般入試（前期日程・後期日程）の面接時間が拡大したことに伴い、面接評価者にとって面接の進め方や評価基準の標準化がより重要となる一方で、面接質問事項は多様化が求められるようになった。今回の講習会には多くの参加が得られ、上記目標の達成に非常に有意義な講習会であったと考えられる。さらに参加者の評価も良好であったため、次年度以降も講習会を継続して実施していくことが望ましいといえる。

また、講習会ではメリハリのある面接評価の重要性について議論がなされ、今後の面接試験に大いに貢献するであろうと推測される。

5. おわりに

平成 27 年度は前述の 3 つの活動計画に基づいて本学科の FD 活動を行ったが、平成 28 年度に向けては JACME による医学教育分野別評価受審に関連した FD 活動を行っていくことが、本学科の今後の発展に非常に重要であると考えられる。

授業評価アンケートについては、平成 28 年度からアンケート結果のフィードバックに対する各教員からの意見収集を新たに実施し、PDCA サイクルの活性化を図っていく予定である。また、平成 28 年度は医学教育分野別評価に関連した研修会等に積極的に教職員を派遣し、知識向上や情報収集に努めていくことが必要となる。さらに、現在行っている入学試験面接評価者講習会を継続するとともに、医学教育分野別評価に関連した教育やカリキュラムに関する講演会を実施していかなければならないと考える。

今後も FD 活動を通じて、本学科の大学教育及び医学教育の現状を分析し、継続的な改良につなげていくことで学生の教育環境改善に貢献していく所存である。

平成 27 年度 医学部保健学科 FD 活動報告

1. はじめに

平成 27 年度医学部 FD 委員会保健学科部会の活動として、平成 26 年度に引き続き、以下を実施した。

- 1) 学生による授業評価アンケート
- 2) 講演会

それぞれの活動について概略を述べる。

2. 学生による授業評価アンケートの実施とその結果の検討並びに授業評価結果の教員へのフィードバック

1) 対象科目と方法

実習、演習と非常勤講師による授業を除く、全ての授業科目を対象に、学生による授業評価を例年通り実施した。学生による授業評価は各授業の最終日に学生にアンケート票を配布し、無記名で記載してもらい、学生代表に回収し、封筒に入れ、厳封し、学務課に提出してもらった。授業評価の中の評価項目は以下の通りである。「学生自身の自己評価」、「授業について」、「教員について」、そして「自由記述」から構成されている。

授業評価アンケート

学生自身の自己評価

101 出席状況は良好だった。

(5: 非常に良好だった、4: かなり良好だった、3: 良好だった、2: 良くなかった、1: 非常に良くなかった)

102 授業に意欲的に取り組む努力をした。

(5: 非常に努力した、4: かなり努力した、3: 努力した、2: あまり努力しなかった、1: 努力しなかった)

103 授業の予習あるいは復習をした。

(5: 非常に予習復習をした、4: かなり予習復習をした、3: 予習復習をした、2: あまり予習復習をしなかった、1: 予習復習をしなかった)

授業について

201 授業科目にふさわしい内容だった。

(5: 非常にふさわしかった、4: かなりふさわしかった、3: ふさわしかった、2: あまりふさわしくなかった、1: ふさわしくなかった)

202 シラバスの内容は明確だった。

- (5：非常に明確であった、4：かなり明確であった、3：明確であった、2：あまり明確でなかった、1：明確でなかった)
- 203 授業内容はシラバスに沿ったものであった。
(5：非常に沿っていた、4：かなり沿っていた、3：沿っていた、2：あまり沿って
いなかった、1：沿っていなかった)
- 204 授業の難易度は以下の通りだった。
(5：丁度良かった、4：やや簡単だった、3：簡単だった、2：かなり難しかった、1：
非常に難しかった)
- 205 この授業を他の学生にも勧めたいと思う。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)
- 206 この授業は自分にとって価値があった。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)

教員について

- 301 話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすかった。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)
- 302 授業は時間どおり行われた。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)
- 303 教師の授業に対する熱意を感じた。
(5：非常に感じた、4：かなり感じた、3：感じた、2：あまり感じなかった、1：感
じなかった)
- 304 授業中、オフィスアワー等で、質問や相談に丁寧に応じてくれた。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)

自由記述

この授業をより良くするための意見や要望、受講者としての自分を省みた上での感想などを自由に書いてください。

2) 学生による授業評価アンケートの結果

前期開講分は 65 科目に依頼し、58 科目からアンケートを回収した (回収率 89%)。後期開講分は 64 科目に依頼し、56 科目から回答を回収し得た (回収率 88%)。前期開講、後期

開講別にアンケートの中の各項目について評価点（1～5）の平均値と標準偏差を求めた。点数が高いほど評価が良いことを示している。また、前期開講科目と後期開講科目を合わせた全体での評価点の平均値も求め、過去5年間との比較を行った。27年度前期開講科目の平均点と27年度後期開講科目の平均点を表1に示す。表2には、27年度を含めた6年間における前期・後期を合わせた科目全体での平均点の推移を示した。

表1. 平成26年度学生による授業評価の前期・後期別の点数の比較（平均点）

質問項目	前期開講科目	後期開講科目
出席状況は良好であった	4. 6 9	4. 6 4
授業に意欲的に取り組む努力をした	4. 3 8	4. 3 1
授業の予習あるいは復習をした	3. 7 4	3. 6 6
授業科目にふさわしい内容だった	4. 5 9	4. 5 7
シラバスの内容は明確だった	4. 4 8	4. 4 8
授業内容はシラバスに沿ったものであった	4. 4 7	4. 4 9
授業の難易度は丁度良かったか	4. 4 4	4. 5 0
この授業を他の学生にも勧めたいと思う	4. 3 6	4. 3 6
この授業は自分にとって価値があった	4. 4 8	4. 4 7
教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすかった	4. 3 9	4. 4 1
授業は時間どおり行われた	4. 4 8	4. 5 1
教師の授業に対する熱意を感じた	4. 4 9	4. 5 0
授業中、オフィスアワー等で、質問や相談に丁寧に応じてくれた	4. 3 5	4. 3 6

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

表2. 過去5年間の学生による授業評価の点数の推移（平均点）

質問項目	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
出席状況	4. 6 6	4. 6 7	4. 6 2	4. 6 8	4. 6 7	4. 6 7
意欲的な取り組み	4. 1 9	4. 2 3	4. 2 1	4. 3 3	4. 3 2	4. 3 5
予習・復習	3. 2 9	3. 3 6	3. 3 7	3. 6 6	3. 6 0	3. 7 0
内容のふさわしさ	4. 4 7	4. 5 0	4. 4 8	4. 4 9	4. 4 9	4. 5 8
明確なシラバスの内容	4. 3 4	4. 3 8	4. 3 8	4. 3 6	4. 3 8	4. 4 7
授業内容とシラバスの整合	4. 3 4	4. 3 6	4. 3 9	4. 3 6	4. 3 9	4. 4 8
適切な難易度	4. 3 0	4. 2 6	4. 3 3	4. 3 3	4. 3 1	4. 4 7
他学生への履修の勧め	4. 2 2	4. 2 1	4. 2 2	4. 2 5	4. 2 5	4. 3 6
自分にとっての価値	4. 3 8	4. 3 6	4. 3 4	4. 3 8	4. 3 7	4. 4 8

わかりやすい説明	4. 29	4. 26	4. 27	4. 30	4. 31	4. 40
時間どおりの開講	4. 37	4. 45	4. 42	4. 40	4. 40	4. 49
授業に対する熱意	4. 40	4. 39	4. 38	4. 40	4. 42	4. 49
質問や相談への対応	4. 27	4. 27	4. 24	4. 26	4. 25	4. 35

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価 質問項目の文言は表1と同じ。

3) 結果の解釈

①「学生自身の自己評価」について

平成27年度の前期と後期の比較では、後期では前期に比べ学生自身の授業に対する自己評価が3つの項目全てで低下していた。また、「授業の予習あるいは復習をした」という項目は前期、後期いずれも低い点数であったこと(3.74と3.66)は特筆すべきであると思われる。学生の授業への積極的な取り組みが十分になされていないことがうかがえる。なお、この27年度に見られた結果は26年度でも同様にみられていた。

②「授業について」と「教員について」

「学生自身の自己評価」についてとは対照的に、平成27年度の前期と後期の比較では、後期では前期に比べ学生自身の授業に対する自己評価が全てで高かった。6年間の推移については大きな変動はみられていない。

4) 学生による授業評価結果アンケート結果の教員へのフィードバック

各授業科目についての各学生からのアンケート票(自由記述も記載されたものあり)は当該科目の担当教員に返して、今後の授業方法についての参考資料としてもらった。自由記述には、特に教員に伝えたメッセージが具体的に記載されており、教員にとって貴重なフィードバックとなっていると思われる。

3. 講演会

医学部保健学科では平成24年度から看護学専攻・理学療法学専攻・作業療法学専攻の3専攻合同授業として、1年次から4年次にわたる「チーム医療授業科目群」をカリキュラムの中に組み込んでいる。

「チーム医療授業科目群」のさらなる充実に向けて、27年度は県内実習施設の3名の指導者を講師として招き、地域における取り組みと課題についての講演会を開催した。

講演会名：チーム医療における地域の取り組みと課題

講師：医療法人恒心会 おぐら病院 理学療法士 梅元 昭英 先生

医療法人恒心会 おぐら病院 看護師 永田 真琴 先生

医療法人松風会 松下病院 院長、曾於医師会会長 松下 兼裕 先生

日時：平成27年11月17日(火)17時～19時

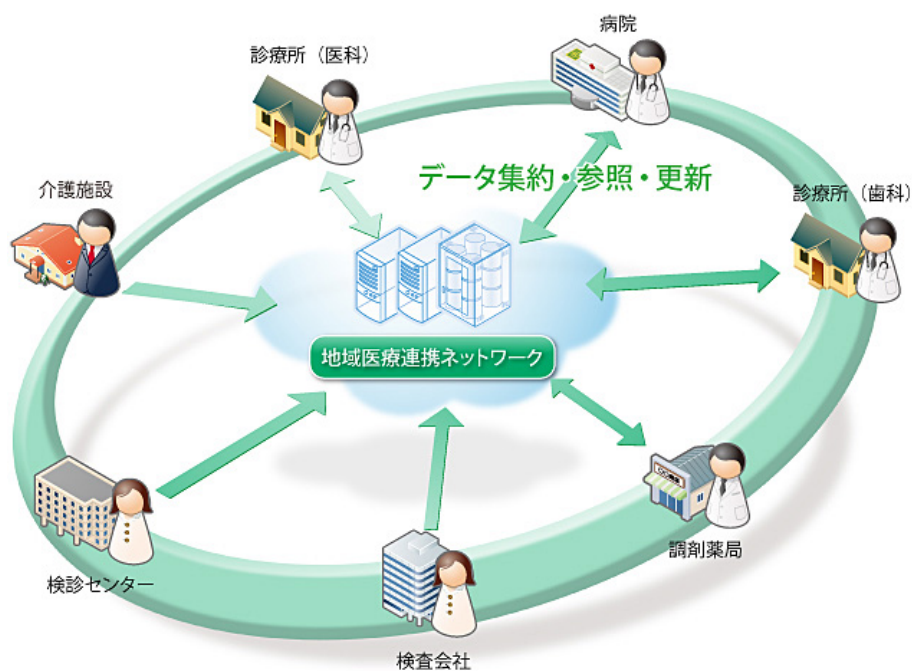
場所：鹿児島大学医学部鶴陵会館 中ホール

主催：鹿児島大学医学部FD員会保健学科部会、共催：鹿児島大学医学部FD員会医学科部会

講演内容：県内実習施設の3名の専門家が、各々医師、看護師、理学療法士の立場から、大隅半島におけるチーム医療に対する取り組みについて紹介され、その有用性と今後の課題が述べられた。43名の教員、学生が聴講した。講演会の後、活発な質疑・応答がなされ、鹿児島大学医学部における今後のチーム医療教育推進に向けてのFD活動に寄与するところが大きかった。



講演会の様子



地域医療連携ネットワーク構想について（松下先生のスライドより、一部抜粋）

5. 終わりに

授業評価アンケートにより、教員が自覚できていない改善点が明らかになり、教員の教育力の向上につながるものと期待される。また、チーム医療の講演会を通して授業のノウハウが明確となり、担当教員間の共通理解と共同作業が促進され、4年間一貫のチーム医療カリキュラムが有効に遂行される効果が期待される。

（文責 医学部FD委員会保健学科部会長 新地 洋之）

歯学部

歯学部 FD 活動報告

1. はじめに

歯学部 FD 委員会では、学部教育や学部組織、研究、および病院組織運営などの多面的な領域について、教員の能力開発に関わる様々な活動を企画、実施している。本年度は、従来からの全学的な取り組み以外に、今年度のからの新規取り組みとして教員の「教育業績評価」を実施した。主な活動項目リストを下記に記す。本報告では各活動について、その概要を記載する。

1) 平成 27 年度の事業リスト

- ・学生による授業評価
- ・授業公開・授業参観による教員相互の評価
- ・FD 講演会「歯学部新ホームページの運用について」の開催
- ・FD 講演会「Internationalism and Education in 21st Century」の開催
- ・FD 講演会「平成 26 年度研究・教育業績評価ならびに研究業績表彰」の開催
- ・FD 講演会「科研費獲得向上のポイント」の開催
- ・FD 講演会「おさえておきたい研究における画像処理」の開催
- ・FD 講演会「歯科医療に対する医科からの期待～終末期医療の考え方」の開催
- ・FD 講演会「東日本大震災における身元確認業務について」の開催
- ・FD 講演会「CBT 作問に関する FD 講習会」の開催
- ・FD 講演会「歯学教育認証評価事業の現在」の開催
- ・教員の国内研修「第 6 回 歯科医学教育者のためのワークショップ」参加
- ・教員の国内研修「歯学教育認証評価制度に関する公開シンポジウム」参加
- ・教員の「教育業績評価」の実施

2. 歯学部 FD 委員会の活動状況

1) 平成 27 年度歯学部 FD 委員会 委員構成

委員長：後藤哲哉（歯科医学教育実践学分野 教授）

委員：中村典史（口腔顎顔面外科学分野 教授）

小松澤均（口腔微生物学分野 教授）

信友建志（心身歯科学分野 准教授）

事務所掌：歯学教務係

2) 平成 27 年度歯学部 FD 委員会 開催状況

①第 1 回歯学部 FD 委員会（平成 27 年 4 月 6 日開催）メール会議

- 議題
- ・平成 26 年度歯学部 FD 活動報告について
 - ・平成 27 年度第 1 回 FD 講習会の開催について

②第 2 回歯学部 FD 委員会（平成 27 年 4 月 30 日開催）

- 議題
- ・平成 27 年度歯学部 FD 活動計画について
 - ・平成 27 年度歯学部 FD 活動経費要求について

- 報告 ・平成 26 年度歯学部 FD 委員会予算執行状況報告
- ③第 3 回歯学部 FD 委員会（平成 27 年 5 月 22 日開催）メール会議
議題 ・授業アンケート・授業評価について
- ④第 4 回歯学部 FD 委員会（平成 27 年 7 月 28 日開催）メール会議
議題 ・第 3 回 FD 講演会の実施について
・平成 26 年度歯学部教育業績評価について
- ⑤第 5 回歯学部 FD 委員会（平成 27 年 9 月 9 日開催）メール会議
議題 ・科研費獲得向上に関する FD の開催について
- ⑥第 6 回歯学部 FD 委員会（平成 27 年 9 月 24 日開催）メール会議
議題 ・大規模災害における身元確認業務に関する FD 講演会の開催について
- ⑦第 7 回歯学部 FD 委員会（平成 27 年 10 月 17 日開催）
議題 ・研究における画像処理に関する FD 講演会の開催について
- ⑧第 8 回歯学部 FD 委員会（平成 27 年 10 月 22 日開催）メール会議
議題 ・終末期医療に関する FD 講習会の開催について
- ⑨第 9 回歯学部 FD 委員会（平成 27 年 11 月 16 日開催）メール会議
議題 ・平成 27 年度学生・教職員ワークショップ
『授業アンケートの結果をどう授業に活かすか』の参加について
- ⑩第 10 回歯学部 FD 委員会（平成 28 年 1 月 4 日開催）メール会議
議題 ・CBT 作問に関する FD 研修会の開催について
・歯学教育認証評価に関する FD 講演会の開催について
- ⑪第 11 回歯学部 FD 委員会（平成 28 年 2 月 18 日開催）
議題 ・平成 28 年度 FD 活動計画について

3. 学生による授業評価

歯学部 FD 委員会では、年間の FD 活動の一環として「学生による授業評価」について、今年度更新した評価票を用いて実施した。この授業評価は平成 27 年度に開講した全ての授業を対象に、各授業の終了時に適宜実施した（評価への参加は各教員の自由意思に任せた）。評価対象者は各授業担当教員であり、職位は教授、准教授、講師、助教であった。本調査票は記名式とし、学生が評価記入後、各学年のクラス委員が回収し、学務課歯学教務係へ提出してもらった。また無記名での提出を希望する場合は、所定のボックスへ各自で提出してもらうよう依頼した。得られた記入済み調査票は OCR により読み込み処理後、集計作業が行われた。

個別のデータは集計直後、各授業担当者に生の調査票を PDF 化し返送することにより、学生の意見や指摘事項について、次の授業へすぐに生かせるような体制を、昨年度より構築した。そのため、教員も調査に参加するモチベーションが上がり、調査の手法としてはある程度機能したと考えられる。また、自由記載欄には多くのコメントが寄せられており、授業改善に直接つながるような内容が多かった。今年度までは、本授業評価の実施は各教員の判断にゆだねていたが、本年度からは、歯学部教育委員会と共同で、全ての授業において学生からの授業評価を得て、個々の授業において学生視点のフィードバックをもとに授業内容、方法等を見直し、授業改善シートを提出することと

した。

4. 授業公開・授業参観における教員相互の評価

歯学部教員による授業公開・授業参観による相互評価は、全学的な取り組みの一環として例年実施しており、平成27年度については7月21日（火）～7月29日（水）、および11月24日（火）～12月4日（金）の2度の期間で行われた。この期間の歯学部における授業は原則として全て公開とし、教員はFD活動の一環として、随時授業参観することを可能とした。授業を参観した教員は、授業修了後に次のアンケートへの記載を行った。今年度は、授業参観は極めて少ない結果となった。この取り組みを通じて、教員が同僚の授業を見学することにより様々な意味で刺激を受け、よりよい授業の作り方を考え、自己の授業方法のあり方を再考するきっかけになればよいのであるが、未だ十分その趣旨や意義が各教員に浸透しておらず、本事業に対する広報のあり方についても見直しが迫られている。教員が相互の授業を見学し互いを評価・批判し合うには、互いの遠慮もあり、それ相応の環境整備が必要不可欠である。そのためには今後、本活動の目的や意義を広く周知する手段を検討するとともに、より多くの教員の本取り組みへの参加を促す必要があると考えられた。

5. 平成27年度第1回歯学部FD講習会

- 1) 講師：(株)オーガニックデザイン 大村氏
- 2) 講演タイトル： 1. 歯学部新ホームページの概要について
2. ホームページの記事更新の方法について
- 3) 日時：平成27年5月22日（金）17:30～18:30
- 4) 場所：歯学部第3講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員63名
- 6) 内容

今年度歯学部のホームページがリニューアルされるにあたり、その改良内容の説明とホームページの更新方法についての講演が行われた。近年、教育や研究の情報発信としてホームページの役割は増しており、教職員への周知は非常に重要である。教職員にとってホームページの重要性を再認識する良い契機となった。なお、このFD講演会は歯学部広報委員会との共催で行われた。

6. 平成27年度第2回歯学部FD講習会

- 1) 講師：Ravindra M. Shah 准教授 (University of British Columbia, Canada)
- 2) 講演タイトル： 「Internationalism and Education in 21st Century」
- 3) 日時：平成27年5月27日（水）17:30～19:00
- 4) 場所：歯学部第3講義室
- 5) 参加者：歯学部教員64名
- 6) 内容

昨年度、部局間協定を締結したカナダのブリティッシュ・コロンビア大学歯学部の国際交流専門のShah准教授を招いて、教育の国際化とはどのようなものかの講演が行われた。また、学生の短期研修を早期に実現する為に、このFD講演会と同時期に歯学部学生に対してもShah准教授に国際交流とは

どのようなものかというテーマで講演会を行った。

7. 平成 27 年度第 3 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：小松澤 均（歯学部教育委員長）、後藤哲哉（歯学部 FD 委員長）
- 2) 講演タイトル：「平成26年度研究・教育業績評価ならびに研究業績表彰」
- 3) 日 時：平成 26 年 8 月 10 日（月）17：00～18：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教員 56 名
- 6) 内 容

研究体制委員会との共催で前年度の研究・教育業績評価の説明ならびに、研究においては若手のベストリサーチャー賞の表彰を行った。教育業績評価については本年が本格実施の第 1 回目であったので、結果の説明と、これからどのように教育業績評価を活かすかについての説明を行った。

8. 平成 27 年度第 4 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：小松澤 均（研究体制委員長）、宮脇正一（医歯学総合研究科副研究科長）
- 2) 講演タイトル：「科研費獲得向上のポイント」
- 3) 日 時：平成 27 年 10 月 2 日（金）17：00～18：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 77 名
- 6) 内 容

同様の講演は本学主催で行われたが、時間の設定が悪く、聞きに行く事の出来なかった教員が多かったため、改めて歯学部教員を対象に開催した。小松澤研究体制委員長より、鹿児島大学歯学部の科学件費の取得状況と来年度の目標についての説明が行われたのち、宮脇医歯学総合研究科副研究科長より、審査する方の立場を考慮した、採択されやすい科学研究費申請書の書き方についての細かい説明が行われた。なお、この FD 講演会の効果もあったと思われるが、平成 28 年度の歯学部の科研費の採択件数は飛躍的に向上した。

9. 平成 27 年度第 5 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：エルピクセル株式会社 湖城 恵 氏
- 2) 講演タイトル：「おさえとおきたい研究における画像処理」
- 3) 日 時：平成 27 年 11 月 5 日（木）18：00～19：30
- 4) 場 所：鶴稜会館中ホール
- 5) 参加者：歯学部教職員 73 名
- 6) 内 容

教育、研究において画像を使う事は多いが、ソフトを使っての修正がどの程度なら認められるかについてアドビ・Photoshop を主に扱っているエルピクセル株式会社 湖城 恵 氏を招いて講演が行なわれた。実際の例を示して、論文に使う図の修正に関してどのような点に注意すべきかの詳細な説明が行われた。歯学部のみならず医学部からも多くの教員が参加した。

10. 平成 27 年度第 6 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：米永一理 先生 東京大学病院顎口腔外科・歯科矯正歯科助教
- 2) 講演タイトル：第一部：「歯科医療に対する医科からの期待～終末期医療の考え方」
第二部：「夢を実現させる考え方」
- 3) 日 時：平成 27 年 11 月 11 日（水）18：00～19：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 58 名
- 6) 内 容

医学部病院の歯科口腔外科医に所属する米永先生の過疎地域の医療事情における終末期医療の経験に基づいた、歯科医療に対する医科からの期待についての講演が行われた。今回の講演は教員のみならず大学院生、研修医、学生などの多くの参加者があった。

11. 平成 27 年度第 7 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：東北大学歯科法医情報学分野准教授 鈴木敏彦先生
鹿児島県歯科医師会副会長 西孝一先生
- 2) 講演タイトル：「東日本大震災における身元確認業務について」
「歯科医師会の大規模災害に対する取り組みについて」
- 3) 日 時：平成 27 年 11 月 24 日（火）18：00～19：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 68 名
- 6) 内 容

鹿児島大学COC事業「火山と島嶼を有する鹿児島の地域再生プログラム」平成27年度地域志向教育研究経費採択課題「大規模災害時の身元確認業務と歯科医療支援への対応能力向上と関係諸機関との連携強化」の一環として、昨年度に引き続き講演会を行った。本講演会では、東日本大震災における東北大学の歯科医療支援に関する具体的な取組について情報提供をいただき、鹿児島県における大規模災害時の大学と行政とのかかわりについての情報交換が行われた。本講演の内容の一部は、実際平成28年4月に発生した熊本地震で実施された。

12. 平成 27 年度第 8 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：鹿児島大学歯学部
村口浩一先生（咬合機能補綴学分野）
岩下洋一朗先生（歯科医学教育実践学分野）
田松裕一先生（人体構造解剖学分野）
犬童寛子先生（顎顔面放射線学分野）
梶山加綱先生（歯科麻酔全身管理学分野）
- 2) 講演タイトル：「CBT の作問に関する FD 講習会」
- 3) 日 時：平成 27 年 1 月 26 日（火）18：00～19：30

- 4) 場 所：歯学部第3講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 75名
- 6) 内 容

共用試験歯学系 CBT において、より質の高い作問を行うとともに、作問の教育活動上の意義に対する認識を深め、教員の教育能力開発に資するために、学内の CBT 作問委員会コアメンバーおよびアドバイザーが講師を務める講習会を開催した

13. 平成 27 年度第 9 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：九州歯科大学、北村知昭教授
- 2) 講演タイトル：「歯学教育認証評価事業の現在」
- 3) 日 時：平成 28 年 3 月 9 日（水）17：00～18：00
- 4) 場 所：歯学部第3講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 77名
- 6) 内 容

他学部と同様に歯学部においても歯学教育認証評価として、教育の認証評価が本格実施をすべく準備が始まっている。平成 29 年度の本格実施が予定されているが、鹿児島大学歯学部としても認証評価ではどのような事が求められるか情報が必要であり、準備を始める必要がある。そこで、歯学教育認証評価ワーキンググループの幹事である九州歯科大学の北村教授を招いて講演をして頂き、歯学教育認証評価に関する認識を新たにした。

14. 教員の外部研修会への派遣報告

- 1) 教員の国内研修「第 6 回 歯科医学教育者のためのワークショップ」

参加者：小松澤 均（口腔微生物学分野 教授）

日 時：平成 27 年 12 月 7 日（月）～12 月 11 日（金）

場 所：幕張国際研究センター（千葉市）

概 要：

日本歯科医学教育学会が主催して毎年行われている。卒前・卒後歯科医学教育に携わる歯科大学・歯学部の教員および歯科医師臨床研修指導医が一堂に会し、歯科医学教育の改善ならびに教育能力の開発(Faculty development)に寄与することを目的とする。最近の歯科医学教育理論の説明ならびに、授業の組み立て、実施方法についてのワークショップが行われた。

- 2) 教員の国内研修「歯学教育認証評価制度に関する公開シンポジウム」

参加者：佐藤友昭（歯科応用薬理学分野 教授）

日 時：平成 28 年 2 月 27 日（土）

場 所：大阪歯科大学 100 周年記念館（大阪市）

概 要：

歯学教育認証評価は平成 29 年度の本格実施を目指して準備が進められているが、すでにトライアルとして平成 26 年度は九州歯科大学、大阪歯科大学、平成 27 年度は新潟大学、東京歯科大学で行われた。本シンポジウムは、トライアルをふまえて歯学教育認証評価の評価方法の最新版と今後の

予定の説明が行われた。

15. 教員の「教育業績評価」の実施

昨年の歯学部 FD 委員会で試行された教育業績評価について、平成 27 年度第 3 回歯学部 FD 講習会においてその概要と改善点を検討した。

歯学部 FD 委員会では、教員の教育活動をできるだけ適正に評価することを目的に、評価方法の開発を検討してきた。今回は、日本医学教育学会業績評価委員会が発表した「教育業績評価シート」のサンプルをベースに、鹿児島大学歯学部版評価シート(図 1)を作成したので、今回はこれを用いて教育業績評価を進めていくこととした。

なお、今回の評価はあくまで自己申告制とした。本格的な実施に向けて精度を高めていく必要があるため、評価後、多くの情報を集め、改善に結び付けていく予定である。

今回の教育業績評価を終えての課題は、現在のスコアでは職位や役職によって対象範囲が異なり、職位の上位の者の方がスコアが高くなる点(図 2)が指摘された。この問題に関しては、職位ごとに評価の範囲を分けて評価する必要があると感じられた。また、自由記載においては、授業や実習への参加は現実には分野長が決めており、どの程度授業や実習に関わっているかに関して本人の意志では改善しようがない点があることが指摘された。また、評価結果を今回はレーダーチャートで示すようにしたが(図 3)、比較の対象がないためにレーダーチャートで表示する意味がないのではという指摘があった。この問題に対しては、レーダーチャートは本年の評価であって、数年続けていくうちに自分の評価の変化を確認出来るという意味で行ったと説明した。

鹿児島大学歯学部 教育業績評価シート		
所属・職位など		
所属	歯科機能形態学分野	①所属と氏名を記入して下さい
氏名	後藤哲哉	
番号	職位	
1	教授	
2	准教授	
3	講師	
4	助教	
右を2回クリックして 選択→	教授	②それぞれ
選択番号	1	選択して下さい
評価項目		
学部教育		
評価段階	授業・セミナーの年間コマ数(1コマ=90分)	
5	30～ コマ	
4	15～29コマ	
3	5～14コマ	
2	1～4コマ	
1	0コマ	
右を2回クリックして 選択→	30～ コマ	1/22
評価点	5	
評価段階	授業・セミナー(統合系科目、選択科目以外)	
5	授業・セミナー全体の企画に関与し、授業・セミナーを主導的におこなった。	
4	授業・セミナー全体の企画に関与し、授業・セミナーの一部を担当した。	
3	授業・セミナー全体の企画に協力した。	
2	授業・セミナーの補助をおこなった。	
1	ほとんど、あるいは全く関与していない。	
右を2回クリックして 選択→	授業・セミナー全体の企画に関与し、授業・セミナーを主導的におこなった。	2/22
評価点	5	
評価段階	基礎実習	
5	実習全体の企画立案に主導的役割をはたした(実習責任者等)。	
4	実習全体の指導・評価をおこなった。	
3	実習の現場における指導をおこなった。	
2	実習補助をおこなった。	
1	ほとんど、あるいは全く関与していない。	
右を2回クリックして 選択→	実習全体の指導・評価をおこなった。	3/22

図1. 歯学部 教育業績評価シートの一部

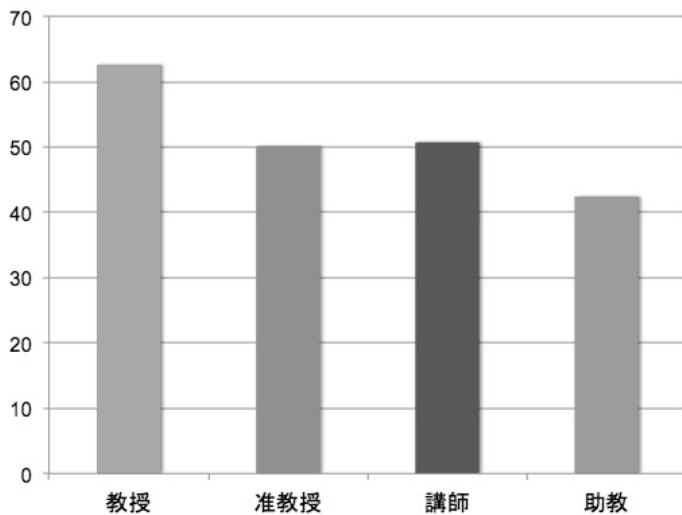


図2. 職位ごとの平均スコア

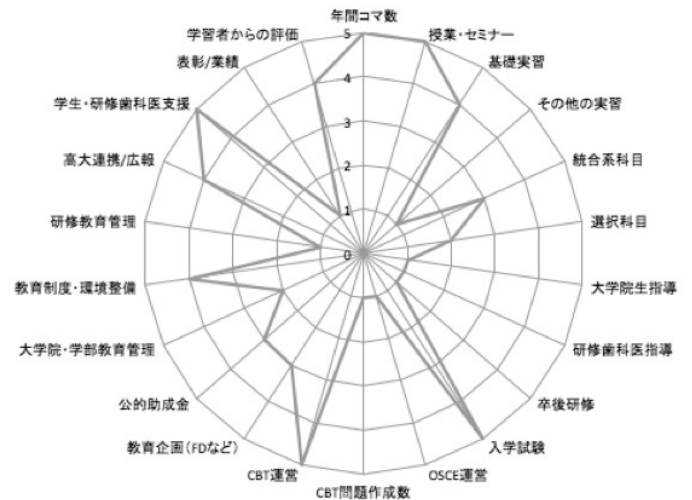


図3. レーダーチャートの例

16. 特筆すべき事項と改善例

歯学部 of FD 活動において特筆すべき事項は、講演会をはじめとしてその回数が多い事（平成 27 年度は 9 回）と、出席率が高い所である。本年度も講演会を行い、その出席率は常時 5 割から 7 割に及んでいる。現状では歯学部教員のうち臨床系の教員は臨床業務で参加出来ない事が多い事、さらには講演会が勤務時間終了後の 17:00 から 19:00 に開始しないと行けない事を考慮すると、各教員の FD 活動に対する意識の高さが伺える。平成 28 年度の鹿児島大学としての FD 活動の目標として全教員の 75% 以上が年間少なくとも 1 回は FD 活動に参加する事が目標とされているが、現状でも十分その目標は達成されているものと考えられるので、今後は今まで以上に教員の参加率の向上を目指して、FD 活動の企画を考える必要がある。

一方、まだ活動が普及していない FD 活動として「授業公開・授業参観による教員相互の評価」がある。現時点ではほとんど機能していないので、現時点では自主参加とされている教員による授業評価を、評価者を決めて行う必要があると思われる。教員による授業評価による授業評価は学生の授業評価と並んで教育の質の改善には欠かせない事項なので、本年度は改善を行う予定である。

平成 27 年度の FD 活動の改善例として、学生の授業評価後の「授業改善シート」の提出と「教員の『教育業績評価』の実施」が挙げられる。「授業改善シート」は歯学部教育委員会と協力して導入したもので、教育の改善に関する PDCA サイクルには不可欠なものである。今後は「授業改善シート」に基づき、どのように改善されたか確認していくことも必要になると思われる。平成 27 年度は「教員の教育業績評価」を歯学部として初めて導入した。項目 15 で既に述べたように、教員の教育に関する意識付けには効果があったのだが、いろいろと課題も指摘されたので、今後も継続的に実施し、教員個人の改善により役立つものにしていく必要が求められた。

工学部

平成27年度 鹿児島大学工学部FD委員会報告

はじめに

各大学は、個々の教員の教育内容・方法の改善のため、全学的にあるいは学部・学科全体で、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）の実施に努めるものとする旨の提言が「21世紀の大学像と今後の改革方策について」（平成10年10月26日大学審議会答申）においてなされた。それを受けて、平成11年9月14日より大学設置基準において努力義務が規定された。工学部においても、FD委員会は、個々の教員が限られた時間の中で行う教育効果の改善の試みを支援し、学部教育全体の質を向上させるための活動を継続的に実施している。

本報告書は、平成27年度の活動報告である。委員と学生係職員が協力して作成した。評価アンケートのデータ処理等は学科事務支援室の皆さんに作業していただいた。これらさまざまな協力に感謝を申し上げます。本報告書を読んでいただき、FD委員会自体の改善のために委員会活動に関する忌憚のない意見をお寄せいただければ幸いです。なお、工学部FD報告書の詳細版は工学部ホームページで公開している。

平成27年度鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 甲斐 敬美

平成27年度 鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	甲斐 敬美	（工学部副学部長，全学FD委員会委員	H27.4.1 ～ H29.3.31）
委員	余 永	（機械工学科委員，専門委員会委員	H27.4.1 ～ H29.3.31）
委員	前島 圭剛	（電気電子工学科委員，専門委員会委員	H26.4.1 ～ H28.3.31）
委員	澤田樹一郎	（建築学科委員，専門委員会委員	H27.4.1 ～ H29.3.31）
委員	中里 勉	（環境化学プロセス工学科委員，専門委員会委員	H26.4.1 ～ H28.3.31）
委員	酒匂 一成	（海洋土木工学科委員，専門委員会委員	H27.4.1 ～ H29.3.31）
委員	塗木 淳夫	（情報生体システム工学科委員，専門委員会委員	H26.4.1 ～ H28.3.31）
委員	中島 常憲	（化学生命工学科委員，専門委員会委員	H27.4.1 ～ H29.3.31）
委員	山本 高師	（理工学研究科等事務部長	H26.4.1 ～ H28.3.31）
事務	坂口 智子	（工学系学務課課長	H26.4.1 ～ ）
事務	川崎さおり	（工学系学務課学生係長	H27.7.1 ～ ）

第1章 鹿児島大学の中期目標と工学部のFD活動

鹿児島大学の中期計画には、『進取の精神』（時代を先取りし、物事に果敢に挑戦する気風）を有する人材を育成するために、FD活動等を充実し、教員の教育力向上に向けた取り組みを展開する」と定められており、充実したFD活動の実施を求められている。工学部FD委員会では平成27年度もこの中期計画に沿って活動を行った。

工学部では、全7学科の教育が日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定プログラム教育、あるいはJABEEに準拠した教育を行っている。これまで継続的に実施してきた授業アンケートによる授業改善などのFD活動は、JABEEの求める教育改善のためのPDCAサイクルに取り込まれた形で実施されている。平成27年度の第1回工学部FD委員会において、年度内に次の活動を実施することが決定された。

- 1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成
- 2) 授業公開と授業参観の実施
- 3) FD講演会の実施
- 4) 学外FD研修会への学部教員の派遣
- 5) 授業評価アンケートの分析
- 6) 報告書の作成

第2章 工学部FD講演会および鹿児島大学FDワークショップ

2.1 工学部FD講演会

平成27年度の工学部FD講演会は2回開催された。1回目のFD講演会は、工学部建築学科棟01号教室にて平成27年4月30日(木)13時30分から15時30分まで、理工学研究科、理学部との共同開催で開催された。講師はニューヨーク州立ニューヨーク・シティ大学機械工学科教授・同大学エネルギー研究所副所長川路正裕先生で「北米の大学・大学院における工学教育・研究・学科の運営について」という演題で講演をしていただいた。講演会への参加者は、141名(工学部教員：64名、理学部教員：8名、他学部教員：4名、事務・技術職員：16名、学生：49名)であった。川路先生の講演に関しては、平成27年年度理工学研究科FD報告書に掲載されているので、詳細はそちらを参照されたい。

2回目の工学部FD講演会は、稲盛会館において、平成27年9月30日水曜日14時30分から16時00分まで、広島大学教育・国際室特任教授の山根八洲男先生に講演をしていただいた。講演題目は、「日本のものづくりに求められるひとつづくり」で、講演会への参加者は、90名(工学部教職員74名、工学部学生12名、他学部教職員4名)であった。講演では「ひとつづくり」の重要性について講演していただいたが、内容は次の通りである：熟練作業の自動化は大きな流れであるが、人から人への移転伝承は現在でも必



要不可欠であるにも関わらず、中堅技術者が不足していることは企業のものづくり能力の大きな低下をまねている。対応策としては、女子の活用、留学生の活用、育成の加速化および新しい技術者の育成にある。技術者に要求される6つの能力として、俯瞰力、理論力、経験力、判断力、行動力および創造力を挙げられ、それぞれについての育成方法が示された。まとめとしては、理想とする技術者像（目標）の構築がスタートであることが強調された。

2. 2 新任教員 FD 研修会

平成27年9月17日（木）に新任教員FD研修会が開催された。本研修会のテーマは「アクティブ・ラーニングの基本と活用術」であり、平成28年度から開講されるアクティブ・ラーニングを取り入れた初年次セミナーの模擬授業を体験してもらうことなどが盛り込まれた研修会であった。工学部からは6名の新任教員が参加した。各参加者からは以下の感想が届いた。

①前島 圭剛（電気電子工学科）

自身が学生の時はあまりなじみがなかったアクティブラーニングによる教育を6人班で体験し、教育手法を学んだ。工学部などでは実験科目があり、アクティブラーニングではないかと班内で議論した。また、通常の授業で取り入れることはそれぞれの科目の内容に合わせなければならないので、いろいろと知恵を絞らなければならないと思うが、何にせよ学生のやる気や興味を引き出していくことが重要であると感じた。

②甲斐 祐一郎（電気電子工学科）

今回の研修会はレベルが高く、ある程度の講義経験を積んでからこの研修会に参加する必要があると強く感じた。また、グループの話し合いの中では、アクティブラーニングの取り入れ方や進め方に対する自身の課題が明確となり、これらを改善しつつ今後の講義に積極的に取り入れていきたいと思う。

③吉田 賢史（電気電子工学科）

普段あまり関わりのない他学部の先生方と、授業や実験の進め方について議論できたことは、新たな知見を得て今後の演習や実験に取り入れる上で大変有益であった。ただし、具体的な講義や演習内容によってはアクティブラーニングが必ずしも適しているとは限らないため慎重な議論が必要である。

④二井 晋（環境化学プロセス工学科）

講義を受けた後、実際に分野の異なるメンバーで構成されたグループ討論を行い、リーダーの決定に始まり、どのようにリーダーシップを取ってメンバーからアイデアを得て、提案をまとめるか、を体験し、大いに刺激を受けた。実施ではリーダーシップの形成が重要かつ難しい部分と感じた。

⑤長山 昭夫（海洋土木工学科）

今回は特に模擬授業体験が印象に残った。この模擬授業において明確な目標設定の重要性を学び、さらにチームとして最終意見を出す過程でのコミュニケーションの難しさや楽しさを学べたと

思う。この経験を今後の教育研究活動に活かしていきたい。

⑥三嶋 道弘（情報生体システム工学科）

アクティブ・ラーニングを行うためには何が必要なのかを、グループに分かれ話し合うことで、理解を深め合った。例えば、実際に使われている部品を触らせる、ゴールを与えそれにたどり着くための方法を話し合わせる、など意見があった。アクティブ・ラーニングには、教科書を読むだけでは得られない経験をさせ、興味を抱かせることが必要であると感じた。

2. 3 学外 FD 研修

齋田 倫範（海洋土木工学科）

平成 27 年 5 月 9、10 日の 2 日間にわたって公益社団法人土木学会で開催された『JABEE 認定・審査のための「土木及び関連の工学分野」「環境工学及び関連のエンジニアリング分野」受審校研修会』について報告する。一日目～二日目午前は、「JABEE 認定制度の考え方と基本方針」や「JABEE に関わる国際的動向」、および「JABEE 認定基準の解説ならびに分野別要件」や「審査書類作成の要点」に関する説明であった。いずれも JABEE に関する総論や認定基準の変更点等に関する事務的な話題が中心であったが、日本技術者教育認定基準で明文化されていない情報も得ることができ、有意義であった。一方、二日目の午後は、「受審校報告」として、金沢工業大学、東京都市大学、大阪産業大学の事例報告がなされた。各大学における自己点検書作成時の工夫、実地審査の状況、あるいは審査を終えての反省点などが具体的に紹介され、継続審査に向けて有用な情報を得ることができた。

審良 善和（海洋土木工学科）

公益社団法人土木学会主催の「JABEE による教育プログラム認定・審査のための「土木及び関連の工学分野」「環境工学及び関連のエンジニアリング分野」受審校研修会」に参加した。JABEE 認定制度の考え方と基本方針や新・旧基準の JABEE 認定基準の解説、JABEE 認定・審査の手順と方法、自己点検書作成時の注意事項などを受講した。また、受審校報告として昨年度受審した 3 大学の事例報告があった。今年度、新任教員として着任したばかりの私にとって有意義なものであった。また、継続審査を受審するための準備や JABEE 認定プログラムの今後の改善などへの有用な情報が得られ、これらを学科内の運営に反映させていきたいと考える

第3章 学生による授業評価とそれを生かした授業

3. 1 学部授業評価アンケート分析結果

工学部の学生による授業評価アンケートの学部での平均値についての分析結果を以下に述べる。各学科の結果については工学部ホームページに掲載した平成27年度工学部FD委員会報告書に記載している。

図3.1.1(1)、図3.1.1(2)は、講義・演習科目の授業評価アンケート結果の工学部全体の平均値に関して、平成25年度前期～平成27年度後期までの6期分の授業評価の推移を示している。なお、「工学部平均値」は、まず各設問に対する講義・演習科目の評点を学科毎に平均し、さらに学科平均値を単純に平均し、得られた値であり、学科ごとの科目数の違いは考慮されていない。

講義・演習科目に関するアンケートの質問項目は、①シラバスの内容と実際の授業との一致性、②授業の今後の有用性、③授業の興味深さ、④授業の理解度、⑤教材等の適切性、⑥レポート等の理解への効果度、⑦授業目標の達成感、⑧文字の明瞭性、⑨声の明瞭さ、⑩教員の熱意度、⑪質問等に対する教員の対応度、⑫レポート等の評価への満足度、⑬出席回数、⑭予習・復習の時間数、⑮総合的満足度である。

図3.1.1(1)、(2)より、平成27年度は、平成25、26年度に比べ、各項目ともわずかながら評価が向上していることが見て取れる。また、⑭予習・復習については、他の項目よりも低くなっており、改善の余地があると思われる。⑪教員の対応、⑫返却も、相対的にやや低い評価になっている。これは、質問の量、オフィスアワーの利用の有無、レポートの有無によっても学生の評価基準が各講義で均一でないため、評価は難しいが、質問のしやすい雰囲気づくりなどの工夫が必要であると思われる。

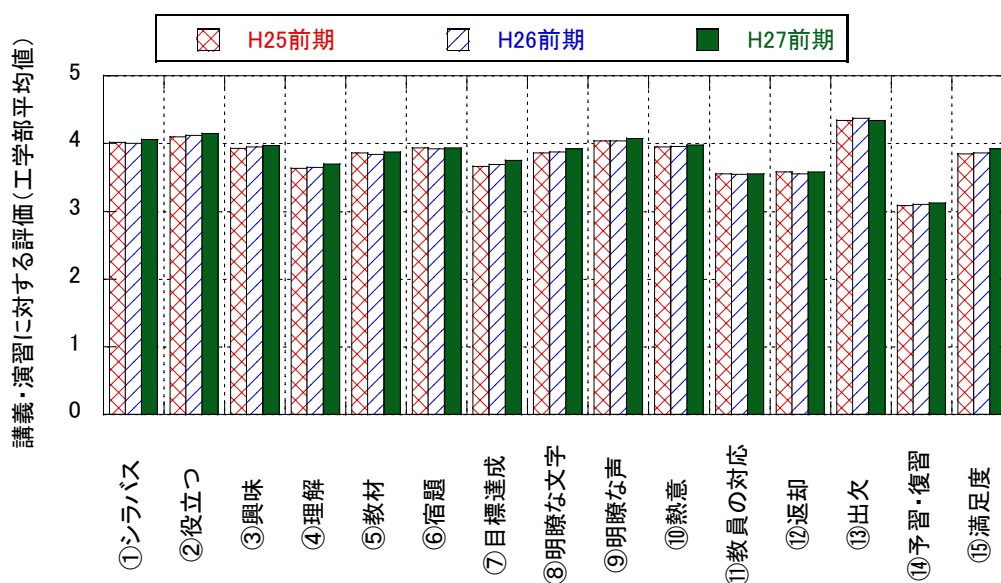


図3.1.1(1) 講義・演習科目の結果（工学部全体の平均） 平成25～27年度（前期）

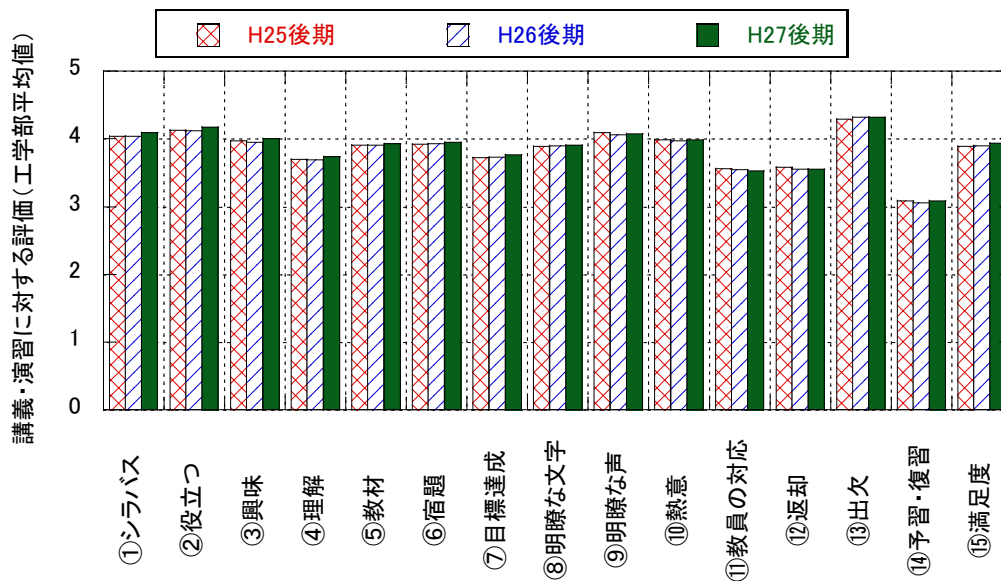


図 3.1.1 (2) 講義・演習科目の結果（工学部全体の平均）平成 25～27 年度（後期）

次に、平成 25～27 年度の実験系科目に関する授業アンケート結果を図 3.1.1(3), (4)に示す。実験系科目の質問項目は、①シラバスの内容と実際の実験との一致性、②実験グループの人数の適切さ、③実験装置の適切さ、④実験時間の適切さ、⑤教材の理解への貢献、⑥講義との関連、⑦理解度、⑧目標達成、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑪安全教育の実施、⑫TA の熱意、⑬予習の度合い、⑭主体的に実験に取り組めたか、⑮総合的満足度である。

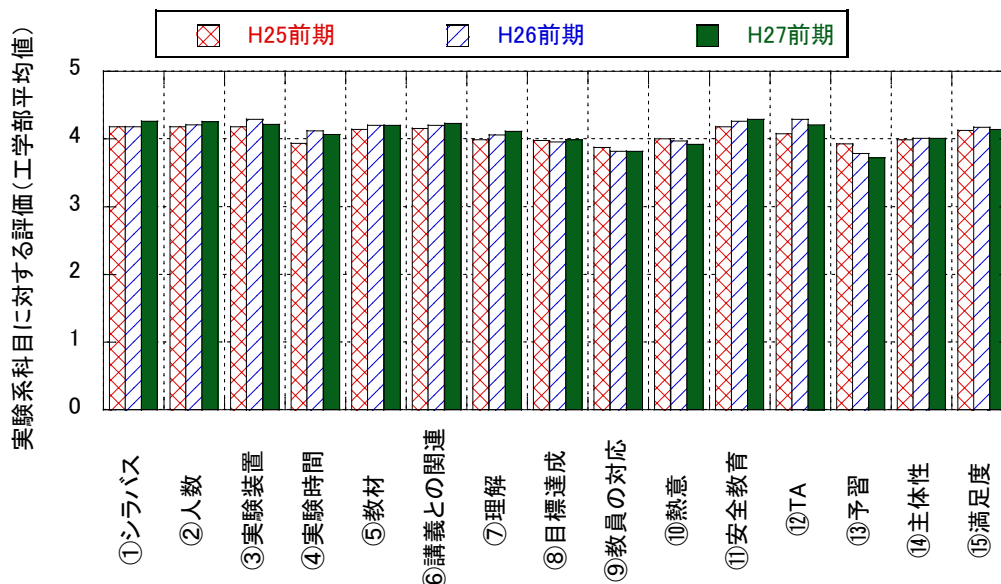


図 3.1.1 (3) 実験系科目の結果（工学部全体の平均）平成 25～27 年度（前期）

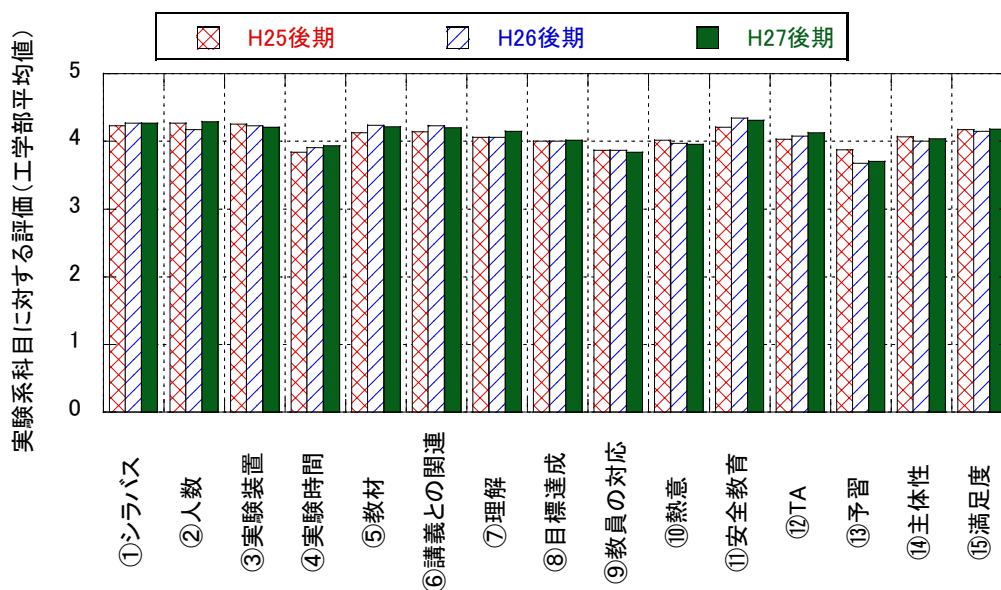


図 3.1.1 (4) 実験系科目の結果（工学部全体の平均）平成 25～27 年度（後期）

図 3.1.1(3), (4)より，例年とほぼ同様な傾向が見られる。⑬予習については，全項目の中で比較的低い評価となっており，平成 25 年度から徐々に低下してきている。予習して実験に望む習慣を付けるための指導が必要と思われる。

3. 2 授業計画改善書の各学科での活用状況

3. 2. 1 機械工学科の活用状況

学科の FD 委員が収集した授業計画改善書は，授業評価アンケートの評価点や科目 GPA とともに専攻教育評価委員会が整理して分析を行っている。専攻教育評価委員会は，整理した内容と分析した結果を「専攻教育評価委員会報告書」としてまとめている。授業計画改善書は，専攻内に設置されたパソコンのフォルダ内に各年度，各期ごとに整理され，全教職員に閲覧できるように公開されている。また，専攻教育評価委員会報告書は冊子と CD-ROM の形で保管され，授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

3. 2. 2 電気電子工学科の活用状況

授業計画改善書は，各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート，および授業評価アンケート回答用紙（実施済みのもの）と共に学科事務室や会議室の JABEE 用保管庫にて保管され，教員はいつでも閲覧できる。主として工学部 FD 委員が管理し，JABEE 活動の一環として，専攻（学科）FD 委員会において授業改善に取り組む資料として活用している。

3. 2. 3 建築学科の活用状況

教員は，授業評価アンケートの集計結果に基づいて，授業計画改善書を作成し，次年度以降の授業に反映させることとなっている。また，授業アンケートの全科目の評点は学科内で閲覧可能

であり、問題点を共有することとしている。本学科では、平成19年度より授業満足度の評点と授業担当時間を用いて、教員の教育貢献度を評価するシステムを導入している。この結果も学科内で閲覧可能にしている。

3. 2. 4 環境化学プロセス工学科の活用状況

年2回学期末に開催される学科の教員間ネットワーク会議において、FD委員会のアンケート調査より返却された前期／後期授業科目の授業改善書、ならびに次学期開講予定科目のシラバスの提示を行っている。授業計画改善書は学科内の資料室にエビデンスとして保管してきたが、今後は電子ファイル化し教員が自由に学科サーバよりダウンロードして確認できる体制を整える予定である。このような継続的な取り組みにより、評価の再確認と改善を図っている。

3. 2. 5 海洋土木工学科の活用状況

海洋土木工学科における授業計画改善書の活用方法は既にシステムされている。具体的には、授業計画改善書は授業評価アンケートの集計結果に基づいて作成され、学科のFD委員に提出することが義務付けられている。そして、学科内に設置されている教育システム評価委員会が、授業計画改善書および専門科目の学習目標達成度に基づいて、授業改善状況の点検を行うことになっている。さらに、その点検結果は教育システム評価委員会から学科会議に報告されることになっている。最終的に、学科会議において、この報告書に示された改善点に関して、審議して必要な措置をとることとしている。以上のように、学科としてはPDCAの点検システムを構築しており、授業計画改善書は、その中で重要な役割を果たしていると言える。

3. 2. 6 情報生体システム工学科の活用状況

情報生体システム工学科では平成22年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能な状態で管理を行っている。各教員による授業改善への取り組みおよび結果を教員全員で共有することで、学科全体の教育内容の継続的な改善に貢献している。また、改組のためにJABEE申請は再出発となったが、学科JABEE委員会の下に作られている教科グループWGにおいて、科目の内容の見直しなどの検討の際に、資料として活用している。

3. 2. 7 化学生命工学科の活用状況

授業計画改善書は応用化学工学科応用化学コースと同一の理念の下で活用を図っている。すなわち、授業計画改善書を、卒業生アンケート集計結果、授業参観報告書およびそれに対する回答書等とともに、各教員が分析、評価し、続いて互いに連携する科目の担当教員グループで作るカリキュラム小委員会において十分な教育効果が達成されているかどうかを討論してカリキュラムの向上に努めている。検討した結果や問題に対する対策は学科内教育プログラム改善検討委員会において報告され、全体のカリキュラムの運営上最も効率が良い方法で運用できているかどうかの評価され、必要な指導がなされている。このように授業計画改善書等のFD活動書類を資料として、教員間で協力・連携そして切磋琢磨するシステムが構築され、その中で授業内容・方法の改善もなされている。

第4章 学科におけるFDとJABEEへの取り組み

4. 1 JABEE認定プログラムを実施している学科での取り組み

4. 1. 1 機械工学科

機械工学科は、平成16年度にJABEE認定の審査を受けた。平成18年度のJABEE中間審査において、平成16年度に評価Wの指摘を受けていた全ての評価項目を改善している。平成21年度実施のJABEE再審査では、評価Cを受けた項目が10箇所あり、W以下の評価を受けた項目は無く、6年間のJABEE認定継続が認められた。今年度実施のJABEE再審査では、評価Cを受けた項目が11箇所あったが、W以下の評価を受けた項目も無く、さらに6年間のJABEE認定継続が認められた。

本学科は、平成22年度から広範囲にわたる機械工学領域の教育研究を3つのコース（生産工学コース、エネルギー工学コース、機械システム工学コース）で分担実施している。各コースは、複数の研究室により構成され、それぞれにコース長をおいている。この3名のコース長と副専攻長から組織される「専攻教育委員会」において、学科の教育プログラムを点検していたが、平成25年度からその役割は「コース長会議」に移管された。この「コース長会議」を基に、学科の教育環境のさらなる改善と実施体制の強化が図られている。学科内には、さらに教務委員会委員、FD委員会委員、JABEE委員会委員等からなる教育の現状を分析する委員会としての「専攻教育評価委員会」と、JABEE認定のための審査資料作成を行う「専攻JABEEワーキンググループ」があり、今年度にはJABEE認定の再審査を受けるため審査項目や評価項目の確認などを検討して、JABEE認定の再審査の実施を行っていた。また、平成26年度は、「専攻教育評価委員会」において、PDCAサイクルの「評価」を実践強化するために運営規程の検討・修正を行うとともに、教育環境に関するアンケートを実施した。さらに、「専攻JABEEワーキンググループ」では、学習・教育到達目標の達成度評価方法を提案して、4年生の卒業時におけるJABEE修了判定の評価を行った。これらの委員会およびワーキンググループによって、教育方法や教育改善に関する実質的に活動が実施され、促進するように継続的に検討が行われている。

4. 1. 2 電気電子工学科

電気電子工学科では、平成19年10月にJABEE中間審査を受け、平成20年5月に3年間の継続認定を受けた。その後、平成22年11月にJABEE継続審査を受け、平成23年5月に6年間の継続認定を受けた。次回は平成28年度にJABEE継続審査を受ける予定になっている。

今年度は、専攻（学科）FD委員会を計3回開催し、その他専攻会議や電子メールでの議論、シラバス点検などで学科の教育改善に取り組んできた。今年度の専攻FD委員会を含む学科の教育改善活動は以下の通りである。

- (1) シラバスの点検：専攻FD委員会において、全シラバスを点検し、シラバスの整備を行っている。
- (2) 授業評価アンケート結果等を活用した授業改善：専攻FD委員会において、授業評価アンケート結果、授業計画改善書等をもとに授業の検証を行ない、必要に応じて担当教員と連絡を取っ

ている。

- (3) 新入生アンケートと追跡アンケートの実施：新入時とその1年後にアンケートを行い、学生の実態を把握し、改善のための資料としている。
- (4) 学生定期面談の実施：各期末の指導教員による学生定期面談を義務化し、指導・助言する体制を整えている。
- (5) 教員間連絡ネットワークの構築：科目間連携会議を基礎科目と各コース専門科目で行い、専攻FD委員会で結果を議論している。
- (6) 社会からの要望調査の実施：来学された企業採用担当者にアンケートで、学科卒業生からは直接社会からの要請を調査し、教育改善に役立てている。また、卒業生アンケートの平成28年度実施に向けて準備している。

4. 1. 3 建築学科

建築学科では、平成26年度にJABEEの中間審査を受審し、次のJABEE審査に向け、新基準への対応等を行っているところである。今年度のFD活動とJABEE関連の主な取り組みは以下のとおりである。

- (1) JABEE 学習教育目標の更新および公開ホームページの更新：学習教育目標 G のコミュニケーション能力の項目中にチーム力の育成を追加し、該当する授業科目を決定した。また、学習教育目標が記述されている公開ホームページを更新した。
- (2) 学習教育目標別の総合的な達成度（計算式）評価手法の更新：各学生に対して、授業科目の成績（達成度）から学習教育目標別の総合的な達成度を計算する評価手法について、教員団で検討を重ね、作成した。
- (3) JABEE 達成度（計算式）評価シートの作成：各学期のはじめに行われる教員と学生の個人面談の際に、学習教育目標の達成度を相互確認するためのJABEE 達成度評価シートを教員団で検討を重ね、作成した。
- (4) JABEE 達成度（計算式）評価システムの作成：卒業時に全ての学生に対して、学習教育目標の達成度を評価するためのエクセルマクロによる計算システムを技術員の支援のもとで作成した。
- (5) 教員の教育負担と教育貢献度の評価：教員の教育負担を調べて教育貢献度を評価し、資料に基づいて授業の分担を検討した。
- (6) 期末および中間授業アンケートの実施：期末授業アンケートだけでなく、中間授業アンケートも実施した。中間中行アンケートは、グループ形式で実施し、進行中の授業の改善を促した。
- (7) カリキュラムマップの更新：カリキュラムマップを整備し、問題点を検討し、共通教育改革や新任教員の着任に伴って一部内容を変更した。

4. 1. 4 海洋土木工学科

JABEEプログラムの実施・点検にともなう教育改善の一環として学科のFD活動が実施されている。工学部のFD委員会で実施している授業アンケートの実施結果に関して各授業担当教員は授業計画改善書を作成してFD委員に提出することが義務付けられている。FD委員はこの結果を学科の教育システム評価委員会に提出することになっている。さらに、各授業科目の担当教員は、

専門科目の学習目標の達成度評価を作成して学科の教育システム評価委員会に提出することになっている。教育システム評価委員会では、学生による授業評価である授業計画改善書と、教員による評価（学習目標達成度の結果）とを比べて検討することになっている。その検討結果は学科会議に報告され、提起された問題点や改善点について、担当する学科内の委員会で検討や実施方法が策定される。このような FD や JABEE に対する取り組みが仕組みとして確立されている。

なお、本学科ではエンジニアリングデザインに関する科目の充実をはかっている。「海洋土木デザイン工学Ⅰ」では、エンジニアリングデザインの実例を学ばせながら、数値解析や CAD による図面作製法などのスキルを身に付けさせ、実際のプロジェクトの調査・代替案の立案・発表を行わせている。「海洋土木デザイン工学Ⅱ」では、学生が自ら持っている知識・情報・技術を用いて社会的・技術的な問題点を自ら発見し自ら解決することを学習・体験させることにより、課題発見ならびに問題解決能力の高い技術者の養成を試みている。また、チーム力を養うため、3～4名程度の小グループに分けて、調査・検討および成果をポスターセッション形式の発表を課している。

4. 1. 5 化学生命工学科

化学生命工学科の前身である応用化学工学科応用化学コースが、平成 18 年度の審査により JABEE 認定を受け、平成 29 年 3 月 31 日まで継続して認定されている。JABEE に関する情報は学科ホームページを通じて広く公開されており、学習・教育目標と JABEE 基準との対応、学習・教育目標を達成するための授業課題の流れ、授業時間などの情報を閲覧することが可能になっている。また、卒業生に対するアンケート調査が継続的に実施され、結果は学科ホームページを通じて公表されている。さらに、自己点検表（ポートフォリオ）を学生自らが作成して継続して改善する仕組みを導入している。新入生については初年度に重点的なケアが必要であると考え、平成 25 年度までは後期が開始される時期に全学生の面談を教員が行い、単位の取得状況、サークル活動やアルバイトと勉学との両立状況、進路の検討状況についてインタビューを実施してきた。これらの活動は平成 26 年度より新入生に対し実施しているアドバイザー制度・学生相談員制度に先んじて行ってきたものであり、これらの新制度とも矛盾の無いように自己点検表制度を継続的に運用し、かつ今までのインタビュー活動から得たノウハウを活用することで、平成 27 年新入生に対しても学生相談員の活動を効果的に指導することができた。

また、授業公開・参観についても積極的に取り組んでいる。具体的には、各教員が年間 1 科目は必ず講義を公開し、どの科目に誰が参観するかを定め、全教員が必ず他の教員の参観を受ける仕組みを導入している。

以上のような取り組みを継続的に実施しているが、更なる改善を目指し、学科内に教育プログラム改善検討委員会を設置して検討を重ねており、PDCA サイクルを構築している。

4. 2 JABEE を受審していない学科での取り組み

4. 2. 1 環境化学プロセス工学科

本学科においては、本学科では平成 16 年度より継続してきた JABEE 認定を平成 26 年度に終了し、これに代わる取り組みとして、平成 26 年度入学生より公益社団法人化学工学会の認定資格で

ある「化学工学技士（基礎）」の取得を意識した新カリキュラムを実施しているほか、本学を試験会場とした団体受験を実施している。今年度は9月上旬に学科教員全員が講師となり受験対策用の補習を初の試みとして実施した。合格率は昨年度（44%）に比べて上がった（51%）ものの、全国の合格率は73%であり、合格率アップに向けての何らかの教育上の対策が必要である。

学科のFD活動においては、学期末および学期中間に行われる学生授業アンケートやその結果に対する授業改善計画書の作成、FD講演会への参加などに取り組んでいる。さらに、本学科教職員は、原則として前期末および後期末に開催される教員間ネットワークに参加している。教員間ネットワークは開講期の直前に開催されるもので、各教員がどのような講義を行うのかシラバスを公開して教員間の相互理解を深めている。今後はこれらを教務委員が電子ファイル化し、学科のサーバにおくことにより、学科教員がいつでも閲覧できる仕組みを作ることを決定した。

学生には個人の学習達成目標の到達度を再確認・自己評価させる意味で、学科図書文献室にてポートフォリオを印刷できるコーナーを設置している。学部1, 2年生には年2回、助教も含めた教員が面談員となり定期個別指導（学生面談）をチーフアドバイザーの教員が企画し実施することにより、学生と教員との間のコミュニケーションを通して学修指導ならびに生活指導を行っている。3年生には後期の研究室配属後に研究室において面談を実施しているほか、4年生には卒業研究の検討会の記録ならびに従事記録の作成を義務づけている。

4. 2. 2 情報生体システム工学科

情報生体システム工学科は、平成21年度に情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合されて新学科となり7年間の経過した。今年度は、新学科の卒業生を送り出して3年目となる。JABEEへの取り組みは平成21年度より新たにスタートしており、7年間の資料の収集が終了したこととなる。

情報生体システム工学科では、教育企画委員会と、FD推進委員会により、学科の教育改善などのFD活動を担っている。FD推進委員会の下には、教科グループWG（情報基礎科目、ソフトウェア科目、工学基礎・教養科目、語学科目、実験科目）があり、学科の教育内容について検討を行っている。ここ数年、学生の数学の学力低下が懸念されており、工学基礎・教養科目WGでは、数学に関する授業の内容を科目間で調整している。また、ソフトウェア科目WGでも同様に、プログラミング言語に関する講義や演習の内容を検討し、科目間での調整を行っており、開講期の変更を決定した。さらに、実験科目WGでは、昨年度末の計算機システムの導入に伴い、実験機器の更新や内容の見直しを検討し、次年度での実施を決定しその準備を行った。

情報生体システム工学科では、授業計画改善書を教員間で互いに閲覧し、各教科グループWGで積極的に活用できるように学科事務室に保管・管理している。また、1年生には、高校における数学・理科の詳細な履修状況、志望動機、進路希望などを調査する新入生アンケートを実施して、学生への指導の参考にするとともに、カリキュラム改善に役立てている。

第5章 GPA 制度の現状と学習成果

平成 18 (2006)年度の FD 報告書において、GP 制度の現状と問題点の整理がなされ、GPA の推移、分布、GP 制度と JABEE との関係、授業アンケート調査結果との関係について調査・検討がなされた。平成 19 (2007)年度と平成 20 (2008)年度は年間 GPA の推移、年間修得単位数の推移、入学者数に対する卒業生数の割合の推移が調査された。平成 21 (2009)～平成 27 (2015)年度も平成 20 (2008)年度の調査を継続し、GPA と授業アンケートデータの関係が調査され、学習成果と学習の質の関連性についての分析が試みられた。本年度も継続しこれらの調査・分析を試みた。

5. 1 年間 GPA の推移

図 5.1.1 に、平成 15 (2003)～平成 27 (2014)年度入学生の間年 GPA の平均値を経過年数別に示す。在学 1 年目の年間 GPA の平均は、平成 20 (2008)年度入学生までは 2.5 程度を推移していたが、それ以降はばらつきがみられるが 2.3～2.4 付近まで低下傾向が見られた。本年度入学生では、以前の 2.5 程度まで回復した。調査開始以降、在学 2 年目の年間 GPA 平均値は、1 年目よりも低下し 3 年目に至って 1 年目と同程度かやや低いレベルまで回復する傾向があるが、近年は 2 年目に 2.0 付近まで落ち込むことがあり、3 年目で 2.3 程度にしか回復しない。年間 GPA の推移について、1 年目は学生自身に緊張感があり、講義の多くが共通教育科目であるため、年間 GPA が高くなるが、2 年目は大学生活に慣れて勉学意欲が希薄になり、GPA 低下を招くと考えられる。3 年目は講座配属や就職を控え、再びやる気が出るので、GPA が回復すると考えられる。

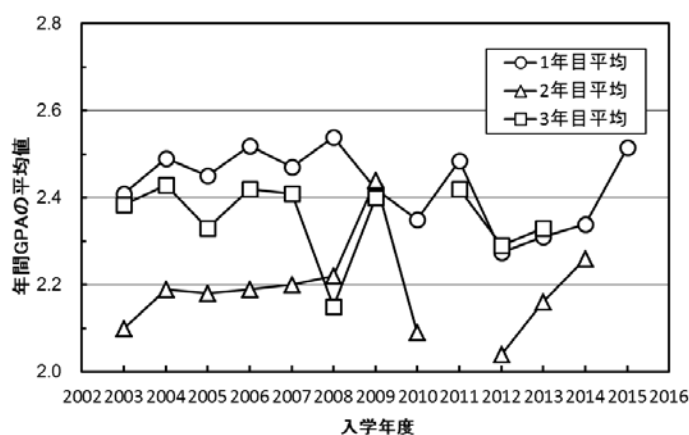


図 5.1.1 学年別年間 GPA の入学年度による相違

入学年度毎の比較では、平成 15 (2003)年度の年間 GPA は、工学部で GPA が導入された年であり、この年度の入学生に対しては教員側も試行錯誤的状况にあったため、平成 16 (2004)年度以降入学生のそれと比べて全般的に低い傾向がある。一方、平成 16 (2004)年度以降入学生に対しては、平成 19 (2007)年度まで、年間 GPA の推移には特に大きな変動が見られない。これは、GPA 制度下における各教員の教育方法がある程度確立し、継続的な改善が実施されている結果であると考えられる。しかし、平成 20 (2008)年度～平成 24 (2012)年度の年間 GPA は、非常に変化に富んで

いる。この原因は定かでないが、今後の更なる調査・分析が望まれる。

平成 22 (2010)～平成 23 (2011)年度の年間 GPA の一部のデータが得られていないので定かなこととは言えないが、表 5.1.1 の平成 27 (2015)年度の年間 GPA の結果より、在学 1 年目の年間 GPA に対し在学 2 年目の年間 GPA が低くなること、在学 2 年目の年間 GPA に対し在学 3 年目の年間 GPA が高くなることなど従来同様の傾向が見て取れる。平成 24 (2012)年度は、在学 1 年目と在学 2 年目の年間 GPA がそれぞれ従来のレベルよりかなり低下したが、平成 25 (2013)年度以降は回復傾向にあり、本年度入学生では、前述の通り 1 年目の GPA が平成 19 (2007)年度以前のレベル (2.5)まで回復した。この学年の 2 年目、3 年目の GPA が上昇するかどうか次年度以降の推移を検討したい。

表 5.1.1 2015 年度の学年別年間 GPA

○ 1年目平均	2.52
△ 2年目平均	2.26
□ 3年目平均	2.35

5. 2 年間修得単位数の推移

図 5.2.1 に年間修得単位数の平均値を年度ごとに算出した結果を示す。途中年度のデータが欠落しているが、本年度解析した 2016 年 4 月におけるデータを過去のデータに追加して図に示した。解析は、2015 年度における 1 年生 (1～2 期生)、2 年生 (3～4 期生)、3 年生 (5～6 期生) が 2015 年度に取得した単位数の平均値を求めることによって行った。ただし、確定 GPA が 1.5 未満の学生のデータは解析から省いた。

1～2 期 (1 年目) および 3～4 期 (2 年目) に取得した単位数は、途中多少の増減はあるが、統計を取り始めてからの傾向として上昇しているように見受けられる。このことから、1～4 期の間に修得すべき単位を取得する学生の割合が増えたと推察される。また、5～6 期生が取得した単位数 (途中年度の解析結果がデータ不足で欠落している) は、年によって大きく変動しているが、おおむね横ばいか微増の傾向のように見られる。1～4 期では共通教育科目や基礎的な専門科目が主であり、これらの科目を入学してからの 2 年間でほぼ単位取得し、3 年目の専門科目に集中できるような履修状況になっているとうかがえる。現時点でのモデルケース (最新のデータの平均値) としては、1～2 期で 39.3 単位、3～4 期で 37.6 単位、5～6 期で 35.4 単位を取得している。2013 年度入学の学生は 6 期を終えた時点で 106.6 単位を取得していることになる。

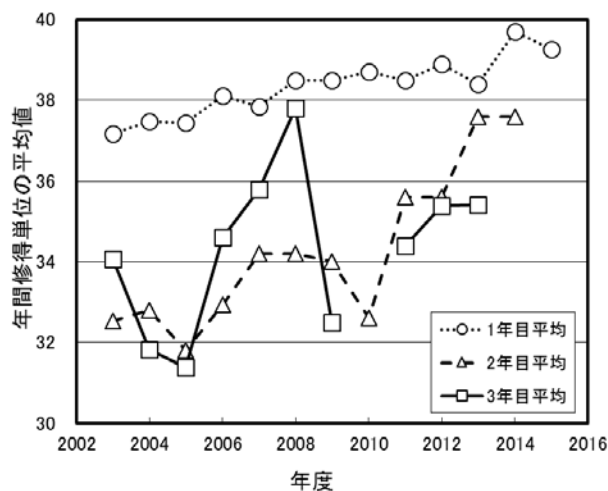


図 5.2.1 学年別年間修得単位数の相違

5. 3 卒業者数と卒業延期者数の割合の推移

図 5.3.1 に、卒業者数と延期者数の合計に対する卒業者数の占める割合の経年変化を示す。統計を取り始めた 2002 年度以降、概ね 0.93～0.98 の間で推移している。年度ごとに割合が異なる理由を考察することは困難であるが、一定の傾向が見られないことから、外的要因による変動や留学など学生個人による影響と推察される。外的要因による変動として、2009～2012 年度の卒業者の割合は低下しており、景気低迷の影響と考えられる。2013、2014 年度は 0.96 程度と高めであったのが、2015 年度では 0.94 程度とやや低下している。2016 年新卒対象の就職活動では選考開始が 8 月に後ろ倒しになるなど、前年度とスケジュールが大きく変更され、上手く就職活動を進められなかった学生がいた可能性がある。

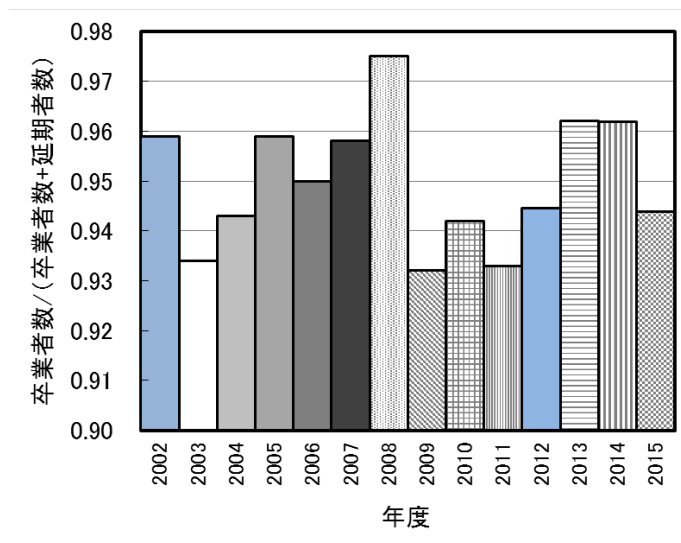


図 5.3.1 卒業者数と延期者数の合計に対する卒業者数の占める割合の経年変化

5. 4 学習成果と質の向上

昨年度に引き続き、それまでに蓄積されてきた講義・演習科目の授業評価アンケート項目の中から学生の学習の質と関連があると考えられる「学習目標の達成⑦」、「予習・復習⑭」、「理解④」、「満足度⑮」の評点を取り上げて、これらと GPA の関係を調べることで、学習成果と質の向上について検討する。

5. 4. 1 学習成果と質の向上の経年変化

2004 年度から 2015 年度までの前後期の前講義・演習科目の「学習目標の達成⑦」、「予習・復習の時間⑭」、「理解④」、「満足度⑮」の工学部平均値および工学部全体の GPA の科目平均値の推移を図 5.4.1 に示す。前年度報告書でも指摘しているように、同図から平成 16 年度から平成 21 年度ごろまでは、これらの評点は向上してきているが、おおむね平成 22 年度ごろ以降、横ばいの傾向を示している。改善努力は継続されてきているが、改善の容易な問題点については、ほとんど対策が施されたために、評点の向上が停滞した可能性があり、今後は高い評点を維持しつつ、さらに改善を要する問題点を洗い出す必要がある。一方、工学部全体での科目平均 GPA は、平成 20 年ごろまでおおむね微増傾向であるが、平成 20 年度から 23 年度までは微減、平成 25 年度から 27 年度までは再び微増している。工学部全体では、授業アンケート評点 4 項目の改善傾向は見いだせたが、科目平均 GPA との明確な関連性は見いだせなかった。次節では、主に平成 27 年度における科目ごとの授業アンケート評点 4 項目と科目平均 GPA の相関を見ていく。

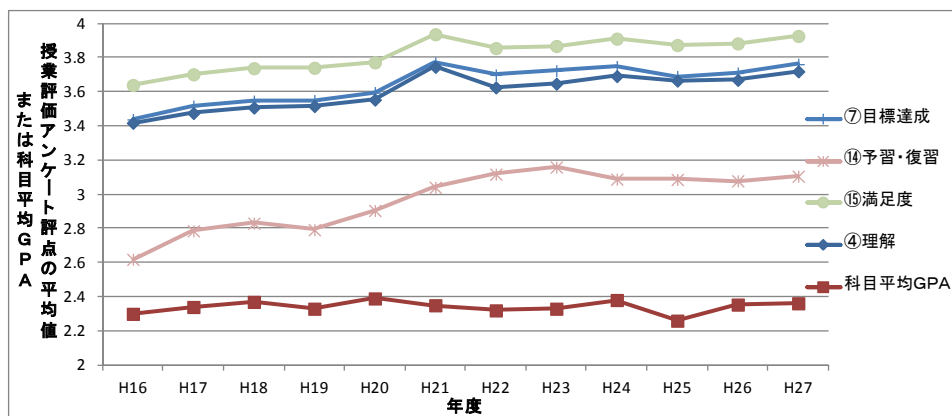


図 5.4.1 年度別の授業評価アンケートと科目平均 GPA の学部平均値

5. 4. 2 平成 27 年度の学習成果と質の向上

平成 27 年度の前期および後期の科目平均 GPA と授業評価アンケート 4 項目の科目平均の相関関係を図 5.4.2(1)、図 5.4.2(2)に示す。図 5.4.2 から、特に「理解④」、「学習目標の達成⑦」、「満足度⑮」の項目において、アンケート評点の科目平均が高くなるにつれ、科目平均 GPA も高まる傾向が確認でき、これら 3 項目のアンケート評点の向上の努力が、科目平均 GPA の向上につながると解釈できる。一方、「予習・復習の時間⑭」については、ばらつきが大きく科目平均 GPA との相関はほとんど認められなかった。これらの傾向は、平成 22 年度以降変わっていない。昨年度報告

書でも指摘されているように、自習をあまりしなくてもよい成績が取れる状況や自習に多大な時間を割いてもよい成績が取れない状況は、健全とはいえないので、今後、各学科で状況を確認する必要があると思われる。

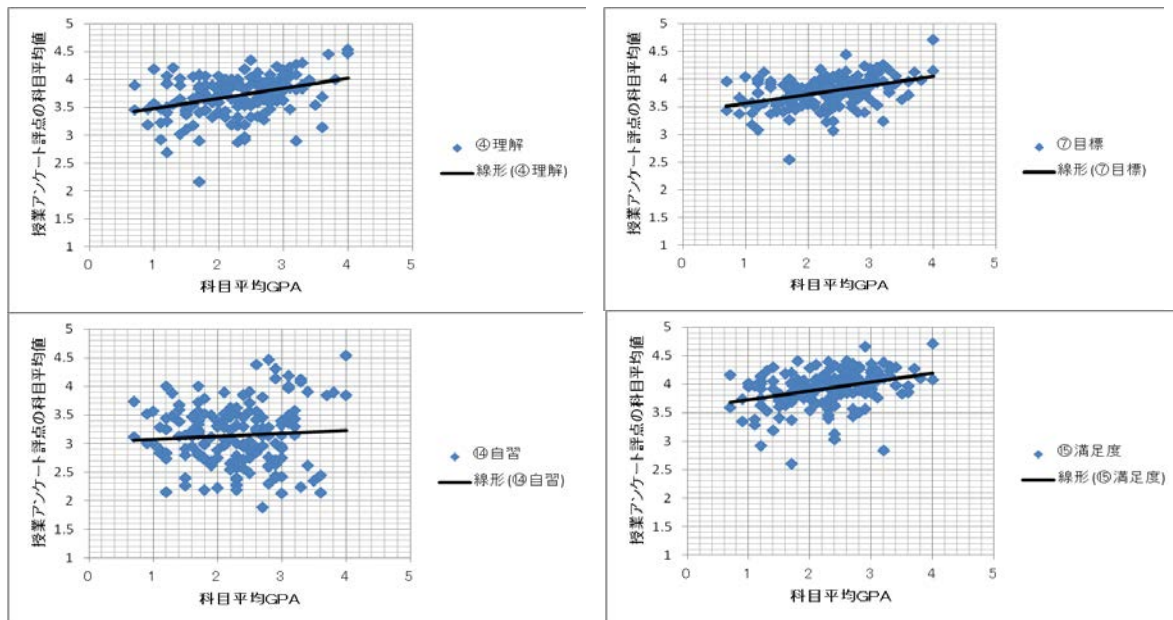


図 5.4.2(1) 平成 27 年度前期の科目平均 GPA と授業評価アンケートの科目平均の相関

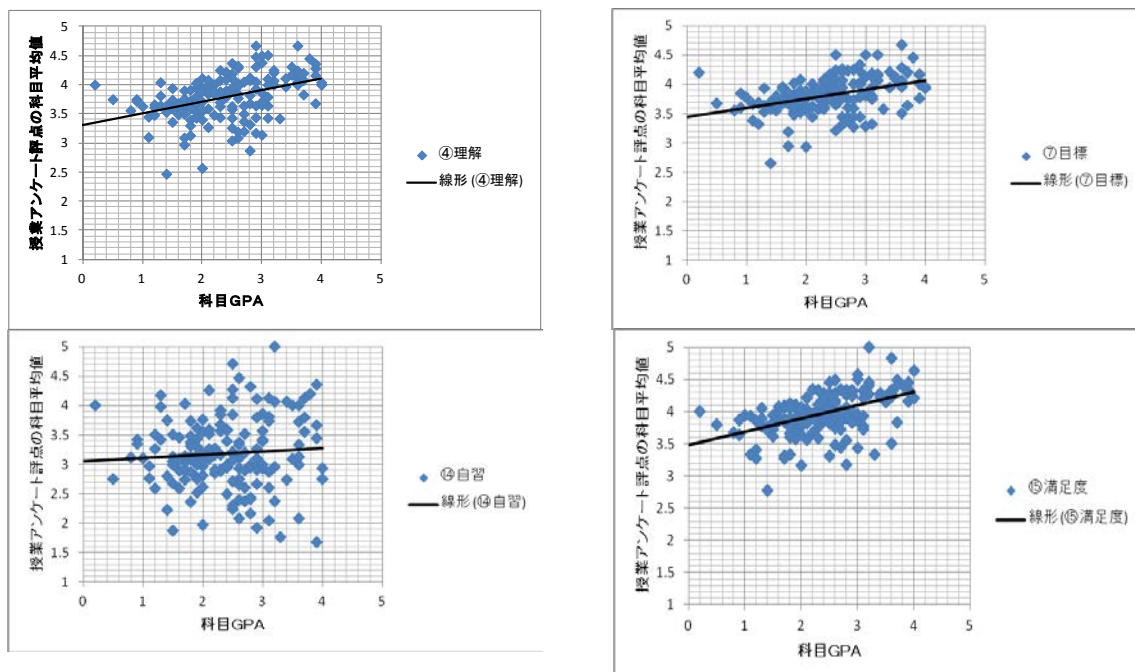


図 5.4.2(2) 平成 27 年度前期の科目平均 GPA と授業評価アンケートの科目平均の相関

第6章 特筆すべき取組や改善事例

平成27年度の学長裁量経費によって実施された三つの取組みを以下に紹介する。

6. 1 建築学科の取組

今年度における建築学科での特筆すべき取組みとして、鹿児島大学学長裁量プロジェクト「地方創生を推進する課題解決型建築教育プログラムの開発」が挙げられる。この取組みの主な内容を以下に記す。

(1) 課題解決型アクティブラーニングプログラムの開発

- ・設計教育で設定する演習課題を鹿児島県内の自治体や企業等が抱える建築的課題やまちづくりなど地域創生に直結する課題に連動させ、教員と学生、外部建築家も参加する設計活動を通して、課題解決への具体的提案を見出した。B1 演習課題：鹿児島市甲突川武之橋詰のレストハウス、B2 演習課題：桜島方先の住宅、鹿児島中央駅前のオフィス計画、日本ガス本社の再生ほか、B3 演習課題：桜島フェリーの双方のターミナル計画、市民病院跡地の劇場計画ほかを実施し、肝付町高山麓で米国学生とのワークショップも開催した。
- ・優秀な設計案を自治体や企業等および地域住民に向けて提示しそれらの実現に向けた課題を明確化するため、学内だけでなくフェリーターミナルでの展示・発表・討論会を実施した。
- ・講評会に外部建築家をまじえた意見交換を実施し、教育プログラムを自己点検・評価し、改善し、2016年度の設計教育への反映に着手した。

(2) 地域創生に向けた研究課題の発掘と展開

- ・麓集落等の研究課題を発掘し調査研究を実施した。また修士設計では、鹿児島中央駅周辺、天文館、桜島を敷地とし地域の課題解決に向けた調査研究と提案を行った。
- ・南九州特有の建築・都市の温熱環境を調査し、様々な地域の省エネ対策、材料・構造等に関する課題を卒業研究や大学院の研究課題とし、いくつかの具体的対策を提案した。

6. 2 海洋土木工学科の取組

海洋土木工学専攻では、「建設分野を軸とした地域貢献型の教育・研究の推進と実践的教育プログラムの確立」において、大学のミッションでもある「地域活性化の拠点形成」を実現するために、建設分野を軸として、鹿児島県固有の背景を踏まえた地域貢献型の教育・研究を推進するとともに、実践的教育プログラムを継続的に発展させるための予備調査と体制づくりを行った。ここでは、実施内容の一例を紹介する。建設業界では、人材確保および人材育成が喫緊の課題であることから、まずは本学科学生に建設業界の分野や仕事内容の理解度を高めるために、産官による特別授業を実施した。また、土木技術者資格試験を3年次の学生全員が受験および合格するように奨励し、学生の専門科目の理解度を外部評価できるようにした。国際的視野を広げるため、大学院生をインド・カルナタカ工科大学（NITK）に派遣し、海外学生との交流を行った。また、鹿児島県建設事業イメージアップ連絡協議会と連携し、産官学連携による人材育成のための協力体制について検討した。教育プログラムにおける教育組織や見直しのため、卒業生に対するアンケ

ートによる外部評価を実施すると共に、教育改善ワーキングを立ち上げ、e-learning 実施を目指したシステムの構築、学科受験生や大学院進学者を増やすためのホームページ改善や説明会実施などを企画した。

6. 3 情報生体システム工学科の取組

アクティブラーニング（AL）推進のための主体的学習支援教材制作・共有環境整備事業を行った。具体的には、工学部情報生体システム工学科の全教員 23 名により、学術情報基盤センターの協力のもとに、下記について実施した。AL 実施に向けた全学のパイロットスタディとして、情報技術の特色を活かした反転学習支援教材の制作・共有環境の整備、数学等の AL 用教材の制作および反転授業の実施を行った。同時に、AL 講演会に外部講師を招聘して教員の資質向上を図った。また、中等教育との連携を強化するため高専等に対して出前講義の実施や、本学研究室見学会開催の実施等による連携を図った。成果として、AL 推進のための主体的学習支援教材の制作ノウハウとその制作環境を整備することが出来た。本事業による教材の制作・実施により、基礎・専門教育科目の AL 化に向けた全学のパイロットスタディとして有益であり、全学教職員の労力軽減、全学学生の学力向上にも寄与されるものと思われる。また、高大連携推進によって受験者の質・量双方の向上が期待できると考えられる。

第7章 平成27年度の工学部FD活動の総括と今後のFD活動

7.1 平成27年度の工学部FD活動の総括

7.1.1 平成27年度のFD活動

工学部では先進の国際的に通用する教育を目指し、日本技術者教育認定機構 (JABEE)の認定プログラム教育、もしくはJABEEに準拠した教育を実施している。これまで継続的に工学部FD委員会が実施してきた授業アンケート等によるFD活動を通じた教育改善のPDCAサイクルは、比較的良好に機能してきたと思われる。平成27年度の第1回工学部FD委員会において、既に学部に着したこのような活動を本年度も継続して遂行することが決定され、年度内に以下の活動を実施した。

- 1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成
- 2) 授業公開と授業参観の実施
- 3) FD講演会の実施
- 4) 学習成果と質の向上の検討

7.1.2 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成

工学部の学生による授業評価アンケートは、平成27年度も例年通り、前期は7月、後期は1月に実施した。また各期中頃に中間アンケートも実施した。期末アンケートは、5段階のリッカート尺度評価による15項目の質問と自由記述欄で構成されている。各項目は5段階評価で5から1までの値で数値化し、科目ごとの各項目の平均値を評点として集計後、担当教員に学生の記入したアンケート用紙とともに印刷して返却した。各教員は授業評価を受けて、授業計画改善書を提出した。授業計画改善書には直近3年間の各項目の評点の推移と当該年度の評価値に対する自己評価と改善対策案を記入する。この改善書は系列科目担当の教員間で共有されたり、学科内での自由な閲覧を可能にするなど、各教員の教育の質改善のみならず、各学科の教育の質改善にも利用されている。この授業評価アンケートは平成16年度より継続して実施しており、多くの項目の評点についての経年的な変化やトレンドを把握することが可能となっている。第5章では工学部平均および各学科ごとの評点分析がなされた。

7.1.3 公開と授業参観の実施

平成27年度は、前期・後期合計4科目が公開科目となった。これらの公開科目に対して、工学部教員による授業参観は22件実施された。ただし、参観の実施は、学科間で大きな差がある。

参観することによって、授業改善につながるのかどうか知るために、各学科ごとに参観者数の教員数に対する割合と講義の満

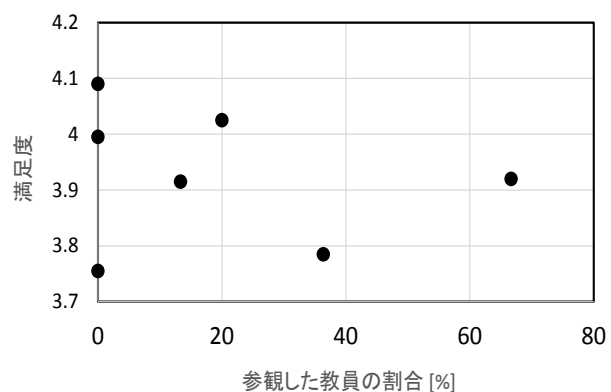


図 7.1.1 授業参観教員の割合と満足度の関係

足度の平均点の関係を図 7.1.1 にプロットした。この結果から判断すると、分かりやすい講義への反映といった観点からは、授業参観はさほど役立ってないと思われる。参観した教員数が少ない場合には学科の平均値への寄与は小さいが、かなりの割合で参観が実施されたからといって、その学科の講義の平均満足度が高くはなっていない。どこに問題があるのか今後検討する必要があるだろう。

7. 1. 4 FD 講演会の実施

平成 27 年度の工学部 FD 講演会は、2 回開催された。1 回目の講演は、理工学研究科、理学部との共同共催で、ニューヨークシティ大学工学部の川路正裕教授に講師を依頼し、「北米の大学・大学院での工学教育、研究及び学科の運営などについて」という演題で 4 月 29 日に講演が行われた。2 回目の講演は、工学部 FD 講演会で広島大学特任教授の山根八洲男先生に依頼し、「日本のものづくりに求められるひとづくり」という演題で 9 月 30 日に実施された。これらの講演会のいずれかもしくは両方への工学部教員の参加率は 66%であった。

7. 1. 5 学習成果と質の向上の検討

工学部 FD 委員会では、平成 21 年度から学習成果と教育の質の向上の定量的な評価のために、学生による授業評価アンケートの評点と科目 GPA との関連性について調査してきた。平成 27 年度も同様の検討を行った。その結果は第 5 章でまとめられている。平成 22 年度ころからはアンケートの評点および平均 GPA とほぼ横ばいになっている(図 5.4.1)ことから、改善の容易な問題点については、ほとんど対策が施されたのではないかと指摘されている。ただし、アンケートの評点は対象科目すべての平均値ということに注意すべきである。つまり、大きく改善された科目とほとんど変化のない科目が存在する可能性がある。少なくとも、平成 27 年度のデータ(図 5.4.2)を見ても科目間の評点の分布は大きい。この点に、改善の余地は大いに残されている。また、理解度が高い授業の平均 GPA は高くなることも示されている。分かりやすい講義をすることが大事であることが分かる。

7. 2 今後の FD 活動

工学部は平成 16 年度から授業アンケートを行い、その結果を受けて各教員が授業改善のための計画を策定しながら、分かりやすい授業の実施を目指してきた。10 年間のトレンドで見ると改善はされているが、この数年は変化がなくなっていることや、各科目単位で見るとアンケートの評価には大きな分布が存在する。このことはまだ改善の余地が残されていることを示している。平成 28 年度から工学部ではエクセレント・レクチャー表彰制度が実施される。これはその年度に最も優れた教育を行った教員を各学科から 1 名表彰する制度である。表彰された教員による講演会の実施なども考えられ、これをきっかけにして、今後さらに分かりやすい授業がなされることとその結果として学生の講義の理解度が深まり、その授業に対する満足度も向上することが期待できる。

農学部・ 農学研究科

平成27年度
鹿児島大学農学部・農学研究科 **FD** 活動報告書
(概要)

鹿児島大学農学部 **FD** 委員会

平成28年4月

第1節 平成27年度農学部FD活動の記録

まえがき

農学部 FD 委員会は、委員長、副委員長（教務副委員長が兼任）、および各学科から選出された委員 4 名、および、教務係長で構成されている。委員会では、さまざまな FD 活動計画や取りまとめ、また、全学 FD 委員会や、全学 FD 活動への対応について協議した。

今年度の農学部の FD 活動の特筆すべき点は、授業公開・授業参観の参加率を挙げることを目指した取り組みの 2 年目である。1 年目に授業公開期間を 2 週間に延長したが、参観者から、例年 7 月上旬(前期)と 12 月上旬(後期)とに授業公開時期が固定しているため、1 つの授業では授業内容がどの年に行っても変化しない点は、授業参観への興味をそぐため、参加率を下げるだろうという指摘があった。これに対して、本年は前期を 6 月中旬、後期は 11 月中・下旬と 2-3 週程度前倒して実施することを試した。これによって、授業参観のマンネリ化が防がれ、今年も 75%を超える教員が授業参観に参加した。また、例年の学生による授業評価アンケートの集計分析だけでなく、今年も参観報告書もここに掲載し、教員が授業改善で目指す点として、学生とのコミュニケーションにかかわる点を挙げていることを指摘することができた。授業公開・授業参観の予約、学生による授業評価アンケートの集計は、農学部・水産学部共通の Agri-Fish-Web システムが利用できるため、授業公開・参観期間の調整、参観報告書のとりまとめおよび授業評価アンケートの集計も容易となった。

1. 農学部 FD 活動組織 (FD 委員会の構成と活動状況)

委員長 坂巻祥孝

副委員長 秋山 邦裕(教務委員会 副委員長兼任)

委員 坂巻祥孝(生物生産学科)

委員 高峯 和則(生物資源学科)

委員 神田 英司(生物環境学科)

事務担当者 河本政展(教務係長)

FD-WEB 管理・データ処理 池田日出男 (技術専門職員)

第 1 回農学部 FD 委員会 平成 27 年 4 月 27 日 (月)

議題：1. 平成 27 年度 FD 委員会の活動計画について

1) 平成 27 年度農学部授業公開・授業参観の実施について

2) 平成 27 年度 FD 報告書作成の分担について

2. その他

1-1) 平成 27 年度農学部授業公開・授業参観

農学部では、平成 15 年度後期より公開授業・授業参観の取り組みを実施している。平成 22 年度からは、授業公開科目と授業参観参加希望科目の登録を FD-WEB で行うようにし、今年度もこの FD-WEB を活用することとした。その使用法は教授会ならびに学部教員へのメーリングリストにて説明し、周知した。今年度の授業公開は、例年参観率の向上を目指すため、授業公開期間(通称：農学部 FD ウィーク)を 2 週間に延長した。これは、参観希望の講義公開日に出張など入った場合、FD ウィークが 1

週だけでは、参観をあきらめてしまう教員もいるだろうという配慮からである。また、FD-WEB システム上での参観予約なので、講義の当日まで参観予約期間としても問題ないとの意見が、農学部 FD 委員会で挙げられたため、参観予約期間は3週取った。その 授業公開と授業参観のスケジュールは以下のとおりであった。

(前期)

- 5 月 20 日 (水) : 公開授業の実施についてのお知らせ (教授会)
- 5 月 25 日 (月) ~5 月 29 日 (金) : 公開不可能な授業科目調査
- 6 月 1 日 (月) ~6 月 19 日 (金) : 授業参観予約
- 6 月 8 日 (月) ~6 月 19 日 (金) : 授業公開 (農学部 FD ウィーク)
- 6 月 8 日 (月) ~6 月 26 日 (金) : 授業参観報告書作成・提出

(後期)

- 10 月 14 日 (水) : 授業公開の実施についてお知らせ (教授会)
- 10 月 26 日 (火) ~10 月 30 日 (金) : 公開不可能な授業科目調査
- 11 月 9 日 (月) ~11 月 30 日 (金) : 授業参観予約
- 11 月 17 日 (火) ~11 月 30 日 (金) : 授業公開 (農学部 FD ウィーク)
- 11 月 17 日 (火) ~12 月 12 日 (金) : 授業参観報告書作成・提出

授業担当者と授業参観者には、可能な限り、授業参観終了後に意見交換をお願いした。また、参観者には、FD-WEB を通じて、授業参観報告書を作成・提出いただいた。

本年度の授業参観には、前期 48 名、後期 34 名の参加があった。これらの内一人で複数の授業を参観する教員も多く、のべ参加人数は 96 名であったが、参加名簿から実参加者を数えると農学部全教員 77 名中 58 名が授業参観をしたことが分かった。有意義な取り組みであった。特別に農学部 FD 委員による参観報告・感想を掲載した。

公開授業参観所感

生物生産学科 坂巻 祥孝

前期は生物環境学科の曾根晃一先生の「森林保護学」、後期は生物生産学科岡本繁久先生の「分子生物学」と獣医学科の中馬猛久先生の「食品衛生学」を参観させていただいた。いずれの講義も、専門家が情報を集約して、ストーリー化し、覚えやすいように取りまとめているので、その工夫を感じることができて教員としては大変興味深い授業であった。しかし、学生と同じように席について聞いていると、ほんの一部の学生が、遅刻して来たり、授業中ウトウトしていたり、教員の話をもせねばならないタイミングでスマートフォンをいじっていたりすることに気づく。100%の受講生に90分間集中して授業を受けさせるのは、やはりとても難しいことだと思う。これまで、8年くらいこのような授業参観をしてきており、近年は参観する授業でウトウトする学生は非常に少なくなったと感じている。各教員の努力が実を結んでいると感じ取ることができる。それでも少数ながら、授業に集中できない学生が残ってしまうのは仕方ないことなのだろうか？教員個人個人の工夫だけでは限界で、教育コース、学科などの単位で授業参観結果を活かす組織的取り組みを検討する時期が来ているのかもしれないと思う。

公開授業参加報告

農学部附属焼酎・発酵学教育研究センター 高峯和則

木曜日 2 限目に開講されている「分析化学」(樗木准教授)は生物資源化学科 2 年生の必修科目を参観した。教室は 307 号室で、学生数に対して十分な広さであった。この科目は実験をする上で必要な分析の基礎を学ぶものである。配布された講義資料をもとに、重要な点は板書を行い丁寧に解説されていた。また、重要な部分については繰り返し説明を行い、更に、学生に問いかけることで理解度を確かめながら進めていた。授業参観で参考になった点を今後の自身の担当する講義に生かしたいと思う。

公開授業参加報告

生物環境学科 神田英司

下桐准教授の「生物統計学」、加治佐准教授の「森林計測学」を参観させていただいた。「生物統計学」はパワーポイントを一切使わず、板書と資料の演習により進み、「森林計測学」はパワーポイント、ネット、ミニッツペーパーを効果的に活用していた。このように両講義は見かけは異なっていたが、学生の理解を深めるために一方的な講義ではなく、双方向講義となるように、「生物統計学」は演習および宿題を通じ、「森林計測学」は質問およびミニッツペーパーを有効に活用していた。また、両授業ともに講義内容に関連して、担当教員が実際に実施している研究や活動についても紹介されていた。実際の体験からの説明は非常に説得力が高いだけでなく、講義と研究等との関連を理解するうえでも効果的であった。とくに項目ごとに意識的にスローペースで丁寧に分かり易く説明された点は今後の自身の担当する講義に活かしていきたいと思う。

平成 27 年度 全参観者による授業参観報告のとりまとめ

農学部では授業参観後に報告書の提出が義務付けられており、平成 27 年度前・後期の参観者の報告書は Agri-Fish Web システム上で参観を受けた教員本人が閲覧できる仕組みになっている。参観報告書には 1. 授業担当教員に対する感想、2. 受講している学生に対する感想、3. 自分の授業に活かしたい点、4. その他の 4 項目があり、参観を受けた各教員は授業改善に活用できる。しかし、他の教員の授業へのコメントは閲覧できない。そこで、他の授業で挙げられる長所や問題点も参考にできるようにするため、今年度の授業参観報告書の記述を項目別・授業担当教員所属学科別に以下に列記する。

なお、学科別の特徴はあまりはっきりしたものがないが、全体として、ノートの取りやすい板書、配布資料に空欄を作って授業への集中を促す工夫、話す速度、身近な事例や実際の事例を織り交ぜること、小テスト・宿題を課すことや前回ミニッツペーパーの質問事項への回答を丁寧に行うことで講義内容の復習を促すこと、など比較的テクニカルな工夫を「担当教員への感想」で挙げる参観者が多かった。一方で「自分の授業に取り入れたい点」としては、これらテクニカルな点以外に、学生の名を覚えて授業中に指名して質問することや、小テスト、宿題を課すこと、学生の質問事項から授業の話を展開してゆくこと、フランクな授業の雰囲気づくりなど、受講生と教員のコミュニケーションの向上を挙げる参観者が目立った。

さらに「その他」として、液晶プロジェクタや暗幕といった教室の設備が、大きな教室では不十分であるといった問題が指摘されていたことは、今後の授業環境改善のため重要と思われた。

1. 授業担当教員に対する感想

生物生産学科

・大変密度の濃い講義であり、教員の情熱が感じられた。説明も丁寧に、パワーポイントを使って、分かり易く工夫していた。また、最新かつ多くの情報を取り入れ、学生に紹介していたので、興味が一層湧いたと思われる。

・板書しながらの講義と演習がバランス良く配分されており、非常に良かった。前回までの復習にあたる内容については、学生に問いかけるなど、学生の発言を促す取り組みもなされていた。演習問題は、練習問題をまず解いてから、農業市場学に関する演習問題に取り組むなど、難易度が徐々にあがっていくように工夫されていた。また、演習問題に、福岡県での実際の調査結果が使われていた点も良かった。一方で、エクセルを使っている統計的処理の練習に多くの時間が割かれ、その結果を「農業市

場学」の視点から分析し、議論する時間などが十分に確保されていなかった点は残念に感じた。

- ・講義は、多くの事例を交えての説明で、非常に分かりやすく、興味深い内容であった。声も良く通っており、後ろの席からでもしっかりと聞くことができた。一方で、先生のパワーポイントがあまりにも整理されすぎており、すべての情報が含まれているために、学生がメモをとる必要を感じず、それが学生の居眠りを招いているようにも思えた。また、本日の講義は、14時半～15時50分ごろまで、一続きで講義が行われ、その後、学生2名が、それぞれ2、3分ずつ、宿題の発表を行うといった構成であったが、学生の宿題の発表を講義の合間にもって行うことができれば、気分転換・目覚め（エナジャイザー）となっており良かったと思う。
- ・今回参観したのは麦類に関する回でしたが、実際に小麦、大麦、ライ麦などの実物を配布して下さったので、違いが良く分かりました。また、最後には小麦と大麦の模式図を書くというユニークなレポートがあったのが印象的でした。先生の話方ははっきりわかりやすかったです。また、教卓だけに留まらず学生さんの方へ歩み寄りながらの授業姿は、聞いている方を引き込みやすいのではないかと思います。初めて聞く授業でしたが、麦類やとうもろこしの分類・用途、需要の高まりなどよく理解できました。
- ・101 教室は広い教室です。担当された先生は、声がとても大きくて良く通る声であり、発音も語尾も明瞭であり、話し方もゆっくりでした。声の大きさ、発音の明瞭さ、スピードは授業を進める上でやはり大事であることが再確認できました。
- ・改組の中で、本科目はなくなる予定なので、聴講させていただいた。ただ、午後の実習の準備がある為、途中で失礼させていただいた。今日は実験動物のモルモットとウサギの話であった。補助プリントを配布されていたが、大事な点は記載されておらず、大事なことは口頭と板書で講義されていた。
- ・配布プリントを用いて、丁寧に板書することで、学生のペースに合わせた授業スピードを維持していると感じた。
- ・前回の講義に対する質問に丁寧に答えており、前回の講義を受けていない私でもわかりやすかったです。授業の進行はプリントと教科書を用いており、理解が深まっていると思います。プリントに教科書のページが書いてあるのがよいと思いました。講義の最後に、今日のまとめと次回の内容について説明があり、次への興味が出ました。
- ・担当科目だけでなく、関連分野にも深い知見を有しており、余裕を持って講義されている印象を受けた。
- ・スライドと板書を組み合わせて丁寧に分かりやすく説明されていると感じました。植物生理の知識がまるでない私としても興味深い内容でした。
- ・話す速度が、説明を理解するのに丁度良かった。メモを取る時間も十分であった。補足説明も必要な箇所での確に行われており、理解が深めることが可能と思われた。
- ・論文の内容と英語の訳し方を大変丹念に懇切丁寧に指導していた。
- ・冒頭に、前週の内容に関する10分間のミニテストが行われ、ミニテストについての解説が行われた。その後授業が開始され、授業のおわりにもミニツペーパーが配布されている。学生の理解の程度を十分把握しながら、授業を進める配慮がされていると感じられた。
- ・ゆっくりかつ丁寧に講義が行われていた。
- ・講義で出てくる専門用語の英単語を織り交ぜており、専門英語定着の促進があると感じた。
- ・学生に合わせてゆっくりと説明しており、わかりやすいと感じた。
- ・授業は前回の復習と質問の回答から始められ、そのあと課題の授業が行われた。授業はPPTスライドとその印刷資料を基に進められた。全体的にはストーリーがあり、まとまった内容であった。一点、最後尾席で聴講したが、一部聞き取りづらい部分

もあったので少し配慮が必要かもしれない。

- ・学生の質問に対し、丁寧に対応していた。
- ・ノートを取りやすいように最低限のスライドがしっかり考え抜かれて準備されていた。
- ・ノートをうまくとることに主眼を置いた授業で、板書とスライドを併用し、板書速度、書いたり消したりで、速度調節してノートをまとめやすいように配慮されていた。
- ・丁寧にゆっくりとした説明であった。眠くはない。復習となる部分は、まめに、学生を名指して質問しており、良い緊張感があった。
- ・声が明快で聞き取りやすく、語りかける口調ですので、授業に参加する意欲が湧きました。
- ・学生さんの名前をよく御存じで、指名して答えさせるなど、参加型の授業をされており、内容も非常にわかりやすかったです。
- ・非常に熱心に、丁寧に教授されていました。良かったと思います。時々、講義のポイントを学生に質問するなど、学生に集中力を保たせるための工夫がありました。
- ・ウガンダにおけるネリカの他の作物との間作に関する興味深い授業であった。講師の実体験に基づいているので説得力のある内容であった。
- ・学生にわかりやすい講義を心がけていた。
- ・大講義室であったが、大きな声で、明瞭に、わかりやすく説明をしていた。専門分野での適切な例題を準備して、統計学の講義を行っていた。
- ・授業の効果が良く例題演習への動機づけになっていると感じます。
- ・前回の講義の復習や本日の講義の内容等を冒頭に解説し、わかりやすいと感じた。
- ・検定法が利用できるケースを具体的に説明しており、統計を応用しやすいよう計画されていた。
- ・例題を解きながら解説する際に解き方の順序を解説して実際に解いてみせた後で例題を解かせることで、わかりやすかった。"
- ・親しみやすい講義スタイルでした。
- ・資料もきれいに作成され、よく準備されていると思いました。質問をスライドにまとめて丁寧に答えていた。先週の復習にもなり、一方通行になりがちな講義を活性化させるのには良いと思いました。
- ・具体例もあり理解しやすい講義で良かった
- ・わかりやすく説明することを心がけていたように見えた。
- ・興味深い話をわかりやすくしていた。
- ・パワーポイント等、十分に授業の準備がなされており、講義内容も明確でわかりやすかった。今回だけでなく、すべての講義を通して受講したいと感じた。
- ・難しい内容を、非常に丁寧にわかりやすく解説されていた。板書も明瞭で、重要なところを異なる色で強調するなど、常に学生の視点にたった授業だった。

生物資源化学科

- ・資料プリントに空欄を設けて授業をしっかり聞いていないと理解できない方法や小テスト、前回授業の復習などで、アクセントをつけて学生が集中しやすい環境作りを心掛けていると感じた。授業内容のキーワードを最初に明確にしてから、説明に入るの、わかりやすかった。
- ・チーズの知識はまるで無かったので、楽しく聞かせて頂きました。実際にチーズづくりに使われている乳酸菌の種類を聞きたいと思いました。
- ・講義プリントの工夫、穴あき（受動にさせない）、実物の配布など、学生に講義に対して集中させる仕組みを取り入れていると感じた。

- ・スライドの中に図表が多用されていて説明が理解しやすかった。設問形式や受講者への問いかけがあれば、より教育効果が向上すると感じた。
- ・プロジェクターを利用して、わかりやすい表現で説明されている。
- ・難しい部分を含む内容が平易に解説されていると思いました。特に、折に触れて復習的な内容を入れながら授業を進めて行くやり方と、学生にノートを取らせるための間の取り方は参考になりました。
- ・非常に丁寧かつ、分かりやすい説明でした。勉強になりました。
- ・実物の写真と数値データとを絡めて、非常に理解しやすかったです。授業のスライドが、学生の書き取りスピードにちょうど合っていました。
- ・世界のスピリッツと題して、まずスピリッツの定義から始まり、主に四大スピリッツのジン、ウォッカ、ラム、テキーラの種類、製法、歴史について概説された。洋酒は学生にとって馴染みが浅いと思われたが、国内酒との対比を交えることによって分かり易く解説されていた。飲むまでとはいかないが、香りを嗅ぐ等の現物に触れる機会があると、さらに理解が深まったであろうと感じた。
- ・配布資料が見やすく工夫してあった。身近な出来事と関連付けて教えていたため、興味を強く持つことができた。
- ・パワーポイントと資料、ホワイトボードを適宜使いながら、はっきり、ゆっくり話されており、非常にわかりやすく講義をされていた。
- ・基礎化学と肥料との関係を、化学式を使って分かりやすく説明していた。
- ・大変分かりやすい説明で参考になりました。ありがとうございました。
- ・90分で完結するように、スライドやプリントを含め、周到な準備がなされていた。
- ・声の大きさ、話すスピードがちょうど良かった。スライドも授業内容を理解する上で大いに役立った。
- ・非常にスマートな語り口・柔和な表情が、授業に対するある種の抵抗感を緩和している印象を受けた。
- ・前回の中間試験の解説から始まり、糖と窒素塩基との反応についての講義内容へと推移した。メイラード反応の説明では、食品のアクリルアミド問題も紹介されており、身近な問題として印象づけたと思った。ゆっくりした進行で1年生には丁度良いと思った。
- ・中間テストの模範解答を、問題の趣旨および過去の問題との関連も含めて、非常に丁寧に進んでいた。また、授業については、スライドの進み具合も良く、丁寧に解説がなされていた。
- ・非常に丁寧かつ分かりやすい説明であった。内容も高度で、生化学に学生が親しみ興味を持てる内容であると思った。
- ・授業プリントを配布する時間を使って教科書を読ませて予習させる時間にあてており、効率的だと感じました。
- ・とても丁寧に説明されて、学生はわかりやすくよかったですと思います。

生物環境学科

- ・学生が提出済みのレポートへのコメントやこれまでの講義に関する補足説明に10分程度が費やされた後、本日の講義が始まった。講義は、事例を示しながらの説明で、資料もスクリーンで示され、非常に分かりやすかった。また、福岡や鹿児島の実例が示されたことで、講義の内容を、自らを取り巻く環境に置き換えて考えることができ、非常に良かった。
- ・学生への質問を交えているので、双方向授業が行われている。3限目の授業であり、居眠りする学生が多いので、途中で休憩を入れた方がいい。
- ・学生にわかりやすく説明しようと、一所懸命に話をしようとす

る姿勢が感じられました。時々質問を入れ、学生の集中力を切らさないように工夫されていたようです。ただ、その効果については？でした。

- ・ポイントとなる考え方、基本となる知識の理解に力点を置いて講義を進めておられ、そのために講義の流れの中に緩急と余裕があり、受講者とのコミュニケーションがスムーズに行われている感想を持った。自身の講義を顧みて、知識の伝達にとられ、時間に追われていることに気づかされた。
- ・話し方が聞き取りやすい早さであること、話の強弱のつけ方
- ・最近の森林・林業に関するトピックスを取り上げ、わかりやすく丁寧に解説されていた。
- ・ホワイトボードに式や単純な模式図などを記載してスライドの補足説明を行っており、効果的に授業が進められていた。
- ・教員による説明だけではなく、学生に演習問題を出題して解答させることも取り入れられており、アクティブラーニングによる学習効果向上の工夫が見られた。
- ・教員と学生のコミュニケーションをより行いやすくし教育効果を高めるために、学生を教室の前方に座らせたほうがよいと思った。
- ・TAと協力して実習の確認をしていたので、良かった。あえて言えば、なぜ樹木を覚えるのか。林業や森林の専門家として知らないとはじまらないし、知ることで、他の一般の人から尊敬される存在になることをもっと強調してほしい。
- ・授業の終わりに締めくくりにレポートを学生に書かせ、次週に添削して返却する授業方法は知識の定着のため有効なやりかたであると思いました。また随時学生からの質問を受け付け、さらに確認をしていくなど学生の能力と学修程度に応じたきめ細かい配慮がうかがえ、たいへん好感度の高い授業であると感じました。演習問題を各自に解かせる手法も参考になりました。
- ・体系立った主要な講義内容の中に、主に経験に基づく話題が取り入れられ、快活に話をされるため面白く授業を受けることができた。大変感謝しています。
- ・また、前回ミニッツペーパーの質問に対する回答もプリントで配布され、大変マメだと思いました。学生からすれば文句のつけようがないでしょう。
- ・一つの話の区切りで、きちんと学生に質問がないかを確認している点に配慮が感じられた。私がつい忘れてしまう点である。"
- ・授業で重要となるキーワードを丁寧に説明することで、受講生全体の理解に努めており、事前準備も十分に行っている印象を受けた。
- ・今回の講義は学生による生物および環境に関連する書籍の紹介と統計学の基礎でした。学生がどのような分野に興味を持っているかを引き出すためにはいい方法だと思いました。発表する側は大変ですが、聞いている学生の反応が薄いのが残念でした。
- ・スライドや動画を活用して具体的な例を示しながら説明しているので、専門外の者にも各機械の仕組みが良く理解できた。
- ・前回は振り返った後に、今回の講義を始めるなどストーリーの流れを大切にしていると感じた。また、充実した資料が配布され、復習の際にかなり有効であると思われた。自身の教育研究分野とは大きく異なるが、分野の方向性や概要がよく分かる内容であった。受講学生にとっても分かりやすいものであると想像される。
- ・配布資料や教材の使い分けなど、入念に準備された講義であることが窺えた。また、数式の説明や重要な用語の解説と強調など、非常に丁寧な説明であった。
- ・講義内容を絞り、学生の理解を深めるとともに、質疑応答で学生をできるだけ講義に参加させようと努力している。
- ・パワーポイントとインターネット環境を駆使したわかりやすい解説をおこなっている。
- ・今回は最新の航空レーザー計測に関する講義であり、大変興味深い内容であった。

- ・配布プリントの内容が詳細で、講義を聴きながら、プリントで内容の再確認ができるので、理解を深めることができた。説明も非常に分かり易い。
- ・講義の最初には前回の講義に対する質問に丁寧に解答するなどきめ細やかな講義であるというのが第一印象である。また、講義、予習復習のための配布資料が大変充実していると感じた。さらに、現物を持参して講義するスタイルは理解を促すのによいやり方であると感じた。内容が盛り沢山であったため、細部まで理解することはできなかったが、概ねストーリーを追うことができ楽しい(魅力的な)授業であった。
- ・講義の最初に前回の質問、要望に丁寧に答えていた。話が後ろまでよく聞こえた。
- ・学生の予習や復習に役立つ詳細な講義資料が配付されていた。また、予習の範囲の説明や復習の課題等も与えられており、学生の自学習を促すような工夫がなされていた。大変、参考となった。
- ・森林科学コース関連教員によるオムニバス形式の授業であり、本日の担当者は、XXXX 先生であった。
- ・ビデオ映像を用いてビジュアルにわかりやすく授業を展開されていた。視聴覚用の教材は、初心者に対して、概要をつかませるには良いと思う。
- ・後ろの方に移動しながら話して、後ろの学生に圧力を加える努力をしており、感心した。
- ・掲示する PPT において、勉強していること(復習部分)の掲示して、いままでも勉強したこととの関連をわかりやすくしている。ここまで努力していることは賞賛すべきこと。
- ・また、専門用語を講義の初めにまとめて説明して、そこから個別の現象について説明しているのでわかりやすい。また、他の講義で勉強したことを問うことも関連がわかってよいことだと思った。

獣医学科

- ・獣医国家試験の科目なので、教科書の流れに沿って、比較的淡々と授業を進められていた。教科書内容の要約(キーワード)スライドにまとめられていた。また、食中毒細菌の近年の話題(事件)を取り交えて、学生が見たことがない細菌を身近に感じられるように工夫されていた。
- ・ハッキリした声と話の速度で講義が進められており、受講生にとっても聞き取りやすい講義ではないかと思えます。食中毒の原因となるバクテリアの話、もっとたくさん聞いてみたい気がしました。先週聞けば良かったです。
- ・講義で提供していただく重要な情報が多く、重要な授業内容だと感じました。またそれらに関連した地域に密着した話や逸話などを含めて、より内容に興味をもつ内容を講義していると感じました。

2. 受講している学生に対する感想

生物生産学科

- ・講義を真剣に拝聴していた。やや大人しい印象を受けたが、理解はしていたと思われる。ノートも取っており、授業終了後にも質問を行っていた、そして講義内容についてレポートを書くようになりました。
- ・エクセルを使って、演習課題を解くといった演習型の授業であったため、受講生全員が、パソコンに向かって、真剣に課題に取り組んでいた。また、用語解説など講義部分に関しては、パワーポイントではなくホワイトボードを使っての板書であったため、学生も手を動かして、しっかりノートをとっていた。授業の後半では、早く作業が終わった学生が他の学生を手伝うなど、共に学ぶ姿勢も見られ、非常に良かった。
- ・教室の後方から拝見している限りにおいては、学生の主体的に取り組む姿勢・学問に対する意欲があまり感じられなかった。教員の問いかけにはあまり答えず、居眠りをする学生も少な

らずおり、またメモをとりながら講義を聞いている学生も少なかった。その一方で、宿題の発表を聞いていると、ヨーロッパの事例と日本のことを対比させながら、しっかりと考えていることが分かった。また、他の学生の前でもきちんと発表できていた。講義時間中も、「日本ではどうだろう?」「どんな事例があるだろう?」などと頭の中で考え、メモをとりながら聞くと、眠気にも負けることなく、主体的に学ぶことができるのではないだろうか。

- ・私語も少なく、先生の話をよく聞いているように感じました。配られる麦類の一つひとつ興味深そうに観察していました。配布資料になかったスライドを携帯電話のカメラでパシャパシャとっていた学生さんが多く見受けられました。時代が変わったなあと感慨深かったです。101号教室がいっぱいになるほど学生さんがいたので出席率も高いのではないかと思います。
- ・「その他」の項に書いたことと関連しますが、最前列のスクリーンに向かって右端の机からは、スクリーンが斜めになり、そこに書かれている図表や文字が全くと言ってよい程見えません。この周囲の複数の学生の様子を観察していましたが、スクリーンを見るのを全くあきらめている様子で、下を向いているか別の方向を向いているかどちらかです。何らかの対策が早急に必要だと思います。
- ・学問的、技術的な知識だけでなく、農業現場での実態についてもよく知っておられ、興味深い話をされていた。実験でも関連した内容をされているようで、その内容も意識して話されていた。
- ・昆虫の話で、実際の現場や農家ででの状況を踏まえて解説していたのが印象的であった。
- ・話し方はゆっくりでわかりやすく説明されておられた。また、それぞれの内容について、板書で黒板一枚できれいにまとめておられ、見やすいと思えました。形態的特徴は、写真を用いて説明されて、理解を促進すると思いましたが、最後尾からはその写真が小さくて見えにくかったので、せっかくなのでスライドなどにされたほうがよいと思えました。板書がきれいなこともあると思うが、学生は板書をしっかりしていた。先生の指示にしたがってプリントにマークもしていた。全体的にしっかり聴講している印象を受けた。
- ・板書をきれいにノートにまとめている学生が多く見られた。
- ・教室の3分の2より前に座っている学生さん達は、非常に熱心で、カラーペンでマークしたり付箋を貼ったりしていました。どの授業でも同じですが、後ろの方に座っている学生は、教科書すら持って来ていない人もいました。
- ・遅刻者や私語も無く、真面目に講義に取り組んでました。
- ・寝る学生、しゃべる学生もほとんどおらず真剣に聞いている学生がほとんどと感じました。
- ・長時間集中させるのは難しいと思われるが、適度な速度の解説で内容も理解しやすく、メモを取る時間も十分であった為、ほぼ全ての学生が集中して聞いていた。
- ・全員真面目に受講していた。
- ・授業の後半では居眠りをする学生も見受けられたが、ほとんどが熱心にノートをとり受講していた。
- ・PPTで講義が行われていたが、スライドの配布資料がないので、学生らは熱心にノートを取っていた。
- ・講義を受けている学生の多くが前方の座席に座り熱心に受講していた。
- ・おおむね真剣に取り組んでいたようだ。特段の問題点はなかった。
- ・熱心に受講している学生もいるが、携帯電話を見たり、寝ている学生も見受けられた。
- ・21名受講。遅刻なし。欠席5-6名くらいか?居眠りは後半に1名でたのみ。
- ・前回の資料を持って来ており、当てられてわからない時はプリントを調べるなど、積極的な姿勢が見られました。

- ・皆熱心に聞いていました。
- ・受講者は、植物生産学コースの3年後期にあたる学生がほとんどであり、実験・実習などを経ていることもあって、理解度は高いようであった。後部座席に座っている受講生の一部に、ノートやメモをとらずに漫然と座っている者がいた。これは私の授業でも同様ではあるが・・・
- ・分散分析の例題では、多くの学生が、個々に計算しながら、解答を作成していた。例えば自コースの学生に答え(数値)を質問するなどして、学生の理解度を講義中に確認できればと思った。
- ・様々なモデル式等が使われていてわかりやすい授業だった。講義では学生と先生のコミュニケーションは双方向の授業を重視しており、おもしろい反応であった。
- ・真剣に受講していた。
- ・通常を受講態度だと思います。
- ・話し方も丁寧なので、学生も集中力を保って聞いていたと思う。
- ・1限目ということかもしれないが1割程度の学生が遅刻であったが、概ね真面目に受講していた。
- ・ほぼ、全員、熱心に聴講していたように見えた。
- ・多人数なので、遅れて来る学生も多数いた。
- ・1時限のため、遅刻者が見受けられた。ただし、雨のため交通が乱れているようなので、そのせいかもしれない。全体としては静粛にしていた。
- ・前方で受講していたため全体を見るができなかったが、授業に対する集中力を感じた。

生物資源化学科

- ・月曜日1限目なので、寝る学生が出るかと思ったが、ほとんどいなかった。ただ、担当教員の問いかけや質問などにほとんど反応していなかった。
- ・興味深そうに聞いている学生がほとんどでした。遅刻してくる学生さんもいますが、こればかりはしょうがないかと思えます。
- ・講義の途中で出席をとるという工夫もあると思うが、皆集中して聞いているが、遅刻してはいつてくる学生も多く見受けられて、学生の学ぶ心意気自体が問題だと思う。
- ・1枚のスライドに示す情報量を最小限にしたり、説明後にすぐ演習問題をやらせたりする等、学生たちに授業内容を理解させるための工夫が随所に見られた。
- ・遅刻者が数名いた。100名以上の受講者がいるにもかかわらず、寝ているものはほとんどおらず、配布資料にメモをとるなどして皆まじめに受講していた。
- ・少し私語がみられた、多くの受講生が配布資料にメモをとりながら真剣に聞いている。
- ・人数が多く、大教室が一杯になる状況でしたが、概ね真面目に受講していたように思います。
- ・講義中に私語はなく、遅刻者もほとんどおらずよかった。しかし、質問する学生さんがいない。
- ・前回の講義で学んだキーワードについては、復習を兼ねて簡潔に説明されていたため、学生も「ああ、そうだった」と思い出したような反応をしており、熱心にノートを取っていました。特に、PPTで写真を紹介した時などは、食い入るように見ており、学生たちの興味の深さが感じられました。
- ・二十数名の比較的少人数クラスで全体が良く見渡せる環境であった。教員の声も良く通り、ほとんどの学生が真面目に聞いていた。やや遅刻する学生が多いようであった。
- ・集中して授業に取り組む様子が見受けられた。
- ・雷雨の日の1限目であったが、遅刻者もほとんどなく、熱心に受講していた。

- ・熱心に受講している学生もいるが、携帯電話を見たり、寝ている学生が見受けられた。
- ・学生の人数がおおいためか、後ろの方で寝ている学生もいましたが、基本的にはほとんどの学生さんが真面目に講義を受けていました。
- ・教員の質問に対する反応は悪いが、温和しく聴講している。配布されたプリントに講義内容が網羅されているため、ほとんどノートを取っていないようだ。科学全般に対する基礎知識が十分に無いように見受けられた。
- ・午後一番の授業で眠気に襲われやすいにもかかわらず、皆熱心に受講していた。
- ・授業にしっかりと集中している印象があった。
- ・静寂な環境であった。遅刻者も少なく、この時点では未だ1年生が真面目であることが判った。
- ・教室の前で熱心に授業を聞いてノートをとっている学生と、後方に陣取った学生との意識の違いを感じた。
- ・概ね良好であった。
- ・プリントにマークしたり、メモをしたり、積極的に参加していました。
- ・「疲労」の講義で、同調したのか、少し寝ている学生もいましたが、総じて熱心に聴講していました。
- ・実際に我々が口にする発酵食品を例に挙げながら、理解し易い内容の授業構成に努めていたと感じた。

生物環境学科

- ・事例を示しながらの講義で非常に分かりやすく、学生への問いかけもところどころで行われ、さらには卒業後の進路と結びつけながら授業がすすめられたが、学生からの反応はあまりなく、終始スマホを触っている学生も少なからずおり、また途中で出入りする学生や居眠りする学生もいた。さらには、ノートをとっている学生も少なく、学ぶことへの意欲をあまり感じなかった。
- ・約1/4が居眠りしていた。教員からの質問に対する回答の声が小さい。
- ・一応まじめに聞いているようでした。しかし、反応は良いとはいえないと感じました。とくに、授業の後半はそれが顕著でした。
- ・自身の講義でもそうであるが、積極的に受講しようとする態度に欠けるように感じる。講義内容への好き嫌いを含め、もう少し気持ちを出して欲しいものである。
- ・遅刻も無く、まじめに受講していた。座っている位置が教室の後方に偏っていること、教員の問いかけに対する反応がいまいちであったことからもう少し積極性を持って講義に望んでほしいと思った。
- ・実習でかつ、いままでやったことを復習する機会であったので、..学生が主体的に動いていた。学生がどこまで樹木の形態の特徴を知っているのか、疑問であった。
- ・比較的、教室の前方に着席する学生が多く、学習意欲や熱意が感じられました。
- ・体系立った主要な講義内容の中に、主に経験に基づく話題がちらりばめられ、快活に話をされるため面白く授業を受けることができた。大変感謝しています。
- ・また、前回ミニツペーパーの質問に対する回答もプリントで配布され、大変マメだと思いました。学生からすれば文句のつけようがないでしょう。
- ・一つの話の区切りで、きちんと学生に質問がないかを確認している点に配慮が感じられた。私がつい忘れてしまう点である。"
- ・20名弱の受講生であったが、居眠りしている学生は皆無であった。自発的な発言は疎らであったが、ほとんど全員が内容を理解していたと思われる。

- ・統計学の基礎の部分では統計パッケージの R を使用されているようでしたが、実際に学生にもコマンドを記述させているかが気になりました。
- ・概ねまじめに講義を聞いているようであるが、詳しい資料が配布されているためか、あまりノートを取っていないような印象を受けた。
- ・全体的に温和しいなという印象を受けた。
- ・静かに受講していた。
- ・指名しないと質問に答えない。
- ・私語も無く、熱心に聞いている学生が多い。
- ・関心を持って聞いている。
- ・寝ている学生が多い。1年生は熱心な学生が多い傾向にあるが、学年があがるに連れて熱心さは失われている模様である。
- ・全般的に温和しいなと感じた。質問も直接ではなく紙面を使わないとできないというのは少々問題かもしれない。
- ・あまりメモを取っていない。
- ・概ね熱心にノートを取りながら受講していた。
- ・1年生が対象であるため、熱心に聞いている。ただ、前から 5 列目までは誰も座らない。教室の後ろの遠くから、スクリーンが見えるのか心配である。
- ・最初の間は、若干私語があったが、静かになった。学生の中には、集中できないものもいるが、絶えず学生のところ(後ろまで)先生がまわっているの、後ろにいる学生も緊張感をもって講義を聞いている。
- ・途中で退出する学生が見られるが、どのように対応すればよいか。大学の入学時にきちんとルールを学生に伝える必要を感じる。

獣医学科

- ・約 80 名出席。まめにノートを取る学生が大変に多かった。1 割程度、下を向いてスマートフォンをいじる学生が認められた。
- ・真面目に聞いている学生もいれば俯せになっている学生もあり、この点は私の講義の時とあまり変わりません。
- ・家畜生産コースの学生には非常に重要な講義だと思いますので、しっかりと身につけてほしいと思いますが、一部の学生は受講態度はよくないと思います。

3. 自分の授業に活かしたい点

生物生産学科

- ・プリントとパワーポイントを使って行う授業は効果的と思われた。学生に語りかけるような講義方法は取り入れたい。
- ・演習問題を解かせることで、学生に主体的に取り組ませること、パワーポイントに頼り過ぎず、板書を心がけることなど、自分の授業でも活かしていくようにしたい。
- ・宿題として、読書または DVD の視聴をさせ、その感想を全員の前で発表させるというのは、面白い取組だと思った。また、きちんと機会を与えると学生も自分の考えをしっかりと話すことが分かった。自分の講義の際には、学生の発言を促す方法を考え、講義のところどころに取り込んでいく工夫をしていきたい。
- ・授業に関わるモノを配布する点やユニークなレポート課題については、自分の授業に活かしたいなと思います。また先生のフランクな話し方やフレンドリーな雰囲気は真似できるかどうか分かりませんが、そうなりたいなと思いました。
- ・(1)授業に関連するサンプルを、学生全員に行き渡るように十分な量を準備されていること、
- ・(2)時々、学生に「問いかけ」を行いながら話を進めていくところ、

- (3)学生の席により近づいて話をするところ、
- (4)時々「メモをとるように」と催促するところ、などを参考にさせていただきたいと思います。"
- ・茶業試験場の見学などもされるようで、実践的な授業だと感じた。2 時限目の授業だったが、遅刻してくる学生が結構いた。試験前ということで、緊張感があった。
- ・中間テストの実施もあり、緊張感を持って授業に臨んでいたと感じた。
- ・それぞれの内容について、板書で黒板一枚できれいにまとめておられ、かなり見やすいと思ったので、なかなか難しいが、真似してみたいと思いました。
- ・学生自身にノートを作成させることで、復習の意欲が高まるのではないかと感じたので、活かしたいと思う。
- ・最初に、前回の講義に対する質問を丁寧にされていました。私も、同じように質問には回答するようにしていますが、その日の講義範囲を終わらせることを優先し、なかなか時間をかけることができていません。しかし、わからないまま次へ進んでも、結局は理解が進まないの、やはり、時間をかけて説明するようにしたいと思いました。
- ・丁寧な板書が印象に残った。私の板書はなぐり書きのようになってしまうので、ノートをとる学生のことを考えた板書を心掛けたい。
- ・質問を個別にあてるというのは学生さんも緊張感が持てていいと思いました。試してみたいと思います。
- ・XX 先生の講義の進め方を参考に、学生の集中を途切れさせないような講義を行いたい。
- ・自分の授業では英語論文のプレゼンだけをやっているのもっとしっかり一文一文の訳し方を指導したい。
- ・授業内容の大きな流れを大切に、受講生の理解を深めるための努力がなされている点。板書の文字が十分大きく、ノートを取りやすいと感じた。
- ・自身は PPT を中心に講義を行っており、スライド資料も配布している。このような講義形態の場合、熱心な学生は配布資料を見ながら話も聞いており一定の効果があるように思える。しかし、熱心でない学生は配布資料があるという安心感から、講義内容に集中していないし、成績も振るわないという問題に以前から気が付いていた。あえて、スライドの配布資料をなくし、ノートを取らせる方法も重要であると感じた。
- ・講義で使用する PPT で専門用語の日本語のすぐ後に英語表記を色付で示していたので、活用したいと思った。
- ・学生の期待に応える授業はむづかしいものだと感じた。彼らの疑問に答えることは必要なのだろう。
- ・学生の質問に対する回答から、発展的内容に結びつける講義方法
- ・板書からノートを作成する訓練。・まめに学生に質問をして、授業テンポをつくって、退屈させない工夫。・スライドを厳選して、ppt から資料を作り、資料の文字が大きく、書き込みがしやすいようにする配慮。
- ・パワーポイントだけではなく、ホワイトボードも使って前回の授業の復習をされていたので、うまく活用したいと思いました。
- ・スライドの図表を大きく描いてあり、分かり安く編集されていた点を活かしたいと思います。
- ・受講生に積極的に話しかける(受講者を指名して質問する)。これは受講生に適度な緊張感を与える。
- ・受講者が少ない特論(修士課程の授業)では自分もやっているが、受講生の多い学部授業ではまだ試みたことがないので、次回は試してみようと思う。"
- ・練習問題を解答させて理解させる方法
- ・講義資料が充実している。
- ・授業の雰囲気が良かった。

- ・重要事項に関しては適切にプリントが配布されており、プリント作成の必要性を感じた。
- ・授業の終りに質問を受け付け、次週にスライドにして丁寧に回答している点が良い。取り入れようと思いつつも、なかなかできないでいます。
- ・板書が大項目と詳細に左右に分けてあり理解しやすかった。板書を大きな文字で書くところ。
- ・学生の質問や指摘に回答する時間を多く取っていたので、学生にとってインタラクティブな講義であるとの印象があると思う。
- ・丁寧な資料の作成等は参考にしたい。
- ・パワーポイントを用いず、配布された資料と板書、それに対する解説という形式の授業で、自分にはないスタイルが非常に斬新だった。板書されたものを自分のノートに書き写す作業が、授業に対する集中力や理解において大きな利点があることを痛感した。

生物資源化学科

- ・授業の内容のキーワードをPPのスライド1枚に1つだけ入れるという手法は、インパクトがあり、自分の授業にも取り入れたい。
- ・最後のレポートを私も取り入れたいところですが、読むのがしんどいと思い、躊躇してしまいます。
- ・講義プリントの工夫については積極的に取り入れたいが、大講義室でやっているプレゼンだけでなくホワイトボードや黒板を使いたくてもスクリーンが邪魔で実施が難しいので、ホワイトボードや黒板とスクリーンを同時に使えるような講義室改善が必要であると思います。
- ・概ねまじめに取り組んでいるようであるが、ノートがあまり取れていない学生も何人居るようである
- ・自分の授業に講義内容に関わる最近のトピックや実社会で生じる問題・現象などを補足的に説明されており、私もそういった話を講義の説明の中に取り入れたいと思った。
- ・土壌の分子構造をモデルで示し、鉱物の化粧品などへの利用など興味を引く内容で講話されている点
- ・上記のような方法論以外にも、近い内容を含む講義を持っておりますので、具体的に講義で教える項目についても参考になりました（今回は土壌有機物についての講義でしたが、自分の講義でも微生物による分解と物質循環について解説する所がありますので）。
- ・板書を使用した丁寧な解説を行うこと。講義の最後に小テストを行うこと。
- ・講義の残り15分程度で、小テスト(講義内容の確認)を行いました。自分の授業では(出欠も兼ねて)「質問または感想」を書かせて回収していますが、講義内容の理解度を見るには、やはり小テストを実施した方が良さだろうと、思いました。
- ・講義の最後に、当日の要点をまとめさせる課題を与えており、復習を誘引するきっかけになると思われ、このような点は自分の授業にも活かしたいと思った。
- ・身近な出来事と関連付けて、授業内容を理解してもらおう工夫したいと思った。授業にタブレット端末を使用しており、非常にスムーズな進行であった。是非使用してみたいと思った。
- ・試験を中間と期末の2回実施し、学生の試験への負担を分散されており、自分の授業でも、1回のみ試験などではなく、レポートなども2回以上、提出回数を増やすことを検討したい。
- ・移動式ホワイトボードの有効活用
- ・配布物の情報が豊富で、学生さんが復習がしやすいと思いましたので、取り入れたいと思いました。
- ・単にテキストの解説にとどまらず、科学は立証や検証が不可欠であるといった哲学まで立ち入った話の進め方。
- ・復習させる意味でも“宿題”を出すのはいいアイデアだと思

った。

- ・パワーポイントの資料が明瞭でわかりやすかった。生化学は難しい印象が自分にはあったが、考える上での重要なポイントをしっかりと丁寧に説明されており、個人的には次回も講義を受けたいと思える授業だった。
- ・試験の解説が時間をかけて丁寧になされており、自分の講義でも導入したい。
- ・小テスト・中間テストの解答を、復習も兼ねながら十分に解説するようにしたい。
- ・実験の結果を見て考察する方法なども話しており、例示があることが学生の理解につながると感じた。是非真似したい。
- ・具体的な例示を示しながら講義されていたので、学生にわかりやすい講義を心がけたいと思います。
- ・丁寧に説明することを学びました。
- ・70～80名程度の授業であり、前部席は空席で後部に行くに従い居眠りをしている学生も多かった。質問する場面も無く、淡々と受講している印象を受けた。

生物環境学科

- ・前回までの講義との関連づけ、事例を取り入れながらの解説、学生への問いかけ、卒業後の進路を意識しながらの説明など、自分の授業のなかでも実践していくよう心掛けたい。また、板書のかわりに、Wordの画面をスクリーンに映しながら、Wordへの書き込みが行われていた。乱筆を気にせず書くことができ、さらに書いたことが記録に残るので、この方法も試してみたいと思う。
- ・話すスピード
- ・PPの図表はきれいに作成されていました。私は手書きのものを多く入れたりしています。きれいな方が見やすいかもしれません。
- ・自身の講義を顧みるに、知識の伝達に力点を置くあまり、時間にとらわれている感があり、受講者とのコミュニケーションが不十分であると感じた。今後は、全てを伝えようとするのではなく、核となる部分に絞り込んで講義を進める事で、受講者の興味をより高めること、さらにはコミュニケーションを深めることができるようにしたいと考えているところである。
- ・資料の使い方。
- ・スライドの中で、穴埋め式にキーワードや式などを表示し、学生に考えさせる工夫がなされており、私も講義で使用するスライドで活用したいと思った。また、実社会での事例や歴史的背景などの説明も講義の要所で取り入れたいと思った。
- ・実物を見て判断させるのは、主体的に勉強するのでよいと思った。
- ・パワーポイントのスライドを白板に投射し、その上に記入していくやりかたは参考になりました。そのためには授業内容の精査と構成をよく練り上げる必要があるようです。いつも90分、フルに話してしまうことが多く、今回のように60分でメイン部分を切り上げ、残りをレポート作成や質問に当てるのは、時間配分として合理的と思いました。
- ・ミニッツペーパー提出を出席の確認としているためか、授業開始時の出席数がやや少なめで、ちらほら後から入室する遅刻者が認められた。
- ・教室の後ろに学生が固まって座り、教室の前半分に学生がいない状態であったことは、残念でもったいないとまで思った。また、おとなしく、教員が内容に対する質問を求めても、誰も口を開かないことにももったいなさを感じた。
- ・半数以上の学生はしっかり前を向いてノートをとったり、プリントにメモをしたりしていたが、下を向いている学生、明らかに眠っている学生もいて、少し残念でした。メモを取るために手を動かせば眠気は緩和されるのに…。
- ・事前準備は勿論のこと、インタラクティブな授業を実施するこ

とで受講生全員が理解できるように努めたい。また、内容を詰め込み過ぎず、さらには毎回の復習レポートおよび感想を提出させており、これを踏まえて重要ポイントを理解させる授業形態が肝要であると感じたので、これを自身の授業に活かせればと思う。

- ・20名弱の受講生でしたが、全体として後ろに着席しており、授業への参加意欲が低く感じた。
- ・映しているスライド内に直接説明を書き込む方法は良いと思った。これまでスライドを映している時には横の白板に説明を書いていたが、講義室の前方を暗くしているので見にくかった。スライド内に書き込めば明るくて見やすい。
- ・ノートにブランクを作り、学生に書かせるなどの工夫は自分の講義にも取り入れたい。
- ・スクリーンの映像とホワイトボードを併用し、適宜使い分ける点が参考になった。また、文章のように文字の多いコンテンツでも映像として示すことが効果的であることは意外であった。適宜練習問題を組み入れており、直前の説明内容の理解度を受講生自身が確認できるように工夫されている点も参考にしたい。
- ・出欠表に、設問に対する答えやオリジナルの考え、講義への質問などを書かせる点
- ・インターネット環境を利用した説明と学生1人ひとりに質問しながら講義を進めている点
- ・新しい内容を取り入れる工夫
- ・随所に注意を引きつけるコラムなどを加えて、学生の集中力を持続させるように工夫を加えて行きたい。
- ・教員に対する感想欄にも記述したが、現物を使った授業は是非真似てみたい。
- ・質問、要望に丁寧に答えていたこと
- ・各章の目標を明確に示して講義が進められていた。これは学生の受講の動機付けや予習の目標として効果的と思われる。自分の講義にも取り入れたい点である。
- ・ビデオなどビジュアルな教材を豊富に準備されており、このようなビデオ教材を自身の授業に生かせると良いと思う。
- ・後ろの方について、後ろから話をしており、学生の様子をみながら話をしているのを参考にしたい。
- ・用語をまとめて説明することは、学生に理解につながると考えるので、授業の中でまとめて行うことを考えたい。

獣医学科

- ・近年の話題(事例)を良く調べて、説明に織り交ぜることで、この科目の学習内容を覚える重要性を示すこと。また、こういった話題が学生にとっては記憶の為の助けになるでしょう。
- ・中馬先生の講義を聴いて、自分の講義中の話し方は早すぎるかもしれないと感じました。参考にします。
- ・各項目に触れる際の導入部分に関する一般的な話題から専門的な話に向かう流れはぜひ活用させていただけたらと思います。

4. その他

生物生産学科

- ・他の先生の「演習」の授業を拝見する機会はなかなかないので、非常に良い勉強になりました。ありがとうございました。
- ・授業参観の機会を与えていただき、ありがとうございました。とても良い勉強になりました。
- ・101教室は横幅が広いので、最前列の右端の机からは、スクリーンに書かれている内容が全く読めません。対策を望みます。考えられる対策として、(1)机をあと2m程度は全体として後ろに移動しておく。(2)スクリーンからホワイトボードの壁面まで1m程度の余裕がありますので、スクリーンを壁面まで奥に移動する。(3)スクリーンと液晶プロジェクタとを2組設置し、左と

右のスクリーンに映写する、などが考えられます。学生の立場に立つと、スクリーンが見れるように工夫するのが当然だろうと思います。昔と違い、5,000ルーメンの明るさの液晶プロジェクタ価格は30万円台と廉価になっています。スクリーンはなくても電動である必要性は感じません。工事費が最も高価なのかもしれませんが、学生への教育効果から判断するとそう高くは無いと思います。共通教育棟では縦長の教室などで天井からモニター計4台を釣るして学生が見やすいように配慮されています。この状況は、実際に授業参観に出はじめて気付く状況だと思います。早急な対策を望みます。

- ・授業の終わりに質問を書かせて、次の授業のときにそれに対する回答の資料を作り配布していた。手間のかかることだが、効果が大きいと思った。
- ・前回の授業で学生から出された質問に対する回答書を配布していた点
- ・低温貯蔵による低温障害など、実生活でも役に立つ内容が盛りだくさんで、非常に楽しく講義を受けました。勉強になりました。
- ・授業に使用する教科書をお貸しいただき、ありがとうございました。
- ・数十年前のかなり古いデータでも授業に使える点が驚きだった。
- ・担当教員の実体験に基いた海外活動の魅力を伝える内容の授業にもなっている。これが当研究分野への学生の誘因につながっているのかもしれない。今後、国際食料資源学特別コースの学生が受講し出すとさらに活発な双方向授業が展開されるものと期待できる。
- ・学生の理解度の向上のために、専門分野での例題をさらに増やし、講義資料を充実させていきたい。
- ・マイクは使わないのですね。広い教室なので使った方がよいのでは。
- ・テロメアの話は、クローン劣化は「ルパンのママーの話がネタにできるかと。学生は知らないかな
- ・どうも有難うございました。
- ・社会系科目であったが、練習問題を中心に、自学的要素が盛り込まれていたところは、注目された。
- ・経済学という身近な学問なので、実生活や体験に基づいた話ができるので、学生も興味深く受講できたと思った。
- ・どうもありがとうございました。とてもわかりやすく勉強になりました。「比較優位」については昔勉強したことを思い出しました。懐かしかったです。

生物資源化学科

- ・授業の合間にトピック的に最新の情報を入れており、興味がわいた。
- ・小テストの後、回収する前に自己採点させる方法は、自分の間違いに気付く理解を深めるのに効果的な方法だと思った。
- ・受講生が非常に多いため、出欠管理が非常に大変だと思った。学生カードを読むPDAリーダーなどの購入と配備の検討が必要ではないか。
- ・101講義室だったのですが、スクリーンが机に近く、前列の端の方の学生は余り見えていないのではないかと思われました。施設の方で少し改善を図る必要があるかもしれません。
- ・大変勉強になりました。
- ・授業の内容は、家畜生産の学生にとって非常に大切な内容である。にもかかわらず、資源の学生のほうが熱心に聞いているように感じた・・・
- ・中間テストの回答・解説からの授業開始であったが、自身の授業でも様々なタイミングで小テストを実施し、学生の理解を進める授業を展開できればと思う。また、大きな教室であったとしても、質問等によりインタラクティブな授業形態を展開できれば、居眠りする学生も少なくなると感じたことから、パワー

ポイントのスライドだけでなく、板書も含めた工夫が必要であると考えさせられた。

生物環境学科

- ・明らかに眠くなるだろうといった授業とは異なり、本授業は教員の話し方も快活で内容も分かりやすいものであった。それにもかかわらず、学生の主体性がみられなかった。「授業が面白ければ、学生は話をきくだろう。」という単純な考えでは、太刀打ちできないように思えた。大学生にとって、学ぶこととは何なのか、何がモチベーションになるのか、もっと根源的なところを考えていく必要があるように思えた。
- ・授業の初めに出席をとるのに 5 分、最後 10 分を残して終了されました。15 分の無駄です。出席に関しては、出席表を配布するとか工夫できると思いますがいかがでしょうか？
- ・P P の画面が小さく、特にその中の表が見にくいのではないかと感じました。また、P P の中に授業で説明されなかった図や表が載っていました。必要なものだけに絞るか、全てについて説明するか再考された方が良いでしょう。私の経験では、実際のデータを元作成した図表を用いて学生に説明した方が、理解度が高くなるようです。
- ・話すときに、コンピューターの画面を見て話すことが多かったようです。学生の方をみて話すようにする方が、学生は寝ないですよ。スクリーンやコンピューターの画面を見て話しても、最後は学生の目を見るというのも有効です。教卓の前でしゃべるのではなく、もっと動き回って話すようにすることも選択肢の一つかもしれません。
- ・P P での間違い？:何枚目かは忘れましたが、「生育場所の提供」とすべきところが「成育場所の提供」となっていました。ご検討ください。
- ・この実習の最後には、覚えている樹種が少なくとも、図鑑を利

用すれば、おおよその樹木の名前や仲間の樹木にはたどり着けるようになってほしい。

- ・授業中、直接目のあった学生を名前を言って差して、回答を求めるところ。・ミニツペーパーの質問に対する回答を、プリント配布して授業時間を削らないようにする工夫。・一つの話の区切りで、受講生に質問がないかを確認している点。
- ・自分も授業の中で統計に関わる部分があるので、R を利用した講義を実践してみたい。
- ・質問票の作成の仕方が興味深かった。
- ・(1)広い教室のわりに、プロジェクターの明るさが暗いのが気になる。(2)教室を暗幕などで暗くできれば光量不足でもスクリーンは見えると思うが、残念ながら暗幕は無い。
- ・黒いブラインドが備え付けられておればよいが、これも無い。昼からの授業では、南窓には直射日光がさし、教室の西側に座ってスクリーンを見ると、窓からの日射の影響のためとても見にくい。
- ・現状の明るい色のブラインドでは、直射日光の影響を防ぐことができない。黒色のブラインドに交換するか、あるいは、暗幕を付けるかの対策が必要だと感じる。 "
- ・鹿児島の特徴として火山の部分の説明が多いが、最初に一般的な雨浸について説明してから、鹿児島の特徴として火山部分を説明した方がよいのではないかと。火山地域以外の一般のことについての印象があまり残らなくなってしまうのではないかと心配する。

獣医学科

- ・スライド中の「アクアスポーツ」の「ポ」の字が、私には変な字にみえました。気のせいかな？

1-2) 平成 26 年度後期および平成 27 年度前期 農学部授業評価アンケートの結果とりまとめ

本授業評価アンケートの結果は、農学部水産学部共通の Agri-Fish-Web(<http://staff.agri-fish-web.jp/base/login/login.php>)上でも閲覧できるが、この Agri-Fish-Web システム上で閲覧できる結果は、授業形態別（講義か演習かの比較）および(実験か実習かの比較)、授業規模別（5 人以下、6-10 人、11-30 人、31-50 人、51-100 人の比較）にとりまとめている。このデータは 2008 年から 2015 年前期までが同システム上に蓄積されている。

しかし、本稿では授業形態や授業規模ではなく、学科の違いに着目してこのアンケートを比較して、学科ごとの授業、実習などの特徴と受講学生の感想の特徴を浮き彫りにすることを目指した。ただし、平成 26 年度後期および平成 27 年度前期の講義・演習に関するアンケート結果は、昨年度報告書における平成 26 年度前期のアンケート結果と傾向がほぼ同じなので省略する。

本報告書では、実験・実習に関するアンケートの学科別の結果において平成 26 年度後期と平成 27 年度前期の間に部分的なちがいがみとめられたので以下に示す。ただし、27 年度前期は実験・実習用に講義・演習用と同じアンケートシートを使用したため、わずかに項目が異なっていることは注意されたい。

結 果

平成 26 年度後期実験・実習について(図 1-2)

101-104 は受講生自身の出席状況や自習状況を問う設問である。図 1 の 101 は実験・実習の出席状況を示しており、生物資源化学科で「すべて出席」が 90%以上ととびぬけて高い。実験・実習にに関連のある参考書、論文、雑誌等を読みましたかという問い(102)に対しては、「はい」と答えた割合が獣医学科で約 60%と高く、続いて生物環境学科が 40%、生物資源化学科、生物生産学科は約 20%と低かった。一方、予習復習にかけた時間については 1 コマあたり 60 分以上が生物環境学科のみで 50%を超えた。104 の「この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか」という問いに対して、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の合計が生物生産・生物資源・生物環境学科で差がなく 70%以上であった。これらから、生物環境学科では受講生のこれまでの基礎学力よりも高めの新たな課題を実験・実習の予習・復習で課していたのではないかと推測される。

実験実習内容に関する質問(201-206)のうち、「202 この実験・実習のレベルはどうでしたか」および「203 この実験・実習の分量はどうでしたか」の設問ではいずれの学科も「妥当だった」が 80%を超えた。「201 この授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか。」「204 この授業は、知力や学力の向上に役立ちましたか。」という問いに対しては、生物生産学科と獣医学科で「そう思う」が 60%を超えて高かった。「205 この実験・実習の学習目標は達成できたか」「206 この実験は総合的に見て満足できるものでしたか。」という問いに対しても、生物生産学科と獣医学科で「そう思う」の回答が 60%を超えて高かった。

教員の姿勢や実験・実習の進行法等に関する質問(301-305)では、講義・演習の場合と同じで、いずれの問いでも約 90%が「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」と答えており、教員の説明や態度に満足していることが垣間見える。とくに、生物生産学科と獣医学科ではいずれの質問についても「そう思う」と答える受講生が約 60%かそれ以上と高めであった。

平成 27 年度前期実験・実習について(図 3-4)

平成 26 年度後期に比べて、アンケート結果が良くなっている場合には「*」、悪くなっている場合には「△

」を各帯グラフのすぐ上に配した。101の出席状況(図3)では、生物生産学科ですべて出席が80%を切り、大きく悪化した。一方で生物環境学科では、ほぼ90%と良くなっている。102の関連書籍を読んだかという問いについては生物資源化学科で40%を超え、26年度後期の2倍になった。103の1コマ当たりの予習・復習時間が60分を超えた割合が、生物環境学科で下がったが、それでもほかの学科よりは多いままであった。201のこの実験実習から関心が生まれて、関連分野の勉強をしたくなったかという問いに対しては、「そう思う」の回答が、生物生産学科で下がり、生物環境学科でよくなった。図4の303教員の話が分かりやすかったかという問いについては、生物生産学科で10%下がったが、生物資源化学科と生物環境学科では20%良くなった。304の教員の熱意に関する質問でも「そう思う」という回答が、生物環境学科で20%程度多かった。

このように、26年度後期と27年度前期の実験・実習に対するアンケート結果に、明瞭な違いが認められた要因が、その学科教員の自助努力や怠惰によるものか、実験実習科目の違いによるものなのか、サンプリングの誤差なのかは、今年度の調査だけでは判断ができない。これらの項目については次年度以降も注視しておく必要がある。

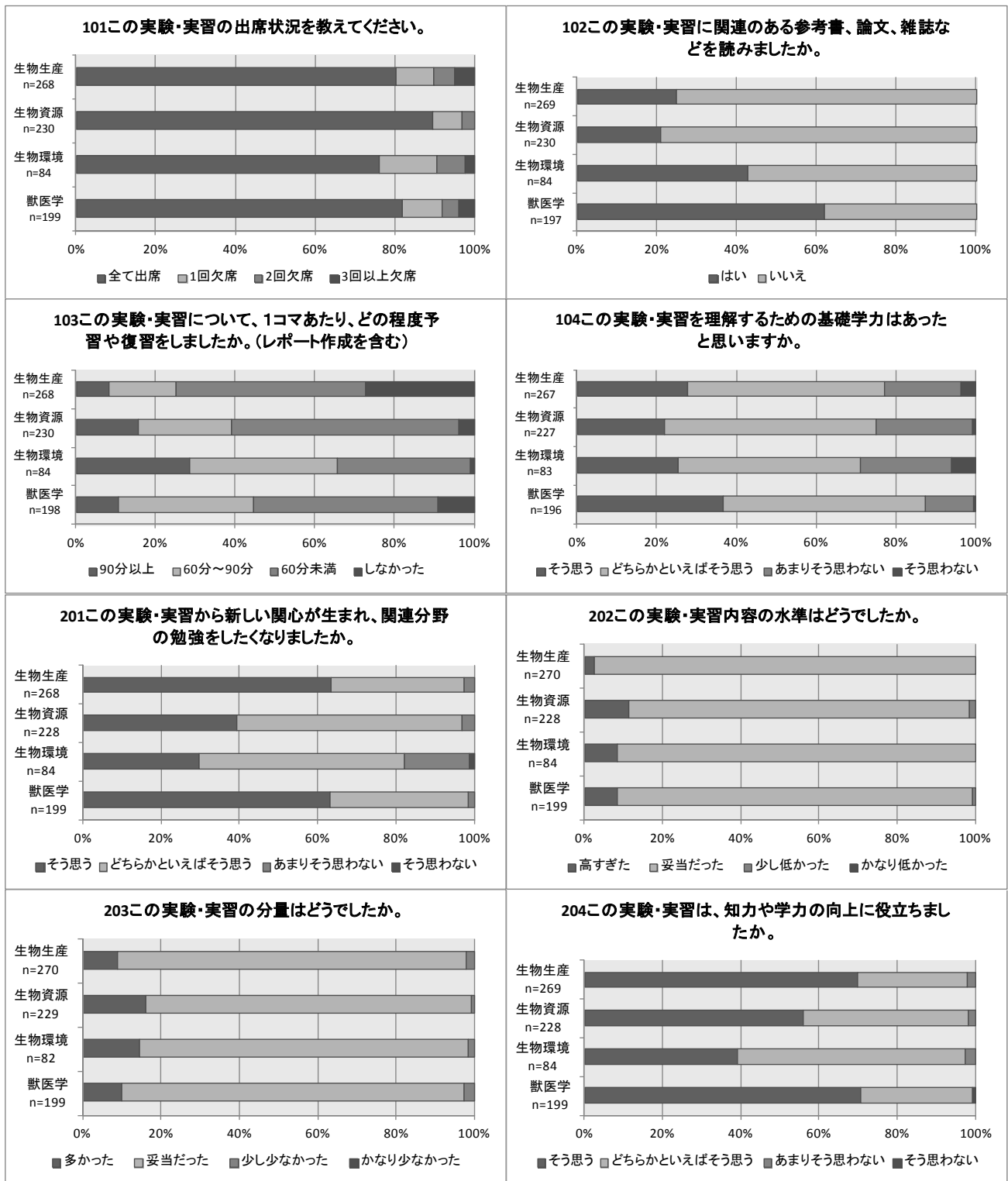


図 1. 平成 26 年度前期 授業評価アンケート (実験・実習) の学科間比較[質問 101-204]

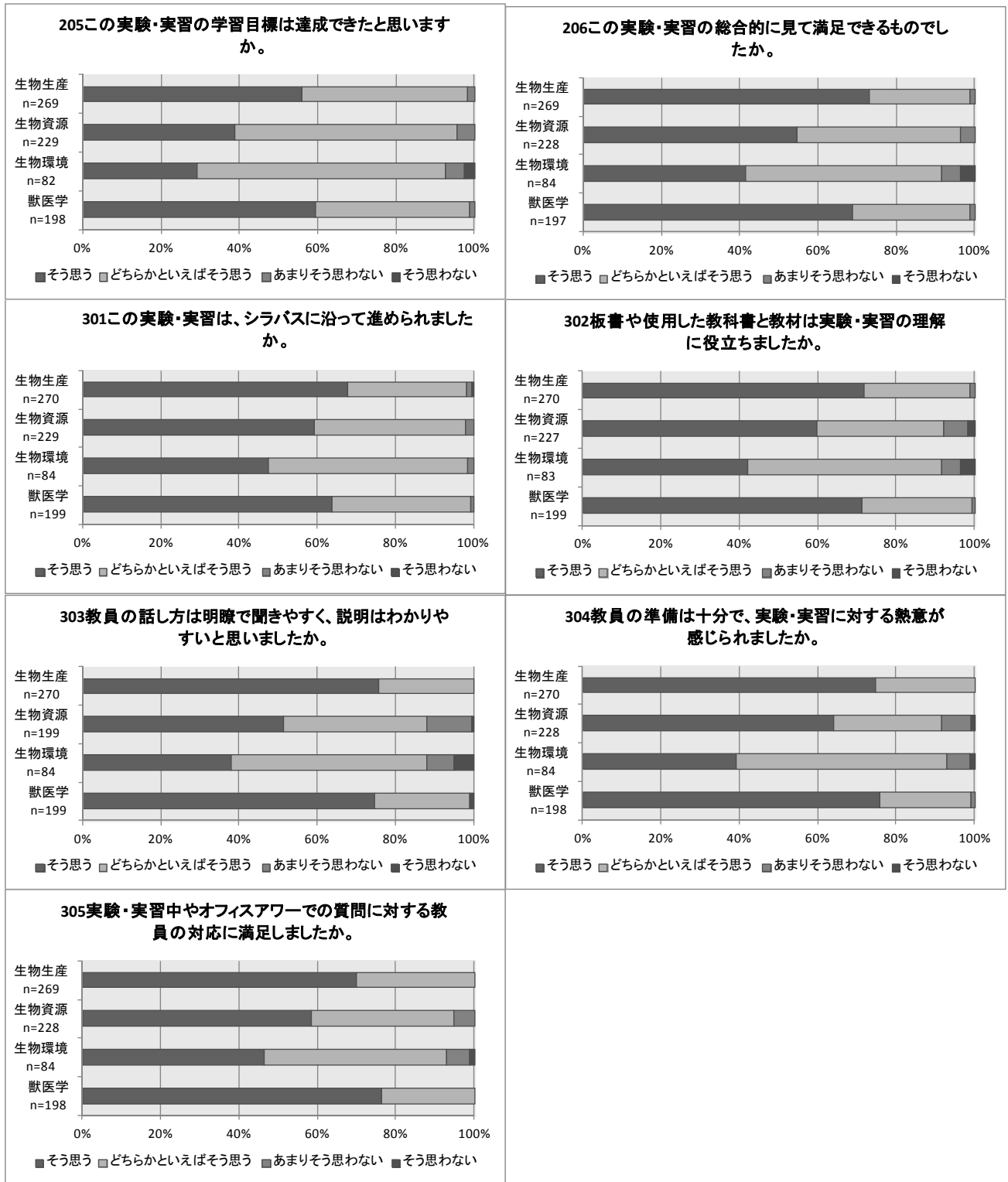


図 2. 平成 26 年度前期 授業評価アンケート（実験・実習）の学科間比較[質問 205-305]

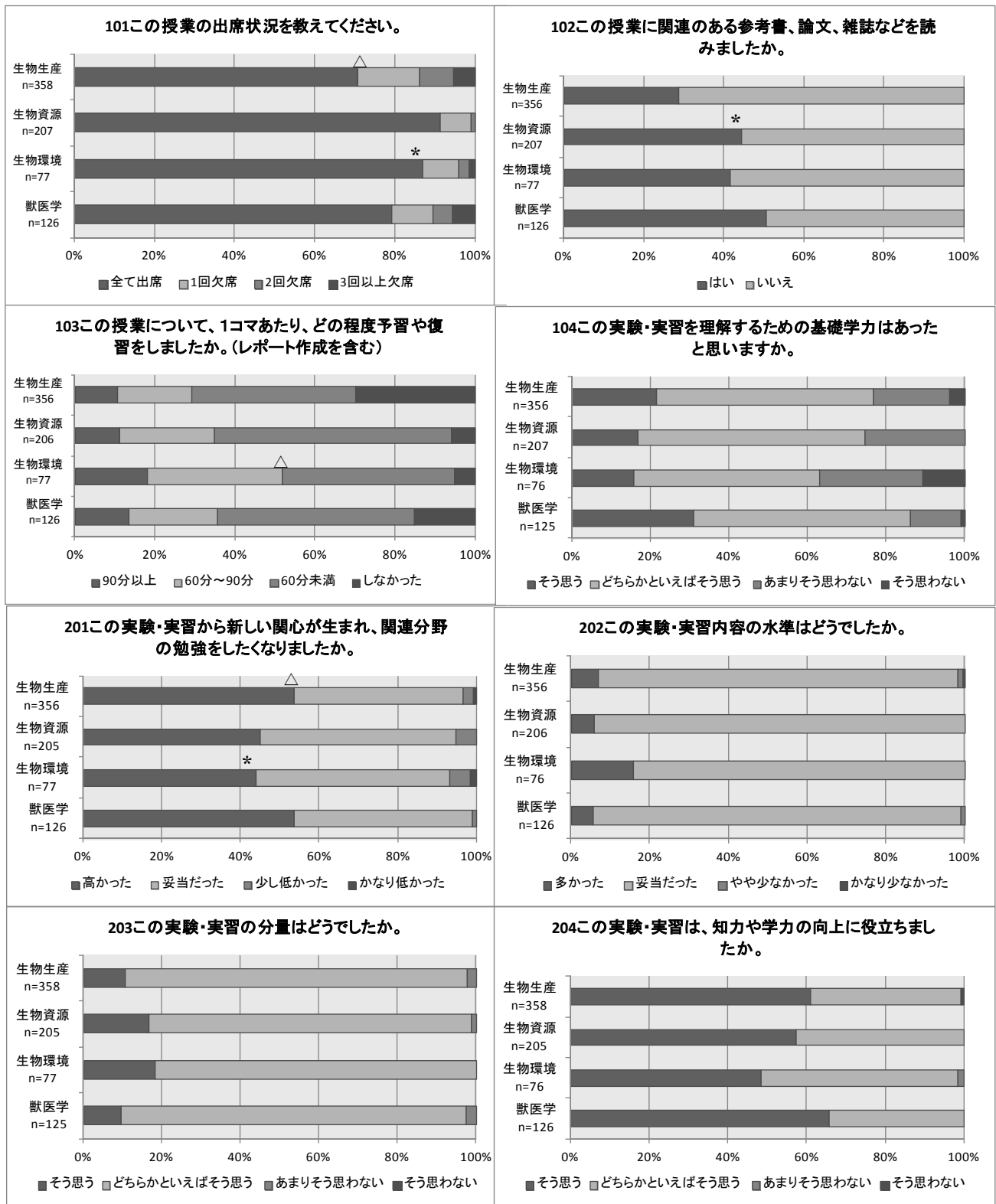


図 3. 平成 27 年度前期 授業評価アンケート (実験・実習) の学科間比較[質問 101-205]

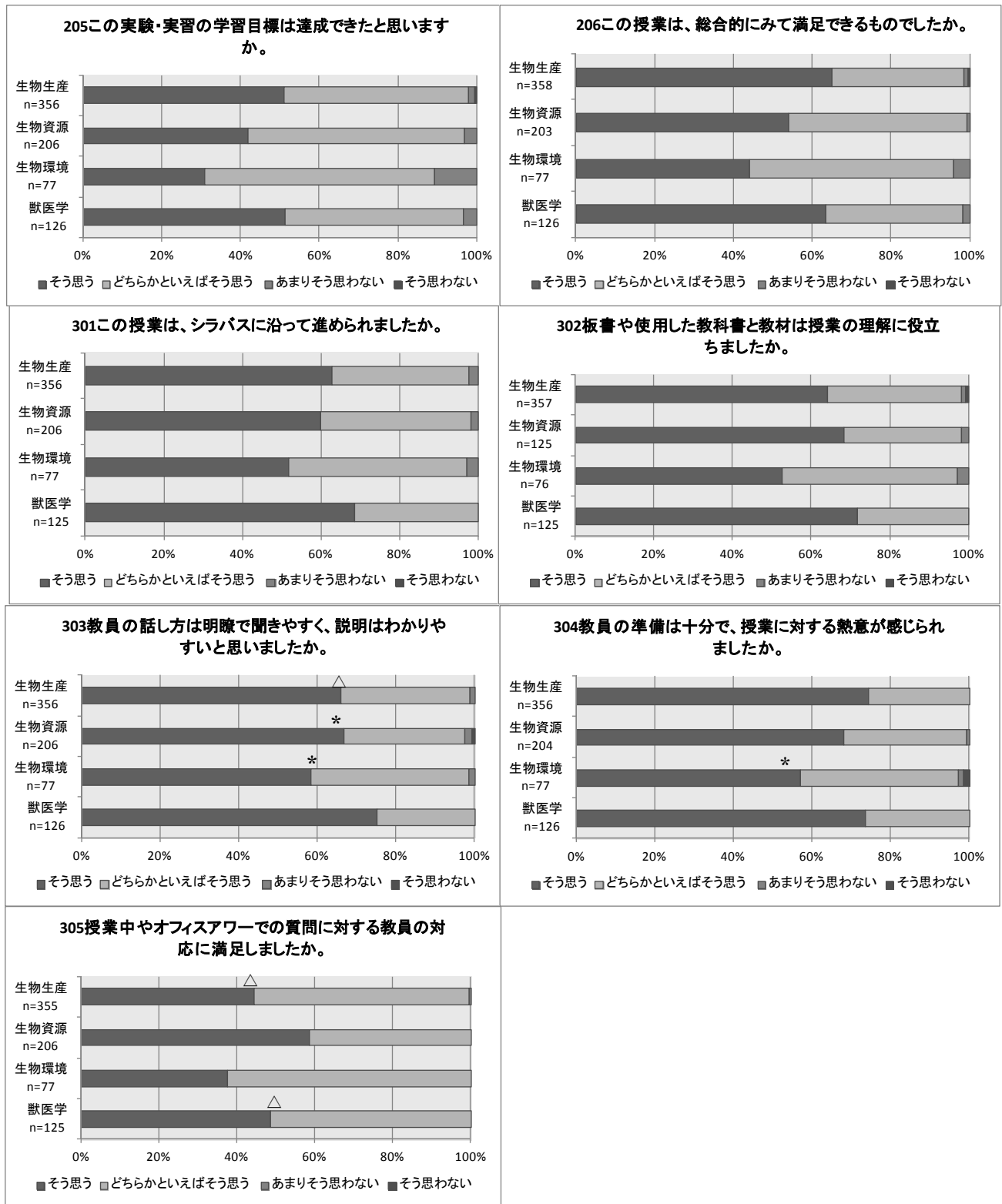


図 4. 平成 27 年度前期 授業評価アンケート（実験・実習）の学科間比較[質問 206-305]

第2節 全学 FD 活動への参加

今年度も全学 FD 委員会開催のさつつんカフェや学生・教職員ワークショップに教員が参加した。以下に平成 27 年 12 月 11 日開催の生・教職員ワークショップ「授業アンケートの結果をどう授業に活かすか」に参加した教員の感想を掲載する。

学生・教職員ワークショップ「授業アンケートの結果をどう授業に活かすか」に参加して

農学部附属焼酎・発酵学教育研究センター 高峯和則

学生 3 人、教員 3 人がアンケートの必要性や意義、問題点などについて、学生と教員それぞれの立場からグループディスカッションを行った。アンケートに対する問題点として学生からの意見として①質問数が多い、②塗りつぶし形式で面倒、③アンケートを通じて改善が見られた成果が伝わらないことでアンケートの必要性がわからないため、いい加減な回答になる、等が上がった。また、教員からは、①単純集計の結果がそのまま信頼できるのか、②おもしろい授業は評価が高く難しい授業は評価が低い結果で良いのか、③アンケート結果の信頼性、等があがった。これらの意見を踏まえて、アンケート結果を授業に活かすためには、アンケートの実施を早い段階で行い、アンケートに対するフィードバックを速やかに行う。そのことが、アンケートの結果で改善が認められることを学生が実感し、記述式のアンケートへの取り組みを真剣に行うようになり、アンケートに対する学生と教員との信頼関係が生まれてくると結論づけた。この議論を通じて、これまで機械的にアンケートを実施していたが、より良い授業を行うためにはアンケートが重要であるかに気づかされた。

学生・教職員ワークショップ「授業アンケートの結果をどう授業に活かすか」に参加して

生物生産学科 坂巻祥孝

前半の講演会では山形大学の小田隆治教授による講演で、山形大学では授業アンケートの結果を掲示板に張り出す完全公開を実施しているという事例が紹介され、正直驚いた。一見、授業改善が進まない教員への懲罰ともとられかねない、アンケート結果の完全公開ができて背景には、この公開によって教員個人の自助努力による改善だけでなく、教育コースや学科などによる組織としての改善の取り組みが、この公開によって実現するという信念あるいは教員組織内の信頼関係があるようだ。また、その後のワークショップの話し合いでは「授業評価アンケートをどのように教育改善に利用するか」というテーマについて 5-6 人の参加者と班を組んだが、学部別の事情、参加者個々人の事情があまりにばらばらで、私のいた班は、うまく話し合いの結果をまとめられなかった。しかし、他の班の発表を聞いて、「授業アンケートの実施時期を、学期の半ばにすべきで、アンケート後すぐに改善した授業をすれば、学生へのフィードバックがスムーズに行われ、学生との信頼関係を築きやすい」という意見に大変感心した。これならば、すぐにできるので、28 年度にでも一度農学部でもやってみる価値があるかもしれないと思えた。大変価値のあるワークショップでした。

水産学部・ 水産学研究科

水産学部・水産学研究科 FD 活動報告

はじめに

水産学部では、教育に対する学生満足の実現を目的として、水産学部教育システム運用マニュアルを策定し IS09001 を取得しています。このマニュアルに基づいて、水産学部ファカルティ・デベロップメント委員会（以下、FD 委員会）は、教職員の力量を維持し高めるための教育訓練、学生満足度を把握するための授業アンケートを実施し、その評価を行っています。FD 委員会は、IS09001 が求める PDCA サイクルの Check（授業アンケート）を中心に Action（教育訓練の実施）にも関わり、授業改善、教育改善において重要な役割を担っています。

本年度、FD 委員会が策定した年間教育訓練計画は以下のとおりです。

第 1 回 平成 27 年度前期授業公開・授業参観

第 2 回 水産学部 FD 講習会「大学における障害学生の支援・配慮について」

第 3 回 平成 27 年度後期授業公開・授業参観

以下に、今年度の活動概要とその成果を報告します。

1. 授業アンケートと授業改善

FD 委員会では、受講生に対し、各学期末に授業アンケートを行っています。学生の抱く満足度を計ることを中心に据えて質問して、各科目の評価を行いました。ここでは、平成 26 年度後期および平成 27 年度前期の授業アンケートについてまとめます。

本アンケートでは、受講生の満足度に応じ、満足した点あるいは満足できなかった点について具体的な記述を求める様式としました。各質問項目における科目の平均値を図 2.1～図 2.2 に示します。科目種（講義・演習、実験・実習、乗船実習）別の満足度では、いずれの科目種でも満足したと答えた割合は平均で 80%を超えており、ほとんどの受講生が学部で実施している科目に満足していることが分かります。

表2.1 水産学部授業アンケートの質問項目

Q1: 当該科目を履修した動機	
(答) この授業に興味を持ったので	回答1
この授業に学習意欲がかき立てられたから	回答2
履修しやすい曜日や時間帯だったから	回答3
必修科目だから	回答4
単位取得の為	回答5
Q2: 授業内容に満足した はいorいいえ	
はいの場合 → Q3へ	
いいえの場合 → Q4-1、Q4-2へ	
Q3: 満足した点	
(答) この授業は興味や関心を抱かせる内容だった	回答1
この授業によって学習意欲がかき立てられた	回答2
授業の内容が理解できた	回答3
教員の説明が分かりやすかった	回答4
学習について教員からのアドバイスやサポートがあった	回答5
その他	回答6
Q4-1: この科目の学習への取り組み態度	
(答) 強く思う、そう思う、あまりそう思わない、そう思わない	
Q4-2: 満足できなかった点	
(答) 授業の内容がよく理解できなかった	回答1
授業の内容に興味や関心がわかなかった	回答2
教員の説明が分かりにくかった	回答3
学習について教員からのアドバイスやサポートがなかった	回答4
その他	回答5

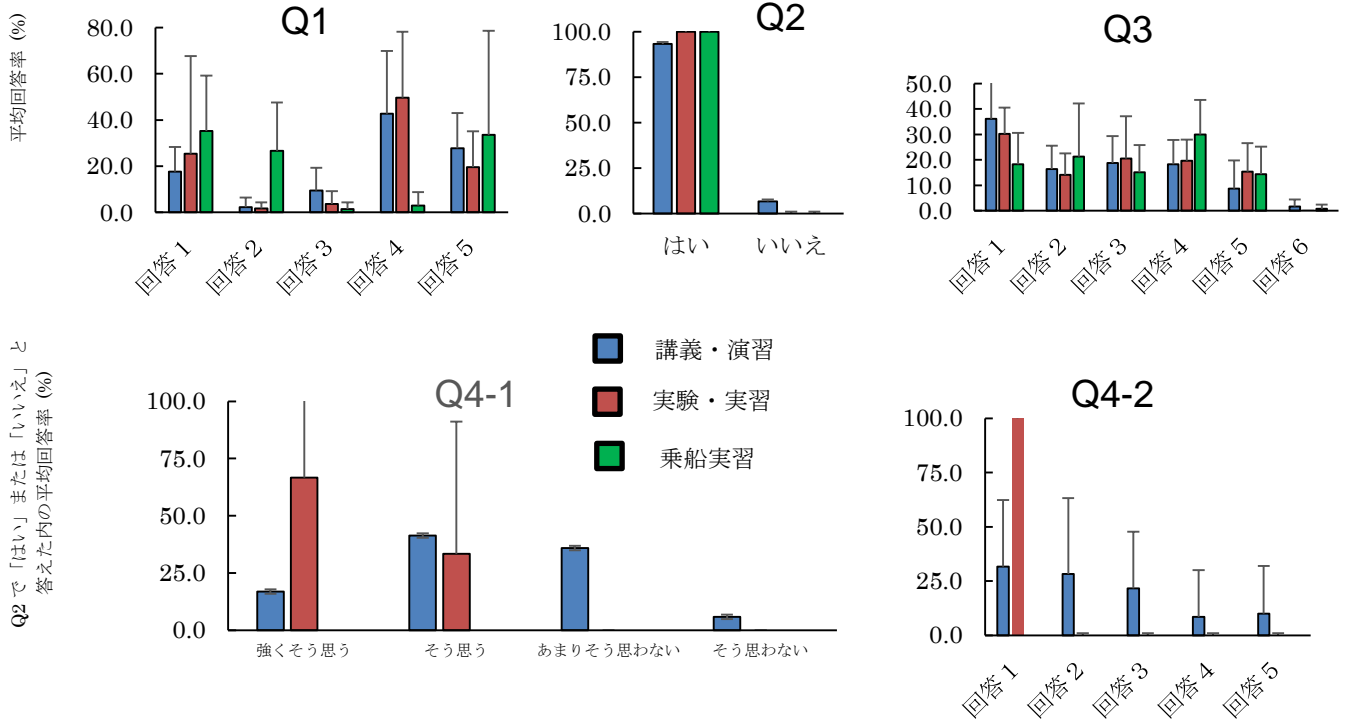
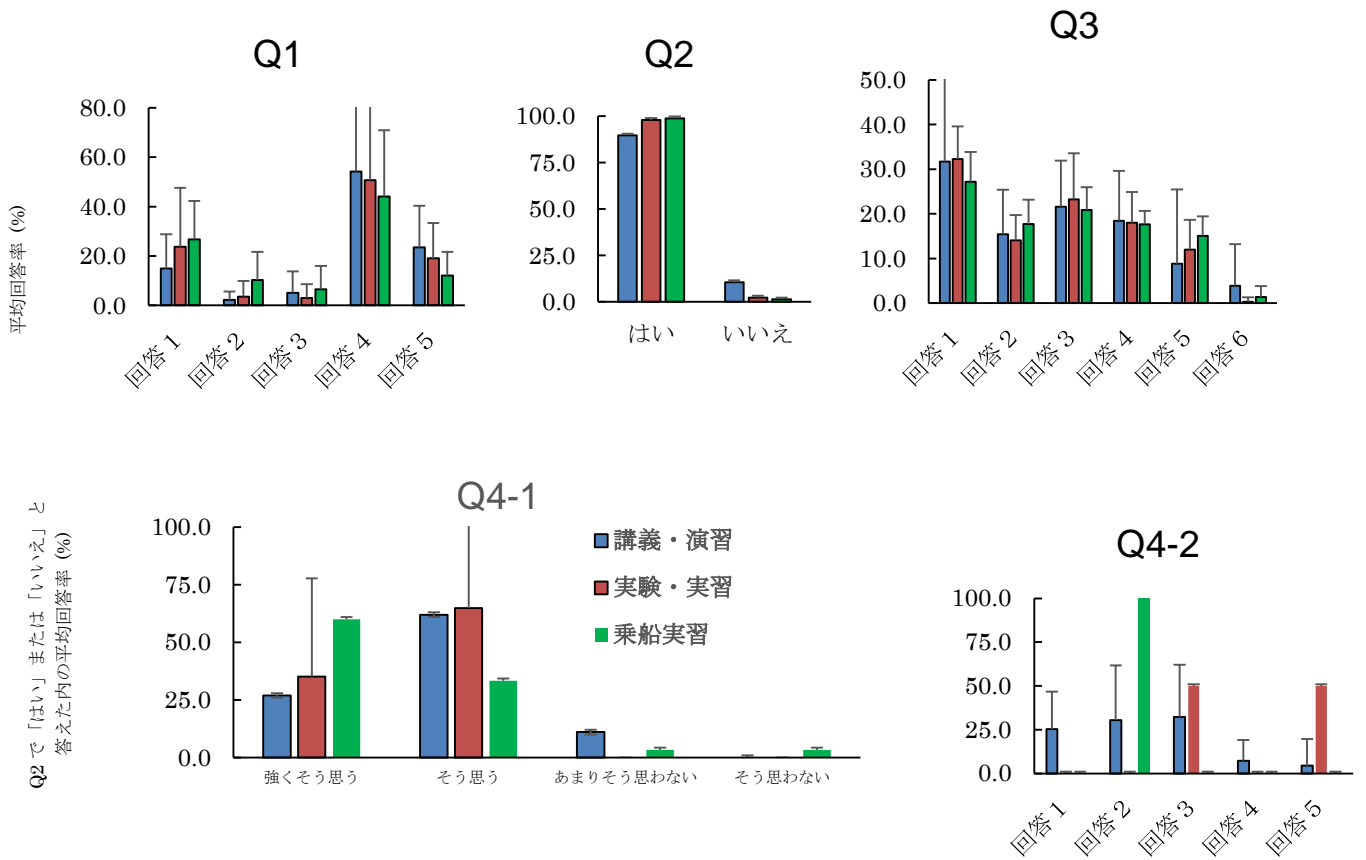


図 2.1 平成 26 年度 後期開講科目の授業アンケートの集計結果



講義・演習科目では、受講の動機を尋ねる質問において、平成 26 年度後期でも平成 27 年度前期でも「必修科目だから」、「単位修得のため」と答える割合が多く、「この授業に興味を持ったので」と積極的な動機を持つ受講生は前述の回答よりも少ない傾向でした。一方で、満足した点について「この授業は興味や関心を抱かせる内容だった」と答えた割合が最も多く、動機が積極的でない割には、各科目で受講生の興味や関心を喚起させることに成功していたことが窺えます。また、「授業の内容が理解できた」あるいは「教員の説明がわかりやすかった」「この授業によって学習意欲がかき立てられた」と答えた受講生が比較的多かったことから、教員の指導方法の改善に対する効果が現れていたことが示唆されています。

講義・演習科目で満足していないと答えた受講生の中で、講義への取り組みが積極的であったかどうかについては、回答にばらつきがみられました。また、満足できなかった点も平成 26 年度後期では「授業の内容がよく理解できなかった」、「授業の内容に興味や関心がわかなかった」とする意見も見られました。これは、履修した動機で「必修科目だから」「単位取得のため」とする意見が多く、これを反映したものと考えられ、科目に満足できなかった受講生は、履修の動機が「単位取得のため」であり、履修したもののそのまま興味や関心を持ってないまま過ごしてしまったものと考えられます。しかし、多くの学生は履修登録の時点では興味や関心を持っていなかったのにも関わらず、科目履修を続けるうちに興味や関心が湧き、科目の内容に満足したものと考えられます。また、この興味や関心が湧いてきた要因としては、授業の内容を理解でき、かつ教員の説明が分かりやすかったことに起因するものと考えられました。ただ一部の科目では、満足できなかった理由として「教員の説明が分かりにくかった」、「授業の内容がよく理解できなかった」と回答した学生が見受けられ、今後の動向に注視すべきと思います。

また、「学習について教員からのアドバイスやサポートがあった」を満足であると回答した受講生の割合は、実験・実習科目と乗船実習科目では平成 25 年度後期、平成 26 年度前期に比べて増えており、担当教員、技術職員、船舶職員及び TA のサポートが順調に実施されていると考えられます。講義・演習科目では、講義中の個別対応は難しいものの、ミニッツペーパーや Moodle で学生とのやりとりをしている講義では、「学習について教員からのアドバイスやサポートがあった」と答えた割合が高く、各科目でさらに積極的に学生へのアドバイスやサポートに取り組む必要があると思われます。

平成 26 年度からアンケート用紙によるアンケートと Moodle と併用していますが、Moodle のみでアンケートを実施した場合、紙媒体のみまたは併用の場合と比べて、回答率が低くなっています。Moodle で実施する場合は、回答時間を十分取るなどの工夫が必要と思われます。

一部の科目を除いて、Moodle も利用してアンケートを実施しました。授業アンケートの Moodle での実施については、学生部教務課の特任専門員（Moodle 担当）である榮徳啓介氏に大変ご尽力いただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

2. 授業公開・参観と授業改善

FD 委員会では、教育従事者の教育訓練の一環として授業公開・授業参観を行っています。各学期の初めに授業公開への協力を依頼し、公開可能との回答をいただいた科目について授業公開をします。水産学部に限らず、全学の教職員の参観も可としています。授業公開にご協力いただいた担当教員には授業公開・授業参観報告書を提出いただき、授業改善の基礎資料としています。本年度は、前期で 12 科目、後期で 18 科目の授業公開を行い、前期は 1 名（1 科目）、後期は 1 名（1 科目）の授業参観がありました。なお、本年度は新カリキュラムが開始され、新しい分野での教育を理解し、より多くの授業への参加を促進することを目的として、水産学部の全教員および技術職員を授業参観の対象としました。

授業参観報告書では、受講生の理解度を向上し受講生に興味を持たせることを目的とした取り組みが挙げられており、たとえば、自作の動画や写真を使って機器の動作原理や使用方法について説明する、演習問題を併用することにより学生の理解を高めるなど、教員が工夫を重ねている様子がうかがえます。アンケートの回答からは、個別の工夫だけでなく、受講生にとって分かり易く、かつ考えながら講義を受けられるような方向に、各教員の意識が向いていることが示唆されていました。

一方で、授業参観者数は、授業公開・授業参観報告書が提出された公開授業 1 科目当たり平均 0.1 名と少なく、授業参観者がなかった公開授業は 93.3%と高い割合を示していました。このため、授業公開・授業参観の効果的な実施方法についても議論が必要である、と思われます。

3. FD 講習会「大学における障害学生への支援・配慮について」

教育従事者教育訓練の一環として、平成 27 年 10 月 27 日に FD 講習会「大学における障害学生への支援・配慮について」を開催しました。これまで水産学部では、保健管理センターと協力して、学生の不登校への対応などに取り組んでまいりました。平成 26 年 4 月に鹿児島大学障害学生支援センターが設立され、保健管理センターと共に学生支援に当たりますが、まだ教職員に十分周知されているといえません。また、平成 28 年 4 月から「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（障害者差別解消法）が施行され、正当な理由なく障害があることを理由とした不当な差別的取り扱いの禁止や合理的配慮の提供が義務づけられます。各大学も平成 28 年 4 月までに対応要領を策定す

ることが求められています。そこで、学生の学修成果向上や学生生活の充実に向けて教職員に期待される役割や適切な支援方法について理解していただくことを目的に、FD 講習会を開催しました。講師として障害学生支援センターの今村智佳子先生をお招きして、ご講演いただきました。

今村智佳子先生のご講演では、障害学生支援センターの役割や支援体制の説明の後、障害者差別解消法の説明と合理的配慮の具体例紹介がありました。障害に対する合理的配慮として、①作業環境や設備の改善による物理的環境の配慮、②資料作成、ノートテイクや書面による指示など意思疎通の配慮、③作業補助や介助などルール・慣行の柔軟な変更等があり、多様で個別性が高く具体的状況に応じて配慮内容は異なるとの説明がありました。続いて、大学生活につまずいている学生に対する対応について紹介があり、「学校に来ない」、「指示が伝わらない」、「確認が非常に多い」、「自分の意見が出てこない」、「段取りが悪く物事が進まない」等の事例紹介がありました。対応策として、①役割を与え居場所を作る、②具体的で簡潔な指示を行う、③メモなど視覚情報で指示を残す、④「会話をすると相手に伝わった」という肯定的な経験を積み重ねる、⑤指示の量を減らすなどが有効であると示唆されました。最後に障害のある学生の就職支援として、学内の就職支援センターで面接練習などを実施しているほか、ヤングハローワークかごしまや鹿児島障害者職業センターでも就職相談を受け付けていることを紹介されました。

水産学部教職員 28 名が出席し、講演後の質疑では、水産学部で開講されている実習や乗船実習と障害を有する学生の受け入れについて、障害者差別解消法に関する多くの質問や意見交換がなされました。事故等の危険が想定される場合の受け入れに関する質問では、正当な理由が存在すれば受け入れを拒否することもできるが、学部で取り決めを策定するなど受入環境を整えることの必要性を再認識しました。

4. 大学院授業アンケートの実施

水産学部では、学部で開講される全科目について授業アンケートを行っています。一方で大学院修士課程では平成 25 年度からの授業アンケートを実施しており、平成 26 年度からは近年の留学生の増加なども考慮し、アンケートの質問文を日英併記に変更しています。アンケートの様式を図 6.1 に示します。本年度は、8 月のサマーセッションに来鹿した国際連携プログラムの学生にも記入を依頼し、講義内容や英語での開講について貴重な意見を得ることが出来ました。現状では各科目の受講人数が少ないため、今後は授業アンケートの内容や集計結果の活用方法について吟味することも必要である、と思われれます。

大学院水産学研究科 授業アンケート
(Graduate school of fisheries class questionnaire)

このアンケートは、受講生の皆様とともに授業改善に取り組むための基礎資料として活用します。集計結果のみを授業担当者にお知らせしますので、回答内容が成績に影響することはありません。あなたの考えを率直に記入して下さい。(This survey will be used to improve the class. This survey will never be connected with your grading. Only a summary of the questionnaire will be given to the teacher.)

受講科目名： _____ 学籍番号： _____ 氏名： _____
(Class name) (Student number) (Name)

所属分野 (該当する□にレ点) : (Please check your field)

【平成 27 年度入生】

【平成 26 年度以前入生】

- 水圏科学 (Aquatic Science) 水産生物・海洋学 (Fisheries biology and oceanography)
 水産資源科学 (Fisheries Resource Sciences) 養殖学 (Aquaculture)
 水産食品科学 (Fisheries Food Sciences) 漁業工学 (Fishing technology)
 水産経済学 (Fisheries economics) 水産経済学 (Fisheries economics)
 水産環境保全学 (Aquatic Environment Sciences) 食品資源・利用学 (Biochemistry and
 その他(Others) technology of marine food and resources)

Q1. この科目を履修して良かったと思う点を自由に記述してください。

(Please describe the good points in this class freely.)

Q2. この科目の改善すべき点について自由に記述してください。

(Please describe the improvable points in this class freely.)

図 6.1 大学院修士課程の授業アンケート様式

5. 卒業時アンケート・修了時アンケートの実施

水産学部では教育 PDM の中で掲げられている学部教育目標及び各分野のカリキュラム目標に対する達成度の調査として、卒業時アンケートを卒業式直前に実施しています。アンケートでは、学部教育目標及び各分野のカリキュラム目標に基づく質問、及び卒業後の進路決定に際して情報収集や相談をどのようにして行ったかを合わせて質問するような設問としました。平成 25 年度から大学院生に対しても修了時アンケートを実施しました。ここでは、平成 26 年度の卒業時・修了時アンケートについてまとめます。

卒業時アンケート及び修了時アンケートの設問項目を図 7.1 及び図 7.2 に示します。各質問は「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」「③少しそう思う」「④全く思わない」の 4 段階で評価してもらいました。項目 A では学部の教育目標に対する満足度を図るために全員共通で 6 つの質問を行い、項目 B では国際化に関する質問を、項目 C は就職・進学に関する質問、項目 D では分野ごとに質問を変えて、満足度を 4 段階で評価してもらいました。アンケートは、項目 A,B,C は全体で、項目 D は 分野ごとに集計しました。結果を図 7.3 及び図 7.4 に示します。

項目 A(教育目標)に関する質問では、「少しそう思う」を加えると、全体として教育目標に掲げた各能力を修得できたと考える学生がほとんどであった。しかし、質問 A-4 の「水産技術者として必要な英語能力が向上した」項目に対しては「少しそう思う」「全く思わない」を選択する学部生が目立ち、修了生のアンケート結果では「ある程度そう思う」を加えた肯定的な回答数が半数を超えており、全体的に見て評価レベルがよくなっていることがわかります。これは、修士課程での講義や修士論文研究で英語論文を読む機会が増えたことが原因と考えられますが、学部生も共通教育や「実用英語」などで英語の講義は受講しているため、水産に関する専門英語に触れる機会が少ないためではないかと思われます。平成 27 年度からの新カリキュラムでは、英語による基礎的な水産学の講義も開講されるため、次年度以降の傾向も分析し、英語カリキュラムの改善に役立てることができると期待されます。また、修了者アンケートでは、質問 A-4 に加えて、質問 A-7「就職のメリットとなるビジネス知識等を学んだ」の評価が低く、どのような知識を必要としているかの調査も含めて、今後、改善の余地があると感じました。以上から、水産学部及び水産学研究科の教育目標はおおむね達成されていると考えられます。

本年度から新しく追加された国際化に関する項目 B の結果に関しては、卒業生、修了生ともに英語力の向上や異文化理解、国際交流に興味はあるものの(質問 B-13~B-17)、実際には取り組んでいない傾向(B-8~B-11)が見受けられました。今後、国際交流に参加する機会を増やしていくことで、改善が期待できるのではないかと考えられます。

質問 C-18 の結果に関しては、卒業生、修了生ともに傾向が似ており、「十分にそう思う」「ある程

度そう思う」が過半数を占めており、希望する職種につくことができた学生が大半である一方で、諸事情により不本意な就職先を選ばざるを得なかった学生もいることを示唆しています。

以上から、卒業時・修了時アンケートを行った結果、学部の教育目標はおおむね達成できていると考えられますが、水産に関連した専門英語教育については改善が必要であると考えます。

平成26年度 卒業時アンケート（学部生用）学部生はこの面の質問に答えて下さい

1. (設問1) 学部生は①にマークし、下記Aに進む。大学院生は②にマークし、裏面Aに進む

A. 水産学部が掲げる下記の教育目標について、貴方自身が修得できたかどうかを総合的な観点から評価してください。①～④を選び、別紙のシートに数値をマークしてください。(設問2～7にすべて回答) ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

質問項目 (全員回答)
2. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する知識を修得した
3. 基礎学力が身につき、生涯学べる能力を習得した
4. 水産技術者として必要な英語能力が向上した
5. 情報処理能力が身に付いた
6. 報告書作成、プレゼンテーション能力が身に付いた
7. 現場対応能力が備わった

B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問8～17にすべて回答)

8. 在学中に海外研修 (Advanced Lecture on Tropical Fisheries など) に参加しましたか?
9. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか?
10. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
11. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
12. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか?
13. これから、英語の力 (語学力) を伸ばしていこうと思いますか?
14. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか?
15. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか?
16. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか?
17. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか?

C. 就職・進学について、ご回答ください。(全員回答) (設問18に数値をマークしてください)

- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定

18. 貴方が修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた

D. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。評価は、下に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問19～25のうち1つ選択)

- ①十分にそう思う (当てはまる) ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

専門分野別の質問項目 (1つ回答)
19. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれを取りまく海洋環境の両面から総合的に理解できる必要で実践的な知識・技術が身に付いた
20. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において必要で実践的な知識・技術が身に付いた
21. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
22. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
23. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
24. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
25. 水産教員養成課程 水産教員またはそれに近い分野の教員になるための必要で実践的な知識・技術が身に付いた

ご協力、ありがとうございました。

図 7.1 卒業時アンケートの様式

平成26年度 修了時アンケート (大学院生用) 院生はこの面の質問に答えて下さい

1. (設問1) 学部生は①にマークし,裏面Aに進む. 大学院生は②にマークし,下記Aに進む

A. 水産学研究科が掲げる下記の教育目標について、研究科入学時と比較して貴方自身が修得できたかを総合的な観点から評価し、①～④を選び、別紙のシートに数値をマークしてください。(設問2～7にすべて回答)

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

質問項目 (全員回答)
2. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する高度な知識を修得した
3. 基礎学力が向上し、生涯学べる能力を修得した
4. 水産技術者として英語論文などの内容を正確に理解し、要約できた
5. 情報活用能力が向上し、自ら学ぶ技術が身に付いた
6. 調査・研究のプロセス全体を進めることができた
7. 就職のメリットとなるビジネス知識等を学んだ

B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。

評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問8～17にすべて回答)

8. 在学中に海外研修 (Advanced Lecture on Tropical Fisheries など) に参加しましたか?
9. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか?
10. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
11. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
12. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか?
13. これから、英語の力 (語学力) を伸ばしていこうと思いますか?
14. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか?
15. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか?
16. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか?
17. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか?

C. 就職・進学について、ご回答ください。(全員回答) (設問18に数値をマークしてください)

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定

18. 貴方が修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた

D. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください (設問19～24のうち1つ選択)

①十分にそう思う (当てはまる) ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

専門分野別の質問項目 (1つ回答)
19. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれとをとりまく海洋環境の両面から総合的に理解できる高度で実践的な知識・技術を身に付けた
20. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において高度で実践的な知識・技術を身に付けた
21. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に高度で実践的な知識・技術を身に付けた
22. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた
23. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた
24. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた

ご協力、ありがとうございました。

図 7.2 修了時アンケートの様式

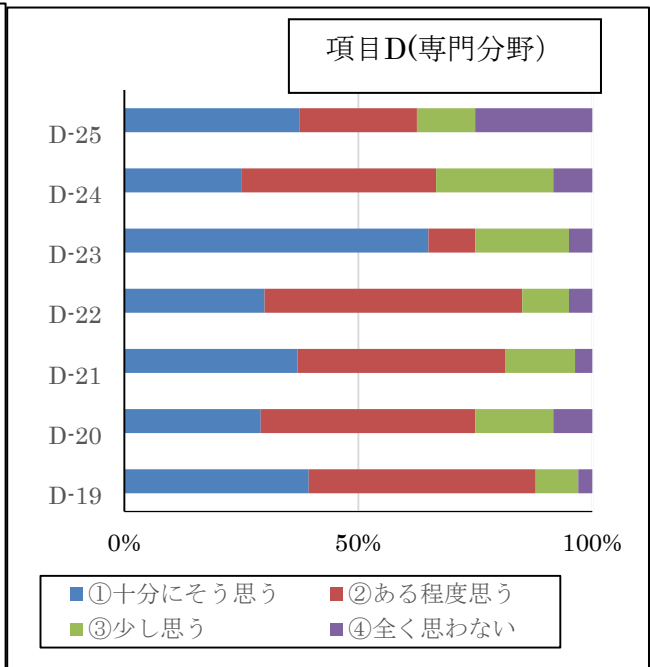
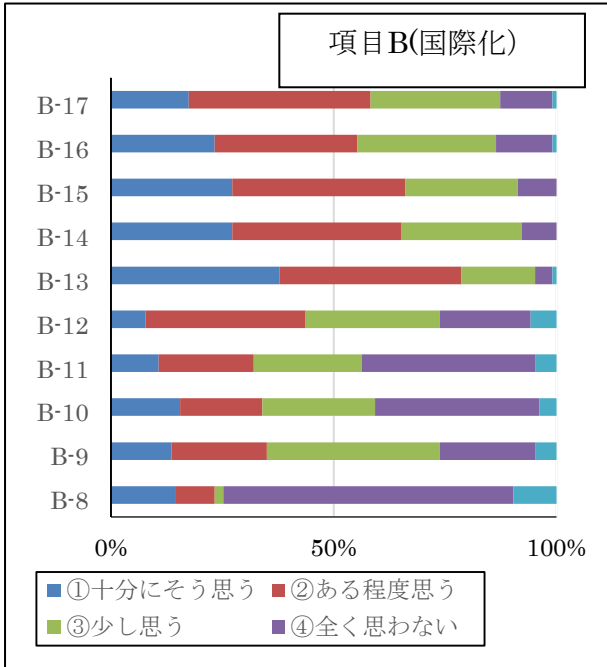
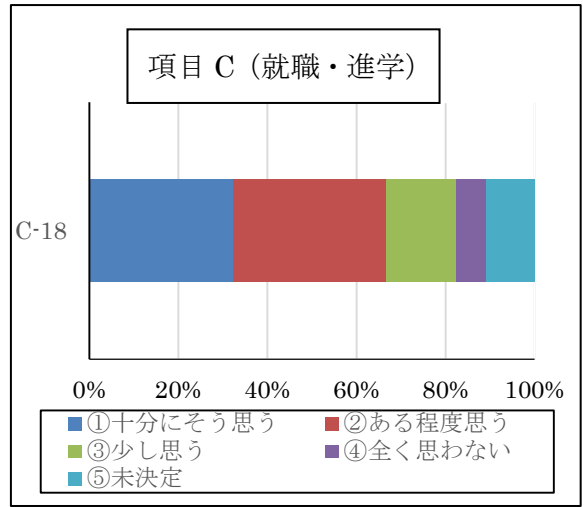
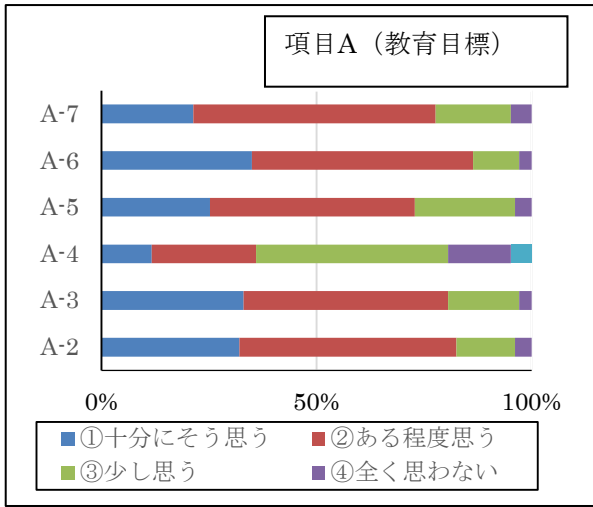


図 7.3 卒業生に関する集計結果

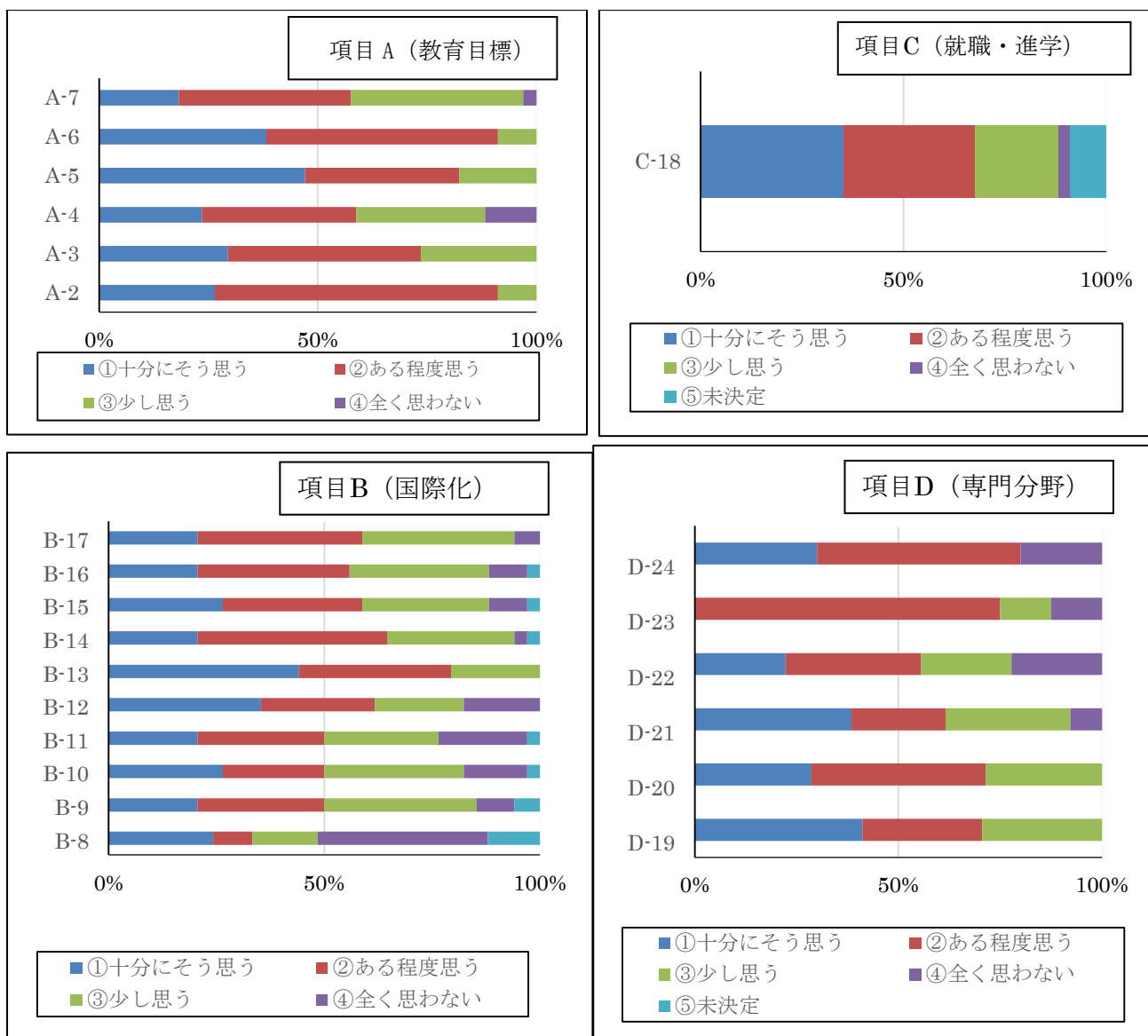


図 7.4 修了生に関する集計結果

6. おわりに

FD 委員会では、教育システム運用マニュアルに規定された教職員の力量の維持、向上を実現するために、授業公開・授業参観を企画し、FD 講習会、FD ワークショップを開催しています。また、学生満足度の調査を目的として授業アンケートを行い、その結果を教職員にフィードバックすることにより、授業改善に役立てていただいています。本年度は、大学院水産学研究科（修士課程）における授業アンケートの評価に取り組みました。今後の課題として、これらの成果を検証するのに加え、授業改善やカリキュラム改善に資するような授業公開・授業参観の実施方法の検討、修士課程のFD活動の充実が挙げられると思います。その実現のために、他の教育関連の委員会との連携も図りながら、教職員が積極的に関与し議論できるような仕組み作りをめざしたいと考えています。

共同獣医学部

第1節 平成27年度共同獣医学部FD活動の記録

I. 共同獣医学部FD活動組織（FD委員会の構成と活動状況）

委員長 大和 修 教授
委員 白石光也 准教授
委員 小澤 真 准教授
委員 安藤貴朗 准教授
事務担当者 西郷 豊 学務課長
河本政展 教務係長
東屋敷貴宏（教務係主任、～6月）、鬼塚剛生（教務係員、7月～）

第1回共同獣医学部FD委員会

日時：平成27年4月13日（月）16：08～16：45、場所：農・獣医共通棟2階22セミナー室

出席者：大和、白石、安藤、欠席者：小澤、陪席者：事務部（西郷、河本、東屋敷）

議題 1. 平成27年度FD委員会の活動計画について
2. 平成27年度全学FD委員会への経費要求について
3. 平成27年度学部各種委員会活動経費要求について

報告事項 1. 平成26年度FD委員会の活動実績について
2. 平成26年度全学FD経費執行状況報告書について

第2回共同獣医学部FD委員会

日時：平成27年6月19日（金）8：57～10：18、場所：農・獣医共通棟2階22セミナー室

出席者：大和、白石、小澤、安藤、陪席者：事務部（西郷、河本、東屋敷）

議題 1. FD研修会について
2. 授業評価アンケートについて

その後、その都度、個別事項について、メール会議にて対応した。

II. 授業公開と授業参観の取り組み

共同獣医学部では、農学部所属の平成15年度後期より授業公開・授業参観を実施している。平成24年度より共同獣医学部が発足し、本年度は共同獣医学部所属の学生が1～4年生となったが、5年生および6年生は農学部所属となるため、授業公開と授業参観のスケジュールは農学部と同様に実施した（農学部報告書参照）。例年どおり、授業公開に関する周知は事務経由でメールにて行い、授業参観参加希望申込みは授業担当者と参観希望者間の直接のやりとり（メールおよび電話）で行われた。授業担当者と授業参観者には、可能な限り、参観後に意見交換をお願いすると共に、参観者には様式の配布を行って、授業参観報告書を作成・提出してもらった。また、26年度からは授業担当者に参観者からの報告書に対する対策書を作成・提出してもらっている。

本年度の獣医学科教員の授業参観参加者数は、前期11名、後期10名、のべ21名の参加があった。なお、平成26年度はのべ28名、平成25年度はのべ14名、平成24年度はのべ21名の参加者である。平成27年度は平成26年度に比較して減少したため、次年度以降の参加者拡大を目指す。

III. 学生による授業評価

平成 27 年度前期・後期の 2 回、全授業および実習・演習について、学生による授業評価のアンケートを実施した。なお、5 年生および 6 年生までは農学部としてアンケートを行っている。共同獣医学部では、山口大学と共通の授業評価アンケートを作成し、実施している。様式は下記のとおりである。

平成24年度共同獣医学部	
授業評価アンケート(講義・演習用)	
授業科目番号: _____	受講者氏名 _____ <small>(氏名の記載は任意です。)</small>
授業科目名 : _____ () 遠隔授業システム 教員名 : _____	
<p>このアンケートは、授業をより良くするために行うものです。 * 回答者の成績に影響することは全くありませんので、あなたの考えを率直に記入してください。 * この回答用紙は機械(OCR)で読み取り集計しますので、該当する番号の前の○印を塗りつぶしてください。</p>	
<p>1 あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか?(括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です) <input type="radio"/> 1. 90%以上(14回以上) <input type="radio"/> 2. 80~90%(12~13回) <input type="radio"/> 3. 60~80%(9~11回) <input type="radio"/> 4. 40~60%(6~8回) <input type="radio"/> 5. 40%未満(6回未満)</p>	
<p>2 あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか? 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 <input type="radio"/> 1. 3時間程度または以上 <input type="radio"/> 2. 2時間程度 <input type="radio"/> 3. 1時間程度 <input type="radio"/> 4. 30~50分程度 <input type="radio"/> 5. 30分未満</p>	
<p>3 この授業内容の水準はどうでしたか? <input type="radio"/> 1. 高かった <input type="radio"/> 2. やや高かった <input type="radio"/> 3. 妥当だった <input type="radio"/> 4. やや低かった <input type="radio"/> 5. 低かった</p>	
<p>4 この授業の分量はどうでしたか? <input type="radio"/> 1. 多かった <input type="radio"/> 2. やや多かった <input type="radio"/> 3. 妥当だった <input type="radio"/> 4. やや少なかった <input type="radio"/> 5. 少なかった</p>	
<p>5 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いませんか? <input type="radio"/> 1. そう思う <input type="radio"/> 2. ややそう思う <input type="radio"/> 3. どちらとも言えない <input type="radio"/> 4. あまりそう思わない <input type="radio"/> 5. そう思わない</p>	
<p>6 板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか? <input type="radio"/> 1. そう思う <input type="radio"/> 2. ややそう思う <input type="radio"/> 3. どちらとも言えない <input type="radio"/> 4. あまりそう思わない <input type="radio"/> 5. そう思わない <input type="radio"/> 6. この授業は該当しない</p>	
<p>7 授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか? <input type="radio"/> 1. そう思う <input type="radio"/> 2. ややそう思う <input type="radio"/> 3. どちらとも言えない <input type="radio"/> 4. あまりそう思わない <input type="radio"/> 5. そう思わない</p>	
<p>8 この授業はシラバスに沿って進められましたか? <input type="radio"/> 1. そう思う <input type="radio"/> 2. ややそう思う <input type="radio"/> 3. どちらとも言えない <input type="radio"/> 4. あまりそう思わない <input type="radio"/> 5. そう思わない</p>	
<p>9 あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか? <input type="radio"/> 1. そう思う <input type="radio"/> 2. ややそう思う <input type="radio"/> 3. どちらとも言えない <input type="radio"/> 4. あまりそう思わない <input type="radio"/> 5. そう思わない <input type="radio"/> 6. 答えられない</p>	
<p>10 あなたは、この授業の内容を理解できましたか? <input type="radio"/> 1. そう思う <input type="radio"/> 2. ややそう思う <input type="radio"/> 3. どちらとも言えない <input type="radio"/> 4. あまりそう思わない <input type="radio"/> 5. そう思わない</p>	
<p>11 この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか? <input type="radio"/> 1. そう思う <input type="radio"/> 2. ややそう思う <input type="radio"/> 3. どちらとも言えない <input type="radio"/> 4. あまりそう思わない <input type="radio"/> 5. そう思わない</p>	
<p>* 以下は、遠隔授業システムに関する質問です。該当する場合(授業科目名の横にチェックあり)のみ回答してください。</p>	
<p>12 教員の音声は聞き取りやすかったと思いませんか? <input type="radio"/> 1. そう思う <input type="radio"/> 2. ややそう思う <input type="radio"/> 3. どちらとも言えない <input type="radio"/> 4. あまりそう思わない <input type="radio"/> 5. そう思わない</p>	
<p>13 教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いませんか? <input type="radio"/> 1. そう思う <input type="radio"/> 2. ややそう思う <input type="radio"/> 3. どちらとも言えない <input type="radio"/> 4. あまりそう思わない <input type="radio"/> 5. そう思わない</p>	
<p>14 教員の授業の進め方はスムーズでしたか? <input type="radio"/> 1. そう思う <input type="radio"/> 2. ややそう思う <input type="radio"/> 3. どちらとも言えない <input type="radio"/> 4. あまりそう思わない <input type="radio"/> 5. そう思わない</p>	
<p>15 授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いませんか? <input type="radio"/> 1. そう思う <input type="radio"/> 2. ややそう思う <input type="radio"/> 3. どちらとも言えない <input type="radio"/> 4. あまりそう思わない <input type="radio"/> 5. そう思わない</p>	
<p>16 対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いませんか? <input type="radio"/> 1. そう思う <input type="radio"/> 2. ややそう思う <input type="radio"/> 3. どちらとも言えない <input type="radio"/> 4. あまりそう思わない <input type="radio"/> 5. そう思わない</p>	
<p>自由記述 この授業についての意見・要望・感想などを自由に書いてください。</p> <div style="border: 1px solid black; height: 50px; width: 100%;"></div>	
<p>ご協力ありがとうございました。 共同獣医学部ファカルティ・ディベロップメント委員会</p>	

ここに記載している「遠隔授業」とは、遠隔授業システムを使って、教員の映像や音声、授業の資料等をリアルタイムで送信あるいは受信して行う授業である。共同獣医学部では、この「遠隔授業」に関する設問を用意し、学生の授業環境に対する満足度を測っている。

本年度は共同獣医学部所属の 1~4 年生に対して実施し、共同獣医対象の共通教育科目と専門教育科目において、前期 41 科目、後期 45 科目、計 96 科目分の回答が集まった。

次のページより、今年度のアンケート集計結果を紹介する。

●アンケート集計結果（全科目集計）

【講義・演習科目】前期：40科目、後期：31科目

No.	質問項目	回答	27前期	%(27前)	27後期	%(27後)
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上	928	81.4%	716	80.4%
		80～90%	173	15.2%	151	17.0%
		60～80%	33	2.9%	23	2.6%
		40～60%	4	0.4%	0	0.0%
		40%未満	2	0.2%	0	0.0%
		計	1140	100.0%	890	100.0%
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。（授業1回あたりの時間）	3時間程度または以上	245	20.8%	231	25.3%
		2時間程度	275	23.3%	203	22.2%
		1時間程度	357	30.3%	309	33.8%
		30～50分程度	109	9.2%	117	12.8%
		30分未満	194	16.4%	54	5.9%
		計	1180	100.0%	914	100.0%
3	この授業内容の水準はどうでしたか？	高かった	265	22.5%	231	25.2%
		やや高かった	343	29.1%	251	27.4%
		妥当だった	549	46.6%	423	46.2%
		やや低かった	18	1.5%	8	0.9%
		低かった	4	0.3%	2	0.2%
		計	1179	100.0%	915	100.0%
4	この授業の分量はどうでしたか？	多かった	308	26.2%	283	31.2%
		やや多かった	352	29.9%	251	27.6%
		妥当だった	505	42.9%	367	40.4%
		やや少なかった	11	0.9%	5	0.6%
		少なかった	1	0.1%	2	0.2%
		計	1177	100.0%	908	100.0%
5	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思われましたか？	そう思う	485	41.3%	472	51.9%
		ややそう思う	440	37.4%	295	32.5%
		どちらとも言えない	177	15.1%	108	11.9%
		あまりそう思わない	59	5.0%	24	2.6%
		そう思わない	14	1.2%	10	1.1%
		計	1175	100.0%	909	100.0%
6	板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか？	そう思う	487	41.3%	458	50.0%
		ややそう思う	440	37.4%	303	33.1%
		どちらとも言えない	187	15.9%	113	12.3%
		あまりそう思わない	53	4.5%	26	2.8%
		そう思わない	11	0.9%	13	1.4%
		この授業は該当しない	0	0.0%	3	0.3%
		計	1178	100.0%	916	100.0%
7	授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う	454	38.5%	467	51.3%
		ややそう思う	399	33.8%	259	28.4%
		どちらとも言えない	284	24.1%	166	18.2%
		あまりそう思わない	30	2.5%	13	1.4%
		そう思わない	12	1.0%	6	0.7%
		計	1179	100.0%	911	100.0%
8	この授業はシラバスに沿って進められましたか？	そう思う	540	46.1%	490	54.0%
		ややそう思う	433	36.9%	291	32.1%
		どちらとも言えない	177	15.1%	104	11.5%
		あまりそう思わない	16	1.4%	15	1.7%
		そう思わない	6	0.5%	7	0.8%
		計	1172	100.0%	907	100.0%

No.	質問項目	回答	27前期	%(27前)	27後期	%(27後)
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	311	26.4%	271	29.8%
		ややそう思う	529	44.9%	390	42.9%
		どちらとも言えない	281	23.9%	184	20.2%
		あまりそう思わない	37	3.1%	49	5.4%
		そう思わない	12	1.0%	6	0.7%
		答えられない	7	0.6%	10	1.1%
		計	1177	100.0%	910	100.0%
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	そう思う	343	29.2%	295	32.3%
		ややそう思う	603	51.3%	454	49.7%
		どちらとも言えない	170	14.5%	128	14.0%
		あまりそう思わない	44	3.7%	30	3.3%
		そう思わない	16	1.4%	7	0.8%
		計	1176	100.0%	914	100.0%
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	465	39.5%	404	44.7%
		ややそう思う	468	39.8%	340	37.6%
		どちらとも言えない	191	16.2%	117	12.9%
		あまりそう思わない	32	2.7%	27	3.0%
		そう思わない	21	1.8%	16	1.8%
		計	1177	100.0%	904	100.0%
12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	396	55.6%	354	62.4%
		ややそう思う	216	30.3%	158	27.9%
		どちらとも言えない	69	9.7%	44	7.8%
		あまりそう思わない	27	3.8%	8	1.4%
		そう思わない	4	0.6%	3	0.5%
		計	712	100.0%	567	100.0%
13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	363	51.1%	339	59.9%
		ややそう思う	226	31.8%	158	27.9%
		どちらとも言えない	87	12.2%	52	9.2%
		あまりそう思わない	30	4.2%	11	1.9%
		そう思わない	5	0.7%	6	1.1%
		計	711	100.0%	566	100.0%
14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	337	47.4%	319	56.4%
		ややそう思う	249	35.0%	155	27.4%
		どちらとも言えない	88	12.4%	63	11.1%
		あまりそう思わない	28	3.9%	21	3.7%
		そう思わない	9	1.3%	8	1.4%
		計	711	100.0%	566	100.0%
15	授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	320	44.9%	310	54.8%
		ややそう思う	253	35.5%	167	29.5%
		どちらとも言えない	99	13.9%	66	11.7%
		あまりそう思わない	35	4.9%	16	2.8%
		そう思わない	5	0.7%	7	1.2%
		計	712	100.0%	566	100.0%
16	対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	235	33.0%	258	45.7%
		ややそう思う	226	31.7%	151	26.8%
		どちらとも言えない	147	20.6%	94	16.7%
		あまりそう思わない	67	9.4%	34	6.0%
		そう思わない	37	5.2%	27	4.8%
		計	712	100.0%	564	100.0%

※設問 No.12～16 は、遠隔授業科目のみ対象の設問

【実験・実習科目】前期：7科目、後期：11科目

No.	質問項目	回答	27前期	%(27前)	27後期	%(27後)
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上	185	92.5%	307	95.6%
		80～90%	14	7.0%	12	3.7%
		60～80%	1	0.5%	1	0.3%
		40～60%	0	0.0%	1	0.3%
		40%未満	0	0.0%	0	0.0%
		計	200	100.0%	321	100.0%
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。(授業1回あたりの時間)	3時間程度または以上	49	24.3%	66	20.4%
		2時間程度	26	12.9%	35	10.8%
		1時間程度	66	32.7%	97	30.0%
		30～50分程度	38	18.8%	59	18.3%
		30分未満	23	11.4%	66	20.4%
		計	202	100.0%	323	100.0%
3	この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか？	そう思う	41	20.6%	87	26.9%
		ややそう思う	85	42.7%	143	44.1%
		どちらとも言えない	59	29.6%	77	23.8%
		あまりそう思わない	12	6.0%	15	4.6%
		そう思わない	2	1.0%	2	0.6%
		計	199	100.0%	324	100.0%
4	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、実験・実習の方法などの説明はわかりやすいと思われましたか？	そう思う	97	48.0%	190	59.7%
		ややそう思う	65	32.2%	103	32.4%
		どちらとも言えない	23	11.4%	17	5.3%
		あまりそう思わない	12	5.9%	7	2.2%
		そう思わない	5	2.5%	1	0.3%
		計	202	100.0%	318	100.0%
5	板書や配布資料、実験マニュアルなどは、実験・実習の内容理解と実施に役立ちましたか？	そう思う	99	49.0%	191	59.7%
		ややそう思う	73	36.1%	107	33.4%
		どちらとも言えない	23	11.4%	16	5.0%
		あまりそう思わない	5	2.5%	5	1.6%
		そう思わない	2	1.0%	1	0.3%
		計	202	100.0%	320	100.0%
6	実験・実習中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う	110	54.7%	196	61.3%
		ややそう思う	57	28.4%	92	28.8%
		どちらとも言えない	21	10.4%	27	8.4%
		あまりそう思わない	11	5.5%	4	1.3%
		そう思わない	2	1.0%	1	0.3%
		計	201	100.0%	320	100.0%
7	動物を扱う実験・実習は、安全性に重点が置かれていましたか？	そう思う	96	48.5%	179	54.9%
		ややそう思う	57	28.8%	98	30.1%
		どちらとも言えない	22	11.1%	25	7.7%
		あまりそう思わない	4	2.0%	2	0.6%
		そう思わない	2	1.0%	1	0.3%
		この授業は該当しない	17	8.6%	21	6.4%
		計	198	100.0%	326	100.0%
8	この実験・実習は、シラバスに沿って進められましたか？	そう思う	110	54.7%	202	62.5%
		ややそう思う	71	35.3%	93	28.8%
		どちらとも言えない	17	8.5%	26	8.0%
		あまりそう思わない	1	0.5%	1	0.3%
		そう思わない	2	1.0%	1	0.3%
		計	201	100.0%	323	100.0%

No.	質問項目	回答	27前期	%(27前)	27後期	%(27後)
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	74	36.8%	138	43.0%
		ややそう思う	93	46.3%	137	42.7%
		どちらとも言えない	28	13.9%	38	11.8%
		あまりそう思わない	3	1.5%	4	1.2%
		そう思わない	2	1.0%	1	0.3%
		答えられない	1	0.5%	3	0.9%
		計	201	100.0%	321	100.0%
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	そう思う	75	37.1%	136	42.5%
		ややそう思う	101	50.0%	152	47.5%
		どちらとも言えない	19	9.4%	27	8.4%
		あまりそう思わない	5	2.5%	3	0.9%
		そう思わない	2	1.0%	2	0.6%
		計	202	100.0%	320	100.0%
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	99	49.3%	185	58.5%
		ややそう思う	81	40.3%	106	33.5%
		どちらとも言えない	12	6.0%	17	5.4%
		あまりそう思わない	5	2.5%	6	1.9%
		そう思わない	4	2.0%	2	0.6%
		計	201	100.0%	316	100.0%
12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	32	55.2%	23	82.1%
		ややそう思う	18	31.0%	5	17.9%
		どちらとも言えない	5	8.6%	0	0.0%
		あまりそう思わない	3	5.2%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	58	100.0%	28	100.0%
13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	33	56.9%	24	85.7%
		ややそう思う	17	29.3%	4	14.3%
		どちらとも言えない	6	10.3%	0	0.0%
		あまりそう思わない	2	3.4%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	58	100.0%	28	100.0%
14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	31	53.4%	23	82.1%
		ややそう思う	14	24.1%	5	17.9%
		どちらとも言えない	7	12.1%	0	0.0%
		あまりそう思わない	5	8.6%	0	0.0%
		そう思わない	1	1.7%	0	0.0%
		計	58	100.0%	28	100.0%
15	授業中は、実験・実習に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	32	55.2%	22	78.6%
		ややそう思う	16	27.6%	5	17.9%
		どちらとも言えない	8	13.8%	1	3.6%
		あまりそう思わない	2	3.4%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	58	100.0%	28	100.0%
16	対面式の実験・実習と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	31	53.4%	21	75.0%
		ややそう思う	11	19.0%	5	17.9%
		どちらとも言えない	8	13.8%	1	3.6%
		あまりそう思わない	2	3.4%	0	0.0%
		そう思わない	6	10.3%	1	3.6%
		計	58	100.0%	28	100.0%

※設問 No.12～16 は、遠隔授業科目のみ対象の設問

IV. 合同 FD 研修会

1. はじめに

平成 24 年度から設置された鹿児島大学および山口大学共同獣医学部では、情報通信技術 (Information and Communication Technology; ICT) のひとつである双方向遠隔授業システムが導入されて、両大学の教員による講義・実習が実施されている。また一方、平成 25 年度からは、帯広畜産大学、北海道大学、山口大学および本学の 4 大学によって、欧州獣医学教育認証機構 (EAEVE) による認証獲得に向けた教育改革事業 (文部科学省国立大学改革強化推進事業「国立獣医系 4 大学群による欧米水準の獣医学教育に向けた連携体制の構築」) が開始されており、南に位置する山口大学および本学は合同でこれに取り組んでいる。これらはいずれも質の高い世界標準の教育の上で成り立つものであり、教員の技術の向上、すなわち FD がより一層求められることとなる。

そこで、通常両大学で独自に行う FD 活動に加えて、平成 26 年度より合同で行う研修会を実施することが合意された。これによって、両大学教員のコミュニケーションを一層深めることができ、共通あるいは個別に抱える課題や問題点を把握し、相互の協力あるいは補完によって、教育レベルを向上させることが可能となる。昨年度 (平成 26 年度) は、山口大学共同獣医学部主催により、平成 27 年 2 月 17 日 (火) に山口大学で実施された。

本年度 (平成 27 年度) は、鹿児島大学共同獣医学部主催により、平成 27 年 9 月 14 日 (月) に鹿児島大学で実施され、それに山口大学共同獣医学部教員 10 名が来鹿して参加した。望月雅美学部長挨拶の後、鹿児島大学法科大学院研究科長の米田憲市教授による講演が、遠隔システムを用いて両大学へ配信され、その後に 3 分野 (食品衛生、産業動物臨床、学生生活) に分かれてワークショップが実施された。両大学を合わせると 50 名程度が本研修会に参加した。研修会終了後には、ワークショップ参加者を中心に懇親会も行われた。以下に、本年度実施された合同 FD 研修会の詳細について報告する。

2. 研修会次第

日時：平成 27 年 9 月 14 日 (月) 13 時～17 時

場所：鹿児島大学共同獣医学部 (鹿児島大学主催)

13:00～13:05 302 教室 (遠隔システムにより山口大学に第 4 講義室に配信)

学部長挨拶 (鹿児島大学 共同獣医学部 学部長 望月雅美 教授)

13:05～14:35 302 教室 (遠隔システムにより山口大学に第 4 講義室に配信)

基調講演 (鹿児島大学法科大学院 研究科長 米田憲市 教授)

14:50～16:50 教育ワークショップ 32～34 セミナー室 (参加者敬称略)

食品衛生 (鹿大：望月、中馬、小原、三好、小尾、松鶴、有村、河野、山大：豊福、佐藤晃、渋谷、下田)

産業動物臨床 (鹿大：三角、帆保、窪田、安藤(貴)、山大：田浦、高木、角川、檜山)

学生生活 (鹿大：遠藤、白石、松尾、小澤、河本、鬼塚、山大：柳田、日下部)

3. 各部の内容

1) 学部長挨拶 (13:00～13:05)

鹿児島大学共同獣医学部の 302 教室で実施され、同時に山口大学共同獣医学部の第 4 番教室に、双方向遠隔授業システムによって接続・配信された。13 時から鹿児島大学共同獣医学部 FD 委員会委員長の大和が進行し、望月学部長の挨拶により研修会が開始された。望月学部長は、自身の民間会社での経験を通じて、研修の重要性と必要性について強調された。鹿児島大学での参加者は三十名程度であった。山口大学の参加者は来鹿者が 10 名、山口大学第 4 教室での聴講者が数名で、合計十数名であった。両大学を合わせると四十数名から五十名が本研修会に参加した。



望月学部長挨拶（302 教室）



鹿児島大学聴講者（302 教室）

2) 基調講演（13:05～14:35）

講師：米田憲市 鹿児島大学法科大学院 研究科長／教授（法社会学）

演題：鹿児島大学法科大学院のICTを用いた教育実践の経験

要旨：鹿児島大学法科大学院は、2004年の設置に向けた準備段階から九州大学法科大学院との協議を進め、遠隔講義システムを用いた授業を展開することを含む様々な方法で、それぞれの長所を共有し短所を補うカリキュラムを構築しました。設置申請までに、この連携に熊本大学が参加し、設置後に琉球大学が参加することとなりました。この連携を支えたICTの活用経験とその成果や課題のほか、鹿児島大学法科大学院内部でのICTの活用について紹介したいと思います。

法科大学院設置とその教育改革事業についての経緯について説明された後、その教育改革で必要とされた複数大学（鹿大、九大、熊大、琉大）との連携およびICTシステム（双方向遠隔講義システム、共同獣医学部に導入されたシステムのプロトタイプ）の導入に関する経緯が説明された。その後、法科大学院の教育改革事業で行われてきたFD活動について個別の説明があった。それらは、双方向システムの実践的な活用法（様々な講義スキルを共有する研修会の実施）、新たなシラバスシステムの導入（メディアミックスによる教育効果の向上）、新たなアンケートシステムの導入（形骸化されにくいシステムの考案）等であった。これらは、いずれも教員が積極的に授業改善に取り組むように工夫されたものであった。法科大学院は共同獣医学部とは分野がかけ離れているが、置かれた状況（教育改革事業、大学間連携、ICTシステム導入）が近似しており、そのFD活動は共同獣医学部のFDに非常に有益な情報となった。講演にはスライド（次ページ以降に掲載）およびアンケート実例やニュースレターなどが用いられた。



米田先生による講演



講演風景（302 教室後方から）

司法政策研究科のFD活動

成果に向けた教育改善の取り組み

鹿児島大学司法政策研究科・研究科長
鹿児島大学司法政策教育研究センター長
教授 米田 憲市

LAWV

2. 日本の法曹養成過程の改革

- 2-2法曹養成制度の改革
- 2-2-1法曹人口を増やす方法論
 - 旧制度:合格者3%程度の厳しい試験
 - 試験の合格者数増だけで「質」を維持できるか
 - 「質」を落とさず、「量」を確保する
 - 合格者数3000人を目指す
 - 修了者の7割から8割が合格となるよう、法科大学院で教育する。

LAWV

2. 日本の法曹養成過程の改革

- 2-2-3新しい法曹養成制度(2)
- 法科大学院
 - 大学院レベル/専門職学位課程(JD)
 - 3年の在学(法学既修者になれば2年)
 - 「理論と実務の架橋」
 - 教員:研究者に加え、一定以上の実務家教員
 - 司法修習の教育の一部を取り込む
 - 双方向/多方向の議論のある授業
 - 修了⇒司法試験の受験資格

鹿児島大学法科大学院の特色

- 「地域に学び、地域に貢献する」
- 法曹養成教育と地域貢献の両立
 - 鹿児島等司法過疎地における法律相談実習
 - 鹿児島、種子島、徳島
- 地域を支える活力のある法曹養成
 - 法情報論:ICTを活用した弁護士活動
- 教育連携による大学の枠を超えた環境
 - 連携講義の実施
 - 九大への留学制度

1-2-1.システム構築の経緯

- 遠隔講義システム 前史
 - 1997年度から鹿児島大学・大阪大学間のSCSを活用した共同授業「法情報論」(学部)の取組
- インターネットの普及による発展
 - 現在は、NLSシラバス・システムを基盤に、名古屋大学、鹿児島大学、大阪大学で共同で「法情報論」(学部)を開講中

教室画像:鹿児島大学

LAWV

第1部 法科大学院

1. はじめに:法科大学院とは何か?

- 司法制度改革:
 - 「バブル崩壊」後の社会構造改革
 - 司法制度改革審議会
 - 日本の司法改革の「第三の波」
- 司法制度改革審議会意見書(2002年)
 - 制度的基盤の整備
 - 人的基盤の充実
 - 国民の司法参加

LAWV

2. 日本の法曹養成過程の改革

- 2-2-2改革以前の法曹養成制度
 - 司法試験を中心とする「点」による選抜
 - 司法試験
 - 受験制無し/短答試験/論文試験/口述試験
 - 司法修習(2年/給費)⇒二回試験
 - 司法試験後は、スムーズに法曹に
 - 法学部/大学院教育
 - 理論教育中心、実務教育、試験対策は無し
 - 司法試験予備校:法曹志願者の多くが活用
 - 試験対策に偏った法律学習
- 【量を増やして、質を維持することはできない】

LAWV

2. 日本の法曹養成過程の改革

- 2-2-3新しい法曹養成制度(3)
- 司法試験
 - 受験資格:法科大学院の修了
 - 5年で3回(後に5年で5回に)
 - 短答試験/論文試験(実務的な事例問題)
 - 司法修習(1年:賞与制)
 - 適性試験⇒法科大学院(2/3年)⇒司法試験⇒司法修習(1年)⇒法曹
 - 旧制度:司法試験⇒司法修習(2年)⇒法曹

鹿児島大学の遠隔教育システム

- 九州3大学遠隔講義システム
 - 遠隔講義のほか映像収録が可能
- 移動式テレビ会議システム
 - 建物内の教室で使える6畳から11畳面の遠隔講義システム(建大はこれが設置されている)
- インターネットテレビ会議システム(MeetingPlaza)
- メディア・パティオ 映像 配信システム
- NLSシラバス・システム
- アカウント管理

参考:SCSを用いた遠隔講義システム

SCS=Space Collaboration System (122地点146局)

Windows3.1(後に6.0で移行)タスクマネージャ、相手先メラの操作、時間費用の問題、予約作業の問題、音声遅延

4拠点で実施する場合

LAWV

2. 日本の法曹養成過程の改革

- 2-1法曹人口の増加を目指して
 - 国際比較
 - 21世紀の社会のイメージ
 - 社会的要請(対立していた2派の協調)
 - 企業法務などの先端分野
 - 司法過疎地の存在

LAWV

2. 日本の法曹養成過程の改革

- 2-2-3新しい法曹養成制度(1)
 - 公平性、開放性、多様性
 - 他の分野、多様な経験・背景を持つ人材
 - 地域適正配置、夜間等の多様な形態
 - 奨学金、教育ローン、授業料免除など経済的支援
 - 2004年に68校、2006年までに74校が開校
 - 大都市に集中していたとはいえ、地方にも設置された。

LAWV

第2部 ICTを用いた教育

- 鹿児島大学法科大学院の特色
- 九州国立4大学法科大学院教育連携の遠隔講義システムについて
 - 導入の目的/システム構築の経緯/システム構築・保守管理費用/システムの特徴・使い勝手/システムの利点・欠点/故障した場合の対応/教員研修など
- 遠隔講義システムを用いた「授業」について
 - 対象科目とその選定/適正学生数/議論の可否/雰囲気共有/録画の有無と活用/他のキャンパスへの配慮事項/補助教員の効用/学生同士の交流/学生の感想・満足度

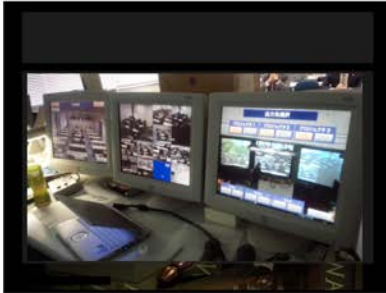
1-1.遠隔講義システムの構築の目的

- 法科大学院の設置
 - 地域適正配置と地方国立の法学教育の基盤
 - 特色ある科目の必要性
 - 鹿児島大学と九州大学の連携での設置申請
 - 鹿児島大学の遠隔講義システムを活用した授業経験の導入を基盤
- システムの設計思想
 - ライブの重視:録画配信は軽視
 - 双方向多方向の授業の実現
 - 操作の簡易性の追求

1-2-2.現在のシステム開発の契機

- 科学研究費「法科大学院における教育連携のあり方に関する研究」(研究代表者:原科吉康、2003年度～2005年度)
- 鹿児島大学・九州大学の連携協議
 - 鹿児島大学の遠隔講義活用経験
 - 米國NTTの法務部長経験者が九大准教授に
 - 九大・法大との連携協議(2001年春から秋)
 - 九大との連携協議(2001年秋～)
 - 九大の受入(2003年)、法大の参加(2005年)
- リーガル・リサーチの必修化
 - ＝「法情報論」の必修化
- 設置審現地調査と形成支援での探択

鹿児島大学の操作卓



1-2-5. ネット会議システムと映像配信システム

- Meeting Plaza
 - 遠隔授業や研究会での活用
 - 少人数の学生で、出張などに活用
- 映像配信システム (MediaPatio)

1-3. 遠隔講義システムの長所

- 高度な操作が容易にできる。
 - 基本は3タッチで映像をスクリーンに出せる。
 - 九大・九大・熊大の3大学間では、相手方カメラを含めた映像を1拠点から自由に操作・映出できる。
- 汎用性が高く、その実現も容易。
 - 汎用性の高いH323プロトコルのテレビ会議システムがあれば、ゲスト機能でどこでも接続できる。
 - 外部入力(PC、書画カメラ、BDレコーダーなど)を容易に使える。
 - Meeting Plazaやサブマシンを併用できる。

1-4. 遠隔講義システムの短所

- 導入にコストがかかる。
 - 端末が単体で1機50万を超え、その他を交えると100万を超える。サブマシンで600万円(音響制御)
- H323規格に限られ、拠点が限られる。
 - PCさえあれば使える、Meeting Plazaでカバー
- ベンダーが「再構築をいやがるほど、内部が複雑で高度。
 - ハイビジョンバージョンは、より簡単なものが提案されている。
- 教育技術が求められる部分がある。

1-5. 故障した場合の対応

- メンテナンス契約
 - 中核機器の交換保守と機能実現
 - 200万円/年
- 基本的に24時間メンテナンス可能
 - 現実には授業時間中であれば、即座に対応。
 - 授業のない日に接続試験などを含めて対応。
 - 3大学同時対応も可能。(班大は別)
- うまくいかないときは、サブのシステムを活用。
- このほか、バージョンアップ対応や機能強化のために年間150万円くらいかけている。

1-6. 教員等の研修

- 特にやっていない。
- 個別に指導: 1回でいたいマスター
- できない教員対応
 - 事務補佐員(九大はTA、熊大は雇用)によるサポート
- 教員は、興味・やる気のある人は誰でもできるが、ない人は永久に駄目。

2-1. 対象科目とその選定

- 基本: 必要に応じて、どの科目でも使う。
- 例外
 - 法律基本科目やそれに近い科目(民事訴訟実務の基礎などで、教員と学生が一度も直接会えない場合は、オフィスアワーや学修効果の管理上の事情から回避している。
- 特にシステムに特化した科目
 - 法情報論: 九大と双方向
 - 司法政策論: 4大学同時実施

2-2. 遠隔講義に適した形式

- 学生数
 - 合計で50名から60名は経験があり、問題なかったと思う。
 - 他拠点で50名を超えると、その拠点の緊張感の確保がむずかしい。
 - 数より教員の意識と教育技法の問題
 - 失敗の原因
 - 教員が話し続けるスタイル
 - 自拠点以外の学生への配慮ができない
- 双方向・多方向の演習形式の講義に適している。

2-3. 他の教室の把握や必要な配慮

- 教員に求められる教育技術: 他拠点優先
 - 複数拠点を一つの空間として認識すること。
 - 他拠点の視聴者を優先して、積極的に指名すること。
 - マイクの扱い(口からの距離、握り位置)
- シラバス・システムなどのメディア・ミックスが効果的
 - 教室だけで終わらない授業構成
- 相手先に補助教員がいる方が望ましい。
 - 補助と言うより共同担当とした方がよい。

2-4. 学生満足度

- 学生の意欲が低い場合、適切な授業管理ができないと、学級崩壊を起こす。
 - 内職や授業中に教室を出入りする。
- 学部レベルの「通常の文系の学習意識」では、学修成果は厳しいので、教育改革が必須。
- サポートできる教員が身近にいる機会は大変。

第3部

- 法科大学院のFD組織 = FD委員会
 - 研究科長を委員長として、各法律分野(公法系・私法系・実務系)から1名以上ずつ
- FD懇談会 = 教授会後、60分から90分
- アンケート
 - 中間/最終/試験/試験の解説の4回評価
- 授業参観
 - 授業参観学期2回・学期1回以上のビデオ撮影
- ワークショップ
- 研究科長のリーダーシップ

2015/09/14

授業と学修の協働改善

鹿児島大学法科大学院 平成23年度 FDキャンペーン

鹿児島大学法科大学院 平成24年度 FDキャンペーン

授業と学修の協働改善

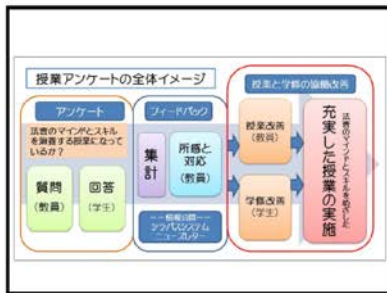
シラバスの充実と活用で到達目標を共有しよう

2015/09/14

ITを利用したFD

- シラバスシステムの活用
 - 法科大学院におけるシラバスシステム
 - 各授業で、前年度の授業評価を冒頭に掲載する。
 - アンケートの結果や教員の対応も、ここに掲載する。
- 映像配信システムの利用
 - 学内専用

2015/09/14



アンケートの改革

- 従前のアンケート
- 中間のアンケート
 - 所感と対応の作成
- 最終のアンケート
 - 所感の作成(中間との比較を交える)
- 試験問題・出題の趣旨/採点のポイントのアンケート

2015/09/14

ネガティブ・レスポンス対策

- アンケート項目の工夫
 - 教育サービスの「内容」に密着させる。
- アンケートの趣旨の説明
 - メールなどで目的を伝える。
- ネガティブ・レスポンスの背景を考える
 - 司法試験というプレッシャー

2015/09/14

3) 教育ワークショップ (14:50~16:50)

(1) 食品衛生 (33 セミナー室、鹿大参加者：望月、中馬、小原、三好、小尾、松鶴、有村、河野、山大参加者：豊福、佐藤(晃)、渋谷、下田)

テーマ：公衆衛生&食品衛生学の Hands-on 実習に向けた各対応について

下記のような議題に沿って、有村特任准教授が進行役となって協議された。

A. 両大学の現状と行うべき対策について

EU 指定科目を網羅する上で、公衆衛生・食品衛生学の授業時間数、特に Hands-on 実習の時間数を増やすことは必須であり、具体的に、屠場実習 (Hands-on 実習のプログラム化)、食品加工実習、乳衛生学実習、魚衛生学実習が必要であることが確認された。また、日本と欧州の間で教育や文化の違いはあるが、EAEVE 認証取得のため、充実した Hands-on 実習や Day-one skills に着目したカリキュラムへの改編を提案し、取り組んでいく事で一致した。

B. 各実習の Hands-on 実習のプログラム化について

a) と畜場実習

鹿児島：現在、鹿大の公衆衛生学実習を行っている末吉食肉衛生検査所における Hands-on 実習の実施を交渉中である。また、廃棄される臓器の提供について交渉予定である。

山口：現在は、大学内で、山口県と畜検査員を講師に招き、購入した臓器を用いて実習を行っている。豚に関しては、広島市からの協力で実習を行う予定である。

b) 食品加工実習

鹿児島：第一案として、大学の牧場での実施、第二案として、鹿児島県立農業大学校の施設での実施を交渉中である。

山口：今年度は、山口県立農業大学校の施設での実施を交渉中である (注：その後、来年度以降は山口大学内で実施する予定で検討中)。また、下関にある水産大学校の施設での魚類缶詰製造実習を調整中である。

c) 魚衛生学実習

一日又は半日の魚市場見学を行い、獣医学的視点を用いて、魚衛生学と関連付ける。

d) 乳衛生学実習

鹿児島：牛乳製造工程の見学がおそらく可能である。

山口：簡単な方法として、ヨーグルトの製造キットを購入し、乳酸菌数を数えるなどの実習を取り入れるのも一案である。

C. 食品衛生学実習を行う時期と単位について

上記の実習を既存の枠組みに入れると、今ある必要な部分が削られるため、屠場実習や食品加工実習を組み込んだ新たな単位を設け、さらに4年次が終わった春休みなどで、集中講義として実施できるよう提案していく事で一致した。

D. 食品衛生・公衆衛生学の時間数増加のための具体案

下記の案は、私見を含むため、今後、各専門分野の教員も交え、更なる協議が必要であることが確認された。

- ・基礎科目の実習を減らし、と畜実習と食品加工実習を追加した実習カリキュラムに改編する。
- ・実習の単位を1単位から0.5単位にする。
- ・現在の薬理実習と毒性学実習各1単位を、薬理毒性学実習1単位とし、残りの1単位を食品衛生・公衆衛生学実習にあてる。
- ・ポリクリ実習の中に、必修科目として食品衛生・公衆衛生学実習を組み込む。
- ・食品衛生・公衆衛生学以外の科目でも、食品衛生や公衆衛生に関連する授業を行い、その内容をシラバス

に記載した上で、食品衛生・公衆衛生の時間数に包含する。

- ・基礎科目が全体的に多いため、解剖学、薬理学、生理学、生化学の実習時間数を減らす。
- ・削減可能な講義の一部を実習に変える。
- ・鹿児島大学におけると畜試料の Hands-on 実習について、病理検査や食肉衛生検査などの検査を全て受け持つ「検査獣医学」という科目を新たに追加し、専任の教員を雇用して行う。

E. 総括

EAEVE が設定する食品衛生・公衆衛生の基準に達するため、様々な分野で、食品衛生・公衆衛生に関連する教育を取り入れ、それらをシラバスに記載した上で、食品衛生・公衆衛生の時間数にカウントできるよう調整していく事で一致した。また、と畜実習と食品加工実習に関しては、現段階では、それぞれの大学で、Hands-on プログラム化の推進を図っていく事が確認された。



食品衛生 WS の様子 I



食品衛生 WS の様子 II

(2) 産業動物臨床 (32 セミナー室、鹿大参加者：三角、帆保、窪田、安藤(貴)、山大参加者：田浦、高木、角川、檜山)

テーマ： 共同獣医学部における産業動物臨床獣医学カリキュラムの調整

下記のような議題に沿って、安藤准教授が進行役となって協議された。

A. 産業動物カリキュラムの内容および担当者の確認 (下記資料)

- ・産業動物臨床獣医学に関連する講義および実習について、担当教員の移動などにより担当教員不在になる科目について、双大学の担当教員の確認を行った。
- ・担当教員の変更などに伴い、双方向授業における担当大学および各大学別に実施する講義・実習についての確認および調整を行った。
- ・科目名変更が行われた講義・実習の確認を行った。
- ・豚診療学 (2016 年度前期開講) については、鹿児島大学も出口教授の後任担当が決まっておらず、両大学に担当者がいない。現状では各大学開講ということにしておき、鹿児島大学に豚を専門分野とする教員が着任した場合には、鹿児島大学からの配信を検討することとする。

B. 産業動物総合臨床実習の内容に関する検討

- ・産業動物総合臨床実習 (=ポリクリ実習) が 1 単位⇒3 単位 (145 h) に変更されたことに伴い、それぞれの実習内容の予定に関して確認を行った。
 - 山口大学： NOSAI、家畜保健衛生所、県育成農場、畜産農家 (豚、鶏) での実習を行う予定で、学内での実習時間数をもとに先方に依頼を行う。
 - 鹿児島大学： 現状では NOSAI に 5 日間、豚農場に 1 日、鶏農家に 1 日の実習は確定。残りの時間については今後の協議を行う。

C. 牧場実習（＝獣医臨床基礎実習）に関する検討

- ・2015年度は4年生を対象に山口大学が9月14日～18日の5日間で実施する（附属農場、県農業大学校）、鹿児島大学は3月に県農業大学校で5日間の実習を行う。
- ・2016年度以降は、4年生を対象に夏季休暇中に実施予定。山口大学では、附属農場で行う方向で調整を行う。鹿児島大学では農学部附属入来牧場での実施に向けて調整中であるが難航している。山口大学の実習を鹿児島で受け入れられるかについては、入来牧場における実習が可能になってから改めて検討する。

D. CBT・OSCEの実施に向けたシラバス内容の調整

- ・CBTおよびOSCEに関連する科目については、実施時期を考慮したシラバス内容になっているかを各担当で確認することとした。

E. その他

- ・特になし



産業動物臨床 WS の様子 I



産業動物臨床 WS の様子 II

(3) 学生生活（34 セミナー室、鹿大参加者：遠藤、白石、松尾、小澤、河本、鬼塚、山大参加者：柳田、日下部）（鹿大学生参加者4年生：中村昂、林原安里、3年生：大重春菜、佐多美咲）

テーマ： A. 1年次の専門科目について、B. 研究室配属について

下記のような議題に沿って、小澤准教授が進行役となって協議された。

A. 1年次の専門科目について

学生：

- ・1年次に開講される「獣医らしい」科目が少なく、モチベーションが下がった。高校時代に生物を選択した学生にとって、1年次の生物学は基本的過ぎた（ただし、物理選択者にとってはとても貴重だった）。
- ・1年次（特に後期）の開講科目がとても少なく（週5～6コマ）、多くの学生が空いた時間をアルバイトに充てていた。2年次以降は急激に科目数が増加（特に2年次後期は最も忙しい）し、1年次とのギャップで対応に苦慮した。
- ・例えば組織学・解剖学において、講義と実習が同時期に開始されるため、座学による知識の習得が不十分なまま実習を受けることになり、学習効率がとても悪く感じた。このような科目は、講義だけでも1年次に開講してもらいたい。

教員：

- ・1年次から「獣医らしい」科目を開講するためには、1年生全員があらかじめ基礎生物学を習得している必要がある。

- ・一部の専門科目で、共同獣医学部に移行してから試験の成績が下降しており、カリキュラムの変更も一因かもしれない。カリキュラムの再編には両大学間の調整や文科省の許可が必要なため容易ではないが、各学年の学習負担の平均化は、今後検討していく必要がある。
- ・確かに1年次後期と2年次後期では授業時間数に大きな差があるが、2年次後期でも、毎日ぎっしり授業が詰まっているわけではなく、対応可能なはず。
- ・一部の講義を半期前倒しして開講することで、実習の学習効率を高めることは可能かもしれない。1年次の空いた時間に「優しい解剖学」のような講義を数コマ開講することも1案としてあるが、現実的には、山口大学で行われている学士編入試験制度があるため、単純に前倒しすることは難しい。

B. 研究室配属について

確認事項：

- ・山口大学では、新カリキュラム導入後も引き続いて、3年次冬の仮配属と、4年次春からの正式配属を実施している。
- ・鹿児島大学では、共同獣医学部の学生の研究室配属は5年次春からとし、今年度より4年次の通年科目として「専攻演習」を開講した。

学生：

- ・同じシラバスで運営されているはずの両大学の「共同獣医学部」間で、研究室配属に関する対応が一致していない理由が知りたい。
- ・鹿児島大学における卒業論文研究の開始時期が1年遅くなることで、「不利益」が生じることを懸念している。
- ・研究室配属前の学生が、自発的な興味・学習意欲により特定の研究室へ出入りすることを妨げないでほしい。

教員：

- ・鹿児島大学においては、EAEVE認証で求められる臨床系実習の充実化等への対応、ならびに卒業時点におけるDay one skillsの修得を重視していて、卒業論文の比重を軽くする（ないしは廃止する）必要性が議論されている。そのため、旧課程の学生と同レベルの卒業論文研究を課すのは現実的ではない。
- ・「不利益」に感じる部分ばかりが目立つのは仕方ないが、新カリキュラムの導入によって、旧課程の学生が受けられなかった講義・実習を「利益」として捉える視点を持つてもいいのでは？
- ・今後、4年次後期以降の新カリキュラムが進められていく中で、研究室配属に関する両大学間の異なる対応の影響が見えてくるはずだが、現段階で、どちらの方式が優れているか（これからの獣医学教育に適しているか）を判断することは出来ない。
- ・教員側は、研究室配属前の学生が特定の研究室へ出入りすることで、正式配属決定時にトラブルが発生することを懸念している。ただし、学生自身の自発的な学習意欲を妨げることは本意ではなく、その対応については今後検討していく必要がある。

C. 総括

- 共同獣医学部の1期生として、旧課程の学生とは異なるシステム・カリキュラムの下で獣医学教育を受けている現4年生は、教育体制の変更の一部に対して「不利益」を感じている。新カリキュラムの導入が、教員側からの説明が不十分なまま押し進められてきた側面もあり、伝達方法も含めて改善の余地はある。
- しかし、学生が「旧課程の学生とは異なる扱いを受けること」そのものを「不利益」と感じている場合もあり、向こう数年間の経過を検証しないとその是非を判断するのは難しい。
- 教員側は、全ての場面において、学生にとってより良い状況になるよう検討・選択しているが、その旨を学生に十分理解してもらうためには、今まで以上に丁寧な説明が必要かもしれない。



学生生活 WS の様子 I



学生生活 WS の様子 II

4) 交流会 (18:00～、3 時間程度)

合同 FD 研修会終了後、18 時から魚福にて交流会が行われ、合同 FD 研修会で協議できなかったことなど話し合われた。なお、基調講演を実施して頂いた米田教授にもゲストとして参加してもらい、講演終了時に十分にできなかった質疑応答なども行われた。参加者は 18 名であった。

V. 国立獣医学系大学連携教育システム (Glexa) の使用に関わる教員研修会

日時：2015 年 7 月 15 日 16:30 開始

場所：農共同獣医共通島 301 講義室

出席者：共同獣医学部教員 22 名

本講習会は、共同獣医学部で運用が開始された E-ラーニングシステムである Glexa への理解と授業における利用を促進することを目的として開催された。主な対象者は Glexa の操作に慣れていない教員であり、22 名の共同獣医学部教員が参加した。講習会は、Glexa の基本機能とその操作方法についてまとめられた資料を用い、さらに参加者は準備された PC を用いて実際に Glexa 上で作業を行うことで講習内容を理解しやすいよう配慮された形で実施された。

最初に Glexa 概要や共同獣医学部での運用状況などについて説明したのち、広く利用されている E-ラーニングシステムである Moodle との比較から Glexa の特徴と利点を解説した。その後、Glexa 利用の基本となるログイン操作、クラス (科目) の作成、クラスへの学生・スタッフ登録方法について資料および PC 画面により具体的に示した。さらに、Glexa が持つ多彩な機能のうち利用度が高いと考えられるコンテンツ (教材) のアップロード、教材 (クイズ) 作成、学生へのメール送信、クラスのバックアップについてその基本操作と注意点を解説した。最後には、各自で Glexa を利用する際の参考となる詳細なマニュアルの入手手順を示し、質疑応答を行った。

聴講者からの質問は、Glexa の基本的操作のみならず発展的な内容にもおよび、Glexa に対する高い関心が伺われた。また今後も継続した Glexa 講習の実施を望む意見もあった。本講習により、E-ラーニングシステムに対する理解は深まり、授業における利用が促進されるものと思われた。また、本講習会での内容は、Glexa 利用上必要となる最低限の基本的操作に関わるもので Glexa がもつ機能のすべてを理解するには不十分であることから、より発展的な講習会を今後も開催することがさらなる Glexa への理解と活用の促進に必要であると考えられた。



第2節 全学FD活動への参加

I. 鹿児島大学FD委員会への出席

第1回 日時：平成27年4月30日（木）9：00～9：46 場所：共通教育棟1号館5階 第1会議室

議題 1. 平成27年度FD委員会活動計画について

2. 平成27年度FD経費予算要求について

報告 1. 平成26年度FD経費執行状況報告について

2. 平成27年度FD・SD関連フォーラム・セミナー等の情報について

第2回 日時：平成27年6月10日（水）16：30～17：05、場所：共通教育棟1号館5階 第1会議室

議題 1. 平成27年度FD活動計画・経費要求について

2. さつつんカフェ（仮称）について

報告 1. 平成27年度FD委員会ワーキンググループについて

2. 中央図書館のFD本コーナーについて

第3回 日時：平成27年7月9日（木）9：00～9：25、場所：共通教育棟1号館5階 第1会議室

議題 1. 新任教員FD研修会の開催について

2. FD・SD合同フォーラムの開催について

3. 学生・教職員ワークショップのテーマについて

報告 1. さつつんカフェについて

2. 各WGの検討内容について

第4回 日時：平成27年9月17日（木）9：00～9：30、場所：共通教育棟1号館5階 第1会議室

議題 1. FDガイド第10号の作成について

2. 学生・教職員ワークショップの開催について

3. 大学IRコンソーシアム「学生調査2015年」の実施について

報告 1. FD・SD 合同フォーラムの開催について

2. さつつんカフェについて

3. 平成26年度FD 報告書の発行について

4. 各WGの検討内容について

第5回 日時：平成27年10月23日（金）9：00～9：20、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

議題 1. 学生・教職員ワークショップの開催について（継続審議）

報告 1. 新任教員FD研修会について

2. FD・SD合同フォーラムについて

第6回 日時：平成28年1月13日（水）16：20～17：25、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

議題 1. 国立大学法人鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメント委員会規則の一部改正について

2. FD活動の推進について

報告 1. 学生・教職員ワークショップについて

2. 大学IRコンソーシアム・アンケート2014調査報告について

3. 各WG検討内容について

第7回 日時：平成28年2月12日（金）9：00～9：20、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

- 議題 1. 国立大学法人鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメント委員会規則の一部改正について（継続審議）
2. 平成28年度FD活動計画について
3. FDガイド第11号の作成について

第8回 日時：平成28年3月11日（金）9：00～10：00、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

- 議題 1. 平成28年度FD活動計画について（継続審議）
2. 平成27年度FD活動報告について

報告 1. FD関連書籍について

II. 学生・教職員ワークショップWGの活動およびワークショップへの参加

第1回打合 日時：平成27年5月22日（木）9:00～、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

第2回打合 日時：平成27年6月26日（木）9:00～、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

第3回打合 日時：平成27年9月1日（水）10:00～、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

第4回打合 日時：平成27年10月14日（金）9:00～、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

第5回打合 日時：平成27年12月8日（金）9:30～、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

平成27年度学生・教職員ワークショップ「授業アンケートの結果をどう授業に活かすか」

目的：ワークショップ参加者は、「授業評価アンケート」活用の現状と問題点を理解し、学生の意見を生かした授業を計画できるようになることを目指す。

日時：平成27年12月11日（金）16:10～19:10

場所：郡元キャンパス 学習交流プラザ 中2階 学習交流ホール

対象：教育に関心のある学生、教育に関わっている全教職員

学生：各学部より推薦を受けた学生、自主参加希望者

教員：各学部、学共施設等の学生教育に関わっている教員、教務委員、FD委員

職員：各学部学生系職員、学生部職員

内容とスケジュール（司会進行：松木FD委員、報告：半田FD委員）

- 16:10 開会挨拶（清原理事、FD委員会委員長）
- 16:15 「授業評価アンケートの現状」（富原FD委員）
- 16:25 事例紹介「山形大学の授業改善アンケートの実践と再考」
（小田隆治先生、山形大学地域教育文化学部教授）
- 17:10 グループ討議
- 17:10 説明（大和FD委員）
- 17:15 グループ討議（5グループ）
- 18:30 発表（大和FD委員）
- 19:00 アンケート記入
- 19:05 まとめ（大和FD委員）
- 19:10 閉会（松木FD委員）



ワークショップ風景

理工学研究科

平成27年度 鹿児島大学大学院理工学研究科FD委員会報告

はじめに

大学院設置基準第五章第十四条の三（教育内容等の改善のための組織的な研修等）で「大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」とされている。理工学研究科の教育理念・教育目標に基づき教育の内容及び方法の改善を図るため、理工学研究科のファカルティ・ディベロップメント委員会（以下、FD委員会）は設置された。

理工学研究科の教員は、研究科と併せて理学部と工学部を兼担し、教育・研究に当たっている。そのため、研究科におけるFD活動は学部でのFD活動と重なる活動もあるが、授業の改善など独立して行っている部分もあるが、年度の始めに立てた計画に従って実施している。

平成27年度は、前年度に続いて（1）学生による授業アンケートとそれに基づいた各教員による授業改善計画書の作成、（2）FD講演会の実施、（3）理工学研究科構成員の活動等の自己点検、（4）学生の研究活動と教育成果の点検を実施した。本報告書においては、これらの活動の概要について報告する。

なお、本報告書は学部FD委員を兼務する理工学研究科FD委員各位のとりまとめや事務職員と事務支援室職員によるアンケート調査の整理等の協力により完成したことを明記し、深謝する。

平成27年度鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 甲斐 敬美(全学FD委員会委員)

平成27年度 鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	甲斐 敬美	全学FD委員会委員（工学部副学部長）	H27.4.1～H28.3.31
委員	余 永	機械工学専攻	H27.4.1～H28.3.31
委員	前島 圭剛	電気電子工学専攻	H27.4.1～H28.3.31
委員	澤田 樹一郎	建築学専攻	H27.4.1～H28.3.31
委員	中里 勉	化学生命・化学工学専攻	H26.4.1～H28.3.31
委員	酒匂 一成	海洋土木工学専攻	H27.4.1～H28.3.31
委員	塗木 淳夫	情報生体システム工学専攻	H26.4.1～H28.3.31
委員	伊藤 稔	数理情報科学専攻	H27.4.1～H28.3.31
委員	半田 利弘	物理・宇宙専攻	H27.4.1～H28.3.31
委員	坂井 雅夫	生命化学専攻	H27.4.1～H28.3.31
委員	井村 隆介	地球環境科学専攻	H27.4.1～H28.3.31
委員	山本 高師	理工学研究科事務部長	

第1章 平成27年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動

1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画と理工学研究科のFD活動

鹿児島大学の中期目標・年次計画の大学院課程におけるFDに関連が深い項目を表1.1にまとめた。これらの計画にそって、理工学研究科のFD委員会ではFD活動を実施した。

表1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画の大学院課程におけるFDに関連が深い項目

中期目標	中期計画
知識社会を担う高度専門職業人や研究者等の育成をめざした大学院教育の質を向上する。	大学院教育カリキュラムを整備・拡充するなど、大学院課程における学位の質を保証する方法を確立する。
グローバル化推進に対応した、国際的に活躍できる人材育成する。	幅広い国際的視野を育成する実践的な教育プログラムを実施する。
教育の質の向上を図る教育研究体制を整備する。	「進取の精神」を有する人材を育成するために、FD活動等を充実し、教員の教育力向上に向けた取組を展開する。
全学的な研究支援体制を整備する。	次世代を担う研究者等を支援する体制を整備する。

1.2 理工学研究科FD委員会

理工学研究科は平成21年度から部局化に伴って新しい理工学研究科としてスタートした。前期課程は工学系が6専攻（機械工学専攻、電気電子工学専攻、建築学専攻、化学生命・化学工学専攻、海洋土木工学専攻、情報生体システム工学専攻）、理学系が4専攻（数理情報科学専攻、物理・宇宙専攻、生命化学専攻、地球環境科学専攻）の10専攻から選出された各委員から構成されている。本年度は理工学研究科のFD委員会を2回行った。

平成27年5月19日に第1回の理工学研究科FD委員会を開催した。本委員会では、平成27年度FD活動計画について議論を行い、次の6項目を実施することが承認された。(1)FD講演会の実施、(2)学生による授業評価、(3)他大学主催のFD研修会参加及び調査、(4)学生の研究活動と教育成果、(5)海外実習報告、(6)GPA制度の現状と学習成果。

第2回（2月9日）の委員会では、平成27年度研究科FD活動報告書の作成について、分担の確認と内容について検討を行った。各専攻の授業アンケートの結果の評価について、昨年度までは各専攻がそれぞれのスタイルでとりまとめていたが、今年度からは図の内容とフォーマットを統一することとなった。また、今年度から、特筆すべき取り組みについて独立した章にまとめることとなった。平成27年度に導入された「学年4期分割授業日程」および「大学院理工系イノベーション海外研修 GOESプログラム」について、第6章で紹介する。

第2章 理工学研究科FD講演会とFD活動

2.1 理工学研究科FD講演会（余 永）

平成27年度の理工学研究科FD講演会は、工学部、理学部、理工学研究科FD委員会の共同主催として企画され、平成27年4月30日（木）13時30分～15時30分まで、工学部建築学科棟01号教室で開催された。講師としてお招きした米国・ニューヨーク州立ニューヨーク・シティ大学機械工学科教授・同大学エネルギー研究所副所長川路正裕先生は、カナダ・トロント大学工学部化学工学科前教授でもあり、「北米の大学・大学院における工学教育・研究・学科の運営について」という演題で講演をしていただいた。講演会への参加者は、教員76名（工系：64名，理系：8名，他学部4名）、事務・技術職員16名と学生49名の合計141名であった。

講演に先立ち、近藤研究科長から開会挨拶があり、多くの教員にとってFD活動に関する認識は単なる授業改善とどまっている一方で、最近、FDとして扱う分野が広がっている背景が説明され、大学教育・研究・運営を改善していくために、本講演での米国やカナダの大学の工学教育・研究・学科の運営から学ぶことは非常に貴重な機会になると説明された。引き続き甲斐FD委員長から講演者の経歴および所属等の紹介の後、講演が始まった。

講演は主に、米国とカナダの3つの州立大学（ニューヨーク・シティ大学、トロント大学及びミシガン工科大学）の工学部機械工学科及び化学工学科での研究費調達、院生の教育と研究指導、学科の運営、人事等について話していただいた。講演者は、1986年からこれまでカナダのトロント大学工学部化学工学科および米国のニューヨーク州立ニューヨーク・シティ大学機械工学科にて教鞭を執っているが、その間学科内の教務や人事、教員の業績評価などにも直接関わってきた。また、フランスの国立研究所へ半年間滞在した折、フランスでの工学教育に関して大学の教員や研究者らから話を聞く機会に恵まれ、北米とヨーロッパの工学教育には色々な相違点があることを知った。近年日本でも政府の教育再生会議などで大学・大学院教育の改革が議論されているが、教育改革の方向や将来の工学教育のあり方などを考える上で、国外の事情を知っておくことは有用であると思われる。そこで、北米の大学及び大学院における工学教育・研究の現状、特に、研究費調達、院生の教育と研究指導、学科の運営および人事等についてテーマに沿って講演された。具体的に、①連邦政府と州政府の研究支援機関及び企業からの研究費の調達（エネルギー関連の研究費の種類、申請、審査及び採択率など）；②教育（学部生と院生の入学から卒業までに行われる審査、単位取得、院生への手当て支給、卒論研究の指導など）；③学科の運営（学科主任の役割、教官の業績査定と待遇、職員の役割など）；④人事（新しい教官採用における選考過程、テニユア（終身雇用）制度と審査、教授への昇格人事など）を詳細に説明・紹介していただいた。

講演後には聴講の教員と学生から6件の質問があり、講師の方から回答していただいた。



2.2 海外実習報告（前島 圭剛、井村 隆介）

鹿児島大学理工学研究科（工学系）では、学生の海外研修を支援するために、「岩崎国際学術交流基金」が設けられている。

また、「グローバルに活躍できる理工系人材」を育成することが社会から要請されており、平成27年度Q2期に「共通科目：理工系国際コミュニケーション海外研修」として実施された。その中で「大学院理工系イノベーション海外研修（Graduate Overseas Engineering and Science Studies for Innovation: GOES）」に理工学研究科では13名の学生が参加した。上記研修を含む一部を下記のとおり紹介する。

国立カルナタカ工科大学（インド）での研修：岩崎国際学術交流基金事業により、平成28年1月31日～2月6日に、海洋土木工学専攻の長山昭夫助教、同専攻大学院博士前期課程1年生2名、インド人ポストドク研究員1名の計4名が、学術交流協定機関であるインド・カルナタカ国立工科大学（NITK）を訪問し、テクニカル・プレゼンテーションとテクニカル・ツアーに参加した。テクニカル・プレゼンテーションは2月2日、NITK構内のDepartment of civil engineering棟で開催された。NITKの教員、大学院生（約30名）が出席する中、鹿児島大学から訪問した教員・大学院生の全員が英語による研究成果の発表とディスカッションを行った。さらにNITK学長・理事を表敬訪問、関連分野の研究者との学術交流を行った。

サンノゼ州立大学（アメリカ）での研修：平成27年度より学年4期分割授業日程を導入し、グローバル教育の一環としてアメリカ合衆国カリフォルニア州サンノゼ、サンディエゴにおいて「大学院理工系イノベーション海外研修 GOESプログラム」を平成27年6月7日～9月14日の約3ヶ月半の期間にわたり実施し、13名が参加した。同プログラムは、語学研修、理工学系研修、就業研修の3部構成になり、本学協定校サンノゼ州立大学やサンディエゴ州立大学で行われ、語学学校で、ライティングやリーディング、オーラルコミュニケーションの授業を受け、サマースクールで、外部の講師を招いた講義や海外の学生とのチームプロジェクト、会社見学などを行った。就業研修は学生により異なった研修内容で実施した。ある学生はArdenwood Historic Farmで植物や動物を育てたり、公園で行われている子供向けの授業を手伝い、別の学生は現地企業や博物館において研修を受けた。

アウラデイ研究所（スペイン）での研究：平成27年10月29日～12月10日の間、日本学術振興会・二国間共同研究の支援を受けて、生命科学専攻の博士前期課程2年生1名が、スペイン・アウラデイ研究所のBecana教授の研究室に滞在した。先方の大学院生らと共同で植物ヘモグロビンの遺伝子発現を分析し、組換え植物ヘモグロビンの一酸化窒素（NO）除去活性をNO特異的電極を利用して測定する方法を実習した。

インドネシア北スマトラのレウサー山国立公園での熱帯雨林の研究：平成28年10月21日～11月15日の間、インドネシア北スマトラのレウサー山国立公園で、地球環境科学専攻1年生1名が、熱帯雨林の植生について研究を行った。

2.3 他機関主催FD研修会参加報告（塗木 淳夫）

平成28年3月17日に京都大学吉田キャンパスにて開催された、京都大学高等教育研究開発推

進センターの主催による「第 22 回大学教育研究フォーラム」に参加したので、以下報告する。

本フォーラムは、これまで 20 年以上にわたり、大学教育の最新動向や知見に関する情報交換や交流の場として、全国の大学・高等教育関係者の多く参加があり、大学教育に関わる優れた実践と研究の成果共有と蓄積に貢献している。本会も日本全国から 600 名以上の参加があり、これまでの積み重ねの成果を感じた。個人研究発表として、大学における授業開発・カリキュラム開発、FD（ファカルティ・ディベロップメント）、授業評価・成績評価等の大学教育に関わる評価、さらに ICT（情報通信技術）の普及に伴う e-learning やブレンディッドラーニング（対面型の「集合研修」とオンライン型の「eラーニング」を組み合わせ、それぞれの特長を活かした研修や学習方法）等の取組を通じ、各大学等で精力的に進められている実践的・実証的研究の交流の場が設けられた。さらに、最近の大学教育における重要課題やトピックを取り上げた小講演、参加者企画セッション（シンポジウム、ワークショップ、ラウンドテーブルなど）が行われた。

今回の全体シンポジウムのテーマである、「高大接続が大学教育に及ぼす影響—私たちは何を理解すべきか」の 4 講演について、紹介する。京都大学教育・情報・評価担当理事の北野正雄教授のあいさつに始まり、京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一教授より、本集会の開催趣旨説明が説明され、4 件の話題提供が行われた。それぞれの講演者と題目は以下の通りである。

1. 「新しい入試の役割—選抜から接続へ—」 内村浩教授（京都工芸繊維大学）
2. 「学びと成長を見据えた高大接続・高大連携—アクティブラーニングでつなぐ、つながる—」
川妻篤史教諭（桐蔭学園 教務統括主任）
3. 「高大接続の改善を見直したカリキュラムと評価の改革—京都大学教育学部特色入試の試みを中心に—」
西岡加名恵准教授（京都大学大学院教育学研究科）
4. 「高大接続改革について—その理念と高等学校・大学への期待—」
北岡龍也課長補佐（文部科学省高等教育局大学振興課）

現在、学力の三要素（①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体性・多様性・協働性）を軸として、高校教育と大学教育、それを繋ぐ大学入学者選抜の一体的改革が進められている。内村氏は、変わる大学入試の観点から、川妻氏はアクティブラーニングを推進する高校教育の現場から、西岡氏は高校から大学までを一体的に繋ぐカリキュラム・評価の観点から、北岡氏は高大接続改革を推進する文部科学省の立場から講演を行った。内村氏は、新しい入試で何をどのように測るか？という問いに対し、「主体的な学びを評価する入試」が大事であることを示した。ただし、このような入試の場合、社会的に納得できる評価システム作りが大事であることを説明し、ダビンチ入試の紹介や具体的な問題例を紹介した。川妻氏は、桐蔭学園で実際に国語の教師として現場で行ったアクティブラーニングの実践例を紹介した。アクティブラーニング後の生徒の声はポジティブなものが多かったが、教師の立場からすると学習指導要領に従って教えないといけない事も多く、アクティブラーニング型授業で大学進学を乗り切れるか実際の所、不安を持っている教師も多いという事であった。西岡氏は、京都大学で H27 年度に行った特色入試の説明を行った。特色入試とは、高等学校における幅広い学習に裏付けられた総合力と学ぶ力および高い志を評価し、個々の学部が定めたカリキュラムと教育コースを受けるにふさわしい学力と意欲を備

えた者を選抜する試験である（募集は6名）。本試験は、出願要件（評定4.3以上など）で25名選抜し、第1次選抜の書類審査で12名に選抜（調査書、学びの報告書（生徒が作成）、学びの設計書）、第2次選抜の課題と口頭試問で7名に選抜（パフォーマンス重視）、第3次選抜で5名に選抜（大学入試センター試験80%以上）する方法である。西岡氏は、特色入試は入学者の幅を広げ、学部教育の見直し、高校現場へ発信する上で非常に意義のあることであることを述べていた。しかしながら、本方法での入試は教員の負担が非常に大きく、同時に受験生にとっても負担が大きかったであろうことを述べていた。また、評価できる学力に偏りが生じることも問題点としてあげていた。このような特色入試は、京都大学だけでなく筑波大学や九州大学でも取り入れていることを紹介していたが、本学で実際に導入する場合は、先に導入している大学入試の問題点を見極め、綿密な入試設計を行う必要があると強く感じた。最後に北岡氏は、高大接続改革は、先に述べた「学力の三大要素」を軸とし、義務教育の改革成果をベースにして、高等学校教育、大学入学者選抜、大学教育を一貫したものとして接続するためのシステム改革であることを説明した。そのためには、「高等学校教育」と「入学者選抜（大学入試）」は一緒に代わる必要があり、今後少子化・国際競争の進展の中で、大学教育の質的転換（しっかりと学ぶ大学教育へ）を進めていく必要性を強調した。大学入試選抜と高等学校教育は表裏一体の関係にあり、大学教員は大学教育の質的向上に対して常に努力していく必要があると感じた。

以上4件の事例研究の後、簡単な質疑応答が行われたあと、閉会となった。「高大接続が大学教育に及ぼす影響について」実際の取り組みと、数々の問題点を知ることができ、有意義な研修であった。

第3章 学生による授業評価

3.1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

理工学研究科では、平成27年度も前年度と同様に授業評価アンケートを実施した。大学院の授業に対する学生の意見を適切に抽出するために授業アンケートの設問項目と内容は前年度と同様とした。

表 3.1.1 理工学研究科授業評価アンケートの結果(平成27年度)

平成27年度前期											
項目	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
機械工学専攻	4.45	3.54	4.11	4	4.11	4.3	4.4	4.1	4.16	4.11	4.39
電気電子工学専攻	4.48	3.01	3.9	3.69	3.8	3.98	4.1	3.94	3.77	3.83	3.98
建築学専攻	4.65	3.23	3.9	3.92	4.04	4.27	4.27	4.19	4.4	4.12	4.23
化学生命化学工学専攻	4.34	2.73	4.13	3.91	4.2	4.32	4.39	4.12	4.13	4.24	4.45
海洋土木工学専攻	3.38	2.88	4.42	4.12	4.12	4.5	4.54	4.38	4.5	4.5	4.54
情報生体システム工学専攻	4.55	2.61	3.91	3.8	3.85	3.93	4.08	3.96	4.03	4.02	4.22
数理情報科学専攻											
物理・宇宙専攻	3.82	2.24	3.59	3.41	4.06	3.88	4.12	3.59	3.71	4	4.06
生命化学専攻	4.82	1.74	4.1	3.97	4.18	4.13	4.31	4.05	3.77	4.05	4.41
地球環境科学専攻	4.19	2.44	3.94	3.69	3.69	3.81	4.44	3.81	4.25	4.06	4.12
理工学研究科(工学系)平均値	4.31	3.00	4.06	3.91	4.02	4.22	4.30	4.12	4.17	4.14	4.30
理工学研究科(理学系)平均値	4.28	2.14	3.88	3.69	3.98	3.94	4.29	3.82	3.91	4.04	4.20
理工学研究科平均値	4.30	2.71	4.00	3.83	4.01	4.12	4.29	4.02	4.08	4.10	4.27
平成27年度後期											
項目	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
機械工学専攻	4.4	3.32	4.19	4.09	4.26	4.37	4.48	4.29	4.06	4.15	4.53
電気電子工学専攻	4.21	3.21	4	3.79	4.03	4.09	4.15	4.11	4	4.12	4.24
建築学専攻	4.05	3.64	4.02	3.91	4.07	4.29	4.22	3.84	4.04	3.76	3.95
化学生命化学工学専攻	4.1	2.61	4.35	4.11	4.2	4.52	4.59	4.44	4.16	4.47	4.62
海洋土木工学専攻	3.33	3	4.33	4.56	4.44	4.56	4.56	4.56	4.67	4.67	4.44
情報生体システム工学専攻	4.4	2.61	3.85	3.7	3.65	3.98	4	3.84	3.72	3.79	4.01
数理情報科学専攻											
物理・宇宙専攻	4.52	2.02	3.67	3.72	3.8	3.76	4.09	3.7	3.87	3.83	4.04
生命化学専攻	3.86	1.95	3.93	4.16	4.3	4.26	4.37	3.93	3.84	4.02	4.35
地球環境科学専攻	3.64	1.45	3.64	3.64	3.82	3.73	4.09	3.91	3.64	3.36	4
理工学研究科(工学系)平均値	4.08	3.07	4.12	4.03	4.13	4.28	4.33	4.18	4.11	4.16	4.30
理工学研究科(理学系)平均値	4.01	1.81	3.75	3.84	3.97	3.92	4.18	3.85	3.78	3.74	4.13
理工学研究科平均値	4.06	2.65	4.00	3.96	4.08	4.16	4.28	4.07	4.00	4.02	4.24

3.1.1 工学系専攻の授業評価アンケートの結果報告(中里 勉)

平成22年度から平成27年度までのアンケート結果を比較したものを図3.1.1に示す。平成27年度は総じて前年度より若干落ち込みを見せているものの、項目②を除きいずれも4.0付近を推移している。項目②の評価のみが3.0程度(つまり予習と復習を合わせて1~2時間程度)と低くなるのは毎年確認されており、修士論文の研究活動時間が大きく影響している可能性が高い。学生の理解度を確実なものとするには、学生が授業時間外学習の大切さを自ら自覚して積極的に行動に移せる仕掛けを授業担当教員が作っていく必要があると思われる。

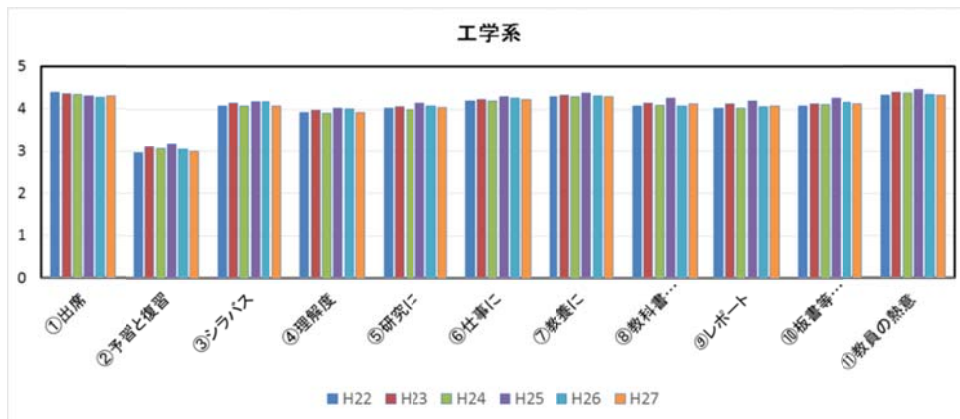


図 3.1.1 博士前期課程（工学系専攻）授業評価アンケート結果の推移

3.1.2 理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（伊藤 稔）

「予習と復習」以外の項目は、いずれも 4 前後の高い評価である。またほとんどの項目は、6 年間全体では上昇傾向にある。各教員の努力で授業が改善されているのだろう。ただし今年度は「出席」以外の項目は、評価点が下がった。どうしたのだろうか。クォーター制の導入が何か影響しているのだろうか。

「予習と復習」の評価点は、他の項目と比べて低い。過去の報告書では、これは予習復習をあまり必要としない授業形式を採用しているためと推測している。仮にこの推測どおりだと、このことの是非は簡単には判断できない。自宅学習の必要性をより高めるべきという考え方もあるだろうし、現状のままでよいという考え方もあるだろう。

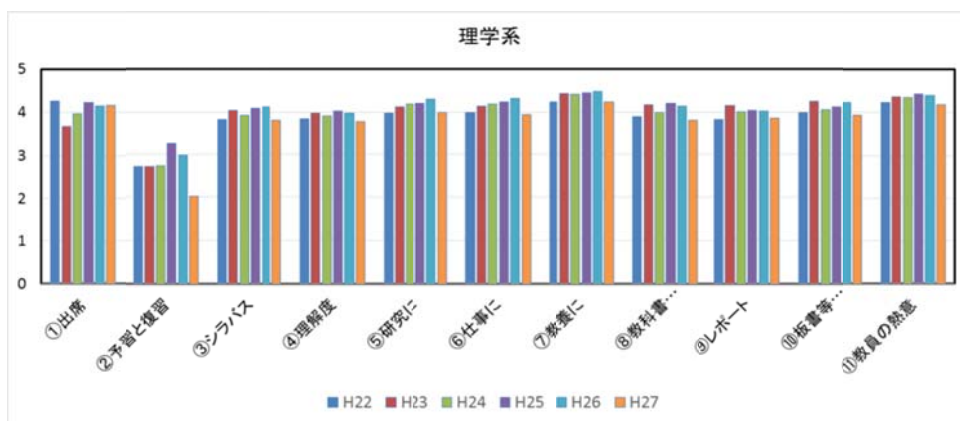


図 3.1.2 博士前期課程（理学系）授業評価アンケート結果の推移

3.2 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

3.2.1 機械工学専攻（余 永）

機械工学専攻の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの結果を図 3.2.1 に示す。この結果は、主なアンケート項目の評価点について 1 年間に開講された科目で平均した点の過去 6 年間における推移を示している。

平成 19 年度後期から理工学研究科 FD 委員会として新規にアンケートの実施を始めたことによる

アンケート項目の変更があった。また、平成 21 年度にはアンケート項目の簡素化と精査が行われた。今回は、アンケート項目変更のない平成 22 年度からのものとして考察する。

図 3.2.1 より、平成 22 年度から平成 23 年度までは右方上がりではあるが、平成 23 年度からはほぼ横ばいの傾向を示していることがわかる。平成 26 年度からは前年度に比べ評点がわずかに低くなっているが高い水準を維持していることから、教員による授業改善への成果が現れていると考えられる。ただし、項目①の「出席」について、高い水準を維持しているが、平成 22 年度より平成 23 年度の評点がやや低くなり、平成 24 年度からはほぼ横ばいとなっている。

項目②の「予習と復習」について見ると、平成 22 年度からはほぼ横ばいとなっている。教員が課外レポート等による授業の予習・復習の方式が定着してきたといえる。

項目③の「シラバス」、項目④の「理解度」、項目⑤の「研究に（役立つ）」については、平成 23 年度は上昇してその以降は高い点を維持している。教員が授業改善に意識して取り組んでいる結果であろう。

項目⑥の「仕事に（役立つ）」と項目⑦の「学力に（役立つ）」については、役立つと考えている学生が多い。項目⑪の「教員の熱意」についても高い点を維持している。

今後も継続的な授業評価アンケートの実施と分析により、教員と学生の意識改善に役立てていくことが重要である。

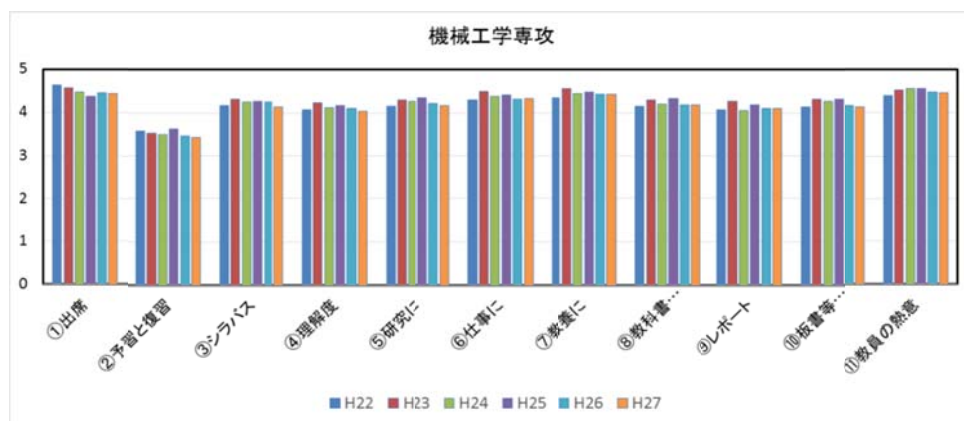


図 3.2.1 機械工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.2 電気電子工学専攻（前島 圭剛）

図 3.2.2 に、電気電子工学専攻の過去 6 年分（平成 22 年度から 27 年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す。平成 27 年度は前年度と比較すると「設問 1：出席」が増加したほかはほぼ前年度と同等の評点であった。また、過去 6 年の平均と比較すると、設問 1 及び 2 の受講態度に関することは平均値に近かったが、それ以外の項目はやや低くなっていた。これらのことから、授業に臨む態度として以前とそれほど変わっていないのに対して、学生の理解度や求めている内容と実際に行われた授業内容は少しずれていることを示している可能性がある。

項目別にみると出席は 4.3 程度と高めになっていて、設問 1 及び 2 を除く項目は 4.0 前後の評点であった。その中で「設問 4：理解度」が 3.7 程度と若干低めになっている。学習した内容を研究や社会で生かしていくためには十分理解している必要があり、理解度を高めていくことが重要で

ある。理解度が低いことは「設問2：予復習」が低いことと関連がある可能性がある。全体を見ると「設問2：予復習」の評点が他の項目に比べての大きく低いことが、やや危惧される点である。予復習を十分に行うことで理解度の向上にもつながることが期待されるので、予復習の時間の増加が更なる授業改善のポイントと考えられる。これらの項目を含め、評点の現状維持または向上が実現できるか、来年度以降も傾向を注視していく必要があると考えられる。以前から本専攻では担当教員の演習問題やレポート、発表方法等の改善に向けた継続的な努力により授業改善に努めてきているが、さらに講義形式の工夫、オフィスアワーの充実、演習課題・レポートの質と量の改善、予復習などの時間外学習を充実させるための工夫などを継続していくことが重要であると考えられる。

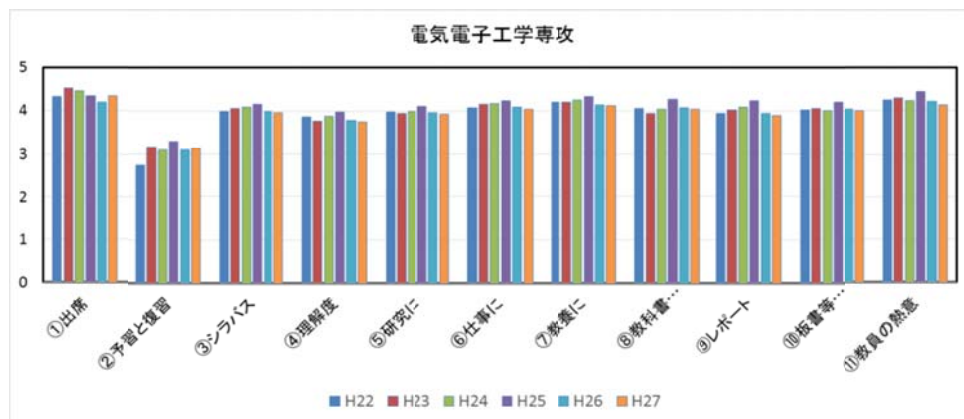


図 3.2.2 電気電子工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.3 建築学専攻（澤田 樹一郎）

建築学専攻の講義科目の授業アンケートの年度ごとの評点平均値の推移を図 3.2.3 に示す。多くの項目において、平成 25 年度がピークを迎え、その後、低下傾向を示している。本年度前期の「②予習と復習」、本年度後期の「⑩板書等」、「⑪教員の熱意」の低下が比較的大きい。今後、科目別の詳細な分析などにより、評点の現状維持又は向上への方策を考える必要がある。

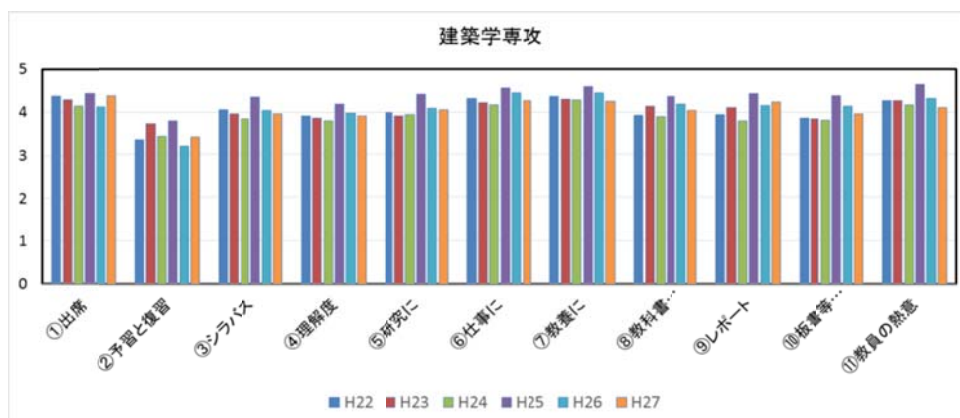


図 3.2.3 建築学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.4 化学生命・化学工学専攻（中里 勉）

化学生命・化学工学専攻の最近6年間（平成22～27年度）の授業アンケート結果を図3.2.4に示す。項目②予習と復習の評価が2.5付近と低いのを除き、ほとんどの項目で4.0付近の評価を得ており、総じて高い評価を受けている。特徴的な傾向として、項目②の評価は理工学研究科（工学系）の平均レベルの3.0よりも低い。教員側がもっと積極的に学生に時間外学習を促すよう、働きかけが必要と考えられる。一方、項目⑥⑦⑩⑪は最近3年間で上昇傾向にあり、改善の傾向が伺える。

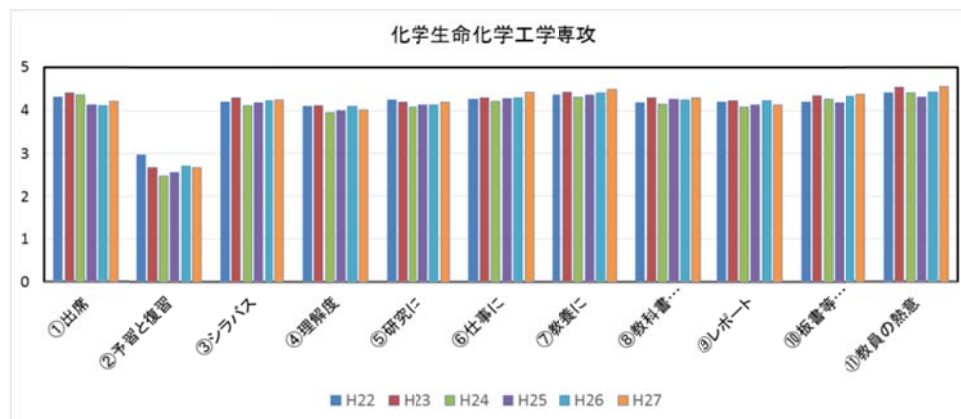


図 3.2.4 化学生命・化学工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.5 海洋土木工学専攻（酒匂 一成）

海洋土木工学専攻における平成22年度～平成27年度の過去6年間の授業アンケートの結果を表3.2.5および図3.2.5に示す。この結果を見ると、平成27年度は、ほぼ例年通りの傾向が見られる。③「この授業のシラバス記載内容は受講申請に役に立ちましたか」、④「授業はほぼ理解でき、学習目標は達成できそうだ」、⑥「授業の内容は目指す（職業上の）高度専門知識として役立つと思う」、⑦「授業の内容は自身の教養や学力を高める上で役立つと思う。」などの項目について、過去5年間に比べ上昇している傾向が見られることから、教員の講義内容改善の効果が見て取れ、大学院の講義に対して学生は所定の満足を得ているものと判断される。ただし、設問①「授業にどれだけ出席しましたか。」は、他年度に比べ低下している。また、設問②「予習と復習は毎週どれくらいしましたか。（レポート作成時間も含みます）」の評価は例年同様、低い評価であるため、今後も改善に向けた努力が必要である。

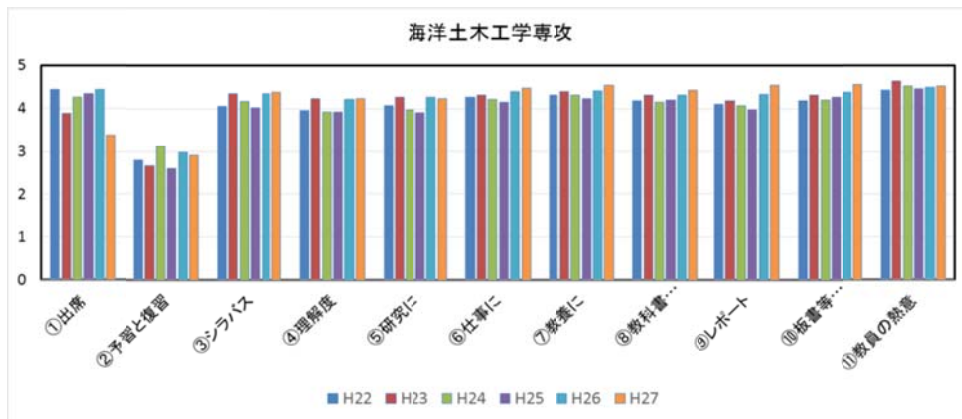


図 3.2.5 海洋土木工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.6 情報生体システム工学専攻（塗木 淳夫）

平成 21 年度に改組が行われ、情報工学専攻と生体工学専攻生体電子工学講座が統合して情報生体システム工学専攻が立ち上がり、7 年が経過した。情報生体システム工学専攻の FD 授業評価アンケートは平成 21 年度から 27 年度分の 7 年間のデータが収集されていることになる。ここではその 6 年間の経年変化を見ることにする。今年度の FD 活動報告書では、情報生体システム工学専攻のデータと平成 27 年度の工学系専攻の平均値及び平成 27 年度の理工学研究科全専攻の平均値と比較することによって評価と論評を加えたい。

比較対象となった 11 項目について情報生体システム工学専攻の集計結果を図 3.2.6 に示す。

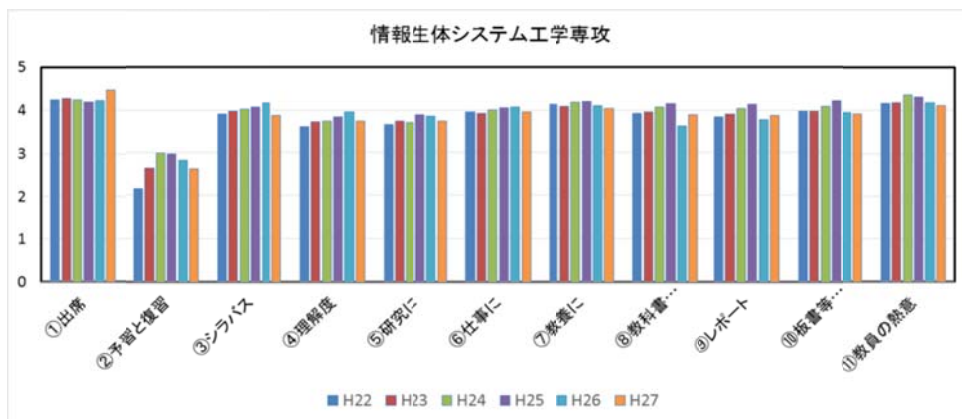


図 3.2.6 情報生体システム工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

集計した科目数は、21 科目であった。

6 年間の推移を見ると、ほとんどの項目で右肩上がりの傾向となっていたが、平成 27 年度は平成 26 年度に比べて全体的に若干評価が下がっている。特に、「③シラバス」「④理解度」の項目が著しく下がっており、シラバスの見直しは必要であろう。逆に「⑧教科書・教材は適切か」は大きく評価が高くなっており、個々の授業での改善が見られた結果であると思われる。

平成 27 年度「①出席」の項目の評価は、前年より評価が上がった。しかしながら前期よりも後期の出席評価は低く、就職活動や研究活動の追い込みによる影響が考えられる。

平成 27 年度後期の「⑩教員の熱意」の評価は、前期の評価比べて低い評価となったが、4.0 を超えており問題はないと考えられる。

「②予習と復習」の項目は、昨年度の評価とあまり変わりがなく 3.0 に達していない。また、「④理解度」、「⑤研究に役に立つか」、「⑥仕事に役立つか」の 3 項目は、専攻の平均値と比べて、評価が低くなっている。これらの点は、次年度以降、改善すべき課題である。

3.2.7 数理情報科学専攻（伊藤 稔）

数理情報科学専攻では、今年度はどの講義も受講者が少人数だったため授業評価アンケートは行わなかった。少人数では統計的な意味がほとんどなく、さらに匿名性が保証できないという問題もあるためである。今年度のデータはないが、ここ 6 年間のデータを参考のため示しておく。



図 3.2.7 数理情報科学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.8 物理・宇宙専攻（半田 利弘）

本専攻での学生による授業評価アンケートの回答項目別評点を図 3.2.8 に示す。回答を科目毎に平均した上で、開講期を問わず 1 科目毎に同一重みで平均した。

ほとんどの項目が 4 点程度であるが、自学自習時間についての回答値だけが目立って低い。しかし、言葉による回答番号を単純に数値化しているため数値自体は意味を持たないため、このような項目間との比較も意味があるとはいえない。受講生数等の条件が異なるため、他専攻との比較は余り意味がない。

したがって、過去 6 年間の変化についてしか述べることはできないが、この間で劇的な変化、継続的な変化は見られない。強いて挙げれば、H25 年を境に出席率が回復に転じているものの、同じ頃から教員の熱意の受取に低落化傾向が見られることであるが、同程度の変動は他の全ての項目に見られることなので有意な違いとは言えない。例えば、前年との比較で見ると、①は増加、③～⑪は全て減少となっているので学生の評価基準が少し厳しくなっただけとの見方もできる一方で、②が減少していることを考えると、不当に厳しくなったという評価もできる。

前年度の報告書でも述べられているが、こうした状況を見ると、ここから授業の評価や改善について指針を示すのは限界がある。回答選択の相関を調べることも含め、授業アンケートだけに頼らない、他の手段による授業評価も併せた上での分析が必要であろう。

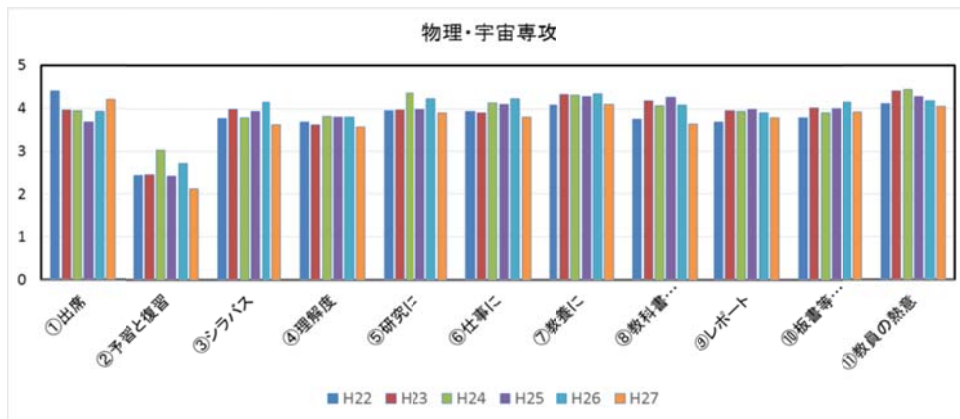


図 3.2.8 物理・宇宙専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.9 生命化学専攻 (坂井 政夫)

図 3.2.8 は、本専攻における授業アンケート各項目の平均点の平成 22 年度からの年次推移である。今年 (平成 27 年度) は、前期でクォーター制に移行したこともあり、そもそもアンケートが行われた件数が少ないという問題があった (26 年度前期は 8 科目、27 年度前期は 3 科目)。本専攻は (理学系専攻全体に言える事だが)、例年「予習と復習」の点数が低いですが今年は特に低かった。これはそもそも、「予習と復習」を重視するような講義ではないものがあることと、アンケート実施科目が例年より少ないことなどから、低い方に振れたと考えられる。一方、「教員の熱意」は例年比較的高く、今年も高いレベルにあった。

大学院の講義は比較的少人数で行われているので、実際には学生から教員が直接意見も聞いているはずで、それが講義にも反映されているはずであるが、それがこのアンケートでは出てきていない。前年度との比較という形で分析している限りはアンケート項目は変更できないわけであるが、そろそろ、アンケートの取り方、どのような項目を聞くのかについても検討する時期なのではないかと思われる。

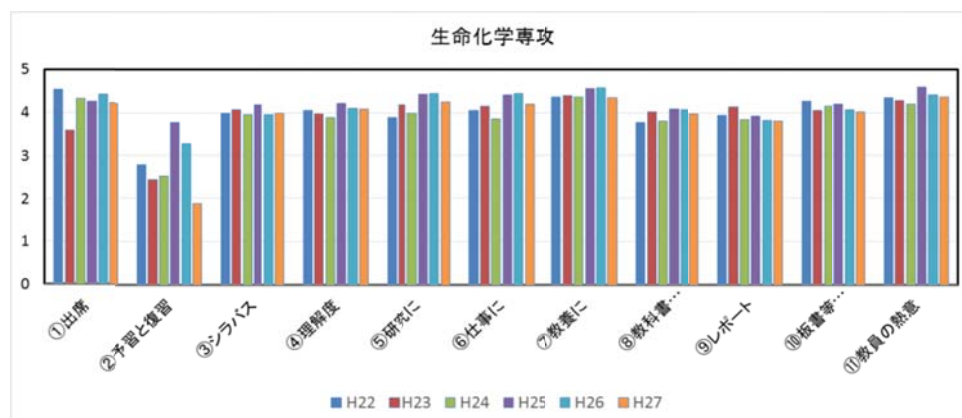


図 3.2.9 生命化学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.10 地球環境科学専攻 (井村 隆介)

平成 22 年度～平成 27 年度のアンケート結果を、図 3.2.10 に示す。全体として、「②予習と復習」

以外の各項目は4.0以上であり、全般的によい結果となっている。「④理解度」、「⑤研究に」、「⑥仕事に」は専門の理解度と類似するのは理解できるが、「⑦教養に」がさらに高い評価ということは、教員側が、受講生の研究分野が違ってもある程度は理解でき、興味の湧く授業に心がけている結果と考えられる。

地球環境科学専攻では、修士論文を書き上げるために野外での観察や観測、室内での実験が必要である。その際には、調査や観察に適した季節があるなど自然現象による制約や、実験機器の使用のスケジュールなどの条件を整える必要があり、自由な時間を必ずしも毎日確保できるとは限らない。「②予習と復習」の時間が十分に確保できていないのは、そのせいかもしれない。

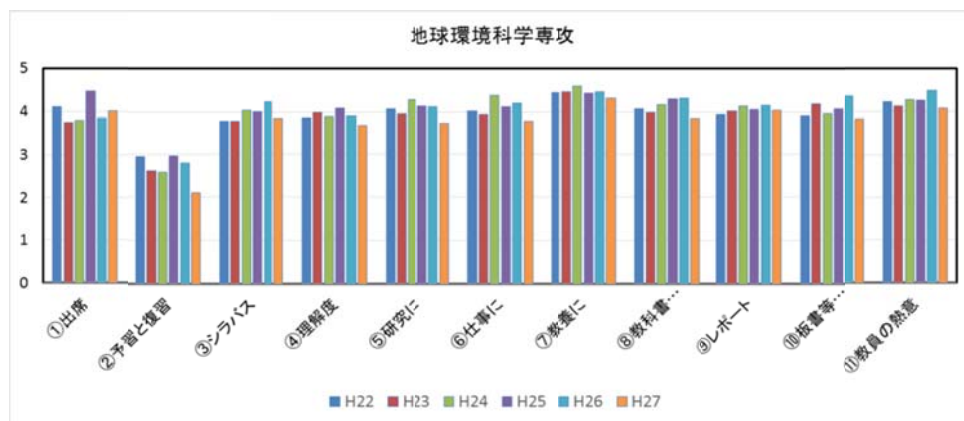


図 3. 2. 10 地球環境科学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3. 3 授業計画改善書の活用

(1) 機械工学専攻

学部(学科)と同様に、専攻のFD委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目GPAとともに専攻教育評価委員会が整理して分析を行っている。専攻教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「専攻教育評価委員会報告書」としてまとめている。この報告書は冊子とCD-ROMの形で保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

(2) 電気電子工学専攻

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケート回答用紙(実施済みのもの)と共に学科事務室にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として理工学研究科FD委員が管理し、専攻FD委員会において授業改善に向けた活用方法等を議論している。

(3) 建築学専攻

前年度に引き続き、授業改善計画書に関しては、全科目の評点を専攻内で閲覧可能にして問題点を共有することになっている。建築学専攻では、コースワーク科目など複数教員で担当する科目も多いため、それらの科目では、授業アンケートの結果を複数教員で確認し検討した結果を授業改善に結び付けている。

(4) 化学生命・化学工学専攻

各教員は、授業計画改善書の作成により授業内容や進め方に問題がなかったか再確認するとともに、改善に向けた取り組みを継続的に行っている。FD委員は、各教員より提出された授業計画改善書を確認し、保管する。不備がある場合は、FD委員が差し戻しを行い、不備箇所を指摘して再提出させている。問題が発見された場合には、専攻長と協議の上、対応を検討する。

(5) 海洋土木工学専攻

海洋土木工学専攻は、環境システム工学コースと建設システム工学コースという2つのコースに分けられている。コース毎に専門性や取得すべき必修科目が異なっているため、各コースで科目部会（環境システム科目部会と建設システム科目部会）を開催し、担当科目数のバランスや授業改善等について検討を行っている。また、授業アンケートに対して担当教員は授業計画改善書を作成し、本専攻の教育点検を継続的に改善するために活用している。これらの取り組みは、JABEE受審以降継続的に実施されている。

(6) 情報生体システム工学専攻

情報生体システム工学専攻では平成22年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能となるように管理している。各教員による授業改善への取り組み及び結果を教員全員で共有することで、情報生体システム工学専攻全体の教育内容への継続的な改善を試みる。

(7) 数理情報科学専攻

担当教員は授業アンケートに対して授業計画改善書を作成、提出し、保管は担当教員自身が行っている。特に、授業計画改善書には、昨年、一昨年の評点を記入する欄があり、各教員が授業計画改善書を作成する際に評点の推移を確認することが、継続的かつ効率的な授業改善につながる重要な要素となっている。授業アンケートおよび授業計画改善書を、専攻内の他の教員に公開するような体裁は、今のところっていない。

(8) 物理・宇宙専攻

授業アンケートを行った教員は、その結果を踏まえた授業計画改善書を作成し、各教員およびFD委員が保管している。これらの資料は、今のところ、他の教員に公開していないが、授業改善が目的ならば、これは本質的な問題ではない。授業アンケートの実施率自体はあまり高くないが、これにはやむを得ない実情がある。というのは、専攻の規模・授業の専門性の高さゆえに、平成27年度こそ例外的に十数人程度の科目があったものの、受講生数は例年10人未満のものがほとんどだからである。少人数ゆえ、学生からの授業改善の要望は授業中や授業直後に教員に直接伝えられている。無記名アンケートでも匿名性が担保されていると院生には感じられないだろうという点を考慮すれば、これで足りると思われる。逆に、単純に数値化できる事項に主眼が置かれている現在の授業アンケートとそれに基づく授業計画改善書の提出は、授業改善を主な目的とするならば、最善の手段とは言えない。授業改善のためには、これとは本質的に異なる方法を見出し、実施することを考えるべきである。

(9) 生命化学専攻

授業アンケートを実施した教員は、アンケート結果をふまえて改善報告書を提出し、今後の講義に役立っている。アンケート結果は各教員が保管しており、現在のところ公開する予定はない。

また、これとは別に、個々の教員は学生から直接要望を聞きとっており、これに基づいた授業改善を行っている。

(10) 地球環境科学専攻

授業を担当した教員は授業計画改善書を作成し、大学院係に提出している。そのため各教員とも各自の授業を見直し、授業形態や教材などについて様々な工夫を試みている。このような改善書作成という作業は毎年行われており、継続的に授業の改善が図られていると考えられる。なおアンケートの取りまとめで改善すべき点としては、個々の授業の受講生が少ないために、アンケートの回収ができる科目が少ないことである。そのため学科内全体の傾向を把握するには、やや難しさを感じる。

第4章 GPA制度の現状と学習成果

理工学研究科では、平成26年度よりGPA制度が導入され、今年度はじめてGPA制度による修了生を輩出した。ここでは、平成27年度のM2生の累積GPAデータと賞修得単位数データをもとにGPA制度の現状と学習成果について述べる。

4.1 工学系専攻のGPA制度の現状と学習成果報告（澤田 樹一郎）

工学系の研究科における2015年度M2生の累積GPAおよび総修得単位数のヒストグラムを図4.2(1)、図4.2(2)に示す。累積GPAは、約90%以上の学生がGPA3.0以上であり、また、GPA3.8以上4.0未満が最も頻度が高く、多くの学生が教員からの高い学習成果の評価を得ていることが確認される。一方、総修得単位数は、約90%の学生が履修基準の30単位ぎりぎりを修得している。多くの学生が履修基準ぎりぎりである状況は健全と言えず、学生の貪欲な学習意欲を引き出す方が必要と考えられる。

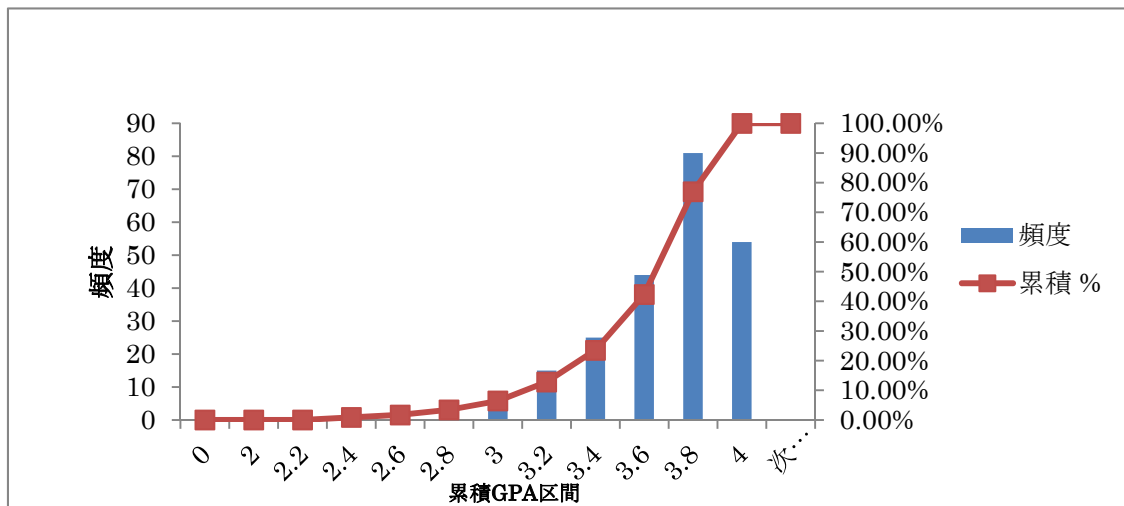


図4.1(1) 平成27年度M2生の累積GPAのヒストグラム（工学系）

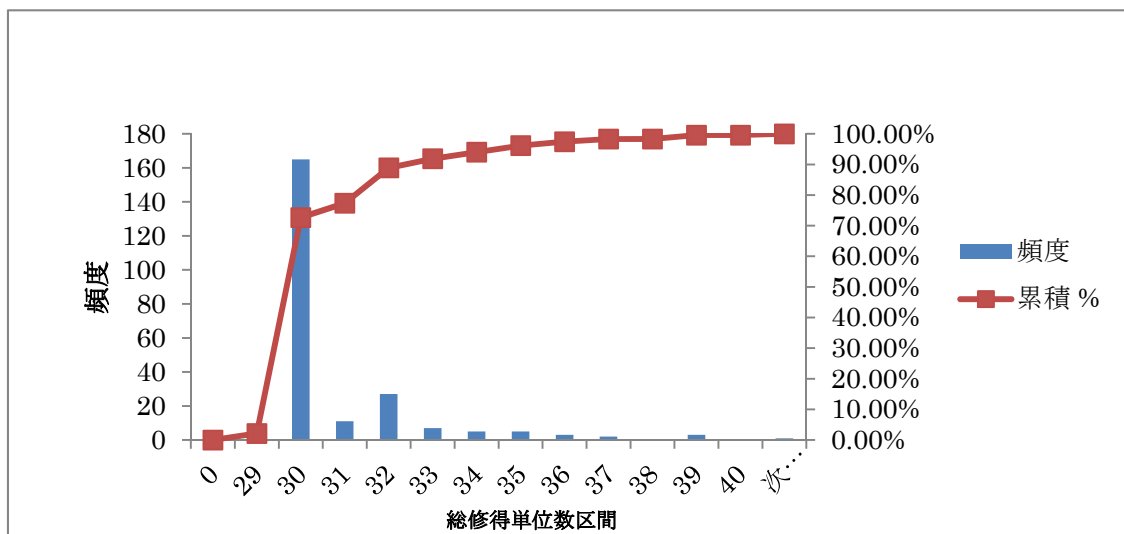


図4.2(2) 平成27年度M2生の総修得単位数のヒストグラム（工学系）

4.2 理学系専攻のGPA制度の現状と学習成果報告（半田 利弘）

GPA の元となる GP(Grade Point)は従来の A～F 表記を数字で置き換えただけで、本質的な違いはないが、その平均値である GPA だけでは情報が圧縮されすぎており、成績指標としての妥当性や学生の科目履修選択の点でも悪影響が理学系では強く危惧されており、特に、学生が自分の GPA を高くするために履修科目を過度に絞り込むことが懸念されていた。平成 26 年度より博士前期課程修了要件に GPA の最低値が規定されたため、学生が従来以上に GPA を意識した科目選択を行う可能性があるため、その傾向を統計資料から検討した。

図 4.1.2 は、平成 27 年度大学院博士前期課程（理系 4 専攻）の修了生および在学生の履修単位数と GPA の相関図である。

まず、履修単位数が多い学生には GPA が低い学生がいないことが明瞭にわかる。これは、過度の科目登録によって履修がおろそかになる学生がいないことを物語っている。むしろ、分布に下限の包絡線が明確に見られる（特に入学初年度）ことから、優秀な学生は履修単位数も GPA も共に高く、履修可能単位数を制限するのは成績向上には逆行する可能性が高いことを示唆している。

GPA は高いのに履修単位数が極端に少ない学生も散見される。ただし、これはほぼ全てが M2 の 2 年目であり、実際に 2 年間の通期では該当者がいないことがわかる。

最も注意すべきは、包絡線より上に位置する一群である。これは、GPA は高いものの取得単位数が少ないことを意味しており、GPA 向上のための履修科目の絞り込みが行われた結果である可能性がある。ただし、H26 入生の傾向で見ると、これらの学生のほとんどは、2 年次に不足単位数をそれまでの平均値に近い GPA で取得しているようである。

大学院では履修総単位数が少ないことや理系 4 専攻のみを対象学生数が限られているため、今後も継続的に検証していく必要があるが、学生の成績評価に於いては、GPA の計算方法の改良(科目による重み付け、卒業要件単位数までの成績上位科目のみの平均など)や履修単位数総数との併用などを考慮すべきであろう。

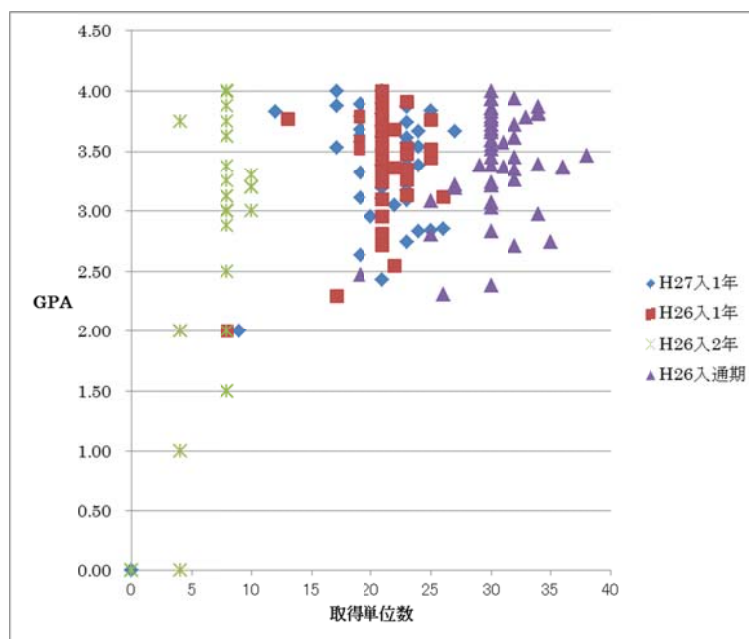


図 4.1.2 単年度ごとの履修単位数と GPA との相関

※1 年は初年度履修分、2 年は 2 年目履修分、通期は 2 年分合算

第5章 学生の研究活動と教育成果（酒匂 一成、坂井 雅夫）

大学院生の研究発表の支援は FD 活動の目的の一つであることから、その実績を把握するために調査を実施した(表 4.1)。当該年度における在籍者数を表 4.2 に、受賞実績について 4.3 に示す。

表 4.1 大学院生の研究成果の発表数

年度	分類		機械	電気	建築	化学	海洋	情報	数理	物理	生命	地環	合計
平成 22 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	3	7	2	53	4	2	1	6	27	11	116
		国際会議以外	44	65	38	126	29	46	4	9	41	19	421
	論文	査読あり	19	12	3	39	17	19	1	4	29	2	145
		査読なし	7	30	26	20	2	36	0	6	7	2	136
平成 23 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	1	5	1	49	2	6	0	3	8	11	86
		国際会議以外	15	60	38	135	34	35	1	14	26	26	384
	論文	査読あり	4	13	0	25	27	9	1	3	9	8	99
		査読なし	3	18	6	7	9	7	1	6	3	0	60
平成 24 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	6	21	2	43	20	3	0	9	15	3	122
		国際会議以外	32	66	46	141	18	28	0	49	52	20	452
	論文	査読あり	10	30	9	36	11	11	0	8	7	4	126
		査読なし	4	38	0	9	5	7	0	10	6	0	79
平成 25 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	9	27	2	40	8	15	0	2	10	4	117
		国際会議以外	80	78	32	104	15	50	0	17	34	8	418
	論文	査読あり	15	33	6	24	14	22	0	5	9	3	131
		査読なし	10	28	0	1	4	22	0	3	9	0	77
平成 26 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	8	25	2	28	2	12	0	8	7	7	99
		国際会議以外	68	88	24	164	25	56	3	36	32	13	509
	論文	査読あり	21	27	1	24	21	27	0	11	6	3	141
		査読なし	1	10	0	0	2	31	0	0	1	1	46
平成 27 年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	8	13	1	63	2	6	0	20	7	0	120
		国際会議以外	64	54	31	182	22	43	5	36	39	15	491
	論文	査読あり	14	21	1	30	13	18	3	14	5	3	122
		査読なし	0	8	14	3	2	16	0	6	7	1	57

表 4.2 在籍者数（博士前期課程）

専攻名	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
機械	109	116	116	99	93	105
電気	106	105	104	95	96	104
建築	46	52	52	43	46	59
化学	132	88	88	84	85	80
海洋	39	32	32	26	30	26
情報	85	89	89	84	90	94
数理	25	24	24	21	20	15
物理	30	28	28	32	36	38
生命	36	32	32	34	33	43
地環	36	30	30	33	31	33
合計	644	596	595	551	560	597

表 4.3 受賞など

受賞者名	学年	受賞名等
Yogi Anggun Saloko Yudo	D3	Best Student Paper Award of The 2015 IAENG International Conference on Computer Science
宮島 洋文	D2	Certificate of Merit (Student) for The 2015 IAENG International Conference on Artificial Intelligence
久永 忠範	D2	Best paper award on International Symposium on Artificial Life and Robotics.
谷口 康太郎	D2	Best Student Award, The 9th Conference on Complex Medical Engineering
川崎 文	M2	日本知能情報フジ学会九州支部 学生優秀講演賞
川崎 文	M2	電子情報通信学会九州支部 学生会講演会 感謝状
高木 基冬	M2	電子情報通信学会九州支部 学生会講演会 感謝状
桑原 達朗	M2	IEICE The Thailand-Japan MicroWave 2015 Best Presentation Award
崎山 裕太	M2	IEICE The Thailand-Japan MicroWave 2015 Young Researcher Encouragement Award
田中 和也	M2	第64回高分子学会年次大会優秀ポスター賞
田中 和也	M2	第52回化学関連支部合同九州大会優秀ポスター賞(若手奨励賞)
五反田 龍矢	M2	第52回化学関連支部合同九州大会優秀ポスター賞(繊維若手研究者賞)
五反田 龍矢	M2	2015 九州・西部-釜山・慶南 高分子(第17回)繊維(第15回)合同シンポジウムPoster Award
戸高 太郎	M2	NDSU-KU Joint Symposium Poster Award
荒巻 力也	M2	JTBW2015 Excellent Poster Award
板垣 亮平	M2	平成27年度化学工学会九州支部学生賞審査会 学生賞
大園 理貴	M2	優秀講演賞(平成27年度土木学会第70回年次大会講演会)
畠中 優成	M2	優秀講演賞(平成27年度土木学会第70回年次大会講演会)
森岩 寛稀	M2	地盤工学会優秀九州支部 学生賞(優良学生賞)
石居 雅寛	M2	ベストプレゼンテーション賞J、精密工学会九州支部飯塚地方講演会
千布 匠	M2	ベストプレゼンテーション賞J、精密工学会九州支部飯塚地方講演会
松葉 正寛	M2	努力賞、鉄鋼協会秋季講演大会学生ポスターセッション
西山 尚弘	M2	電気設備学会九州支部賞受賞
外山 功大	M2	2015年度日本コンクリート工学会 九州支部長賞
吉松 裕貴	M2	電気学会電子・情報・システム部門大会 優秀ポスター賞
畠中 一成	M2	電子情報通信学会 学術奨励賞
畠中 一成	M2	電子情報通信学会 基礎・境界サイエティ バイオメトリクス研究会 学生貢献賞
江頭 剛広	M2	Best paper award on International Symposium on Artificial Life and Robotics.
藤本 祐太郎	M2	平成27年度第7回半導体材料・デバイスフォーラム 口頭発表奨励賞
江平 翔	M1	平成27年電気学会産業応用部門大会 YPG(ヤングエンジニアポスターコンペティション) 優秀発表賞
江平 翔	M1	平成27年度(第68回)電気・情報関係学会九州支部連合大会電気学会論文発表賞B賞
出水 直人	M1	平成27年度(第68回)電気・情報関係学会九州支部連合大会電気学会論文発表賞B賞
四元 信一郎	M1	平成27年度(第68回)電気・情報関係学会九州支部連合大会電気学会論文発表賞B賞
中島 芳樹	M1	日本知能情報フジ学会九州支部 学生優秀ポスター発表賞
原田 晃行	M1	ポスター賞、第66回コロイドおよび界面化学討論会(2015.9.10-12 鹿児島大学郡元キャンパス)
原田 晃行	M1	優秀ポスター賞、日本化学会 低次元系光機能材料研究会 第4回サマーセミナー(2015.9.25-26 休暇村志賀島、福岡市)
原田 晃行	M1	優秀ポスター賞、日本化学会 低次元系光機能材料研究会 第4回サマーセミナー(2015.9.25-26 休暇村志賀島、福岡市)
原田 晃行	M1	Poster Award(ポスター賞)、NDSU-KU Joint Symposium on Biotechnology, Nanomaterials and Polymers (2015.10.15-16 North Dakota State University, Fargo, North Dakota, USA)
今井 健太	M1	ポスター賞、九州地区高分子若手研究会・冬の講演会(2015.12.3 休暇村志賀島、福岡市)
宮田 英和	M1	第26回九州地区若手ケミカルエンジニア討論会ポスター賞
宮田 英和	M1	第21回流動化・粒子プロセスシンポジウム優秀ポスター賞
奥野 晃弘	M1	優秀発表賞、日本顕微鏡学会九州支部講演大会
城島 龍一郎	M1	JSMS Kyushu Young Researcher Award 2015、日本材料学会九州支部第2回学術講演会
西田 哲朗	M1	日本建築学会コロキウム構造形態の解析と創生2015優秀講演
高須 八千代	M1	2015年度日本建築学会設計競技 支部入選
亀田 翔 木村 明寛	M1	宇宙建築賞宇宙建築の会特別賞
紫尾 太郎	M1	Best paper award on International Symposium on Artificial Life and Robotics.
福田 雄介	M1	日本金属学会 第26回 優秀ポスター賞
川畑 拓斗	M1	第38回日本分子生物学会年会、第88回日本生化学会大会合同大会(BMB2015) 若手優秀発表賞
川畑 拓斗	M1	第9回桜ヶ丘地区(基礎系)研究発表会優秀発表賞受賞
川畑 拓斗	M1	鹿児島大学学長表彰(前期)
川畑 拓斗	M1	鹿児島大学学長表彰(後期)
瀬野 秀英, 高 功治, 他6名	M2,M1,B4	総合優勝、ETロボコン2015九州南地区大会
"	"	九州経済産業局長賞、ETロボコン2015九州南地区大会
"	"	アドバンストクラス4位、ETロボコン2015チャンピオンシップ大会
"	"	アドバンストクラス優勝、ETロボコン かしまITフェスタ杯

第6章 特筆すべき取組及び改善事例

平成27年度より理工学研究科では、海外研修を夏季に3ヶ月程度実施するために、前期と後期をさらに2分割する「学年4期分割授業日程」を導入した。一部の科目はこの日程にしたがって実施されたので、週2回の講義を実施することによる学生状況への調べるために、平成26年度と27年度ともに開講された47科目について、授業アンケートの結果をまとめた。図6.1は平成26年度と27年度の各設問項目における数値の比をとっており、平成27年度のほうが高い場合に1よりも大きくなる。開講期が1/2になったことから出席状況は明らかによくなったことが分かる。しかし、その他の項目はすべてわずかであるが低下した。学年による分布の差であるのか、実際に何らかの影響があったのかについては、今後のアンケート結果と比較しなければ分からない。

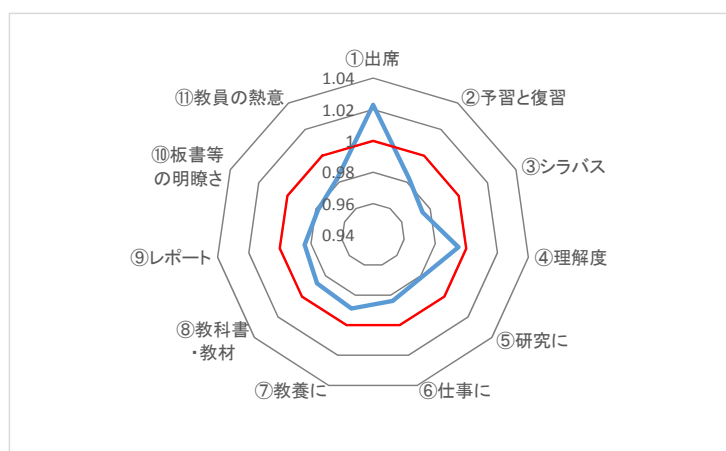


図6.1 四半期制導入前後での授業アンケート結果の比較

上述した制度においては、前期Q2（前期の後半）期間に必修科目を設定していない。そのため、この時期での海外研修が可能となった。新設した科目「理工系国際コミュニケーション海外研修（4単位）」は、Q2期間と夏季休業期間を通じた約3ヶ月を利用した短期留学により、国際コミュニケーションを通して、グローバルな理工系の課題・解決に取り組み、将来、国際社会で活躍する技術者・研究者を目指しグローバルに活動するための経験を養うことを目的として実施された。2.2で紹介したように本年度は、アメリカ サンディエゴ、サンノゼで実施され、語学研修、理工学系研修、企業研修の3種類の研修で構成されており、本学協定校のサンノゼ州立大学やサンディエゴ州立大学で研修を実施した。

10月28日に開催された発表会Movie Festivalでは、参加学生13名が個人やグループに分かれ、英語の説明が入った研修成果の映画を製作し発表した。また、11月18日には理工学研究科教授会において、ダイジェスト版の公開がなされ、教育効果や問題点などについて教員間で共有することができた。

第7章 今後の理工学研究科FD活動への期待

平成17年の中央教育審議会（平成17年9月5日）の答申（新時代の大学院教育―国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて）においては、個々の教員の活動は、各大学院における教員の組織的な役割分担や学問分野、時期等によって多様であることを踏まえ、「教育」か「研究」か、といった単純な区分ではなく、各大学院における自主的な調査研究に基づき、個々の教員の多様な活動状況を考慮した形で、活動評価を行っていく方法も有効であるとされている。また、教員の研究活動に関する評価は、実施されているが、教育活動に関する評価は、その指標に定性的なものが多く適切な指標設定が難しいことなどから、社会的にいまだ定着しているとは言い難いと指摘されている。そのため、教育活動に関する評価の指標として、例えば、学生による授業等の評価などが挙げられている。

理工学研究科は部局化により新しい組織として平成21年度にスタート以来、学生による授業アンケートを実施し、毎年度発行されるFD報告書においては、毎年度の結果がまとめられてきた。図3.1.1と図3.1.2に示された工学系および理学系の授業評価アンケートの結果を見ると、この6年の間での低下や上昇などのトレンドは見られない。ほとんどの項目が4前後の評点であるので、それ以上は望めないということも考えられるが、専攻ごとの結果を比較すると0.5以上の差はあるので、まだ、高い評価を得る余地はあると考えられる。また、予習と復習の項目が低いことは、全教員の悩みの種と思われるが、この6年間低いままである。しかし、この項目は専攻間で2以上の差がついている上に、その傾向が年によって変化するわけではない。これらのことから、授業評価アンケートは実施しているだけで、その結果は講義の改善に役立ってないということが考えられる。

大学院改革の一貫として、理工学研究科では、博士前期課程におけるグローバル人材養成の体制強化、博士後期課程におけるイノベーション人材養成の体制強化が打ち出されている。平成27年度には、留年をしない短期留学・現地調査実施可能とする学年4期分割授業が実施され、平成28年度からは、博士後期課程の3専攻が1専攻となり、基幹コースと先端科学技術コースが設けられる。また、地域の発展に寄与する人材育成に対しては、先端科学技術コースと連携させ、地域コトづくりセンターの創設による機能強化が図られる。このように、この数年の間にさまざまな取り組みがなされてきたし、将来も継続して常に組織改革がなされていくであろう。ただし、新しいシステムの導入とともに、それらの仕組みがうまく機能していくように構成員の教育研究能力を向上させる活動も並行して実施されることが望まれる。

医歯学総合 研究科

医歯学総合研究科 FD 活動報告

1. はじめに

医歯学総合研究科 FD 委員会は、研究倫理指針に則った研究の遂行と大学院教育の充実、活性化を目的として、講演会、教育プログラムと学生支援改善のための調査、ならびに効果的な学習を行うための学習支援システムの普及をめざして活動した。

2. 授業公開

授業公開は「優れた授業を公開し、参観をした教員が授業方法を学ぶ機会を提供する」ことを目的とし、さらに、より多くの教職員が授業参観する機会とするために、昨年に引き続き、研究者が関心を持つべきテーマの授業を公開授業とした。

日時	2015年11月17日(火) 6限目
科目・テーマ	医療・医人倫理学(博士科目) 「臨床研究における倫理について」
講師	井戸 章雄(消化器疾患・生活習慣病学分野 教授)
会場	共通教育棟 503 講義室
参観者	11名 (対象 研究科教員、学生)
概要	医学研究に関する倫理指針を理解するために、ヘルシンキ宣言やニュルンベルグ・コード、さらに医学の歴史、特に戦時下に行われていた人体実験にも触れ、臨床研究をするために「守らなければならないもの」の根幹を理解することの重要性を講義した。参観者はテーマ、講義の進め方に対して、特に歴史的事例をあげた解説や提示した資料の工夫が良かったこと、さらに改善の為の意見もアンケートに記載した。それらの意見に対し、講師からも報告書が提出された。

3. 学生による授業評価アンケート

実施方法の概要 現在、授業科目の評価アンケート、演習・実験科目の研究環境と研究指導に関するアンケートを日本語と同じ内容の留学生用の英語のアンケート用紙により実施している。医歯学大学院係がアンケート用紙を作成、対象学生に配布、回収して集計業務を行った。また集計結果は科目責任者にフィードバックした。

講義科目アンケート 講義を主体とする科目アンケートは5名以上の受講生がいる科目を対象として授業評価7項目、自己評価2項目、全体評価とし、無記名により各項目について7段階の評定尺度で回答し、自由な意見も記載してもらった。前期は対象8科目48枚、後期は対象13科目49枚の回答が得られた。

演習、実験科目のアンケート 演習、実験科目についてのアンケートは後期に実施し、無記名で医系歯系の別、入学年度、演習科目の授業形態、内容と指導3項目、実験科目(研究指導)6項目、研究中断の有無について回答を求めた。選択項目以外は、5段階の評定尺度で回答した。

医系54枚、歯系16枚の回答が得られた。

医系 入学年度は平成18年(10年目)の学生が在籍しており、在籍期間が長い傾向が続いている。項目7で、「個人的理由以外での研究の中断が9名(17%)となっておりやや増えている。科目の有用性、教員の対応・支援はほぼ高い評価を得ている。自由記載では、
良かった点

- 参考となる論文の紹介だけでなく、多角的な視点を含む参考図書や最近の動向などの紹介もあった。

- 新しい研究（実験）をはじめるときにも多くのアドバイスをいただきながら進めていくことができていること
- 古川教授の”分子腫瘍学Ⅰ”はとても勉強になりました（あまり出席できませんでしたが…）
- 指導医が親身になって下さるところ
- 講座の教授自らよりご指導いただけています。
- 指導教員が丁寧に指導して下さった
- 臨床と研究の関連を強く感じる事ができて良かった。
- 教授やスタッフ、同僚は協力的で親身です。
- いい指導です。

改善すべき点

- 研究を補佐し、指導する能力のある人材が明らかに不足している
- 講義が夕方6時から開始されることが多く、子育て中であり参加が難しい
- 私は外国人の学生なので、鹿児島大学での英語の講義やミーティングをもっと増やしてほしい。私は鹿児島大学でセミナーを続けていきたいと思っているが、漢字や日本語がよく分かりません。なので、日本語で開催されるセミナーで英語のスライドがあればとても参考になって助かります。
- シラバスが見にくい。選択した科目の担当教員が不在であったり、選択したことを知らないことがある。
- 授業が遅いため、参加できないことがある。
- 体制として学生に対する配慮に欠けるところ（大雪時の特別講義開講など）
- 仕事との両立が難しかった（時間的に）
- 全体的には満足です。
- もっと英語の講義があれば助かります。

その他

- 大学院は研究をする場であり、学生とは根本的に異なることをご理解頂きたいと思います。
- 倫理審査申請がこんなに大変だとは思っていませんでした

歯系 学生の在籍期間は1名を除き4年以内である。ほ個人的な理由以外での研究の長期中断が2名（12%）であり、昨年の3名とほぼ同じ状況である。科目の有用性、教員の対応・支援は高い評価を得ている。自由記載では、

良かった点

- 先生は私の論文ができるだけ早く終われるように励ましてくれます。そして、論文を完了するサポートや研究で発生したいろいろな問題を解決しようとしてくれます。
- どの教員の先生もアドバイスや協力を惜しみなくして下さいます。
- 実験に必要な設備を整えて下さった点
- まだ研究は始まっていない
- すべてうまくいっています
- 先生は私の研究室や分野の仕事をするための手続きを教えてくださいました。よって、私は研究のために有用であろう多くのことを観察することができた。
- 基礎科目や専門科目。この種の講義は、分野の研究活動に関する基本的な知識を与えてくれます。

改善すべき点

- 診療のバランスが私自身の工夫不足でとれませんでした
- 日本語のすべてのテキストを英語で記載してほしい

その他

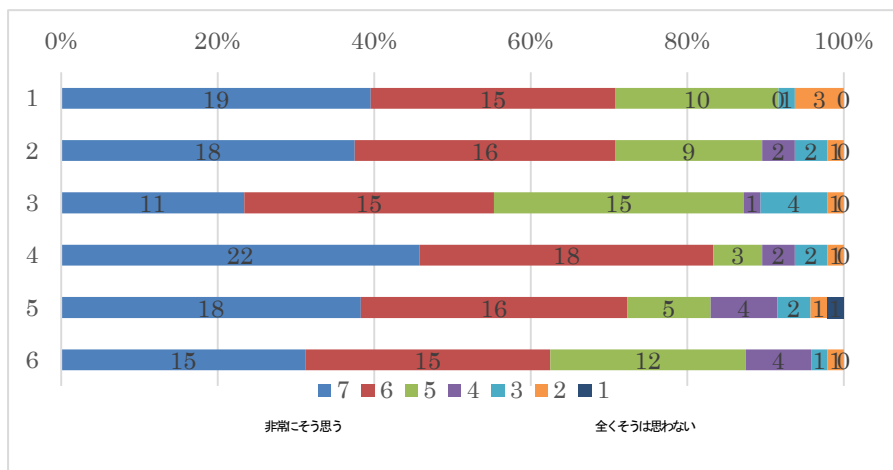
- どうもありがとうございました

医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計 (H27年度 前期)

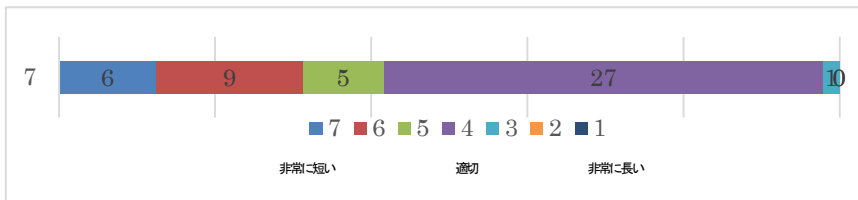
集計 8科目 アンケート回収枚数 48枚

【授業評価】

1. この授業はあなたのニーズに合っていましたか
2. この授業はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
3. 講義の内容はよく理解できましたか
4. 講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか
5. 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
6. 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか

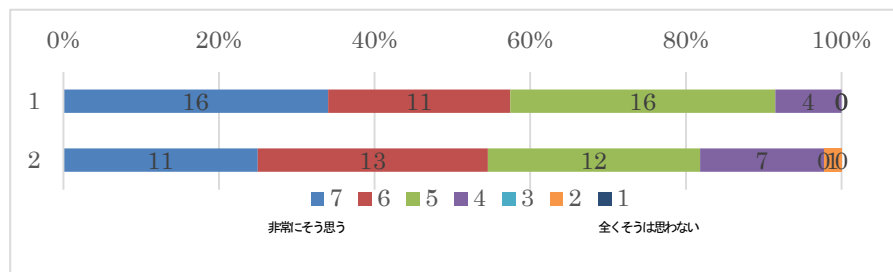


7. 講義時間は適切でしたか

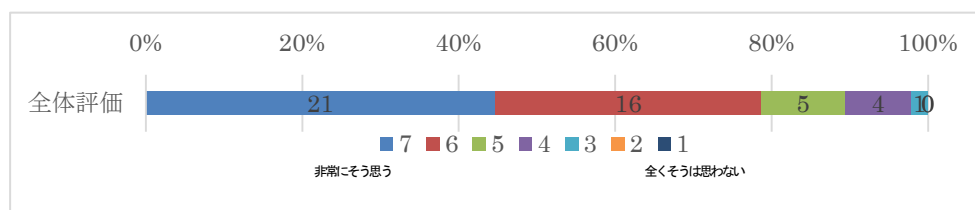


【自己評価】

1. この授業で新しい知識や考え方を習得しましたか
2. 授業には積極的に参加しましたか (質問、自習など)



【全体評価】 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか

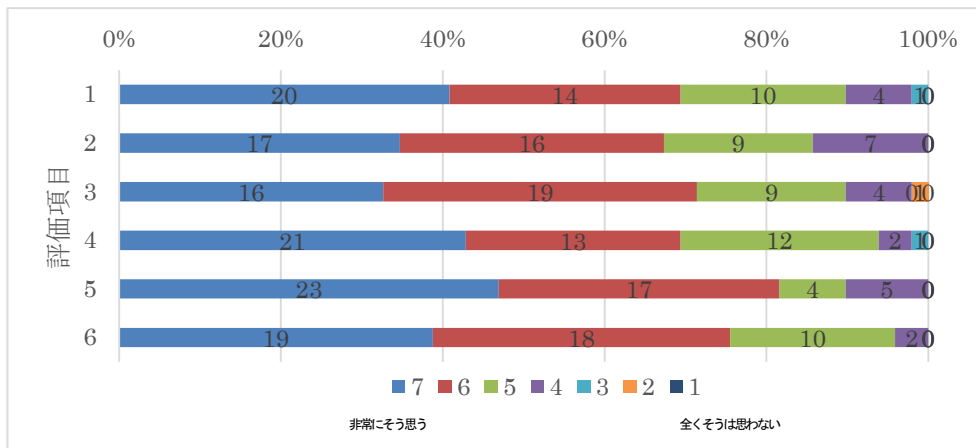


医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計 (H27年度 後期)

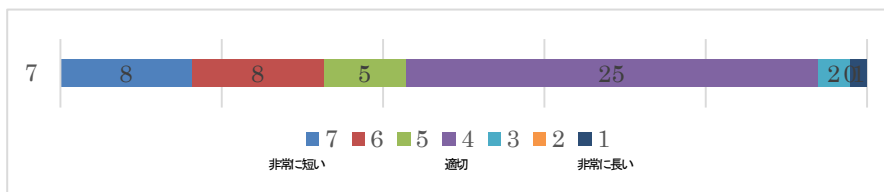
集計 13科目 アンケート回収枚数 49枚

【授業評価】

8. この授業はあなたのニーズに合っていましたか
9. この授業はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
10. 講義の内容はよく理解できましたか
11. 講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか
12. 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
13. 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか

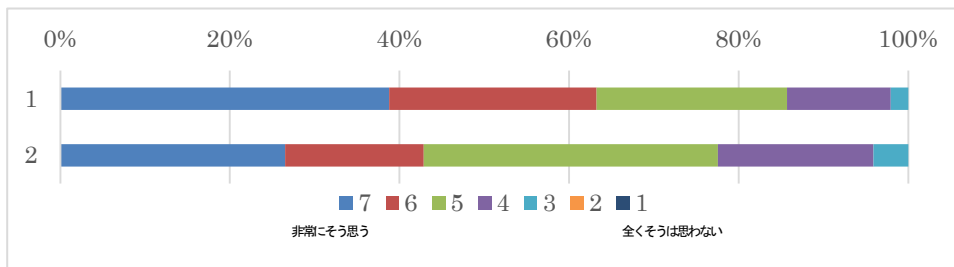


14. 講義時間は適切でしたか



【自己評価】

3. この授業で新しい知識や考え方を習得しましたか
4. 授業には積極的に参加しましたか (質問、自習など)



- 【全体評価】 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか

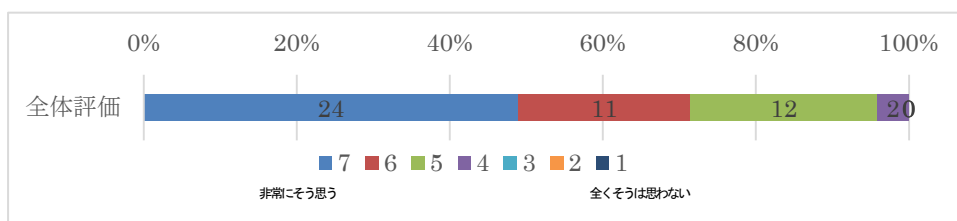
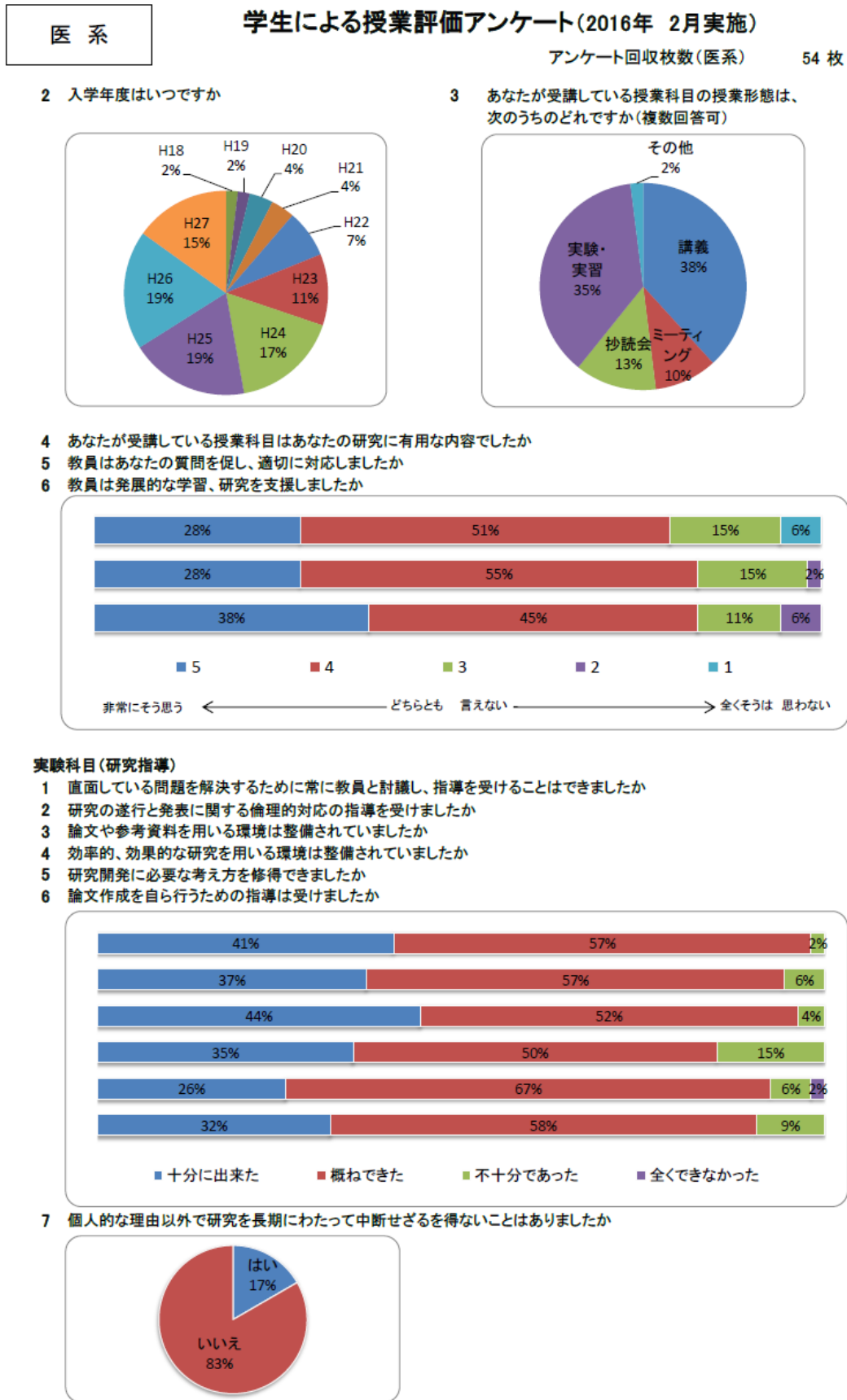
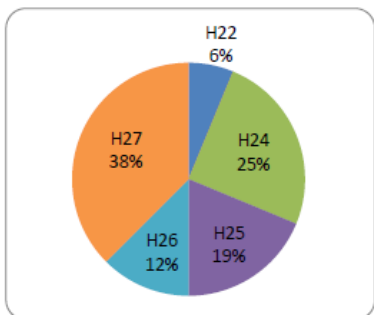


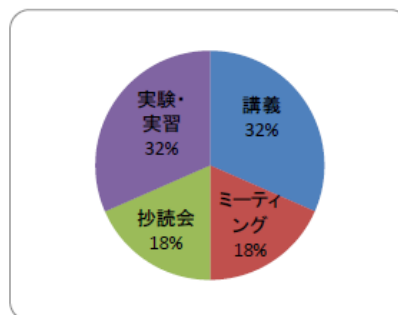
図4 実験科目等アンケート



2 入学年度はいつですか



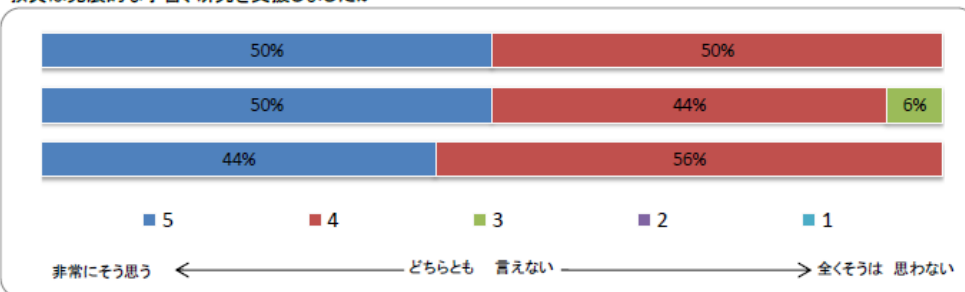
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

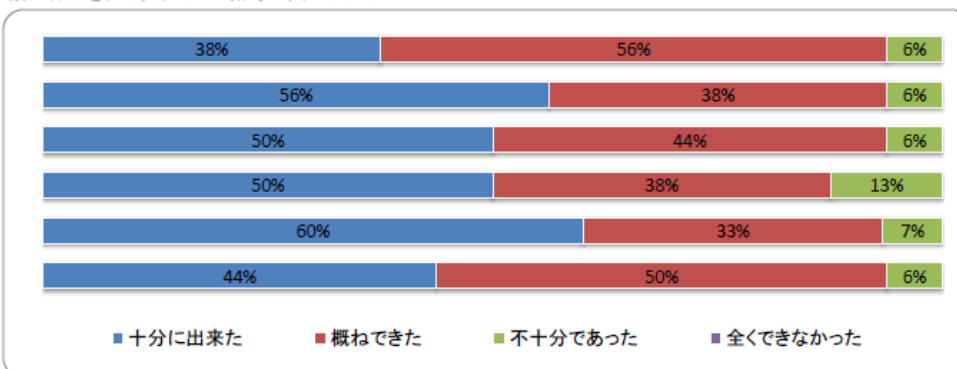
5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか

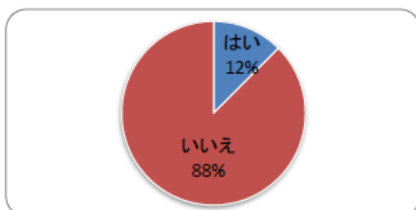


実験科目(研究指導)

- 1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることができましたか
- 2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか
- 3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか
- 4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか
- 5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか
- 6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか



7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありませんでしたか



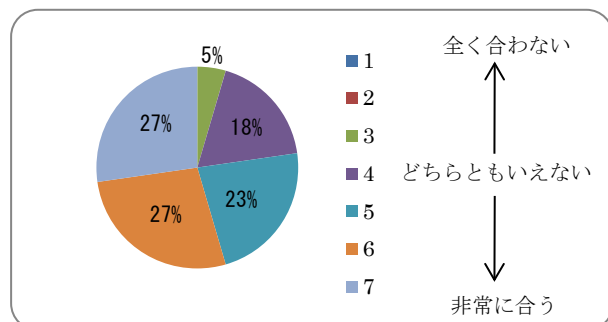
4. 桜ヶ丘キャンパス学習支援システムの活用

1) e-learning 講習会

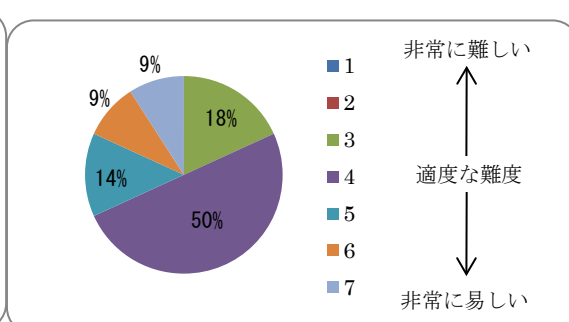
日時	2016年2月23日(火) 16:30~18:00
テーマ	学習支援システムMoodleとe-ポートフォリオの活用
講師	村永 文学(医学部・歯学部附属病院 医療情報部 講師)
主催	医歯学総合研究科FD委員会
共催	医学部FD委員会、歯学部FD委員会
会場	共通教育棟6階インテリジェント講義室
参加者	24名(研究科医系6名 歯系4名、医学部保健学科2名、附属病院医系1名、歯系2名、他2名)
概要	桜ヶ丘キャンパスでe-learningシステムとして利用できるMoodle、医学部医学科に引き続き歯学部での導入が開始されたe-portfolioシステムの紹介の後に、参加者はテスト用のIDパスワード(学生、指導者)を用いて、Moodleシステムを用いたコース設定、教材の提供、レポート提出、小テストの実施、ポートフォリオへの振り返りの記録等を体験した。e-portfolioシステムでの教育到達目標達成度の管理、自己学習目標の記録と自己評価機能、コースの振り返りとコメント、臨床実習症例登録・評価機能の紹介もあった。

図5 アンケート結果

【1 このプログラムは先生のニーズにあっていましたか？】

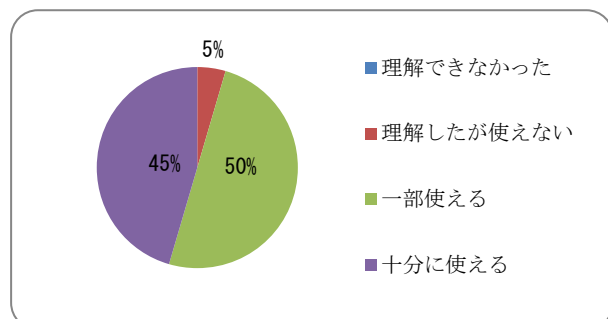


【2 講義とグループ作業の難度は？】

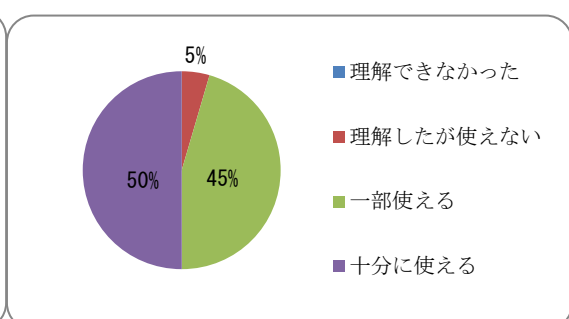


【3 Moodleの以下の機能は理解できましたか？】

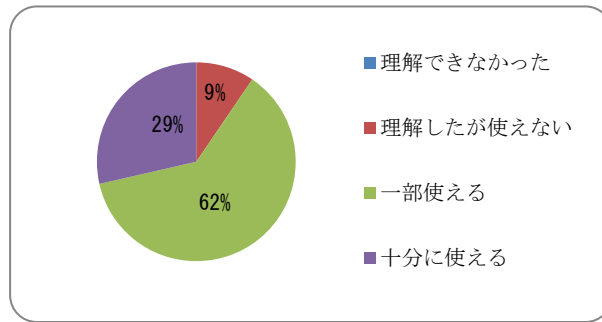
コースの設定



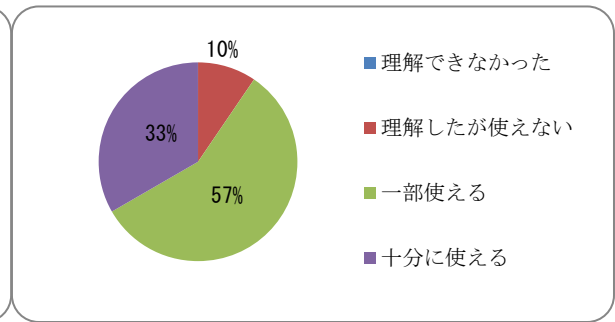
資料の供覧



レポートの提出

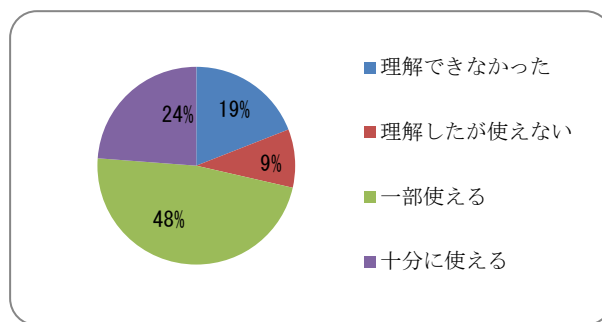


小テスト

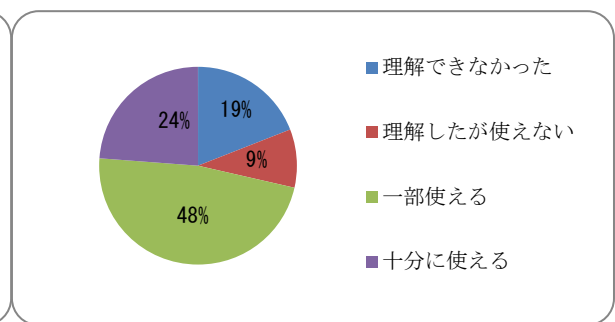


【4 e-ポートフォリオの以下の機能は理解できましたか？】

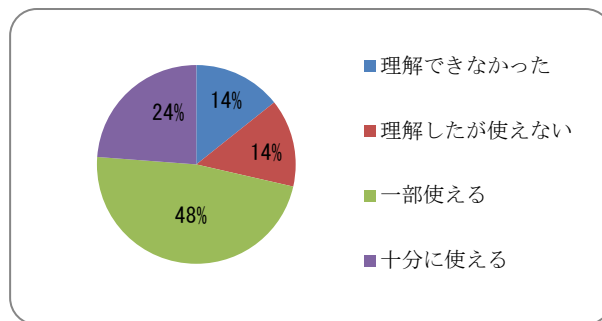
教育到達目標管理機能



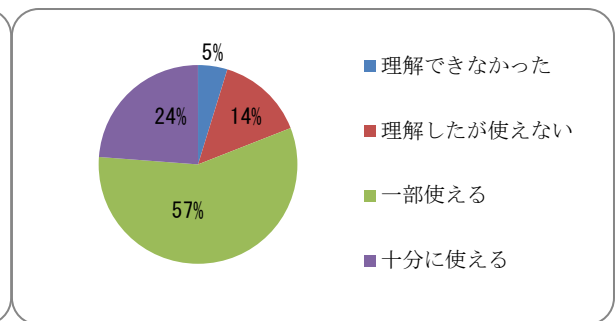
自己学習目標管理機能



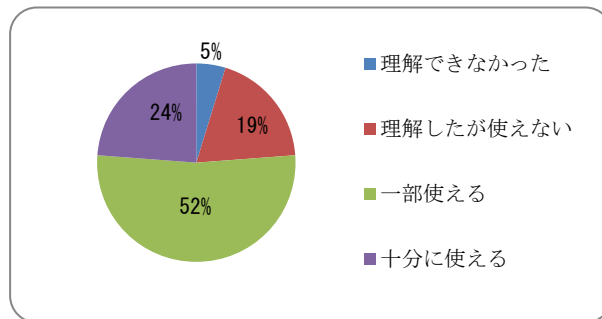
コースのふりかえりとコメント機能



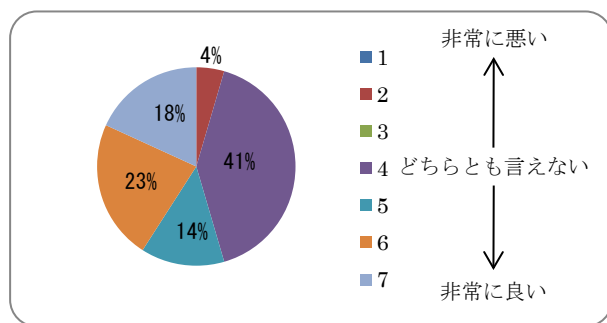
臨床実習症例登録機能



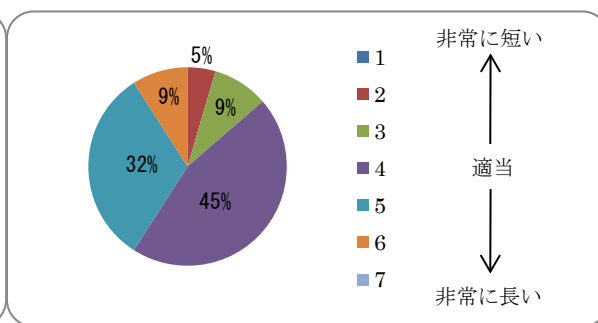
臨床実習評価機能



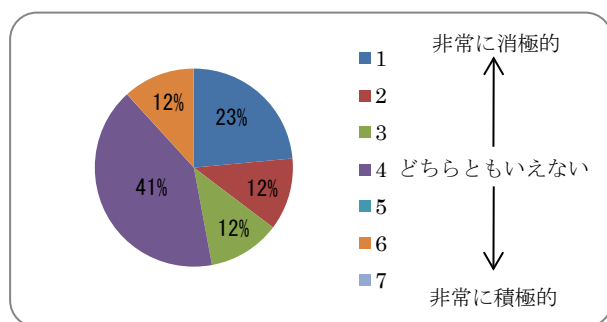
【4 講師の指導は？】



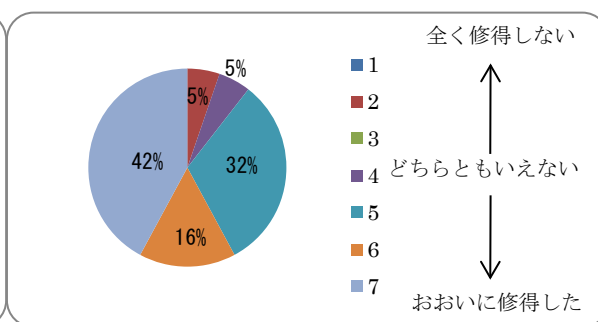
【5 時間は？】



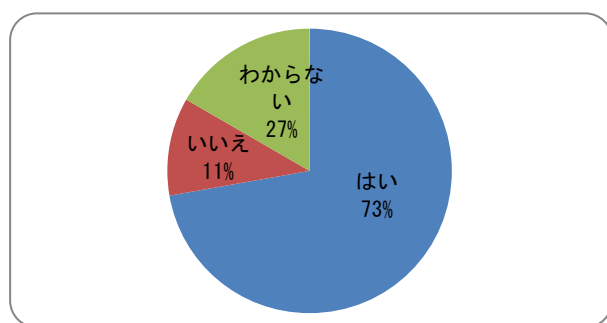
【6 積極的に質問等をしましたか？】



【7 新たな知識、技能を修得しましたか？】



【8 Moodleを利用した教育・研修を実施したいですか？】



2) 桜ヶ丘 Moodle 教職員用資料の整備

今年度はFD 委員会予算の一部を Moodle システムを活用するための教職員用資料の印刷に用いた。

5. おわりに

医歯学総合研究科 FD 委員会では継続して桜ヶ丘 Moodle、医学部・歯学部 e-ポートフォリオの講習会を実施しており、次期中期目標・中期計画に先駆けて、教育への学習支援システムの導入を推進してきた。次年度は学部・研究科の教育のニーズに対応する FD 活動を行うことにより、より多くの教職員が参加する FD 活動としていきたい。

保健学研究科

平成27年度 保健学研究科FD活動報告

1. はじめに

平成27年度の保健学研究科FD委員会の主な活動として

- 1) 学生による授業評価、
 - 2) 修士論文発表会への教員の参加
- を行った。以下にその概略を述べる。

2. 学生による授業評価アンケート

1) 対象科目と方法

対象となる授業科目は、博士前期課程では原則として受講者が4名以上の講義とし（3名以下にあっては授業科目担当者の任意とする）、博士後期課程では全ての講義であった。評価方法は、アンケート調査であり、「あなた自身に関する項目」、「授業に対する評価」、「自由記載」から成り立っている。アンケートの中の質問項目5は、「0回」「1・2回」「3・4回」「5回以上」の選択肢から回答してもらい、その他の質問項目に対しては、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「そうは思わない」「判らない」の選択肢から選び、回答してもらった。アンケート票は各授業終了までに学生に配布し、無記名で記入させたアンケートを学生に封筒に入れ、厳封の後に教務係りに提出してもらうよう依頼した。

あなた自身について

- 1 この授業のシラバスを前もって読みましたか
- 2 この授業の予習又は復習をしましたか
- 3 この授業科目に関連する本（参考書や文献等）を読みましたか
- 4 授業中にノートをとりましたか
- 5 この授業を何回位欠席しましたか

授業に対する評価

- 6 授業はシラバスに沿った内容でしたか
- 7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか
- 8 授業内容に興味が持てましたか
- 9 授業の進め方は適切でしたか
- 10 教員は授業に対する熱意がありましたか
- 11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか
- 12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか
- 13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか
- 14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか

この授業に対して、上記以外に考えたこと、良かった点、その他授業改善に役立つ意見があれば書いて下さい。

2) 学生による授業評価アンケートの結果

平成27年度は、前期開講科目31科目、後期開講科目22科目について実施した。前期開講科目はのべ368名、また後期科目についてはのべ163名より回答を得た。アンケート調査の結果を前期開講分(表1)と後期開講分(表2)に分けて、以下に示す。

表1、表2では「そう思う」と回答したものを1、「どちらかと言えばそう思う」と回答したものを2、「どちらかと言えばそう思わない」と回答したものを3、「そうは思わない」と回答したものを4、「判らないと回答したものを5として表している。なお、質問項目5のみ、「0回」と回答したものを1、「1・2回」と回答したものを2、「3・4回」と回答したものを3、「5回以上」と回答したものを4で表している。

また、オムニバス方式で開講されている科目は、担当教官ごとに学生による授業評価を行ったため、回答数は多くなっている。なお、質問項目によっては、未記入の場合もあり、合計がこの数に満たないものもある。

表1. 平成26年度前期開講授業科目の学生による授業評価結果

質問項目	1 この授業のシラバスを前もって読みましたか					
回答	1	2	3	4	5	未回答
人数	217	116	29	6	0	0
%	59.0%	31.5%	7.9%	1.6%	0.0%	0.0%
質問項目	2 この授業の予習又は復習をしましたか					
回答	1	2	3	4	5	未回答
人数	195	113	51	9	0	0
%	53.0%	30.7%	13.9%	2.4%	0.0%	0.0%
質問項目	3 この授業科目に関連する本(参考書や文献等)を読みましたか					
回答	1	2	3	4	5	未回答
人数	220	92	48	8	0	0
%	59.8%	25.0%	13.0%	2.2%	0.0%	0.0%
質問項目	4 授業中にノートをとりましたか					
回答	1	2	3	4	5	未回答
人数	282	68	16	2	0	0
%	76.6%	18.5%	4.3%	0.5%	0.0%	0.0%
質問項目	5 この授業を何回欠席しましたか					
回答	1	2	3	4	未回答	
人数	308	26	0	0	34	
%	83.7%	7.1%	0.0%	0.0%	9.2%	
質問項目	6 授業はシラバスに沿った内容でしたか					
回答	1	2	3	4	5	未回答

人 数	279	76	11	1	1	0
%	75.8%	20.7%	3.0%	0.3%	0.3%	0.0%
質問項目	7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	296	50	11	3	8	0
%	80.4%	13.6%	3.0%	0.8%	2.2%	0.0%

質問項目	8 授業内容に興味が持てましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	316	47	5	0	0	0
%	85.9%	12.8%	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	9 授業の進め方は適切でしたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	304	53	9	2	0	0
%	82.6%	14.4%	2.4%	0.5%	0.0%	0.0%
質問項目	10 教員は授業に対する熱意がありましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	330	36	2	0	0	0
%	89.7%	9.8%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	326	34	8	0	0	0
%	88.6%	9.2%	2.2%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	327	37	4	0	0	0
%	88.9%	10.1%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	329	34	5	0	0	0
%	89.4%	9.2%	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答

人 数	318	41	8	0	0	1
%	86.4%	11.1%	2.2%	0.0%	0.0%	0.3%

表2. 平成26年度後期開講授業科目の学生による授業評価結果

質問項目	1 この授業のシラバスを前もって読みましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	105	46	8	4	0	0
%	64.4%	28.2%	4.9%	2.5%	0.0%	0.0%
質問項目	2 この授業の予習又は復習をしましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	85	51	22	5	0	0
%	52.1%	31.3%	13.5%	3.1%	0.0%	0.0%
質問項目	3 この授業科目に関連する本（参考書や文献等）を読みましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	80	65	13	5	0	0
%	49.1%	39.9%	8.0%	3.1%	0.0%	0.0%
質問項目	4 授業中にノートをとりましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	139	22	2	0	0	0
%	85.3%	13.5%	1.2%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	5 この授業を何回位欠席しましたか					
回 答	1	2	3	4	未回答	
人 数	123	30	0	0	10	
%	75.5%	18.4%	0.0%	0.0%	6.1%	
質問項目	6 授業はシラバスに沿った内容でしたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	134	25	4	0	0	0
%	82.2%	15.3%	2.5%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	139	17	4	0	3	0
%	85.3%	10.4%	2.5%	0.0%	1.8%	0.0%

質問項目	8 授業内容に興味が持てましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	145	14	4	0	0	0
%	89.0%	8.6%	2.5%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	9 授業の進め方は適切でしたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	145	13	5	0	0	0
%	89.0%	8.0%	3.1%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	10 教員は授業に対する熱意がありましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	146	13	4	0	0	0
%	89.6%	8.0%	2.5%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	146	13	4	0	0	0
%	89.6%	8.0%	2.5%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	144	15	4	0	0	0
%	88.3%	9.2%	2.5%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	146	14	3	0	0	0
%	89.6%	8.6%	1.8%	0.0%	0.0%	0.0%
質問項目	14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか					
回 答	1	2	3	4	5	未回答
人 数	147	11	3	2	0	0
%	90.2%	6.7%	1.8%	1.2%	0.0%	0.0%

3) 結果の解釈

平成26年度より大学院博士前期課程に新たに助産師課程が加わり、平成26年度4名、平成27年度5名が入学した。助産師課程の場合、必修科目（多くはオムニバス形式）が多く、シラバスを前もって読む必要の無い科目が増えた。そのためか、平成26、27年度は25年度に比べ、全体としての「あなた自身について」の中の「授業のシラバスを前もって読む」学生の割合が減少しているが、これはその助産師課程が加わったためかもしれない。

「授業に対する評価」の中の項目6「授業はシラバスに沿った内容でしたか」について、前期では13%の学生が「判らない」と回答している。これは「授業はシラバスに沿った内容ではない」の意味かもしれないが、もしそうであれば、改善の必要があると考えられる。

「授業に対する評価」の中の項目14の「授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか」と項目15「この授業は、全体的に満足できるものでしたか」については概ね良い評価を得ていると思われた。

4) 学生による授業評価の教員へのフィードバック、

学生によるこれらの授業評価の結果は、当該科目の調査票と共に担当教員にフィードバックした。

3. 修士論文発表会への教員の参加

各領域（看護学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻）で、修士論文発表会に教員が参加し、学生が発表する論文について教員が質問し、意見交換を行った。この発表会には看護学専攻教員19名、理学・作業療法学専攻で15名が参加した。

4. おわりに

学生による授業評価アンケートは、特に自由記載事項について各教員が今後の授業に活かせるものとなることを期待したい。オムニバス方式で開講されている科目は、担当教官ごとに学生による授業評価を行ったため、回答数が多く、学生の負担増となっている。今後検討の余地ありと思われる。修士論文発表会へ教員の参加と教員による修士論文評価についてはこれまでよりもさらに長い時間をかけて行うべきかと思われた。

(文責：医学部FD委員会保健学科部会長 新地 洋之)

司法政策 研究科

平成27年度FD活動報告書

(司法政策研究科)

1 組織体制

鹿児島大学大学院司法政策研究科（以下、「法科大学院」という）におけるFDを企画・実施する組織として、鹿児島大学大学院司法政策研究科運営規則に基づき、教育活動点検評価委員会（以下、「FD委員会」という）が設置されている。

FD委員会の役割は、法科大学院の教育内容の点検・評価・改善に関すること全般にわたり、その具体的な活動は、「教育活動点検評価活動の実施に関する申し合わせ」に基づいて、各年度のFD委員会が定める活動計画によって決定される。例年実施する活動としては、以下の諸活動が挙げられる。

- ①法科大学院における教育指針・到達目標の検討
- ②学生による授業評価アンケートの実施
- ③学生による期末試験等に対するアンケートの実施
- ④教員相互の授業参観
- ⑤教員自身による映像での自己点検
- ⑥成績評価総括の取りまとめ
- ⑦授業改善のための取組みに関する報告・検討会
- ⑧教員の外部研修の推進
- ⑨法科大学院認証評価および国立大学法人としての各評価への対応
- ⑩FD報告書の作成

法科大学院におけるFD活動は、すべての教員を対象として実施している。研究者教員と実務家教員の双方とも、専任教員及びみなし専任教員も含めて、FD活動に参加している。FD懇談会の開催は、学期の始めに非常勤教員に対しても案内されている。

授業評価アンケート、授業のビデオ録画、教員相互の授業参観については、専任教員の担当科目のみならず、非常勤教員の担当科目も対象としている。

2 FD活動の概要

平成27年度に行ったFD活動の概要は、以下のとおりである。

【4月】

FD懇談会（8日）

主な検討内容：

○平成27年度前期FD活動計画の確認

FD委員会（24日）、

主な検討内容：

○平成27年度前期FD委員会活動計画の策定

【5月】

FD委員会（27日）

主な検討内容：

- 平成27年度前期中間授業評価アンケート結果の検討と、FD講演会の実施内容（学外講師の教育研究活動の内容等）の確認。

【6月】

FD懇談会（10日）

主な検討内容

- 授業評価アンケートの回収率と今後のアンケート継続方針の確認。
- アンケート結果に対する担当教員の所管と対応の集約状況報告と学生向け公開方法の確認。
- 司法試験・短答試験結果に対する検証。

FD委員会（24日）

主な検討内容：

- 平成27年中間授業評価アンケート結果に対する担当教員の所感と対応の確認。
- 授業のビデオ収録と教員の閲覧方法に関する確認。
- FD講演会の実施時期に関する確認。

【7月】

FD懇談会（8日）

主な検討内容：

- 平成27年度前期最終授業評価アンケートの実施報告（集計結果と回収率等）
- 授業収録映像の活用に関する意見交換。

【8月】

FD委員会（26日）

主な検討内容：

- 平成27年度前期成績評価総括と、各学生の成績及び学習状況に対応した指導の方向性の検討。
- 平成27年度前期（最終）授業評価アンケートの結果に対する担当教員の所管と対応の確認。
- FD講演会の実施に向けた準備作業進捗状況の確認。
- 法律系科目担当教員向けの研究会「電子立法に関する技術の到達点」の開催案内。

【9月】

FD講演会の開催（2日）

主な内容：

- 國學院大學法学部の中川孝博教授によるFDワークショップ「法学教育は甦るか？」の開催

【10月】

FD委員会（28日）

主な検討内容：

- 平成27年度後期FD活動実施計画の策定。
- 平成27年度後期（中間）授業評価アンケート実施スケジュールの確認。

【11月】

□FD委員会（25日）

□主な検討内容：

○平成27年度後期（中間）授業評価アンケートの回答率や回答内容に関する検討。

○法務省（司法試験委員会）からの定期試験問題等の提出要請を受けての今後の定期試験問題作成方針の確認。

【1月】

□FD懇談会（13日）

□主な検討内容

○平成27年度後期（中間）授業評価アンケートの回収率や集計結果および担当教員の所管と対応に関する意見交換。

○平成27年度後期（最終）アンケートの実施スケジュール等の確認。

○平成27年度後期末試験の適切な実施・評価を通じて学生の能力を高める研究科教員の所期の目的を確認。その目的達成を目指した教員の体制を確認。（教務委員とFD委員の連携対応など）

□FD委員会（24日）

□主な検討内容：

○平成27年度後期授業収録の完了報告と各教員の閲覧方法の確認。

○FD経費の執行状況確認と今後の執行計画に関する検討。

【2月】

□FD委員会（24日）

□主な検討内容：

○平成28年度FD活動計画書の作成

○平成27年度後期成績評価総括の確認

○平成27年度のFD活動実績（教員の参加率を含む）に関する意見交換

3 FD活動の内容

（1）学生による授業評価アンケートの実施

教育内容や教育方法に対する学生からの評価は、①授業評価アンケート、②「学期末試験」「出題の趣旨／採点のポイント」に対するアンケート、③クラスワークによる担任との相談や懇談、④その他の方法を通じて実施された。

法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目については、①授業中間アンケート（授業のおよそ半分を経過した、前期は5月、後期は11月）、②授業終了時のアンケートを実施している。講義終了時だけでなく、進行中の授業に対する学生の評価を把握し、開講中の講義の改善に当該学生の評価を活かすために行った。

「学期末試験」「出題の趣旨／採点のポイント」に対するアンケートは、法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目について、期末試験が終了したのち、各科目の成績評価総括報告書が公開された時点で、学生に対するアンケートを実施して、①期末試験の出題が、「基本的な法的知識や体系的理解」「法的思考能力」「事案の事実を把握し分析する能力」をそれぞれの程度問うものであったか、②成績評価総括報告書に記載された「出題の趣旨／採点のポイント」が、自身の答案を見直して復習するのに資するものであるかどうかを評価した。

上記すべてのアンケート結果は、授業で用いている電子シラバス・システムに掲載されることによ

り、当該科目の履修者のみならず、すべての学生に向けて公開された。また、最終アンケートについては、翌年度の担当教員が同一である場合は、翌年度のシラバス・システムの欄にも、参考データとしてアンケート結果が掲載された。

授業評価アンケート（中間・最終）の結果が通知されたのち、法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目については、担当教員がアンケート結果に対する「所感と対応」の作成を行った。

（2）クラスワークによる担任との相談や懇談

クラスワークによる担任との相談や懇談では、学生を 2～3 名程度のクラスに分けて、これに対して 1 名の担任と 1 名の副担任を割り当てて、教員が学生の学修全般や学生生活をケアした。

（3）教員相互の授業参観

法科大学院においては、各教員はすべての授業を自由に相互参観することができる。また、学期ごとに最低でも 1 回は、他の教員による授業を参観した。

授業参観の感想・評価等については、各教員から報告書として提出され、報告書は、当該科目の担当教員に送付されると同時に、FD懇談会において回覧され、授業改善のための検討資料とされた。

（4）授業のビデオ収録参観

授業を学期ごとに 1 回ずつビデオ収録し、ネットワーク上のサイトで随時閲覧できる体制を構築している。また、DVD による画像の配布に対応できる体制も整備した。各教員は、自分自身の講義をこのビデオ映像で視聴して、改善点や成功している点を自ら点検するためのツールとして活用した。

（5）外部研修等への参加

今年度は、熊本大学法科大学院において開催されたセミナー「第 22 回法実務技能教育支援セミナー」に現役弁護士であるみなし専任教員 1 名を含む 2 名の教員が参加した。また、島根県立大学教員と刑事法教育に関する意見交換を行い学部レベルも含めた教育に関する情報収集を行った。専任教員 1 名がアメリカ合衆国コロラド州の NITA (National Institute for Trial Advocacy) およびデンバー大学ロースクール (University of Denver Law School) を訪問し、現地の法学教育の現状を視察するとともに意見交換を行った。さらに、専任教員 1 名が名古屋大学において ICT を活用した法学教育カリキュラムの構築に向けた聞き取り調査を行った。一方、研究科長および教務委員長は、九州大学、熊本大学、琉球大学の研究科長、教務委員長が参加する「九州・沖縄地区四大学教育連携協議会」において実習科目の取扱い等について意見交換を行った。これらのセミナーや他機関との意見交換等により得られた知見が FD 懇談会で報告された後、教員相互で討議・総括がされた。

（6）FD研修会の開催

平成 27 年 9 月に、司法政策教育研究センターとの共催により、國學院大学法学部の中川孝博教授を招へいし、FDワークショップ「法学教育は甦るか？」を開催した。中川教授は、いわゆるアクティブ・ラーニングの手法を全面的に取り入れた教育実践を行っており、その方法と成果を『法学部は甦る！上・初年次教育の改革』（2014 年、現代人文社）として公刊している。当日は、同書で紹介された教育実践の他、國學院大学法学部が組織的に取り組む新しい授業の姿が動画等の再生を含めて詳しく紹介された。これを踏まえて、本学の法科大学院におけるこれまでの教育実践を振り返りつつ、さらなる授業の活性化に向けた施策について、活発な意見交換がなされた。なお、國學院大学法学部からは、中川教授の他、宮内靖彦教授・法学部長（国際法）、上村勝慶教授（憲法）、大江毅准教授（民事訴訟法）が参加した。また、本学からは、本研究科の教員の他、法文学部を主担当とする教員

が多数参加した（ワークショップの実施報告として、KULS ニュースレター61号参照）。

平成28年3月には、北海学園大学大学院法務研究科の四ッ谷有喜教授を招へいし、研究科教員に対して法学教育におけるカリキュラムや新たな取り組みに関する研修会を開催した。まず、四ッ谷教授による民法分野の特別授業を実施し、本研究科の学生のほか、法科大学院進学を目指す法文学部の学生が受講した。授業終了後、学生からの感想も交えて、特別講義のため作成した教材の工夫、双方向形式による授業進行の様々な工夫、法科大学院の上級学年において欠落しがちな基本的な法的思考の様式等について、本研究科の教員と四ッ谷教授による意見交換が行われた。

これら2つの研修会を通じて、法科大学院における教育手法の効果とその限界、学部における法学教育への応用可能性について、知見を共有することができた。

（7）成果に結びつかせるための方策・工夫

法科大学院のFD活動は、教員間の問題意識を共通化するとともに、その取り組みを具体的な成果に結びつけるため、①情報伝達の双方向・多方向性、②日常的な意見交換の実施を重視している。

法科大学院におけるFD活動は、月例で開催されるFD懇談会を中核的な「場」として実施している。授業参観の結果、授業評価アンケートの結果、授業評価アンケートに対する応答内容、各教員が参加した外部研修など、各教員がそれぞれに行ったFD活動は、すべて定例のFD懇談会の席上で全員に対して開示される。そして、懇談会では、各種報告書等の内容に基づいて、自由な意見交換が行われる。これによって、個々の活動を記録・蓄積するだけでなく、その成果を常に全教員がリアルタイムに近い形で共有し、即時に議論の対象とすることによって、個々の活動により得られた知見を多面的に検証し、共有している。

また、この懇談会を数回にわたって開催することによって、授業改善のための情報交換・意見交換を特別な「行事」に仕立てるのではなく、日々の教育活動や研究科運営と一体化した日常的な取り組みとしている。懇談会では、FD委員会が設定したテーマに限らず、各分野や各教員から授業や学生の状況に関する問題提起を自由に行う時間帯を設けている。

臨床心理学 研究科

臨床心理学研究科平成 27 年度 FD 活動報告

1. はじめに

臨床心理学研究科 FD 委員会では、FD 活動の強化を目的に平成 27 年度から定例の研究科 FD 会議（FD 研修会を含む）を、ほぼ毎月行うように体制を整え、学生による授業評価アンケート結果の共有及び相互理解を通して授業改善が適切に行えるように努めた。さらに、より実践的な FD 活動実施に向けて毎月テーマを決めて授業改善のための相互研修、外部講師を招聘しての研修等を行って FD 活動の充実を図った。特に、平成 27 年度は臨床心理実習科目の授業改善に特化したテーマを設け、臨床心理士養成大学院の内、専門職大学院、一種指定大学院への情報収集・意見交換を行い、また、外部講師として招聘するなど活発な FD 活動を行った。以下に、その概要を具体的に報告する。

2. 全教員による研究科 FD 会議（FD 研修会も含む）の定例化

上記に示したように、平成 27 年度から定例の FD 会議（FD 研修会を含む）を、ほぼ毎月行うべく体制を整え、より実践的な FD 活動実施に向けてテーマを決め FD 活動の充実を図った。今年度は臨床心理実習科目の授業改善に関わるテーマが中心となったが、主なテーマは、授業改善の取り組みばかりでなく、職業倫理・研究倫理、臨床心理実習科目の教育方法の改善及び客観的評価に関する検討、等を掲げている。各月におけるテーマは以下の表に示した通りである。

表 1. 平成 27 年度 FD 会議開催日とテーマ（FD 研修会を含む）

	年 月 日	テーマ
第 1 回 FD 会議	平成 27 年 4 月 3 日	専門職大学院における FD 活動について
第 2 回 FD 会議	平成 27 年 4 月 22 日	臨床心理実習（学内実習）の効果的な指導方法について
第 3 回 FD 会議	平成 27 年 5 月 20 日	臨床心理実習科目の評価方法について 1 -実習科目の評価方法についての見直し-
第 4 回 FD 会議	平成 27 年 6 月 25 日	臨床心理実習科目の評価方法について 2 -実習科目評価の GPA 導入に関する検討-
第 5 回 FD 会議	平成 27 年 7 月 29 日	フォローアップセッションについて
第 6 回 FD 会議	平成 27 年 9 月 30 日	職業倫理の教育方法について
第 7 回 FD 会議	平成 27 年 10 月 13 日	研究倫理の教育方法について
第 8 回 FD 会議	平成 27 年 12 月 2 日	学生による授業評価結果と授業改善 1 -授業改善の取り組み紹介-
第 9 回 FD 会議	平成 28 年 1 月 20 日	学生による授業評価結果と授業改善 2 -学生・教職員ワークショップの報告-

第10回FD会議	平成28年 3月 29日	関西大学のFD活動の実際について（臨床心理実習評価を中心に）
----------	--------------	--------------------------------

※定例会議に位置づけたため、教員の出席率は原則100%である。

3. 授業評価アンケートの実施と臨床心理学研究科の独自の取り組みとしてのフォローアップセッションの実施

1) 授業評価アンケートの実施

(1) 実施対象科目と実施時期

学生による授業評価アンケートは、本研究科開講科目の全て（全ての講義科目、演習科目、実習科目）が対象となり、前期は6月中旬と7月下旬の2回、後期は11月中旬と2月上旬の2回、毎年計4回のアンケート実施が行われた。なお、各セメスター2回目のアンケートは最終の授業回までに行い、その評価結果に対する授業改善報告を最終回には必ず学生に行えるように実施時期の改善を行った。

(2) 評価項目

評価項目は、学生自身の理解度評価や授業内容に関する評価、ならびに自由記述で行った。具体的には以下の通りである。

<講義科目>

1. 授業を総合的に5段階で評価してください。
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか(テキスト・資料等を使用した場合のみ回答してください)。
3. 授業の内容は理解できましたか。
4. 授業の内容に満足していますか。
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか。
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか。
7. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

<演習科目>

1. 授業を総合的に5段階で評価してください。
2. 授業の内容は理解できましたか。
3. 授業の内容に満足していますか。
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか。
5. 授業を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか。
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか。
7. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

<実習科目>

1. 実習を総合的に5段階で評価してください。
2. 実習での体験に満足していますか。
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか。
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか。
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか。
6. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

(3) 結果

結果は以下の通りであった。

表2. 前期第1～2回目の講義科目における授業評価 (3科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.3	4.4	5.0	3.3	4.6
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.0	4.5	5.0	3.7	4.7
3. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.0	4.1	5.0	2.7	4.1
4. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.3	4.5
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	2.7	4.5	5.0	3.0	4.6
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.3	4.3	5.0	3.7	4.6

(科目名)臨床心理学原論／発達障害者心理臨床論／臨床心理学入門

表3. 前期第1～2回目の演習科目における授業評価 (7科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.4	4.6	5.0	3.6	4.7
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.4	4.4	5.0	3.6	4.4
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.3	4.6	5.0	3.7	4.7
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.6	4.7	5.0	3.6	4.6
5. 授業を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.6	4.6
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.4	4.5	5.0	3.7	4.6

(科目名)福祉心理臨床論／総合的事例研究演習Ⅰ／学校心理臨床論／

成人・老年期心理臨床論／臨床心理面接演習Ⅰ／臨床心理関連行政論／

臨床心理事例研究演習Ⅰ

表4. 前期第1～2回目の学内実習科目における授業評価（4科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.5	4.3	5.0	3.5	4.5
2. 実習での体験に満足していますか	5.0	3.0	4.3	5.0	3.3	4.4
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.5	4.6
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.0	4.4	5.0	3.0	4.4
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.8	4.6

（科目名）臨床心理実践研究Ⅰ／臨床心理実践研究Ⅲ／

臨床心理査定・面接実習Ⅰ／臨床心理査定・面接実習Ⅲ

表5. 前期第1～2回目の学外実習科目における授業評価（2科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.0	4.5
2. 実習での体験に満足していますか				5.0	3.0	4.6
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか		(実施なし)		5.0	3.5	4.6
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか				5.0	3.5	4.5
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか				5.0	4.0	4.7

（科目名）臨床心理地域援助実習Ⅰ／臨床心理地域援助実習Ⅲ

表6. 後期第1～2回目の講義科目における授業評価（3科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.3	4.7	5.0	3.7	4.7
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	4.0	4.7	5.0	3.7	4.8
3. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.7	4.4	5.0	3.3	4.4
4. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.3	4.6	5.0	4.0	4.7
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.7	4.6	5.0	3.7	4.7
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	4.0	4.6	5.0	3.3	4.5

（科目名）遊戯療法論／コミュニティ心理学特論／臨床心理面接学原論

表7. 後期第1～2回目の演習科目における授業評価（6科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.7	4.5	5.0	3.5	4.5
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.2	4.4	5.0	3.2	4.3
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.2	4.5	5.0	3.5	4.5
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.2	4.6	5.0	3.7	4.7
5. 授業を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.5	4.5	5.0	3.5	4.5
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.8	4.6	5.0	3.5	4.5

(科目名)臨床心理面接演習Ⅱ／臨床心理査定特論／総合的事例研究演習Ⅱ／

臨床心理事例研究演習Ⅱ／エスノグラフィック心理臨床論／司法・矯正心理臨床論

表8. 後期第1～2回目の学内実習科目における授業評価（4科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.8	4.2	5.0	3.0	4.3
2. 実習での体験に満足していますか	5.0	3.8	4.2	5.0	3.0	4.3
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	5.0	3.8	4.6	5.0	3.0	4.5
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.0	4.5
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか	5.0	3.8	4.5	5.0	3.3	4.5

(科目名)臨床心理実践研究Ⅱ／臨床心理実践研究Ⅳ／

臨床心理査定・面接実習Ⅱ／臨床心理査定・面接実習Ⅳ

表9. 後期第1～2回目の学外実習科目における授業評価（2科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.5	4.6
2. 実習での体験に満足していますか				5.0	4.0	4.7
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	(実施なし)			5.0	4.0	4.8
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか				5.0	4.0	4.6
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか				5.0	4.0	4.7

(科目名)臨床心理地域援助実習Ⅱ／臨床心理地域援助実習Ⅳ

(4) 集計結果のフィードバックと授業評価報告書の提出及び授業改善に向けた組織的対応

学生による授業評価結果は、匿名性が担保された状態で各担当教員に集計結果がフィードバックされ、各担当教員は集計結果の確認後に、授業に対する自己評価を行った上で、改善方向及び改善策を含めた授業評価報告書の作成を行った。そして、該当月の教授会にて全教員でアンケート結果に関する討議を行い、教育内容及び方法の改善が検討された。さらに、自由記述欄での意見を含めた授業評価結果について全教員による FD 会議、拡大教務委員会・拡大実習委員会等における検討を行い、教育ニーズに応じた授業科目の内容検討および刷新を実行し、ファカルティ・ディベロップメント (FD) に活かすことができた。

(5) 臨床心理学研究科独自の取り組みとしてのフォローアップセッション

本研究科では、専門職大学院における臨床心理実習の評価方法として、平成 20 年度より、臨床心理実習到達度チェックシステムを策定し、各セメスターごとに臨床心理実習の客観的評価が行われてきたが、これらの評価システムは学生や教職員の負担が大きいため、負担軽減を考慮して平成 23 年度～平成 25 年度までは中断していた。しかしながら、臨床心理実習においても、学生が主体的に到達度評価を行い、かつ、教員が学生に対して適切なフィードバックを行える形での教育方法の構築が重要課題となっていることを鑑みて、平成 26 年度よりは、臨床心理実習到達度チェックシステムの内、フォローアップセッションを再開しより客観的な臨床心理実習評価の実現とそれを反映した教育方法の改善を目指し、平成 27 年度も引き続き継続している。

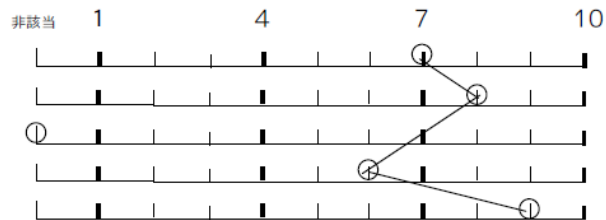
なお、この試みは臨床心理実習科目の GPA 導入を視野に入れた新たな評価方法の構築の可能性を検討することを目的としている。実際に学生がセルフモニタリングして作成するポートフォリオは、主体的な到達度評価を行うための目標設定と課題、例えば、「今期の目標」、「成長した点」、「課題」、「フォローアップセッションでの気づき」を自身で記入し、実習終了後にその到達度をポートフォリオとして記入し 2 年間の成長を自己点検するものとなっており、さらに指導教員とのフォローアップセッションを通して相互的に教育効果を判断し、実践的な FD 活動として活かすことができた。

サマリー

<専門職学位課程 年 期>

記入例

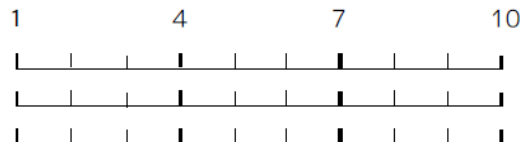
1. ○○○
2. △△△
3. □□□
4. ◇◇◇
5. ◎◎◎



*項目の評点をプロットし、各カテゴリーのプロフィールを作成
 *実施していない項目は「非該当」に○印

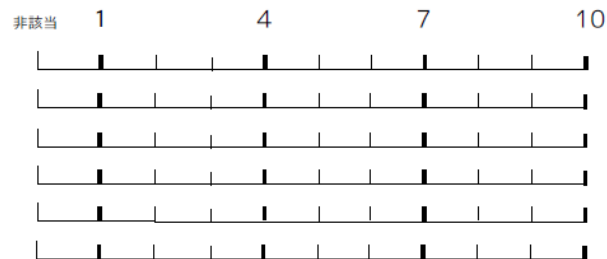
A.実習における基本項目

1. 倫理
2. 姿勢
3. 社会性



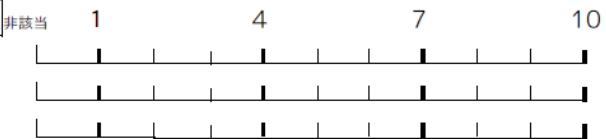
B.学内実習

- I. 相談室
 1. 電話・受付
 2. 陪席
 3. 面接
 4. 心理検査
- II. ロールプレイ
- III. スーパービジョン



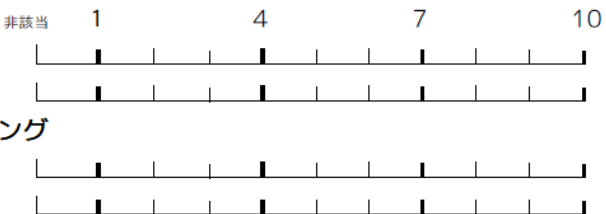
C.ケースカンファレンス

1. 報告者
2. レジユメ
3. 出席者



D.学外実習

- I. 学外実習
 1. 適切な行動
 2. 理解の深化
- II. 報告会・総括シェアリング
 1. 報告者
 2. 出席者



4. 外部講師の招聘によるFD研修会

平成27年度は下記の通り、私立大学において臨床心理士養成の専門職大学院である関西大学から講師を招聘し、①高度なスキルを修得するための臨床心理実習について、②高度専門職人を養成するための特色ある教育課程について、③臨床心理実習の客観的評価について、④公認心理師の国家資格化への対応、について討論を交わし、関西大学と鹿児島大学の教育課程について情報交換を行った。

平成27年度FD研修会

日時：2016年3月29日（火）9:30～12:00

場所：法文棟1階小会議室

講師：岡田弘司先生（関西大学専門職大学院教授）

演題：専門職大学院における教育課程の充実及び臨床心理実習の教育方法について

5. 学外で行われるFD研修会への教員派遣及びFDに関する情報収集・意見交換

平成27年度におけるFD活動での学外への教員派遣は、テーマを「臨床心理実習のガイドライン作成とその効果」と設定し、先行研究を行っている日本大学・国際医療福祉大学へ教員を派遣し情報収集を行うとともに意見交換を行った。

また、日本臨床心理士養成大学院協議会第2回FD研修会でのシンポジウム発表は平成26年度の活動ではあるが、その報告書が平成27年度に発行された「日本臨床心理士養成大学院協議会報」に掲載された。

表10. FD研修会等への教員派遣

年 月 日	タイトル	派遣場所及び派遣教員
平成26年12月6日	地域支援を視野に入れた臨床心理実習の取り組み	日本臨床心理士養成大学院協議会第2回FD研修会（松木繁・中原睦美）
平成28年3月10日	臨床心理実習指導ガイドラインの作成とその効果	日本大学文理学部心理学科（松木繁）
平成28年3月11日	臨床心理実習指導ガイドラインの作成とその効果	国際医療福祉大学医療福祉学研究所臨床心理学専攻（松木 繁）

6. 特筆すべき取り組みや改善事例

1) FD活動の組織的対応の充実

平成26年度までの取り組みをさらに組織的な取り組みとして充実、強化させることを目的に、平成27年度からFD活動を研究科の定例会議として位置付け、研究科FD会議をほぼ毎月行うように体制を整えた。

結果、学生の授業評価アンケートへの具体的な改善策として、アンケート結果を教員へ

のフィードバックや授業評価報告書の提出だけに留めず、該当月の教授会にて全教員でアンケート結果に関する討議を行い、教育内容及び方法の改善の検討を行った。さらに、自由記述欄での意見を含めた授業評価結果について全教員による FD 会議、拡大教務委員会・拡大実習委員会等における検討を行い、教育ニーズに応じた授業科目の内容検討および刷新を実行した。

2) 授業評価アンケート結果を受けての授業改善策のフィードバックの工夫

学生の授業評価アンケート結果での意見を活かすために、これまで通り各学期第 2 回目のアンケートを 15 回目の授業終了時ではなく 14 回目を実施し、第 15 回目には、学生の意見に対するフィードバックを各教員が授業内で行なえるように組織的に取り組んだ。結果として、学生からの意見が教員に伝わる手応えを学生は得ることができただけでなく、教員の授業の進め方の意図を理解できたと好評であった。

3) 臨床心理実習評価の客観性を担保するためのフォローアップセッション導入の試み

臨床心理実習に関する評価が主観的に偏らないために、評価はこれまで実務家専任教員による合議制で行ってきたが、それをより客観的な評価として高めるための改善策として、臨床心理実習到達度チェックシステムの内、フォローアップセッションを再開し、より客観的な臨床心理実習評価の実現とそれを反映した教育方法の改善を目指し実行した。結果、学生は実際に自身でセルフモニタリングし、主体的な到達度評価を行うための目標設定と課題が明確になり、それをポートフォリオ化することによって 2 年間の成長を自己点検することが可能になったと好評である。同時に、指導教員とのフォローアップセッションを通して相互的に教育効果を判断し、実践的な FD 活動として活かすことができた。

文責：平成 27 年度 FD 委員長・松木 繁

連合農学 研究科

F D 活動報告書

(平成 2 7 年度)



大学院連合農学研究科

平成 2 8 年 3 月

大学院連合農学研究科 F D 活動報告

1. はじめに

大学院連合農学研究科は、佐賀大学、琉球大学と鹿児島大学の3大学4研究科が連合した農水産学系の独立博士課程大学院で、高度な専門的能力と豊かな学識をそなえた研究者の養成を目的として、構成大学が連合し、多彩な教員組織を構築して、研究施設及び設備も連合しながら教育研究体制を整えて、社会・世界に貢献する博士を輩出することを目指している。また、社会人並びに外国人留学生を積極的に受け入れ、東アジアにおける農水産学の教育研究の中核となるとともに、農水産業及び地域の発展に寄与することを目的としている。

本研究科は、1988(昭和63年)に設立され、平成19年度宮崎大学の離脱に伴って、平成21年度に4専攻11連合講座を3専攻9連合講座に改組し、単位制導入の改革を行った。平成27年5月1日現在、日本人学生62名、外国人留学生40名、計102名が在籍している。

博士の学位は、12単位以上修得の上、学位論文の審査及び最終試験に合格して授与されるが、新カリキュラムとして職業人教育や国際感覚を養うことを意図した人材養成学生支援セミナーや国際農学特別講義などを創設することで大学院教育の実質化を目指している。さらに、年に一度、地理的に離れた3構成大学の学生が一堂に会して行う農学特別講義Ⅰ(一般セミナー)の実施や、多地点制御遠隔講義システムを用いた授業を行うことで教育方法等の工夫を行っている。

また、本研究科では、学生1人に対し、主指導教員1人、副指導教員2人の計3人による指導体制をとっており、1年次の学生には「中間報告会」、2年次の学生には「中間発表会」を課し、その達成状況の検証を実施している。

F D活動に関しては、平成19年度に代議委員会のサブ委員会としてF D委員会が設けられ、農学特別講義Ⅰ(一般セミナー)を中心とした授業アンケートや修了生アンケートの集計・解析評価を行い、改善に向けて取り組んでいる。

平成22年度は、3年に1度実施してきた自己評価・自己点検を行った。そして、さらにその自己評価書に基づき、平成12年度以来途絶えていた外部評価も受けて、21年改組後の連合農学研究科の教育システムや改善状況を把握することにした。平成24年度には、本研究科における学位の質の保証を確立し、研究者、技術者、教育者として地域社会及び国際社会に幅広く貢献できるリーダーを養成するために、3つのポリシーを策定した。

平成27年度のF D活動としては、F D委員会を3回開催し、「学生教育の改善及び教育体制の向上を図ること」をテーマに掲げ、本研究科における課題及びアンケートのデータ分析、それに伴う改善に向けた検討を継続して行い、今後の英語教育の充実に向けて、学生の海外研修等への意識調査を実施し、教員対象の英語講義のためのセミナー開催などを実施した。



(多地点制御遠隔講義システムを用いた授業)

2. 「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」の開講と改善に向けたアンケート調査の結果と分析

本研究科では、3構成大学（4研究科）に配属されている学生が一堂に会し、3日間の集中講義形式で「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」を実施しており、1年次及び2年次の2回受講（2単位）することを必須としている。

本セミナーは、全学生を対象として、個人の専門に偏らない幅広い農林水産学分野の知識の習得を目的としており、4名の内外の講師による講義、全学生を4班に分けて1年生が各自の研究発表を行う専攻セミナー、2年生全員（未発表の3年生を含む。）が研究成果報告を行うポスターセッション（情報交換セミナー）で構成されている。今回はこれに加えて研究者倫理を学ぶためのDVDの視聴が行われた。

講義は、先端的でトピック性のある内容とされ、広範囲で専門的に高い水準のものであり、研究の視野が広がることが期待される。また、専攻セミナー及びポスターセッションは、学生のプレゼンテーション能力の向上に役立つものであり、国籍を超えた貴重な交流の場でもある。

また、開設した当初から、受講生を対象にアンケート調査を行い、その集計結果の分析を参考に、授業内容等の改善を図ることがFD活動の第一の取り組みになると考えている。

平成27年度は、鹿児島大学農学部を担当により、11月4日～6日の3日間の日程で開催され、学生60名、教職員20名の参加があり、外部講師を交えて連大教職員・学生による交流会も併せて実施された。

平成27年度 農学特別講義(一般セミナー) 日程表

会場: 鹿児島大学学習交流プラザ

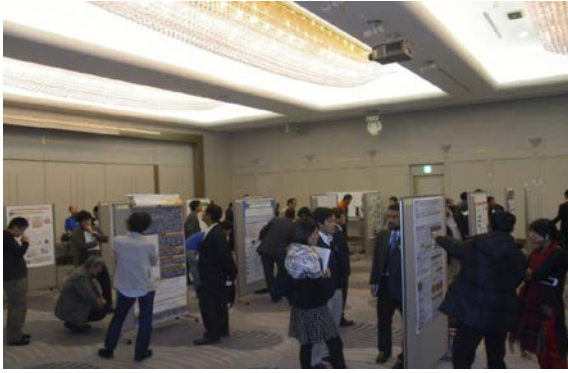
	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	
11/4(木)						14:15	14:45	15:30	セミナーA 「農産物直売の国際比較」 櫻井 清一 千葉大学大学院 園芸学研究所 教授	17:00	17:30	研究者 倫理 交流会
11/5(木)	9:00	10:30	10:40	12:10	13:10	14:40	14:50	16:20	16:30	18:00		
	受付	セミナーB 「環境バイオ: 有害物質の分解」 古川 謙介 別府大学食物栄養学部 発酵食品学科 客員教授	休憩	セミナーC 「保護地域管理の現状と 課題」 伊藤 太一 筑波大学生命環境系 教授	昼 食	セミナーD 「アゲハチョウの食草認識 と進化に関する分子機構 の解明」 尾崎 克久 JT 生命誌研究館 昆虫食性進化研究室 研究員	休憩	専攻セミナー	休憩	情報交換セミナー (2年生ポスターセッション)		
11/6(金)	9:00	10:30	10:40	12:10	12:40							
	受付	施設見学	休憩	施設見学	閉講式							



平成27年度 鹿児島大学大学院連合農学研究所 農学特別講義(一般セミナー) 平成27年11月4~6日 於: 鹿児島大学学習交流プラザ



「農学特別講義 I (一般セミナー)」の講義
ポスターセッション (情報交換セミナー)



ポスターセッション（情報交換セミナー）

農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）参加学生から徴した平成27年度のアンケートの集計結果は次表のとおりである。〔参加学生：61名 アンケート提出者：49名 アンケート回収率：80.3%〕

平成27年度農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）アンケート調査結果

セミナーの理解度について						
〔回答項目〕	セミナーA	セミナーB	セミナーC	セミナーD		
ほぼ理解できた	45名 (92%)	16名 (33%)	26名 (53%)	31名 (63%)		
半分程度理解できた	3名 (6%)	26名 (53%)	19名 (39%)	17名 (35%)		
理解できなかった	1名 (2%)	7名 (14%)	4名 (8%)	1名 (2%)		
セミナーの運営・企画等について						
〔回答項目〕	日程(時期)	日程(日数)	会場			
良い	43名 (88%)	46名 (94%)	47名 (96%)			
悪い	6名 (12%)	0名 (0%)	0名 (0%)			
その他	0名 (0%)	3名 (6%)	2名 (4%)			
専攻セミナーについて						
〔回答項目〕	グループの分け方					
良い	41名 (84%)					
改善すべき	8名 (16%)					
無回答	0名					
専攻・情報交換セミナーについて						
〔回答項目〕	プレゼンテーション	ポスターセッション	交流会について			
意義がある	33名 (67%)	41名 (84%)	37名 (76%)			
少しは意義がある	15名 (31%)	7名 (14%)	9名 (18%)			
その他	1名 (2%)	1名 (2%)	3名 (6%)			
無回答	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)			

①セミナーの理解度について

ほとんどの講義で、日本語と英語の併用で実施していることにより、理解度が上がっているが、内容が専門的すぎず、理解がしやすかったという意見もあった。

また、ほとんどの講義について、「非常に解りやすく、有意義なテーマだった。」「研究内容、研究成果、利用方法等興味深かった。」等の意見が見られたが、講義内容が専門性の高いものにつ

いては、理解が困難だったとの意見があった。専門用語については、用語説明と配付資料がある
とより理解できると思うという意見が多くみられた。

②セミナーの運営・企画等について

「時期」「日数」「会場」については、約 90%の学生から「良い」との評価を得られているため、
今後も従来通りの実施方法を考えている。

③専攻セミナー・情報交換セミナーについて

学生間での研究についてのディスカッションの時間がもっと多く取れるように改善してほしい
との意見があった。

情報交換セミナーについては、異分野の研究を知る機会が得られたこと、自分の研究に役立つ情
報があり有意義だったことなどの意見が多かった。

④セミナー全般について

- ・講義（セミナー）を減らして、専攻セミナーやポスターセッションの時間をもっと長く取って
欲しいとの意見があった。
- ・施設見学は、大変勉強になった。見聞を広めることに役立った。説明の時間をもう少し欲しか
った。
- ・今回のセミナーは火曜日が祝日であったため、社会人学生としては仕事の調整が難しかった。
- ・講師の先生方の各専門分野の最先端の研究内容を受講でき、研究を進める上で大変参考になっ
た。

次年度の琉球大学農学部当番の開催においては、今回のアンケート結果を踏まえて、検討していく
こととした。

3. 人材養成学生支援セミナー I・II

平成 22 年度から、本研究科では、博士課程修了者が社会から何を求められているかを理解し、今後
の修学姿勢及び社会へ出る際の心構え等の修得に役立てることを目的に、各方面の第一線で活躍する
方々からより実践的な講演をしていただく機会として、「人材養成学生支援セミナー I」を開催してい
る。

本セミナーは、選択科目であり、集中講義形式で行われ、0.5 単位となっている。

平成 27 年度は、佐賀大学農学部担当の下、7 月 15 日に（90 分講義×4 コマ）、多地点制御遠隔講義
システムを使用して各構成大学に配信して実施し、連大生 13 名、修士課程学生等 21 名の計 34 名の参
加者があった。なお、今年度は、各構成大学研究科から講師を 4 名ずつ推薦していただき、各研究科で
講演を行うことで、多くの学生が直接講演を聴講できる試みを行った。今後もその成果が繋がるよう
にしたい。

平成 24 年度から、連大生だけでなく、研究者を目指す修士課程や学部の学生及び教職員の参加も推
進しており、講師の方々の広い視野からの有意義な講話は、今後企業や研究機関の研究者を目指して
いる学生にとって、大きな励みと貴重な教訓になったと思われる。学生のみならず、教員にとっても教育
指導を考える上で、参考になるものが得られたのではないだろうか。

今後もより広い分野の講師を迎えて、多くの学生及び教職員の意識向上に繋がるよう実施していくと
ともに、より一層の協力体制を築けるように、企業及び研究機関の開拓に努力していくことも必要にな
って来ると思われるため、今年度から、各構成大学に就職支援活動担当教員を置き、本セミナーを推進
していくこととしている。

また、我が国の水産食糧は黒潮域に分布する回遊性魚介類にも依存していますが、これらの資源量は
黒潮域の海洋環境と生態系を介した気候変動の影響を受けて大きく変動することが知られています。本

セミナーは、このような黒潮域へ出かけ、受講者みんなで協力しながら海洋観測と取得データの考察を行い、食糧を支える海の環境や生態系について知るという科目です。平成 27 年度は、11 月 14 日～22 日（8 日間）水産学部の練習船「新かごしま丸」に乗船して、実践的な学習、高度な専門能力を涵養することを旨として、連大生 4 名が参加した。

人材養成学生支援セミナー I・II とともに継続実施し、地域社会、国際社会で幅広く活躍できる能力と意識の養成に繋がるよう、今後も整備していかなければならない。

平成 27 年度「人材養成学生支援セミナー I 2015」日程表

8:50		9:00		10:20		10:30		11:50		13:00		14:20		14:30		15:50		16:00		17:40			
7 月 31 日 (金) July 31 (Fri)	開講 挨拶 Opening	講義 1 Lec1		講義 2 Lec2		講義 3 Lec3		講義 4 Lec4		昼食 Lunch Time		休憩 Break		休憩 Break		休憩 Break		総合討論会 Discussion					
		中井 茂平 上野ガス株式会社 代表取締役専務		安田 元 オリオン機械株式会社 船機事業本部企画管理部 管理グループ宮城駐在		高根 健一 株式会社インプラントイノベーションズ 代表取締役		安達 宏 ライオン株式会社 研究開発本部企画管理部戦略推進 室長															
		Mohei NAKAI UENOGAS Co., Ltd.		Hajime YASUDA ORION MACHINERY CO., LTD.		Ken-ichi TAKANE Implanta Innovations Inc.		Hiroshi ADACHI Lion Corporation															
		鹿児島大学(水) Kagoshima University(Fish)		琉球大学 University of the Ryukyus		佐賀大学 Saga University		鹿児島大学(農) Kagoshima University(Agr)															
		講義大学																					

場所：各大学 SINET 設置教室 Place: Sinet room of each University
 佐賀大学：佐賀大学農学部 1 号館南棟 1 階学生演習室
 鹿児島大学(農)：鹿児島大学連合農学研究科 3 階会議室
 鹿児島大学(水)：鹿児島大学附属図書館水産分館セミナールーム
 琉球大学：琉球大学農学部 2 階会議室



人材養成学生支援セミナー I（鹿児島市）



洋上セミナー（船上で観測内容の説明）

4. 英語論文作成指導セミナー

平成 23 年度から、学生の英語論文作成のための知識の習得・向上のために英語論文の作成法及び書き方などの指導としてのセミナーを、一部インターネットを使用して、多地点制御遠隔講義システムにより各構成大学へ配信して実施している。

本セミナーは、学生及び教員からも高評価を得ており、継続的な開催を希望する意見が多く、学位論文作成のみでなく、グローバル化に対応した、国際的に活躍できる人材を育成する上でも、実践的な教育として、今後も継続して開催していくこととしている。

平成 24 年度は、英語論文のみならず、研究者の「書く」能力の向上を図ることを目的として開催し、添削作業を取り入れ、より実践的な指導が行われた。

平成 27 年度においては、5名の学生の参加があり、インターネット辞書利用により応用問題解説を取り入れ、的確な指導の下、高い評価が得られた。

5. 分野別セミナーの開催

平成 24 年度から、構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的とした「分野別セミナー」を開催している。

平成 27 年度の 1 日目は、山口大学農学部 松下一信先生による「酢酸菌の適応進化とその適応能を利用した酢酸菌発酵生理学の展開」、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の山本(前田)万里先生による「農産物の機能性と新しい機能性表示制度について」、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の渡辺純先生による「腸内細菌と私たちの健康 -機能性食品開発の新たなターゲットとしての可能性-」、立命館大学薬学部の高田達之先生による「幹細胞生物学を利用した固有魚種保存と環境科学研究」の 4 講演、25 題のポスター発表、交流会を行った。

2 日目は名護市の津嘉山酒造所と金武町のきのこセンター金武の 2 か所の工場見学を行った。

平成 27 年度は、学生の多数参加があり、教員 15 名、学生 30 名の合計 45 名が集い、有意義なものとなった。今後も他の分野においても開催する機会を広げ、分野ごとに議論、研究・教育を行える環境を整備し、大学間及び地域と共同・連携した共同研究プログラムの推進にも繋がるものと期待するところである。講演会を通して最新の研究成果を学習し、ポスター発表で自分の研究成果について学生や教員と議論を深めることができ、交流会とエクスカージョンで他大学の学生との交流を深めることができた。



「分野別セミナー（農芸化学）」



工場見学



「分野別セミナー ポスター発表」

6. 修了生を対象としたアンケートの実施

例年3月と9月に、修了生を対象としたアンケートを実施している。

これは、自己点検・評価の参考とするため、平成18年4月に、平成11～17年度修了者を対象に郵送により実施したのが始まりで、以後は修了時に学生から回答してもらう形を取っており、平成24年度からは、Webによる入力方式で行っている。

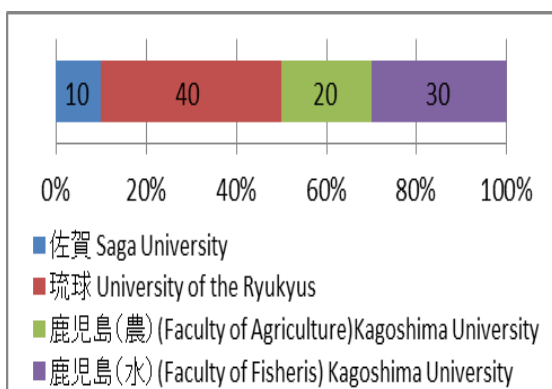
さらに、平成25年度から、在学生へのアンケートを開始した。これは、FD委員会において、現在連大で学ぶ学生から一番身近な現場の声を聞くことで、より学生の声が反映されるのではないかとの見解から、実施を決定したものである。

平成27年度の修了生アンケートの集計結果

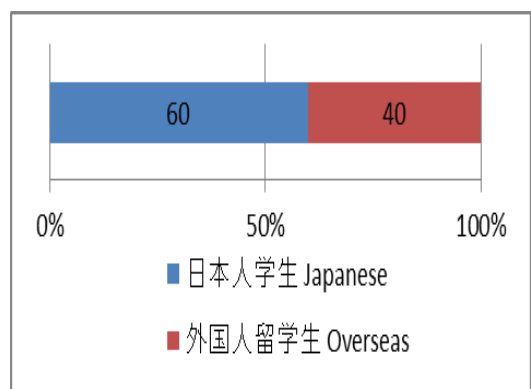
H27年度修了生18名中（H27.9、H28.3）、回答学生13名（日本人8名、留学生5名）回答率72%

（以下アンケート項目）

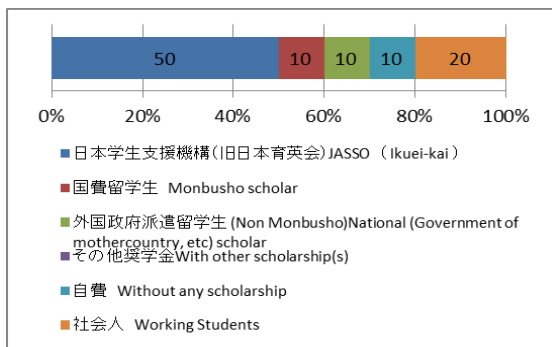
所属構成大学



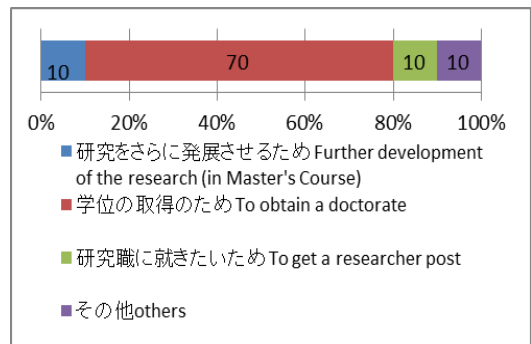
日本人学生あるいは外国人留学生



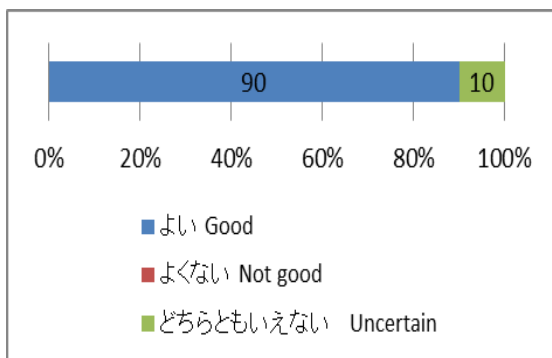
奨学金受取状況



連大への入学目的

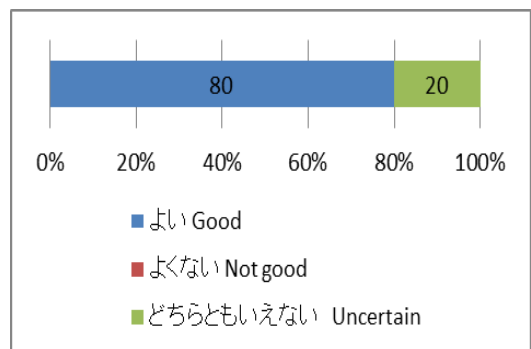


農学特別講義 I（一般セミナー）内容・方法について

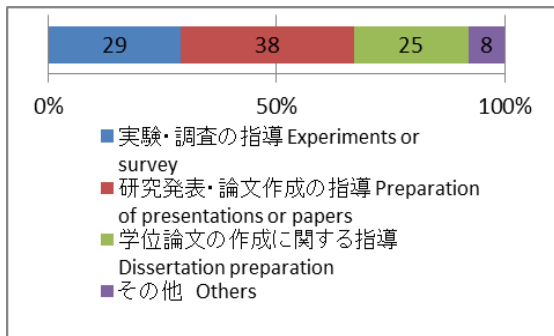


主にどんな指導を受けていたか

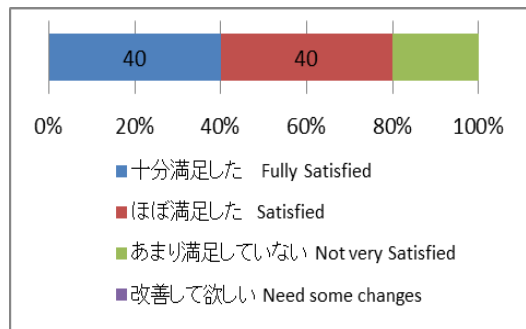
専攻別講義・特論の内容・方法について



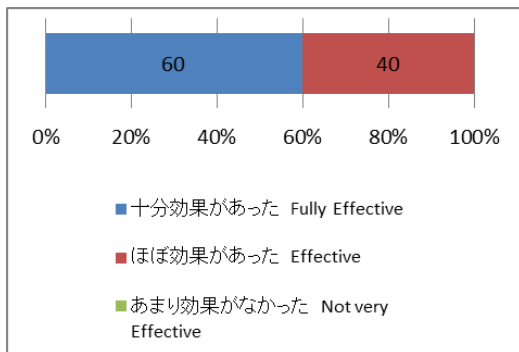
全般的に見て教員の指導に満足しましたか



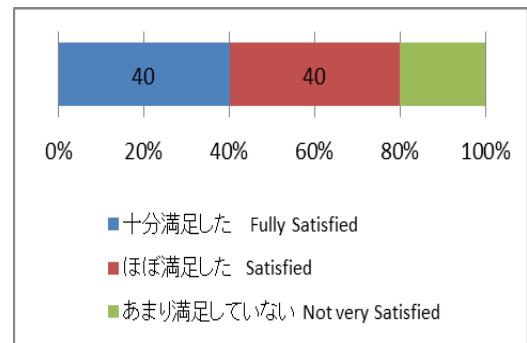
中間発表はあなたの研究を進める上で効果がありましたか。



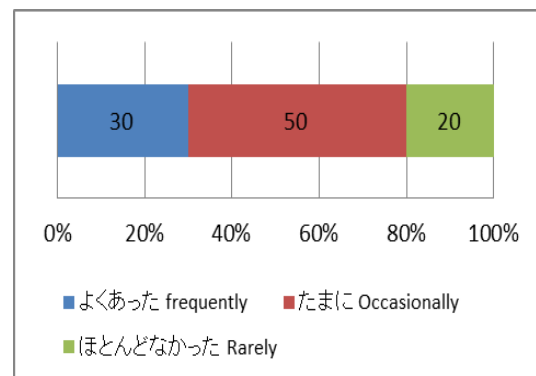
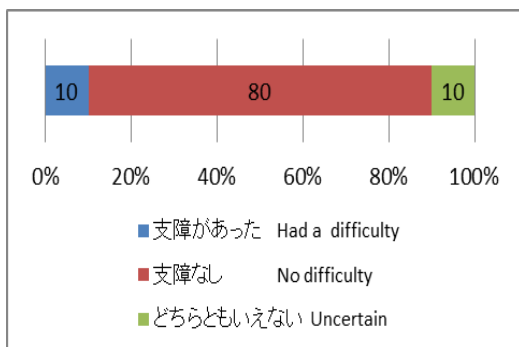
あなたの研究成果に満足していますか。また、得られたものがありましたか。



研究設備等で研究を遂行する上で何か支障がありましたか。



他の構成大学とは情報交換や交流がありましたか。



各セミナーの内容、教員の指導、研究設備等への評価が高い中、他の構成大学間の情報交換や交流については、あまり交流が図れなかったとの意見があり、他の大学の学生とのコミュニケーションを深める機会を望む声が多かった。学生間の交流不足については、例年意見が挙げられており、交流の機会を設ける場を広げるべく、平成24年度から分野別セミナーの継続などを実施しており、今後も、学生交流の機会の必要性を追求していくこととしたい。

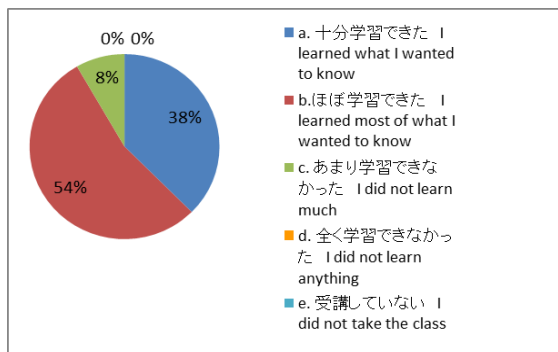
また、中間発表会は学位論文作成への推進のためにも非常に有効であったとの評価が高く、研究をまとめるのにとっても重要で、実験の方向性等の調整にもつながり様々な視点からの助言がもらえるなどの意見があり、平成28年度におけるFD活動の一環として反映させるようにしたい。

対象学生（2年生）26名中、回答学生 24名（日本人 16名、留学生 8名） 回答率 92%
 在籍（佐賀7名、琉球5名、鹿児島(農)9名、鹿児島(水産)3名）

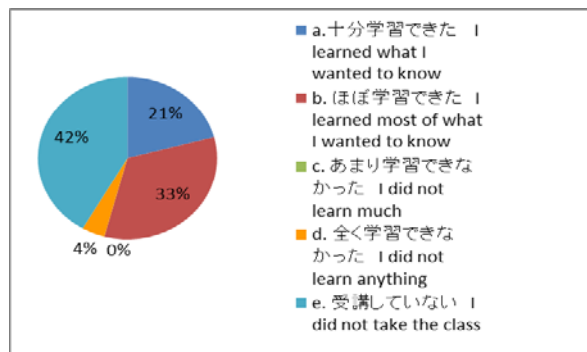
平成 27 年度学生アンケートの集計結果

(以下アンケート項目抜粋)

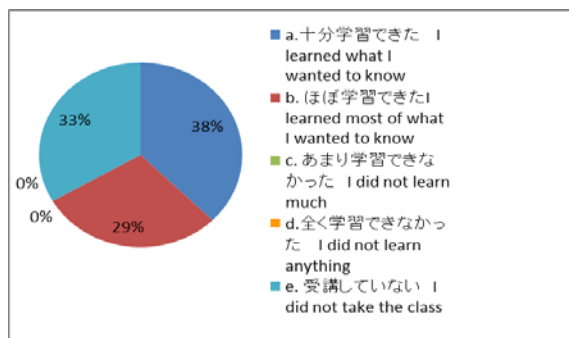
1-1 農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）



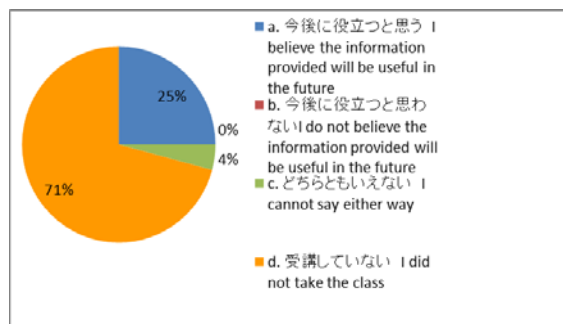
1-2 農学特別講義Ⅱ



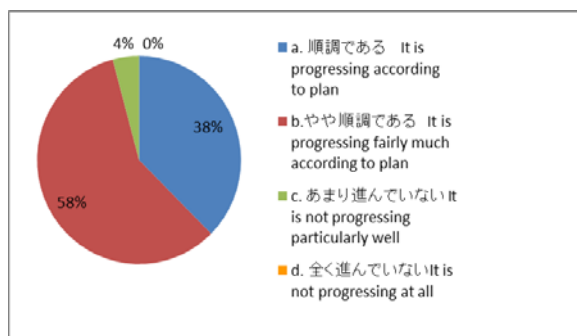
1-3 専攻別特別講義・特論



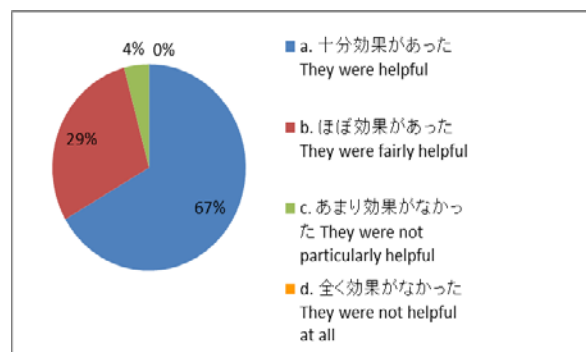
1-4 人材養成学生支援セミナー



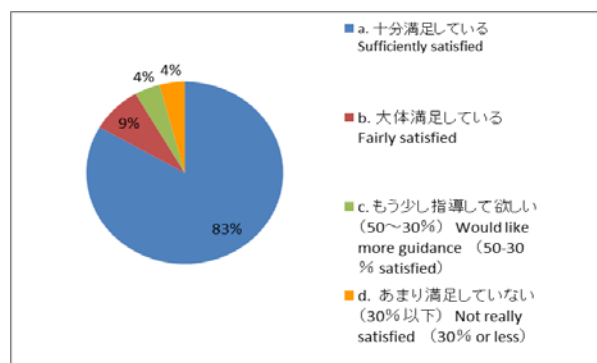
2-1 研究の進捗状況について



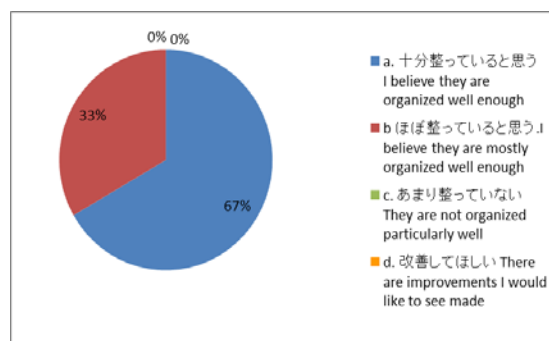
2-2 中間報告会及び中間発表会について



2-3 指導教員の指導について



2-4 研究設備・環境等について



各セミナーの内容、教員の指導、研究設備等に関しては、ほぼ満足している回答が多かったが、一般セミナーでの日本語と英語の統一性や専門用語に対する補助、専攻別講義での共通項を生かした授業など、講義の実施方法への要望も見られた。

また、英語教育の向上（英語による授業拡大）については、英語学習の講義や機会を増やして欲しい、などの意見があり、グローバル化が求められる中、教員の英語講義のあり方と併せて早急な検討を進めていく必要がある。

各種情報の伝達のあり方についても、学生から改善を求める声があり、学生に必要な情報が届いていないケースがあった。研究設備等に関しても、情報不足や使用方法の指導などに対する具体的な意見も見られ、今後、教職員ともに現状の見直しを行い、FD委員会を中心に改善策を検討し、FD活動の一環として反映させていきたい。

これらのアンケートについては、今後も継続して実施し、年度ごとの比較も含めてデータ分析を行い、FD活動の源として本研究科の教育研究の将来に役立たせていきたいと考える。

7. その他のFD活動

ティーチング・アシスタント制度による活動実態把握

ティーチング・アシスタント（TA）制度は、大学院学生の処遇の改善とともに、指導者としてのトレーニングの機会提供を目的として実施しており、平成18年度からTA業務に従事する連大生を対象にアンケート形式の「TA活動実施報告書」を提出させ、さらに平成19年度からはTAの指導を受けた学生を対象にしたアンケート形式の「TA活動評価調査」を実施して、その内容を分析することによりTA活動の実態把握に努めている。

また、平成21年度から、TA採用学生及び当該学生の指導教員を対象に、「大学の教育理念とTAの心構え」「TA業務に関わる注意事項」「安全衛生」を指導することを目的とした「TA研修会」を構成大学毎に実施しており、TA活動に携わる学生への事前指導を遂行している。

今年度の報告書では、教えてもらう立場から教える立場になることで学ぶことが多かったこと、自分自身の知識、学力を高めることの意識が強くなったことなどが多く見られた。今後も、TAに求められること、TAに何が必要かを見極めて、学生の研究指導能力の向上に繋がるよう、教員からの指導助言も取り入れるなど、改善を図っていくこととしたい。

8. おわりに

本研究科のFD活動については、平成18年度末から平成19年度にかけて、FDに関する規則や委員会の整備を行い、教育研究のより一層の充実に向けた体制が整ったといえる。各種アンケートを実施し、その集計結果に対してFD委員会で意見交換を行い、次年度に反映できるようFD委員会及び代議委員会において早急に検討し、改善できる部分については、見直しを図るように教職員で協力して進めているところである。

今後は、本研究科でのFD委員会を含むさまざまなFD活動を、いかに今後の教育力、特に博士課程学生に対する研究指導能力の向上に反映させていくか、また、国際化が進む昨今の状況においては、学生・教員共に英語学習への対応が急務とされ、グローバル人材の育成を目指し、英語教育の向上（英語による授業拡大）や日本人学生の海外派遣促進を行うことが検討課題であると思われる。

現在、本研究科では標準修業年限内での学位取得率が低下しており、これまでも学位取得率向上対策の一環として、1年次に中間報告、2年次に中間発表会を義務化させ、主指導教員から1年次終了時点で「研究指導報告書」を、2年次終了時点で「研究経過の『中間報告会』終了報告書」を提出させ、研究の進捗状況を確認するシステムを導入している。この制度をさらに有効化するために、平成23年度からは、2年生対象の「中間発表会」は、多地点制御遠隔講義システムを利用して、専攻ごとに合同で行い、お互いに相対的な進捗状況等を把握できるようにした。さらに、平成24年度からは、関係講座にかかわらず、学生及び教員ともに他の講座の発表にも参加するように推進し、自己研鑽の要素となり、研究の推進に繋がることを目指している。この「中間報告会」及び「中間発表会」については、学生アンケートや修了生アンケートにおいて、研究を進める上でも、学位論文作成においても非常に有意義なものとなっているとの評価が高く、今後も継続して推進していくとともに、より良い方法を模索していきたい。

また、平成25年度から在学生にもアンケートを実施し、ニーズを把握するとともに問題点などを改善していくこととしており、今後も、標準修業年限内での学位取得率の向上も含め、学生及び指導教員双方を意識した取り組みの推進を図りたい。そして、「大学院博士課程におけるFD活動とは何か」という原点に立ち返り、教育研究力向上のための一層の努力をしていきたいと考える。

平成27年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科FD委員会委員

委員長	杉元康志	研究科長
委員	大富潤	副研究科長
委員	鈴木章弘	(佐賀大学)
委員	早川洋一	(佐賀大学)
委員	屋宏典	(琉球大学)
委員	芝正己	(琉球大学)
委員	中西良孝	(鹿児島大学)
委員	上西由翁	(鹿児島大学)
委員	境雅夫	(鹿児島大学)